

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書15

- 市原市竹ノ下遺跡・関尻遺跡・山小川遺跡、
長南町田宿川間遺跡 -

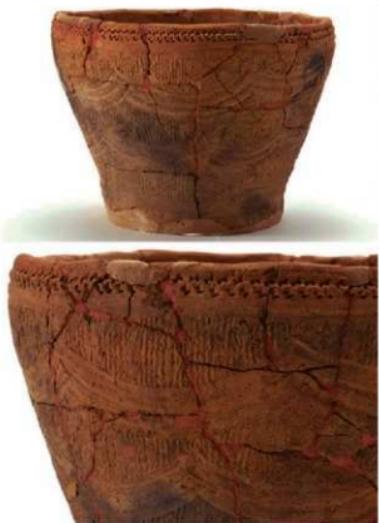
平成24年3月

国 土 交 通 省
財團法人 千葉県教育振興財団

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書15

– 市原市竹ノ下遺跡・関尻遺跡・山小川遺跡、
長南町田宿川間遺跡 –





埋壺の土器(山小川遺跡)



青磁(関尻遺跡)



埋壺(山小川遺跡)

序 文

財団法人千葉県教育振興財団(文化財センター)は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的とし、昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第681集として、国土交通省による首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴って実施した市原市山小川周辺に所在する竹ノ下遺跡、関尻遺跡、山小川遺跡と、長南町田宿川間遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、市原市山小川周辺の縄文時代および中世の様相が明らかとなり、養老川中流域で從来知られていなかった歴史の1頁を付け加えることができました。また長南町田宿川間遺跡は、中世長南武田氏が居城した長南城外郭域にあたり、中世から近世初頭にかけての土器が出土するなど、調査例の少ない長生地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行にあたり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成24年3月

財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 赤羽良明

凡　例

- 1 本書は、国土交通省による首都圏中央連絡自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡の所在地と遺跡コードは、以下のとおりである。

竹ノ下遺跡	市原市田尾112-1ほか	(遺跡コード219-088)
関尻遺跡	市原市田尾501ほか	(遺跡コード219-084)
山小川遺跡	市原市山小川字閑ノ代817-2ほか	(遺跡コード219-085)
田宿川間遺跡	長生郡長南町坂本字田宿川間5096ほか	(遺跡コード427-002)
- 3 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、国土交通省の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財團が実施した。
- 4 発掘調査および整理作業の期間、担当者は、本文中に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は、第1章を上席研究員 森本和男、第2章を上席研究員 麻生正信が担当した。
- 6 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所、市原市教育委員会、長南町教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地図は、下記のとおりである。

第1図	国土地理院発行	1/50,000地形図「姉崎」(N1-54-19-16) 「茂原」(N1-54-19-12)
第2図	市原市発行	市原市基本図O-8 (1/2,500)
第3図	国土地理院発行	1/25,000地形図「鶴舞」(N1-54-19-16-2)
第57図	長南町役場発行	都市計画図「管内図7」(1/2,500)
第58図	国土地理院発行	1/25,000地形図「鶴舞」(N1-54-19-16-2) 「上総一ノ宮」(N1-54-19-12-2-4)
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年、48年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、全て座標北である。測量成果は日本測地系を使用した。
- 10 本書で使用した遺構番号等は、基本的に調査時の番号を踏襲した。

本文目次

第1章 市原市山小川周辺の遺跡	1
第1節 はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 首都圏中央連絡自動車道(圏央道)関係遺跡の調査概要	1
3 遺跡の位置と環境	5
第2節 竹ノ下遺跡	11
1 調査の経過と調査方法	11
2 繩文時代	14
3 近世	24
第3節 関尻遺跡	27
1 調査の経過と調査方法	27
2 繩文時代遺物包含層	30
3 拡張区	31
4 本調査区①	34
5 本調査区②	42
第4節 山小川遺跡	65
1 調査の経過と調査方法	65
2 繩文時代	69
3 中～近世	85
第5節 まとめ	88
1 竹ノ下遺跡	88
2 関尻遺跡	88
3 山小川遺跡	90
第2章 長南町田宿川間遺跡	93
第1節 調査の概要	93
1 調査の経過	93
2 調査の方法	93
第2節 遺跡の位置と環境	100
第3節 遺構と遺物	103
1 遺構	103
2 遺物	111
第4節 まとめ	150
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1図 圏央道建設工事で市原市から茂原長南IC まで調査された遺跡	2	第25図 縄文土器	47
第2図 竹ノ下遺跡・関尻遺跡・山小川遺跡の 周辺地形図	4	第26図 本調査区②	48
第3図 養老川中流域の遺跡	6	第27図 SB07・03・01	49
		第28図 SB05・04	50
		第29図 SB06・02	51
		第30図 SB08・14	52
竹ノ下遺跡		第31図 SB15・11	53
第4図 竹ノ下遺跡の年度別調査範囲と グリッド設定図	12	第32図 SB10・09	54
第5図 竹ノ下遺跡の確認調査と 遺構配置図	13	第33図 SB13・12	55
第6図 竹ノ下遺跡の土層断面図	15	第34図 土坑	57
第7図 ピット群1	16	第35図 SD01	58
第8図 ピット群2	17	第36図 中～近世の陶磁器(1)	59
第9図 土坑	18	第37図 中～近世の陶磁器(2)	60
第10図 縄文土器(1)	19	第38図 中～近世のその他の遺物	63
第11図 縄文土器(2)	20	第39図 山小川遺跡の年度別調査範囲と グリッド設定図	66
第12図 石器(1)	21	第40図 山小川遺跡の確認調査と 遺構配置図	67
第13図 石器(2)	22	第41図 山小川遺跡の土層断面図	68
第14図 近世の遺物	24	第42図 縄文時代の遺物包含層	69
関尻遺跡		第43図 SI01	71
第15図 関尻遺跡の年度別調査範囲と グリッド設定図	28	第44図 小堅穴と土坑	73
第16図 関尻遺跡の確認調査と 本調査区	29	第45図 土坑と焼土遺構	75
第17図 関尻遺跡の土層断面図	31	第46図 縄文土器(1)	76
第18図 縄文時代早期の遺物包含層と 出土縄文土器	32	第47図 縄文土器(2)	77
第19図 石器(1)	35	第48図 縄文土器(3)	78
第20図 石器(2)	36	第49図 石器(1)	80
第21図 石器(3)	37	第50図 石器(2)	81
第22図 拡張区の遺構	39	第51図 石器(3)	82
第23図 本調査区①	40	第52図 石器(4)	83
第24図 SX01	41	第53図 SD01	85
		第54図 溝と試跡	86
		第55図 その他の遺物	87

田宿川間遺跡	第71図 出土遺物(1).....	116
第56図 年度別調査範囲・グリッド設定模式図	94 第72図 出土遺物(2).....	117
第57図 調査区グリッド設定図.....	95 第73図 出土遺物(3).....	118
第58図 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	96 第74図 出土遺物(4).....	119
第59図 確認調査トレンド配置図.....	97 第75図 出土遺物(5).....	120
第60図 北区上層確認トレンド土層断面図.....	98 第76図 出土遺物(6).....	121
第61図 南区上層確認トレンド土層断面図.....	99 第77図 出土遺物(7).....	122
第62図 北区下層確認グリッド配置図.....	101 第78図 出土遺物(8).....	123
第63図 北区下層確認グリッド土層断面図.....	104 第79図 出土遺物(9).....	124
第64図 平場1 遺構平面図・土層断面図.....	105 第80図 出土遺物(10).....	125
第65図 平場9、10遺構平面図・ 遺物出土層断面図.....	106 第81図 出土遺物(11).....	126
第66図 北区拡張区第1面水田検出面平面・ 遺物出土層断面図.....	108 第82図 出土遺物(12).....	127
第67図 北区拡張区第2面烟検出面平面・ 遺物出土層断面図.....	109 第83図 出土金属製品(1).....	136
第68図 北区拡張区第3面水田検出面平面・ 遺物出土層断面図.....	110 第84図 出土金属製品(2).....	137
第69図 北区3・4・6トレンド宝永火山灰層検出 平面図・遺物出土層断面図.....	112 第85図 出土銭貨(1).....	141
第70図 北区SD01水路跡平面図・土層断面図	113 第86図 出土銭貨(2).....	142
	第87図 出土銭貨(3).....	143
	第88図 出土石製品(1).....	146
	第89図 出土石製品(2).....	147
	第90図 出土石製品(3)・土製品・ スラグ・軽石.....	148

表目次

第1表 市原市から茂原長南ICまでの遺跡	3 山小川遺跡	
	第10表 山小川遺跡の縄文土器.....	79
竹ノ下遺跡	第11表 山小川遺跡の石器.....	84
第2表 竹ノ下遺跡の縄文土器.....	20 第12表 銭貨.....	87
第3表 竹ノ下遺跡の石器.....	23	
第4表 竹ノ下遺跡の陶磁器.....	25 田宿川間遺跡	
	第13表 田宿川間遺跡の土器観察表.....	128
閑尻遺跡	第14表 田宿川間遺跡の金属製品.....	138
第5表 閑尻遺跡の縄文土器.....	33 第15表 田宿川間遺跡の銭貨.....	144
第6表 閑尻遺跡の石器.....	38 第16表 田宿川間遺跡の石製品.....	149
第7表 閑尻遺跡の掘立柱建物一覧.....	56 第17表 田宿川間遺跡の鍛冶関係製品.....	149
第8表 閑尻遺跡の陶磁器.....	61	
第9表 閑尻遺跡のその他の遺物.....	64	

図版目次

卷頭図版 埋甕炉の土器（山小川遺跡）	図版10 SK02
青磁（関尻遺跡）	SK03
埋甕炉（山小川遺跡）	SX01
図版1 遺跡の周辺航空写真	図版11 SD01
	SD02
竹ノ下遺跡	SD03
図版2 調査前風景	
第6・7トレンチ発掘状況	竹ノ下遺跡
ピット群2、南西から	図版12 縄文土器(1)
図版3 ピット群2、北東から	縄文土器(2)
SK01	図版13 縄文土器(3)
SK02	石器(1)
	図版14 石器(2)
関尻遺跡	陶磁器
図版4 調査前風景	
3F区トレンチ発掘状況	関尻遺跡
縄文時代遺物包含層	図版15 縄文土器(1)
図版5 扯張区土坑	縄文土器(2)
本調査区①	図版16 石器(1)
SX01	石器(2)
図版6 本調査区②	図版17 石器(3)
SK01	石器(4)
SD01	図版18 陶磁器(1) 陶磁器(2)
山小川遺跡	図版19 陶磁器(3)
図版7 調査前風景	その他の遺物
平成19年度調査区縄文時代遺物包含層	
土層断面	山小川遺跡
SI01	図版20 縄文土器(1)
図版8 SI01埋甕炉断面	縄文土器(2)
土坑群	図版21 縄文土器(3)
SK05	縄文土器(4)
図版9 SK04	図版22 縄文土器(5)
平成17年度調査区SF01	縄文土器(6)
SK01	図版23 縄文土器(7)

石器(1)	図版30 SD01検出
図版24 石器(2)	SD01完掘
石器(3)	北区下層土層断面
図版25 石器(4)	図版31 発掘前風景平成18年度調査区
銭貨その他	平場 1 拡張区全景
田宿川間遺跡	平場 9 拡張区ピット群全景
図版26 遺跡の周辺航空写真	図版32 出土遺物(1)
図版27 発掘前風景平成16年度北区	図版33 出土遺物(2)
発掘前風景平成16年度南区	図版34 出土遺物(3)
確認調査南区E－1～3トレンチ	図版35 出土遺物(4)
図版28 確認調査北区1～4トレンチ	図版36 出土遺物(5)
確認調査北区4トレンチ	図版37 出土遺物(6)
確認調査北区6トレンチ土層断面	図版38 出土遺物(7)
図版29 北区拡張区第2面畠検出面	図版39 出土遺物(8)
北区拡張区第3面水田検出面	図版40 出土遺物(9)
北区拡張区第3面完掘全景	図版41 出土遺物(10)

第1章 市原市山小川周辺の遺跡

第1節 はじめに

1 調査に至る経緯

今からおよそ50年前、昭和33年(1958)に首都圏の道路交通の骨格として、3環状9放射の道路網が計画された。都心から放射状に延びる東名高速道路、中央自動車道、関越自動車道、東北自動車道、常磐自動車道、東関東自動車道、館山自動車道、第三京浜道路、東京湾岸道路の9路線と、それらと環状につなぐ、都心から半径約8kmの位置に計画された首都高速中央環状線(中央環状線)、都心から半径約15kmの位置に計画された東京外かく環状道路(外環道)、都心から半径およそ40km~60kmの位置に計画された首都圏中央連絡自動車道(圏央道)の3路線である。

首都圏中央連絡自動車道(圏央道)は、都心から半径およそ40km~60kmの位置に計画された延長約300kmに及ぶ環状の自動車専用道路である。圏央道の整備により、首都圏の道路交通の円滑化、沿線都市間の連絡強化と、沿線の地域づくりの支援・活性化、災害時などの代替路としての機能、年間CO₂の削減などの効果が期待されている。千葉県内の全体延長は約95kmで、車線数は4車線だが、当面は2車線とし、設計速度は100km/hと計画された。

千葉県区間のうち茂原~木更津間は28.4kmで、平成元年8月に基本計画区間となり、平成7年3月に都市計画決定され、平成9年2月には整備計画区間となった。平成10年度から用地買収、平成12年度から工事が着手された。このうち、木更津JCT~木更津東IC間(約7.1km)は平成19年3月21日に開通した。

事業地区内の埋蔵文化財の取り扱いについては、関係諸機関と協議した結果、事業計画の変更が難しいことから、止むを得ず、記録保存の措置を講ずることになった。事業主体である国土交通省は、千葉県教育委員会の指導により、調査機関の指名を受けた財團法人千葉県教育振興財團と委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。

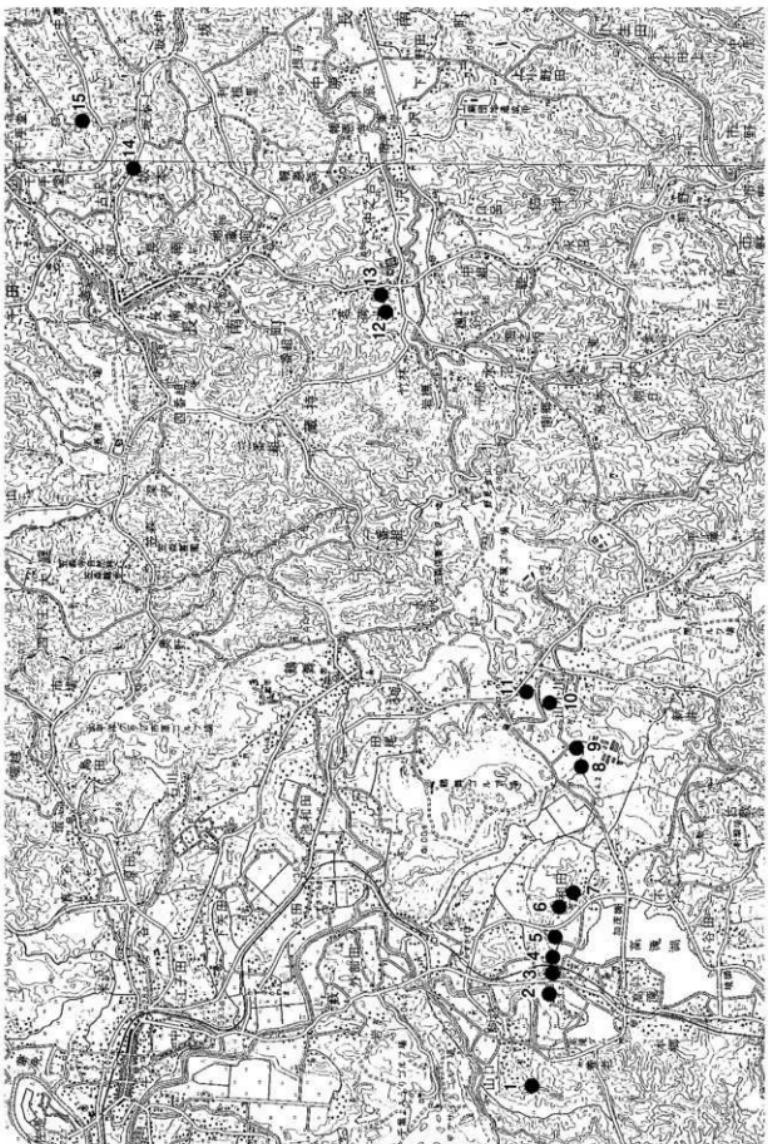
2 首都圏中央連絡自動車道(圏央道)関係遺跡の調査概要

財團法人千葉県教育振興財團による圏央道関係の発掘調査は、平成13年3月に木更津工区から開始され、現在も継続中である。調査された遺跡の報告書は、現在までに12冊刊行されている⁽¹⁾。財團法人君津都市文化財センターの刊行した報告書⁽²⁾も合わせると、合計14冊となる。

これまでに刊行された圏央道関係の調査報告書は、おもに木更津市と袖ヶ浦市に所在する遺跡のものである。市原市およびその東側に位置する茂原市、東金市に所在する遺跡の調査、整理、報告書の作成は、現在も進行中である。

ここでは圏央道建設予定地のうち、市原市から茂原長南ICまでの間に所在した15か所の遺跡を一覧表にまとめた(第1表)。付近の地理的状況をみると(第1図)、国道297号線が北西から南東に向かって走り、その東側に市原市と長南町を隔てる行政境界線がある。遺跡の分布をみてみると、西側の市原市域内の高滝湖周辺の小規模な盆地付近に多く遺跡があり、東側のやや山間となる長南町の地域には遺跡が少ない。

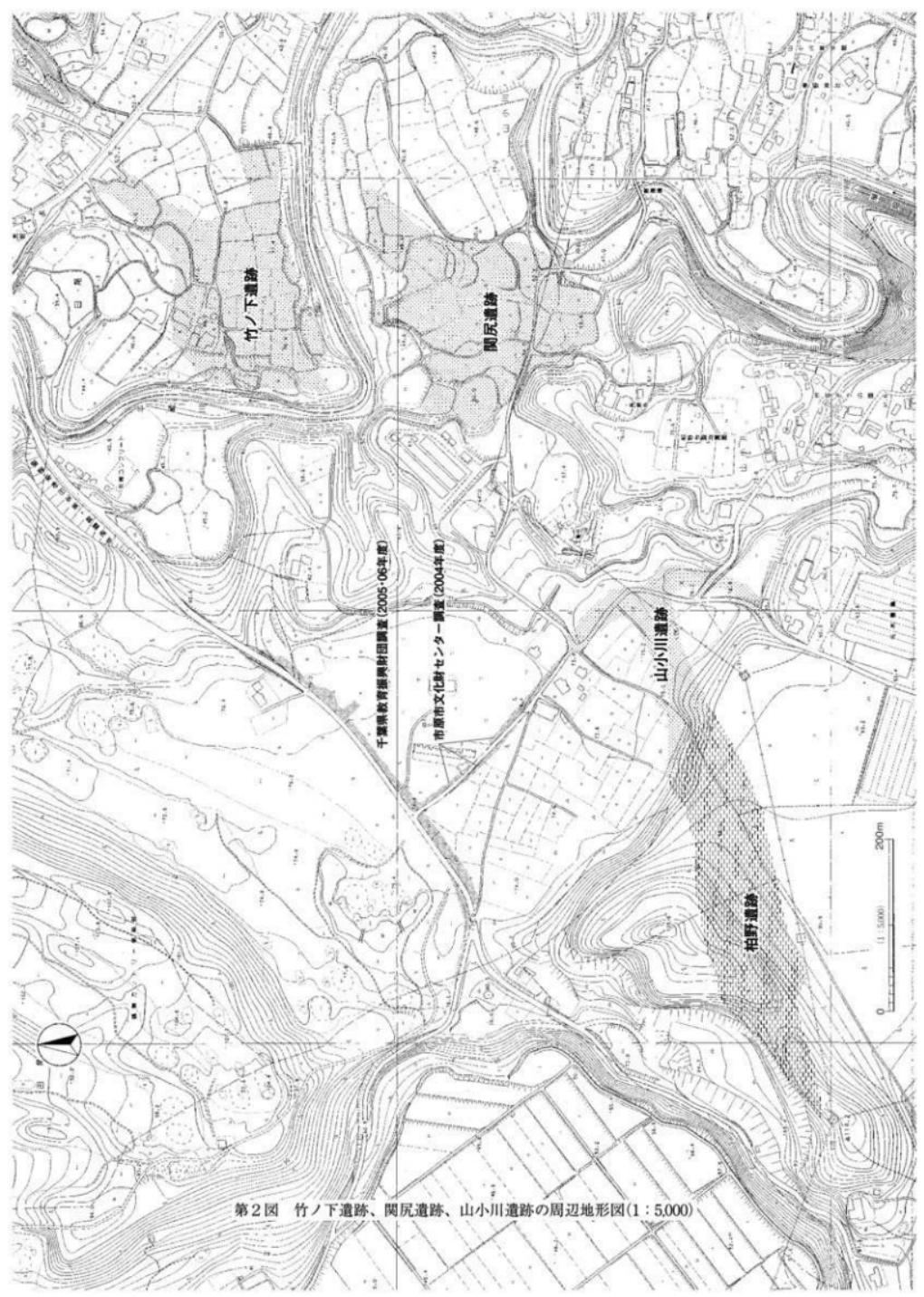
高滝湖は1990年に竣工した人造湖であるが、周辺には旧石器時代、縄文時代の遺跡が數か所分布し、狩猟採集時代には居住に適した良好な環境が備わっていたと考えられる。一方、国道297号線を境に東側は山間となり、平地が少ない。調査された遺跡も横穴墓や塚など、生活とは直接関係しない遺跡が多かった。



第1図 圏央道建設工事で市原市から茂原長南ICまで調査された遺跡(1:50,000)

第1表 市原市から茂原長南 ICまでの遺跡

	番号	遺跡（市原市から茂原長南 ICまで）	調査年度	検出遺構
市原市	1	山口城跡	2006, 07	なし
市原市	2	番后台遺跡	2005, 06	縄文時代小竪穴、陥穴、中世溝、土坑
市原市	3	久保堰ノ台1	2011	縄文時代竪穴住居跡、小竪穴
市原市	4	久保堰ノ台2	2011	縄文時代竪穴住居跡、小竪穴
市原市	5	緑岡古墳群	2010, 11	縄文時代竪穴住居跡、小竪穴、古墳時代古墳、土坑墓、近世塚
市原市	6	大和田遺跡	2006	縄文時代遺物集中地点、土坑、炉穴
		大和田遺跡群(1)	2008	なし
		大和田遺跡群(2)	2009	古墳時代横穴墓
		大和田遺跡群(3)	2009	古墳時代古墳、近世塚
		大和田遺跡群(4)	2010	旧石器時代遺物集中地点、縄文時代遺物集中地点、奈良・平安時代竪穴住居跡
		大和田遺跡群(5)	2010	旧石器時代遺物集中地点、縄文時代遺物集中地点
		大和田遺跡群(6)	2010	縄文時代陥穴
		大和田遺跡群(7)	2010, 11	古墳時代横穴墓、中世やぐら
市原市	7	高瀧陣屋跡	2011	なし
市原市	8	柏野遺跡	2008, 09	旧石器時代遺物集中地点、古墳時代古墳
		柏野遺跡(2)	2009	旧石器時代遺物集中地点
		柏野遺跡(2)	2009, 10	旧石器時代遺物集中地点、縄文時代遺物集中地点、炉穴、陥穴、奈良・平安時代竪穴住居跡、方形周溝状遺構
市原市	9	山小川遺跡	2005, 07, 08, 10	本報告書
市原市	10	閑尻遺跡	2005, 06, 08	本報告書
市原市	11	竹ノ下遺跡	2006, 08	本報告書
長南町	12	竹ノ谷横穴群	2009	中～近世土坑
長南町	13	茗荷沢苔跡、福田横穴墓群	2008	縄文時代土坑、古墳時代横穴墓
長南町	14	田宿川間遺跡	2004, 06	本報告書
長南町	15	八幡下塚群	2008	中～近世塚
茂原市		八幡下塚群(2)	2008	中～近世塚



第2図 竹ノ下遺跡、関尻遺跡、山小川遺跡の周辺地形図(1:5,000)

わずかながらも平地のある高滻湖周辺とは環境が相違し、異なった性格の遺跡が形成されたのであろう。

今回報告する市原市山小川周辺の3か所の遺跡は、圏央道と国道297号線が交差する市原南IC(仮称)付近に所在している(第2図)。インターチェンジの料金所地点に竹ノ下遺跡、料金所と本線車道とを結ぶカーブ地点に閑尻遺跡、そして料金所に近接する本線車道部分に山小川遺跡が並んでいた。この3か所の遺跡は、平成17~22年度に調査された。

山小川遺跡の西側には柏野遺跡が隣接し、平成20~22年度に調査が実施された。旧石器時代の遺物集中地点、縄文時代の遺物集中地点、古墳・奈良・平安時代の堅穴住居跡が検出され、旧石器時代の尖頭器が多数出土した。現在整理作業が進んでいる。

道路整備とともに、周辺遺跡の調査も実施された。圏央道の北側に県道鶴舞・馬来田停車場線が東西に走り、その改良事業とともに遺跡調査が、平成17・18年度に財團法人千葉県教育振興財團によって実施された。縄文時代の堅穴住居跡、土坑が検出され、大量の縄文土器、石器、礫が出土した。縄文時代中期末から後期初頭にかけて、おもに加曾利E式から称名寺式、堀之内式までの時期の遺跡であることが判明した^③。

また市原市山小川で県道鶴舞・馬来田停車場線から南へ派生する市道で拡幅工事が行われ、それとともに、平成16年度に財團法人市原市文化財センターによって遺跡調査が実施された。調査の報告によると遺構は検出されず、出土遺物も少量であったため、確認調査で終了した^④。この調査でも、縄文時代中期から後期の土器が出土した。

市原市山小川から東へ約2km離れた高滻湖の北側台地上に、大和田遺跡がある。近年の調査により、旧石器時代末の細石刃核、縄文時代早中期の垂飾品などの出土が確認された。市原市山小川周辺および高滻湖周辺の遺跡調査により、旧石器時代から縄文時代にかけて、これまでさほど知られていなかった房総半島南部の様相が、次第に明らかにされつつあるといえるだろう。

3 遺跡の位置と環境(第1表)

房総半島は、北部の下総台地と、南部の上総丘陵と安房丘陵とあわせた山間地との、2種類の地形からなる。下総台地は更新世後期から完新世にかけて出現した。約12万年前の最終間氷期に古東京湾の浅い海が干し上がってできた台地で、その後、富士山などの火山灰を起源とする関東ローム層が堆積した。台地を囲む低地には発達した沖積層が形成されている。一方、南部の山間地帯では、中新世から島弧変動という地質学的構造運動により房総半島南部が隆起した結果、複雑な地形が形成された。

山間地の房総半島南部を、河川延長75kmの養老川が南から北へ流れ、東京湾に注いでいる。市原市山小川周辺の遺跡は、東京湾から約20km離れた房総半島のはば中央に位置し、養老川中流域に流入する平蔵川流域にある。付近には標高100mを超える山地が広がり、河川流域にそってわずかに低地が存在している。竹ノ下遺跡、閑尻遺跡、山小川遺跡は、そのような蛇行する河川によって形成された河岸段丘上に所在する。

養老川流域の調査は、東京湾に流入する養老川下流域の平野部を中心に進んだ。養老川下流右岸の市原市役所のある国分寺台周辺では、縄文時代から奈良・平安時代にかけての著名な遺跡が多数分布し、大規模な発掘調査が長年にわたって実施された。しかしながら中上流域に関しては、小規模な調査が少量行われただけで、歴史文化的な様相はさほど明らかになっていない。ここでは市原市鶴舞から山小川周辺に限定して、遺跡の様相をみてみよう。(第3図)

A	竹ノ下遺跡
B	関戻遺跡
C	山小川遺跡
1	柏野遺跡
2	大和田遺跡
3	新井花和田遺跡
4	南総中学遺跡 (江子田古墳群)
5	緑岡古墳群
6	久保理ノ台遺跡
7	番後台遺跡
8	鶴舞遺跡
9	雪解沢遺跡
10	大和田新谷古墳群
11	池和田古墳群
12	福荷台古墳群
13	宮原横穴群
14	戸部田ヤツ横穴群
15	永田・不入塚跡
16	石川糞跡
17	平蔵城跡
18	池和田城跡
19	高輪陣屋跡

第3図 养老川中流域の遺跡(1:25,000)

調査された旧石器時代の遺跡はほとんどない。山小川遺跡に隣接する柏野遺跡(1)で、数年前から圏央道工事にともなう発掘調査がはじまり、旧石器時代の遺物集中地点が検出された^[5]。また西へ約2.5km離れた高滝湖の北側台地にある大和田遺跡(2)でも、数年前から調査がはじまり、旧石器時代の遺物集中地点が検出された^[6]。山小川遺跡から南へ約1kmの地点にある新井花和田遺跡(3)からは、旧石器時代の尖頭器や石核が、縄文時代早期の遺構・遺物に混入して出土した^[7]。また北西へ平蔵川と養老川との合流点より少し下った段丘上の南総中学遺跡(4)で、ナイフ形石器、彫器、搔器、尖頭器などが表面採集された^[8]。これらの遺跡以外に、養老川中上流域周辺で旧石器の出土した遺跡は報告されていない。

養老川流域の旧石器時代の遺跡は武士遺跡、福増遺跡、西広遺跡など、東京湾に近い下流域右岸に分布する。養老川の北側を流れ東京湾に流入する村田川流域、また南側を流れる椎津川流域でも旧石器時代の遺跡は、おもに東京湾に近い台地上に分布していた。東京湾の沿岸地帯と房総半島南部の山間地帯では旧石器時代に環境が異なり、遺跡の形成過程にも違いが生じたのかもしれない。

縄文時代の遺跡も少ない。山小川遺跡の南側、標高約130mの独立丘陵上にある新井花和田遺跡から、縄文時代早期の子母口式前後の堅穴住居跡12軒と炉穴24基が検出された。堅穴住居跡が環状に配置された類例の少ない古い時期の集落遺跡だった。近年の調査によって山小川遺跡に隣接する柏野遺跡から、縄文時代早期の炉穴、遺物包含層が検出された^[9]。また高滝湖の北側台地にある大和田遺跡でも、縄文時代早期の遺物包含層や陥穴が検出されている^[10]。

大和田遺跡から、さらに西側へ緑岡古墳群(5)、久保堰ノ台遺跡(6)、番後台遺跡(7)と遺跡が連続して分布しているが、近年の調査により、それぞれの遺跡で縄文時代の遺構が検出されている。緑岡古墳群では縄文時代中期の堅穴住居跡と小堅穴、久保堰ノ台遺跡でも縄文時代中期の堅穴住居跡と小堅穴が検出され、複数の住居からなる集落が確認された。番後台遺跡は約30年前に調査され、弥生時代から古墳時代にかけて多数の堅穴住居跡が検出された集落遺跡である。1軒だけ縄文時代中期の加曾利E式の堅穴住居跡が検出され、その他に縄文土器と石器も出土した^[11]。その後最近の圏央道工事にともなう調査で、番後台遺跡から縄文時代の小堅穴、土坑、陥穴などの遺構が新たに検出されている^[12]。

市原市山小川から北へ約2.5km離れた平蔵川右岸の段丘上に鶴舞遺跡(8)があり、縄文時代中期の小堅穴が検出された^[13]。平蔵川と養老川との合流地点付近に位置する南総中学遺跡では、縄文時代前期の関山式と中期の加曾利E式の堅穴住居跡と、小堅穴が検出された^[14]。さらに養老川を下り、牛久市街地北側の台地上に奉免上原台遺跡があり、縄文時代早期の貝殻条痕文系土器をともなう炉穴が136基も検出された。前期の関山式の堅穴住居跡6軒、中期の加曾利E式の堅穴住居跡1軒、そして陥穴が30基以上検出された^[15]。奉免上原台遺跡のやや下流の段丘上に土字遺跡と呼称された馬立塚ノ台遺跡が位置する。この遺跡からは縄文時代中期の加曾利E式の堅穴住居跡20軒と、多数の土坑が検出された^[16]。

これより下流の養老川両岸の台地上には、山倉貝塚、西広貝塚、武士遺跡(土器石貝塚)など、縄文時代の大規模な遺跡が多数分布している。旧石器時代遺跡の分布と同様に、東京湾に近い下流域の台地上に多くの縄文時代遺跡が分布し、中上流域の山間地帯では、遺跡分布の少ない傾向がうかがえる。

弥生時代についても、中上流域の山間地帯で遺跡は少なく、東京湾に面する下流域の台地上で、環濠とともに大規模な集落遺跡が多く形成された。養老川中流域の高滝湖の北側台地上に番後台遺跡がある。弥生時代後期を主体とする堅穴住居跡が30軒検出された集落遺跡で、さらに古墳時代にも継続して集落が形成された。養老川を下って右岸台地上に南総中学遺跡がある。この遺跡は環濠をともなう台地上の集落

で、堅穴住居跡39軒、方形周溝墓23基、壺棺3基が検出された。墓と住居が別個に配置されていて、集落構造をしめす遺跡として有名である。平成2年度の周辺調査により、墓域が西側にも広がることが判明した³⁶。南総中学遺跡の南方約1kmに雪解沢遺跡(9)があり、弥生時代後期の壺棺墓が検出された³⁷。さらに川を下ると馬立塚ノ台遺跡があり、弥生時代後期の堅穴住居跡が85軒検出された。番後台遺跡と同様にこの遺跡も古墳時代に継続して大規模な集落が形成された。

古墳時代の集落については、番後台遺跡や馬立塚ノ台遺跡のように、弥生時代からそのまま継続して営まれた遺跡が見受けられる。両遺跡ともに古墳時代前期から後期にかけての住居跡が検出された。しかし奈良時代の堅穴住居跡は検出されず、古墳時代で集落は終焉している。

両遺跡の中間に位置する南総中学遺跡周辺でも、弥生時代から古墳時代にかけて集落が営まれたと想定される。南総中学遺跡では古墳時代の堅穴住居跡が少数軒検出された。雪解沢遺跡では確認調査で、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される堅穴住居跡が複数軒存在することが判明した。その近隣で実施された小規模な発掘調査でも、古墳時代の堅穴住居跡が複数軒検出され、台地上で古墳時代前期から後期にかけて集落が展開したと推測されている³⁸。

古墳や横穴群は多く分布している。高滝湖の南端付近に位置する皿郷田茂遺跡では、古墳時代前期の堅穴住居跡1軒と方墳8基、円墳1基が検出された³⁹。高滝湖北側の台地上には、集落遺跡の番後台遺跡に近接して緑岡古墳群と大和田遺跡があり、圓央道建設にともなう工事で数基の古墳が調査された。大和田遺跡のある独立丘陵北側の谷部に大和田新谷古墳群⁴⁰があり、養老川と平蔵川の合流付近に池和田古墳群⁴¹がある。

古墳時代集落の存在が推定される南総中学遺跡周辺では、多量な副葬品の出土により有力者の墓と目される金環塚古墳(瓢箪塚古墳)をふくめ、多数の古墳からなる江子田古墳群がある。江子田古墳群の北側台地には稻荷台古墳群⁴²、中岱古墳群、真福寺台古墳群、境部岱古墳群がある。さらに牛久市街をはさんで西側に牛久古墳群、佐是古墳群があり、養老川中流域で比較的古墳の集中する地域である。

横穴墓は、高滝湖西側台地斜面に宮原横穴群⁴³、北側台地斜面に大和田横穴群があり、25年前に実施された大和田遺跡の調査では16基の横穴が検出された⁴⁴。また近年の圓央道工事でも、数基の横穴墓が調査された。やや養老川を下って左岸に戸部田ヤツ横穴群⁴⁵がある。平蔵川流域では、池和田古墳群の近辺に池和田横穴、池和田城横穴がある。江子田古墳群には江子田横穴があり、その北側台地に稻荷台横穴、境部岱横穴群、真福寺前横穴群、やや離れた東側に真ヶ谷岱田横穴群がある。古墳と横穴墓は近接して分布する傾向がみられ、両者の関連性がうかがえる。

なお集落や古墳・横穴墓などの通常の遺跡ではみられない特殊な性格をしめす須恵器窯跡が、大和田遺跡で検出された。この窯跡は古墳時代後期に属し、千葉県内で最古の窯とされている。

奈良・平安時代に養老川下流域では上総国の国分寺、国分尼寺が建立され、近くには国府推定地もある。下流域の台地上には同時代の大規模な集落遺跡や、国家的工事に関連した瓦窯跡などの生産遺跡が多数分布している。しかしながら殷賑をきわめた下流域に対して、中上流域では奈良・平安時代の遺跡が僅少である。須恵器を製造した水田・不入窯跡⁴⁶と石川窯跡⁴⁷以外に、めぼしい遺跡はみあたらない。集落遺跡の調査例はなく、はたして中上流域に人々の暮らす拠点があったのかどうか、不明といわざるをえないだろう。

中世から戦国時代の城館跡と比定された遺跡が養老川中流域に多く分布している。山間の地形を応用し

て、軍事的防備に適した城館を築造しやすかったのであろう。養老川中流域に分布する城館跡は、ほとんどが15世紀以降ないしは戦国時代に築造されたと考えられている²⁹。文献に記載されていたり、あるいは実際に調査が実施されて、実態の判明した城館跡は少ない。またそれ以前の、鎌倉時代や室町時代の遺跡調査例も少ない。

平蔵川上流に平蔵城跡³⁰がある。地元の伝承によると、承平年中(931~937)に土橋平蔵政常が城郭を構え近郷七堀を領したのをそのはじまりとし、戦国時代に落城して現在の長南町蔵持に逃れたとされる。平蔵川をはさんで平蔵城跡の北東に、国の重要文化財に指定された西願寺阿弥陀堂がある。この阿弥陀堂の外陣尾垂木剖形裏面に記載された墨書銘により、堂の建造が明応4年(1495)であることが判明し、また縁起によれば平蔵城主平将常によって建立されたと伝えられている。近年、国道297号線の改良工事にともない、平蔵城跡の居住域に相当する字根古屋の部分で調査が実施され、溝が検出された。

平蔵城跡は15世紀後半~16世紀前半の城と考えられている。平蔵城跡の北側尾根に接して16世紀後半とされる城部田城跡があり、そして、平蔵城から城部田城へと城の移行が推定されている³¹。

平蔵川を下って川の流れが西方向へ、養老川に向かう地点に池和田城跡³²がある。長南武田氏の勢力下にあった城で、房総半島で戦国大名の里見氏と北条氏による抗争が繰り広げられるなか、攻守のドラマが軍記物や古文書に登場する城である。戦国時代末の豊臣による小田原攻めで、浅野長政らの軍勢によって攻め落とされ、廃城となったという³³。

江戸時代の遺跡として、高滝湖北側台地据部に高滝陣屋跡³⁴がある。高滝藩は、天和3年(1683)に板倉重宣が2万石を受領して立藩し、その後二代16年で廃藩となった。重宣の領地は3か所に分かれ、信州伊那郡31ヶ村石高16,000余石、佐久郡12ヶ村石高3,000石、上総国市原郡4ヶ村石高765石余りであった。高滝郷大和田村に高滝藩の陣屋があったと伝えられ、國央道建設工事にともない平成23年度に調査が行われたが、遺構は検出されなかった。高滝藩に陣屋ではなく、大和田村の光嚴寺が宿陣になったという説もある³⁵。

注

- (1) 土屋治雄・半澤幹雄・高梨友子『首都圏中央自動車道埋蔵文化財調査報告書1』千葉県文化財センター調査報告第497集、2004年。

伊藤智樹『首都圏中央自動車道埋蔵文化財調査報告書2』千葉県文化財センター調査報告第511集、2005年。

小高春雄・竹内久美子『首都圏中央自動車道埋蔵文化財調査報告書3』千葉県教育振興財团調査報告第526集、2005年。

相京邦彦・小高春雄・麻生正信・石川誠『首都圏中央自動車道埋蔵文化財調査報告書4』千葉県教育振興財团調査報告第546集、2006年。

今泉潔『首都圏中央自動車道埋蔵文化財調査報告書5』千葉県教育振興財团調査報告第558集、2006年。

半澤幹雄・高梨友子『首都圏中央自動車道埋蔵文化財調査報告書6』千葉県教育振興財团調査報告第574集、2007年。

小高春雄・白井久美子・高梨友子『首都圏中央自動車道埋蔵文化財調査報告書7』千葉県教育振興財团調査報告第583集、2007年。

安井健一・大久保奈々『首都圏中央自動車道埋蔵文化財調査報告書8』千葉県教育振興財团調査報告第597集、2008年。

相京邦彦『首都圏中央自動車道埋蔵文化財調査報告書9』千葉県教育振興財团調査報告第612集、2009年。

安井健一『首都圏中央自動車道埋蔵文化財調査報告書10』千葉県教育振興財团調査報告第638集、2010年。

相京邦彦『首都圏中央自動車道埋蔵文化財調査報告書11』千葉県教育振興財团調査報告第654集、2011年。

加納実・新田浩三・西川博孝・半澤幹雄・小林信一『首都圏中央自動車道埋蔵文化財調査報告書12』千葉県教育振興

- 財团調査報告第655集、2011年。
- (2) 松本 勝・米倉 薫『首都圏中央連絡自動車道(木更津-東金)埋蔵文化財調査報告書1』君津都市文化財センター発掘調査報告書第187集、2004年。
- 米倉 薫・渡邊祐二・松本 勝・斎藤礼司郎・竹内順一『首都圏中央連絡自動車道(木更津-東金)埋蔵文化財調査報告書2』君津都市文化財センター発掘調査報告書第196集、2005年。
- (3) 白井久美子・半澤幹雄・安井健一『市原市山小川遺跡・柏野遺跡・山口城跡』千葉県教育振興財団調査報告第624集、2009年。
- (4) 西野雅人「2. 山小川遺跡」『市原市文化財センター年報 平成17年度』2006年。11頁。
- (5) 「千葉県教育振興財团文化財センター年報」No. 35、2010年。
- (6) 「千葉県教育振興財团文化財センター年報」No. 36、2011年。
- (7) 牧野光隆「新井花和田遺跡」市原市文化財センター発掘調査報告書第74集、2001年。
- (8) 倉田芳郎編『千葉・南總中學遺跡』駒澤大学考古学研究室、1978年。
- (9) 藤崎芳樹『市原市番後台・神明台遺跡』千葉県文化財センター、1982年。
- (10) 「千葉県教育振興財团文化財センター年報」No. 31・32、2005年・2006年。
- (11) 櫻井淳教「鶴舞子来遺跡」『平成7年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会、1996年。
- (12) 忍澤成視・田中清美『奉免上原台遺跡』市原市文化財センター発掘調査報告書第74集、1992年。
- (13) 「土字」日本文化財研究所文化財調査報告6、1979年。
- (14) 忍澤成視「安久谷向ノ岱遺跡」『平成2年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会、1991年。
- (15) 金丸 誠「市原市雪解沢遺跡」千葉県文化財センター、1984年。
- (16) 相京邦彦「市原市江子田遺跡」千葉県文化財センター調査報告第516集、2005年。
- (17) 山口直樹「皿郷田茂遺跡」市原市文化財センター、1984年。
- 清藤一順「皿郷田茂遺跡-第2次-」市原市文化財センター発掘調査報告書第24集、1988年。
- (18) 高橋康男「大和田遺跡」市原市文化財センター発掘調査報告書第25集、1988年。
- (19) 小高春雄「市原の城」1999年。
- (20) 半澤幹雄「市原市平蔵城跡」千葉県教育振興財団調査報告第588集、2008年。
- (21) 小高春雄「千葉県中世城跡研究調査報告書第14集」千葉県文化財センター調査報告第256集、1994年。
- (22) 小幡重康「高瀬藩に陣屋はなかった」『上総市原』第八号、1992年。

第2節 竹ノ下遺跡

1 調査の経過と調査方法

竹ノ下遺跡は、首都圏中央連絡自動車道(圏央道)と国道297号線が交差して、市原南IC(仮称)の料金所となる場所にある。遺跡の立地は、平蔵川が蛇行する標高約48mの河岸段丘上に位置し、付近は水田であった(図版1・2)。平蔵川をはさんで対岸に閑尻遺跡がある。

調査の経過 発掘調査を平成18年度と20年度に実施し、調査面積は合計31,700m²であった。調査されなかつた部分については、平成21年度に千葉県教育委員会文化財課が試掘を実施した。整理作業と報告書作成を平成23年度に行つた。発掘調査から整理作業、報告書刊行に至るまでの調査組織、担当者および作業内容は以下のとおりである。

発掘調査

平成18年度 調査期間：平成18年12月18日～平成19年2月28日

調査対象面積：30,900m²

確認調査面積：上層3,204／30,900m²、水田のため下層の確認調査なし。

組織：調査研究部長 矢戸三男、南部調査事務所長 高田 博、担当：主席研究員
加藤正信、上席研究員 鈴木弘幸

平成20年度 調査期間：平成20年8月20日～平成20年8月28日

調査対象面積：800m²

確認調査面積：上層80／800m²、水田のため下層の確認調査なし。

組織：調査研究部長 大原正義、中央調査事務所長 折原 繁、担当：主席研究員
土屋治雄

整理作業

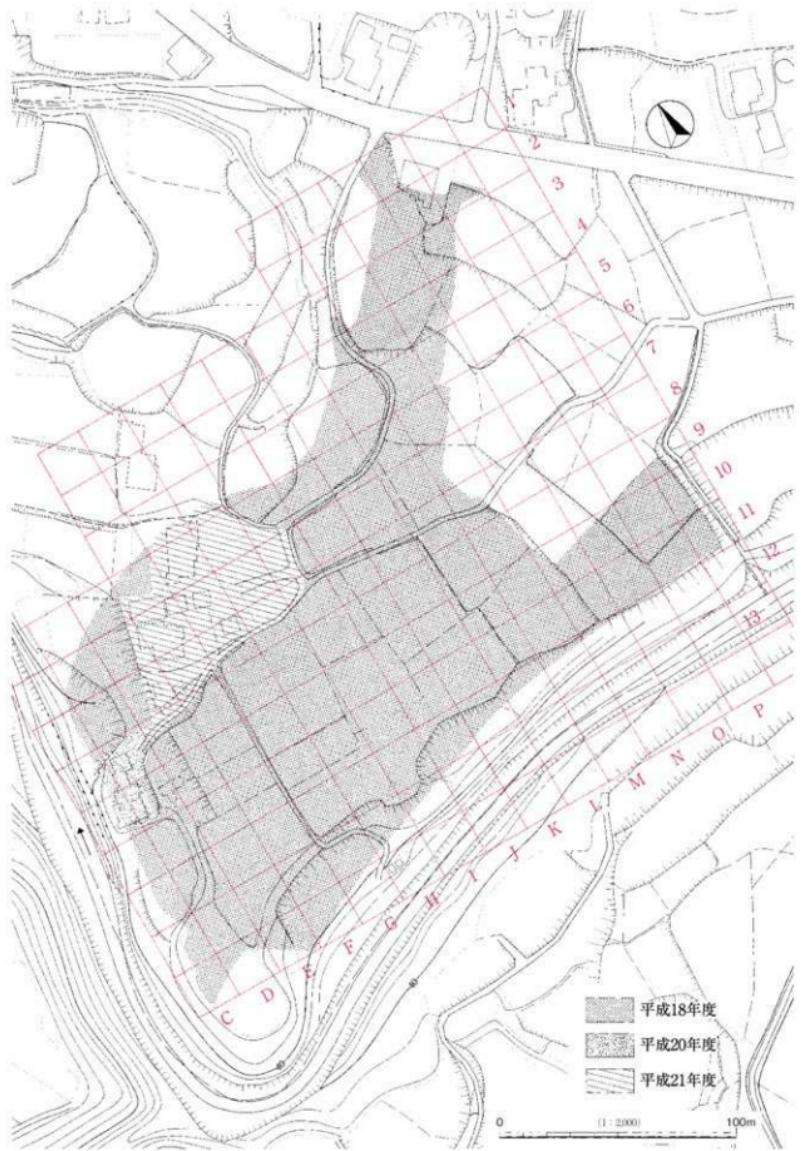
平成23年度 整理期間：平成23年6月22日～平成24年3月28日

作業内容：水洗注記から刊行まで

組織：調査研究部長 及川淳一、中央調査事務所長 白井久美子、担当：上席研究員 森本和男

調査方法 調査は、遺跡全体に20m四方の大グリッドを基本とするグリッド網を設定して行った。大グリッドの名称を北から南へ1・2・3・・・・、西から東へA・B・C・・・・という順序で配列した(第4図)。さらに大グリッドを、2m四方の小グリッドで東西南北に10区画ずつ配して全体を100等分した。小グリッドの名称は、北西隅を00にして、東へ00・01・02・・・・と1の位を増し、南へ00・10・20・・・・と10の位を増して、00～99の小グリッドを設定した。遺構・遺物を検出した場合、その出土地点を特定するために大グリッドと小グリッドの名称を組み合わせて、たとえば11E65、12E01などの表記でしめしている。調査で遺構を検出するごとに遺構番号を付け、整理作業の時も、基本的に野外調査で付された遺構番号を使用した。

上層の調査については、遺構の有無を確認するため、調査対象となった範囲に幅2mのトレンチを任意



第4図 竹ノ下遺跡の年度別調査範囲とグリッド設定図(1:2,000)



第5図 竹ノ下遺跡の確認調査と造構配置図(1:2,000)

に設定し、必要に応じてトレンチを拡張した(図版2)。設定したトレンチの合計面積が、調査面積全体の約10パーセントに相当するようにした。下層の調査については、水田でローム層が検出されなかつたので、確認調査を実施しなかつた。

トレンチによる確認調査の結果、ピット群2か所と数基の土坑が検出されただけだったので、本調査は実施しなかつた(第5図)。遺物は、トレンチおよびピット群周辺から、おもに縄文時代の土器と礫・石器が少量出土した。縄文時代以外の遺物として、近世の遺物が含まれていた。

土層層序 竹ノ下遺跡の立地は河岸段丘上の水田であり、基本的な土層層序も耕作土からなっていた。調査範囲中央やや西側に設定された31トレンチ(31T)南壁の土層層序をみると(第6図)、地表から深さ約20cmまでは暗灰褐色の現代耕作土で、次に水田の床土と思われる黄褐色土がある。その下に3層の黒褐色土があり、おもに縄文土器はこの土層に含まれていた。地表から70cm~100cmの深さに粘性の強い黄色地山層がある。明確な立川ローム層は識別できず、蛇行する河川の河岸段丘上にローム層の堆積は希薄だつたのかもしれない。1層~3層までの土層がほぼ水平に堆積していることから、耕作による搅乱の影響は少なかつたと考えられる。

2 縄文時代

遺構 検出された遺構は、ピット群2か所と土坑3基であった。遺構から出土した遺物はなかつたが、周間から縄文土器が出土していることから遺構の年代を縄文時代と判断した。

ピット群1（第7図）

調査範囲中央やや西側に設定された31トレンチ(31T)から検出された。直径20cm前後の小さなピット5基と、直径50cm~100cmの土坑2基からなり、ピットおよび土坑の深さは2cm~10cmと浅かつた。ピットや土坑の配列に規則性はうかがえない。周間から縄文土器と礫が10数点出土した。

ピット群2（第8図、図版2・3）

調査範囲の西側、平蔵川が鋭角に蛇行する河岸段丘の舌状部分から検出された。南北23m、東西17mの範囲から約100基のピットが検出された。ほとんどのピットが直径50cm以下、深さ10cm前後的小ピットであった。ピットの配列にさほど規則性はうかがえないが、あるいは南側部分で住居跡のような円形に並ぶピットもみうけられる。ピット群の周間一帯には、おもに縄文時代中期の土器や礫・石器が散在し、焼成して赤化した礫も含まれていた。炉跡や硬化した床面など住居にともなう施設は明確に検出されなかつたが、このピット群を人間の居住痕跡とみなすことはできるであろう。

SK01土坑（第9図、図版3）

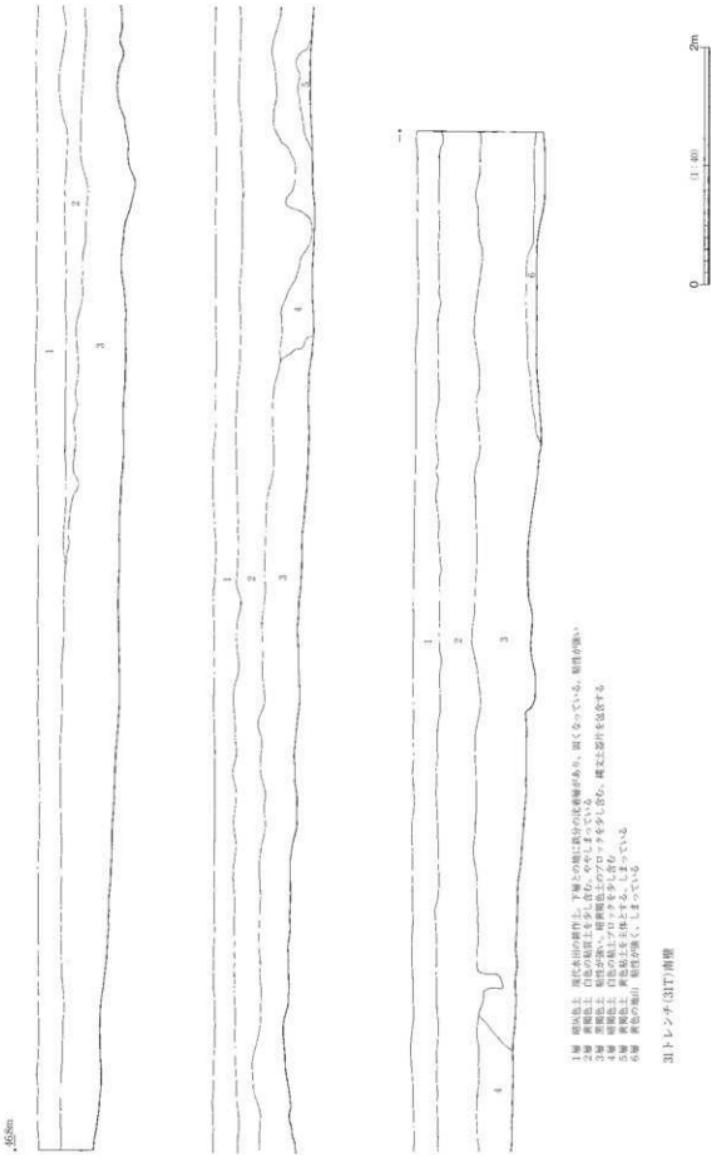
河岸から離れた調査範囲東端で検出された。縦1.35m、横1m、深さ0.93mであった。出土した遺物はなかつた。

SK02土坑（第9図、図版3）

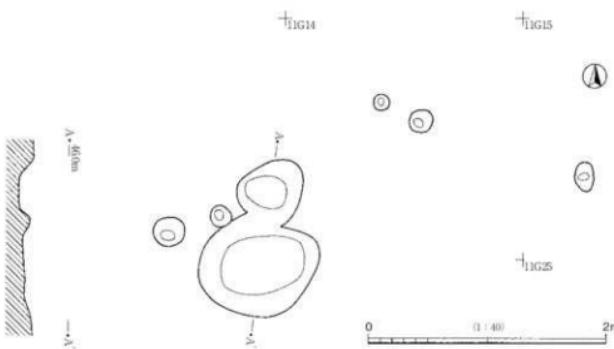
調査範囲のはば中央で検出された。縦2m、横2.73m、深さ1.62mであった。周間から少数の縄文土器が出土した。

SK04土坑（第9図）

調査範囲のはば中央で、ピット群1の東側から検出された。縦1.76m、横1.16m、深さ0.18mであった。周間から縄文土器と礫が少数出土した。



第6図 竹ノ下遺跡の土層断面図



第7図 ピット群1

遺物 縄文時代の遺物は、各トレンチとピット群2の周辺から、おもに縄文時代中期の土器、石器・礫が出土した。

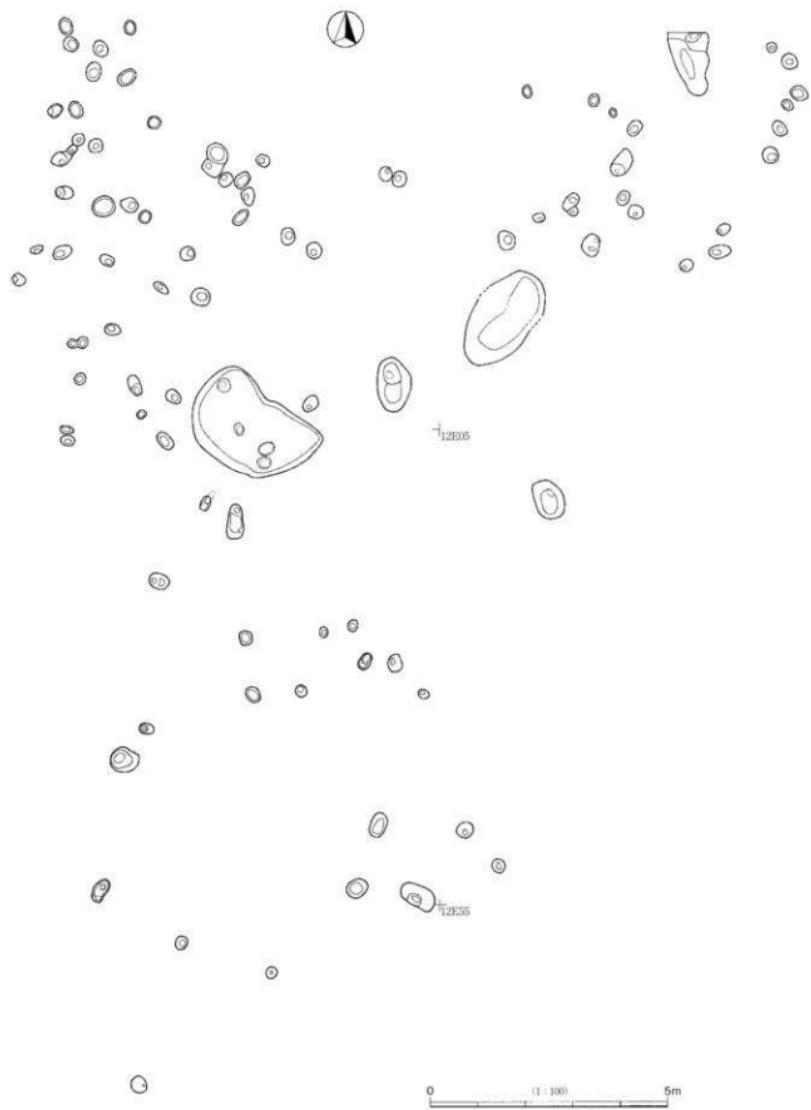
縄文土器（第10・11図、第2表、図版12・13）

1～16はピット群2の周辺、17～20はトレンチから出土した。1～3は隆線で区画された勝坂式の土器で、胎土に砂粒を多く含み脆い焼成である。4は隆線のわきに半截竹管文を付した口縁で、阿玉台II式の土器である。5はキャリバー形深鉢形土器の波状口縁で、勝坂式の終末に比定される土器であろう。6と7は加曾利E式の土器で、6は突帶をめぐらせた口縁である。12は沈線でU字形に区画された深鉢の胴部で、加曾利E式（後半）の土器である。15はくの字状に内側へ屈曲する波状口縁で、竹管による円形刺突文をめぐらし、縦位に波状沈線が施されていて、堀之内I式の土器であろう。16は斜状沈線が施され、曾利IV式の土器であろう。20は口縁下部に半截竹管文を横位に直線状と波状にめぐらせ、その下部に縦位の竹管文を施した深鉢で、曾利式の土器である。

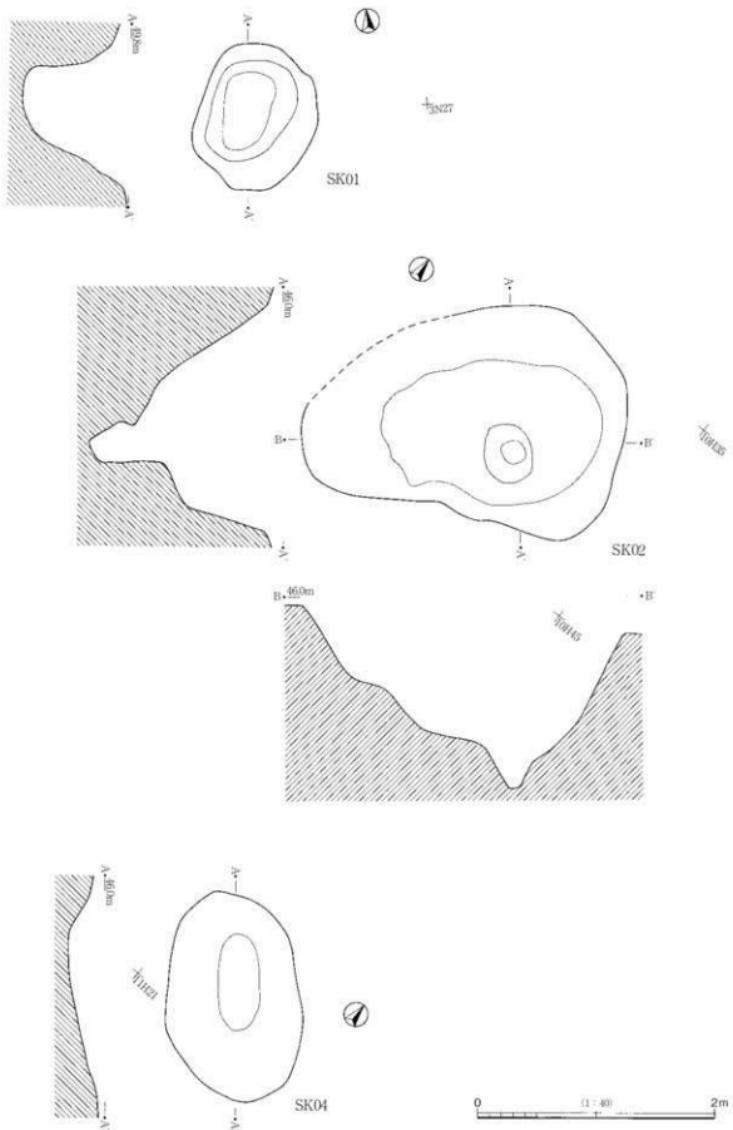
石器（第12・13図、第3表、図版13・14）

1と2は黒曜石の石礫である。1の基辺は直線状で、2の基辺はくぼみ、先端と基辺の片方が欠損していた。3は薄緑色した凝灰岩の磨削石斧で、刃部を欠いていた。4は泥岩の二次加工のある剥片。5は黒曜石の剥片で、一部に二重バティナが見受けられる。6はチャートの剥片で、楔形石器の可能性も考えられる。14はチャートの両極剥片で、15と16はチャートの両極石核である。

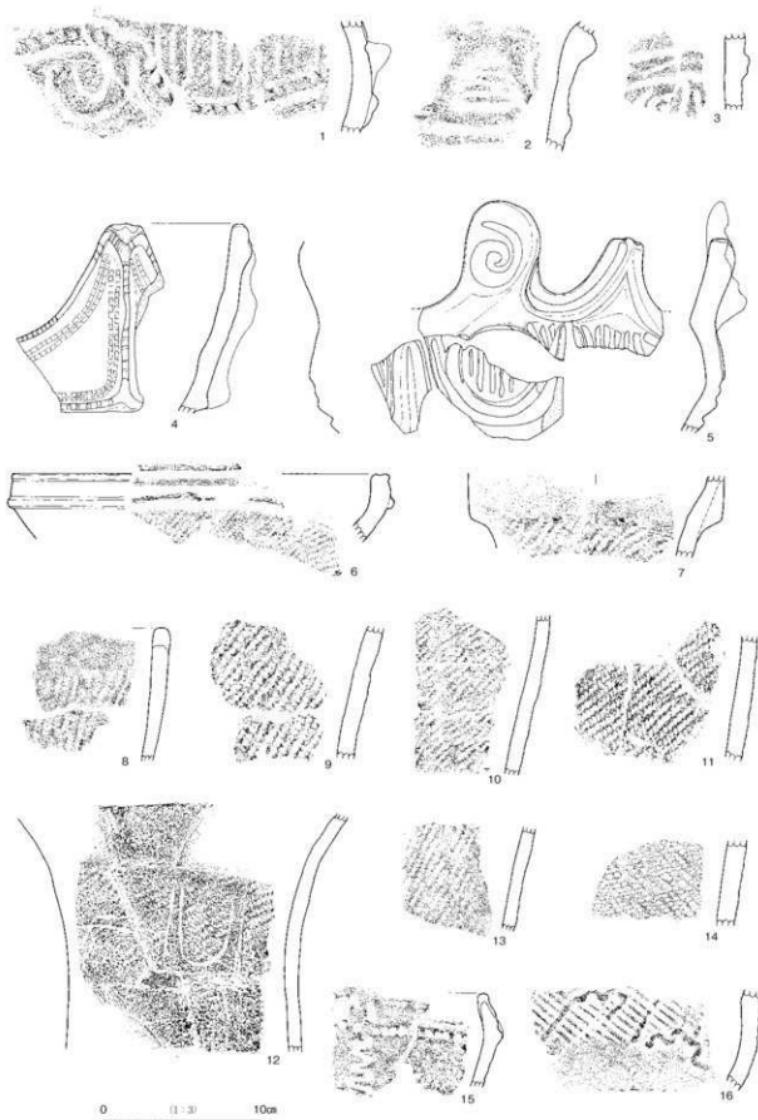
18は粘板岩質ホルンフェルスの分銅形打製石斧で、半分を欠損している。19は頁岩の打製石斧である。20～25・27・28は加撃痕のある礫で、石材はチャート、泥岩（珪化）、砂岩、安山岩などバラエティに富んでいた。26は安山岩、29は砂質ホルンフェルスの磨石である。



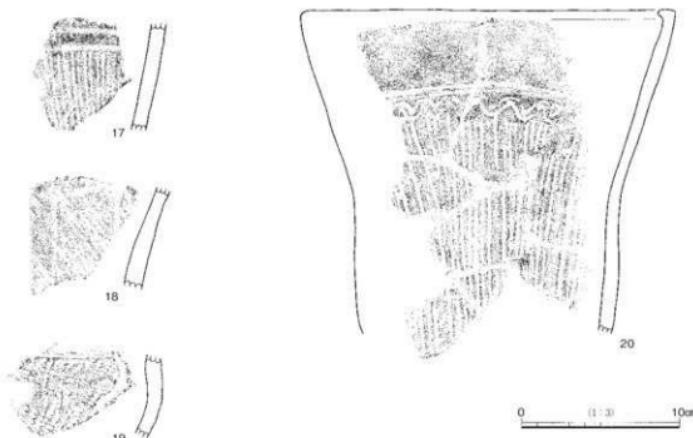
第8図 ピット群2



第9図 土坑



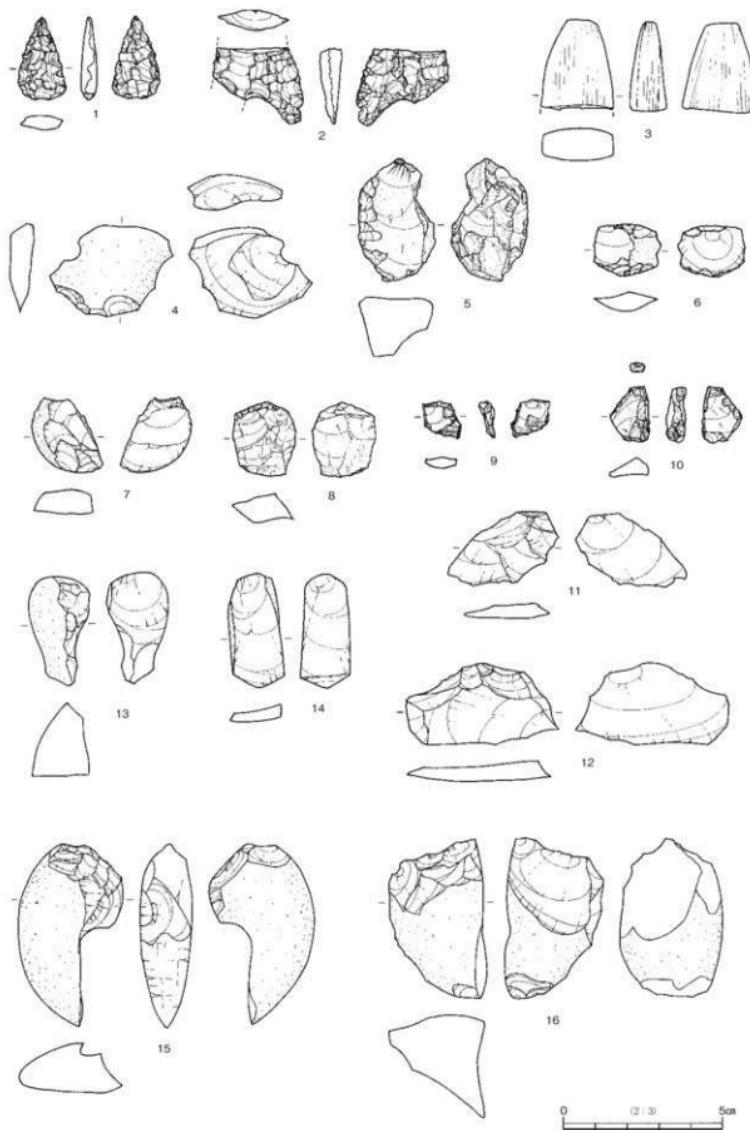
第10図 繩文土器(1)



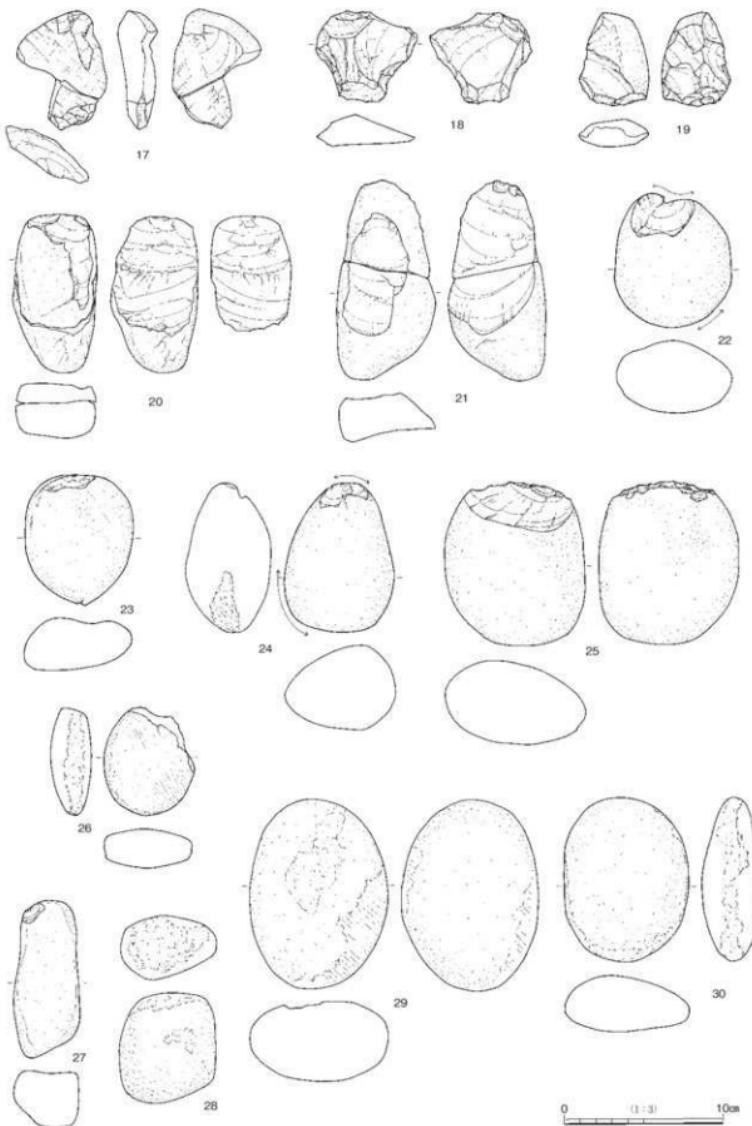
第11図 縄文土器(2)

第2表 竹ノ下遺跡の縄文土器

挿図番号	実測番号	出土地区	型式	遺物番号	備考
1	1	ピット群2	阿玉台	SH04-7, 11E93-17	
2	2	ピット群2	阿玉台	SH04-2・5	
3	3	ピット群2	阿玉台	SH04-8	
4	7	ピット群2周辺	阿玉台II	I2E15-9	半裁竹管
5	5	ピット群2周辺	阿玉台終末	11E65-5・20・22, T36-1	
6	4	ピット群2周辺	加曾利E	11E66-21・26・28	
7	3	ピット群2周辺	加曾利E	11E65-22, 11E66-12・24	
8	2	ピット群2周辺		I2E31-5・8	
9	2	ピット群2周辺		11E65-21, 11E66-23	縄文 RL
10	1	ピット群2周辺		11E91-13, 11E92-6	縄文 RL
11	5	ピット群2周辺		I2E23-5・8・9	縄文 RL
12	10	ピット群2周辺	堀之内I	I2E12-14・24・26・41	
13	4	ピット群2周辺		I2E31-12	縄文 RL
14	3	ピット群2周辺		I2E13-4	縄文 LR
15	6	ピット群2周辺	堀之内I	I2E33-2・11	
16	8	ピット群2周辺	曾利IV	I2E01-17・20	
17	1	トレンチ		T32-22	半裁竹管
18	2	トレンチ		T12-3	
19	3	トレンチ		T31-10	
20	4	トレンチ	加曾利E I	T31-1・8・11・12	半裁竹管



第12図 石器(1)



第13図 石器(2)

第3表 竹ノ下遺跡の石器

排図番号	実測番号	出土地名	器種	石材	縦 (mm)	横 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	遺物番号	備考
1	15	トレンチ	石礫	黒曜石	26	15	5	16	T32-1	
2	25	ビット群2周辺	石礫	黒曜石	25	25	7	34	12E02-5	
3	9	トレチ	磨製石斧	燧灰岩	28	23	11	137	T31-1	
4	24	ビット群2周辺	二次加工のある剝片	混岩	27	40	11	124	12E02-1	
5	4	トレチ	剥片	黒曜石	39	24	20	152	T16-1b	二重ハバティナ
6	30	ビット群2周辺	剥片、石塊?	チャート	16	21	7	22	12E13-19	
7	32	ビット群2周辺	剥片	チャート	24	23	8	45	12E14-1	
8	38	ビット群2周辺	剥片	チャート	23	20	10	52	12E24-11	
9	16	ビット群2周辺	剥片	黒曜石	12	12	5	66	11E62-1	
10	5	トレンチ	剥片?	黒曜石	18	13	6	11	T16-1c	刃こぼれが多いあるが、アッシュメント
11	7	トレンチ	剥片	粘板岩質ホルンフェルス	22	26	5	35	T30-2	
12	7	トレチ	剥片	粘板岩質ホルンフェルス	25	48	6	101	T30-3	
13	33	ビット群2周辺	剥片	チャート	35	19	23	163	12E14-9	
14	22	ビット群2周辺	両極剥片	チャート	26	16	4	55	11E80-3	
15	35	ビット群2周辺	両極石核	チャート	56	31	16	336	12E22-7	12E13-13と同母岩
16	29	ビット群2周辺	両極石核	チャート	50	30	37	624	12E13-13	12E22-7と同母岩
17	28	ビット群2周辺	両極石核	溶結灰岩	75	56	19	900	12E03-1, 12E13-11	
18	8	トレンチ	打製石斧	粘板岩質ホルンフェルス	56	63	18	70	T30-4	分離形
19	31	ビット群2周辺	打製石斧	頁岩	59	42	17	620	12E13-21	
20	20	ビット群2周辺	加撃痕のある縦と横の長合	チャート	98	54	23	2469	11E75-4-5	
21	36	ビット群2周辺	加撃痕のある縦	溶岩(珪化)	126	62	29	2846	12E23-6-7	
22	23	ビット群2周辺	加撃痕のある縦	溶結灰岩	85	72	46	4165	11E82-12	
23	17	ビット群2周辺	加撃痕のある縦	チャート	80	67	33	2813	11E67-3	
24	11	トレチ	加撃痕のある縦	砂岩	92	68	52	4472	T32-1	
25	10	トレンチ	加撃痕のある縦	石英風岩	102	67	52	6445	T31-5	
26	14	トレチ	骨石	安山岩	69	55	25	1560	T34-1	骨質不鮮明、周間に加撃痕
27	19	ビット群2周辺	加撃痕のある縦	チャート	99	41	34	717	11E75-3	
28	39	ビット群2周辺	加撃痕のある縦	安山岩	68	60	40	2867	12E24-13	表面の風化が激しく、骨質は堅かっか えていてない。
29	18	ビット群2周辺	骨石	砂質ホルンフェルス	120	86	50	7420	11E73-2	
30	2	トレチ	周囲に加撃痕のある縦	チャート	102	78	35	4213	T2-1	

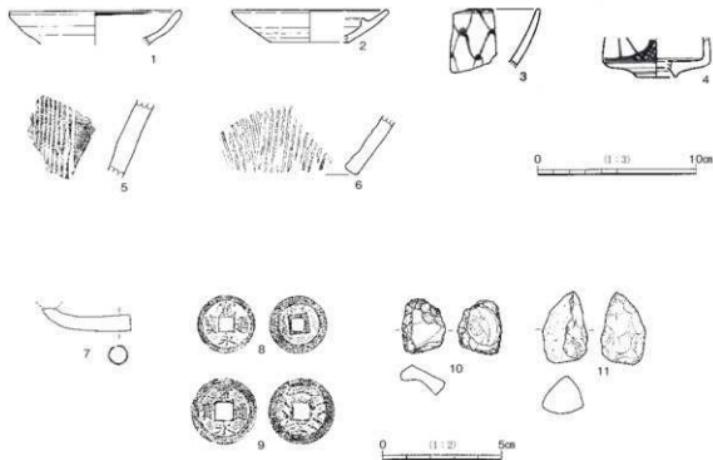
3 近世

近世に関する遺構は検出されなかったが、トレンチから縄文時代の遺物に混ざって、近世の遺物がわずかにながら出土した。

遺物（第14図、第4表、図版14・25）

近世の遺物として、陶磁器、煙管、銭貨、火打ち石が出土した。1は瀬戸・美濃の鉄絵皿で、内面口縁に鉄軸で線模様が描かれている。17世紀後半の製作と思われる。3は肥前の丸碗で、外面に一重網目文が描かれている。18世紀前半の製作であろう。4の筒形碗の外面には花弁と思われる模様の一部が描かれ、また底面には呉須で3重の圈線が描かれている。5と6は瀬戸・美濃の擂鉢を転用した砥石と思われる。

7は煙管の鉄製雁首で、火皿を欠いている。長さ3.7cm、重量3.79gであった。8と9は寛永通宝で、8は古寛永、9は背面に十一波文のある鉄錢の四文銭である。真鍮四文銭は明和5年(1768)から鋳造が開始され、発行初年は背面の模様が二十一波であったが、翌年から十一波に変更された。その後万延元年(1860)に四文銭も鉄銭に切り替えられた。つまり鉄製四文銭は江戸時代末期の鋳貨である。10は玉隨の火打ち石で、縦23mm、横18mm、厚さ8mm、重量4.1gであった。11は石英の火打ち石で、縦30mm、横19mm、厚さ16mm、重量10.1gであった。



第14図 近世の遺物

第4表 竹ノ下遺跡の陶磁器

排図番号	実測番号	出土地点	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調 整		胎土	色 調		遺存率	遺物番号	備考
								外面	内面		外面	内面			
1	1	トレンチ	瀬戸 美濃	鉄爐皿	10.8	-	-	回転ナデ	回転ナデ	砂粒・ 白色針	乳灰色・ 釉薺	小片	T22-1	志野。鉄輪。 17c 中~後	
2	5	トレンチ	瀬戸 美濃	灯明皿	9.9	-	2.0	回転ヘラ 削り	ナデ	密・少	にぶい、黄 橙色・諸 釉	小片	T1-1	19c ~	
3	2	トレンチ	肥前	丸碗	-	-	-	一重網目 文	回転ナデ	密・少	乳灰色・ 釉薺	小片	T22-1	(III~IV期)。 外面に網目文。 底面に呂須で 3重の巻線	
4	6	トレンチ	肥前	筒形納	-	2.4	-	回転ナデ	回転ナデ	密・少	乳灰色・ 釉薺	小片	T12-1		
5	4	トレンチ	瀬戸 美濃	擂鉢 (転用砥石)	-	-	-	回転ヘラ 削り	ナデ	砂粒・ 白色針	暗赤褐色・ 諸釉	小片	T25-1		
6	3	トレンチ	瀬戸 美濃	擂鉢 (転用砥石)	-	-	-	回転ヘラ 削り	ナデ	密・少	赤褐色・ 諸釉	小片	T22-1		

第3節 関尻遺跡

1 調査の経過と調査方法

関尻遺跡は、首都圏中央連絡自動車道(圏央道)と国道297号線が交差して、市原南IC(仮称)となる料金所と、高速道路の本線とをむすぶ円周状の誘導道路に相当する場所にある。平蔵川が蛇行する標高約50mの河岸段丘上に位置し、付近は水田である(図版1・4)。平蔵川をはさんだ対岸に、竹ノ下遺跡がある。調査の経過 発掘調査を平成17年度、18年度、20年度に実施し、調査面積は合計36,938m²であった。調査されなかった部分については、平成21年度に千葉県教育委員会文化財課が試掘を実施した。整理作業と報告書作成を平成18年度と23年度に行った。発掘調査から整理作業・報告書刊行に至るまでの調査組織、担当者および作業内容は以下のとおりである。

発掘調査

平成17年度 調査期間：平成17年10月3日～平成17年12月15日

調査対象面積：21,238m²

確認調査面積：上層2,401／21,238m²、水田のため下層の確認調査なし。

本調査面積：上層2,043m²

組織：調査部長 矢戸三男、南部調査事務所長 高田 博、担当：上席研究員 麻生正信

平成18年度 調査期間：平成18年10月2日～平成18年10月18日

調査対象面積：2,630m²

確認調査面積：上層270／2,630m²、水田のため下層の確認調査なし。

組織：調査研究部長 矢戸三男、南部調査事務所長 高田 博、担当：上席研究員 柴田龍司

平成20年度 調査期間：平成20年8月1日～平成20年8月29日

調査対象面積：13,070m²

確認調査面積：上層1,401／13,070m²、水田のため下層の確認調査なし。

組織：調査研究部長 大原正義、中央調査事務所長 折原 繁、担当：主席研究員 土屋治雄、上席研究員 郡 淳一

整理作業

平成18年度 整理期間：平成18年7月1日～平成18年8月31日

作業内容：水洗注記から挿図作成の一部まで

組織：調査研究部長 矢戸三男、南部調査事務所長 高田 博、担当：上席研究員 麻生正信

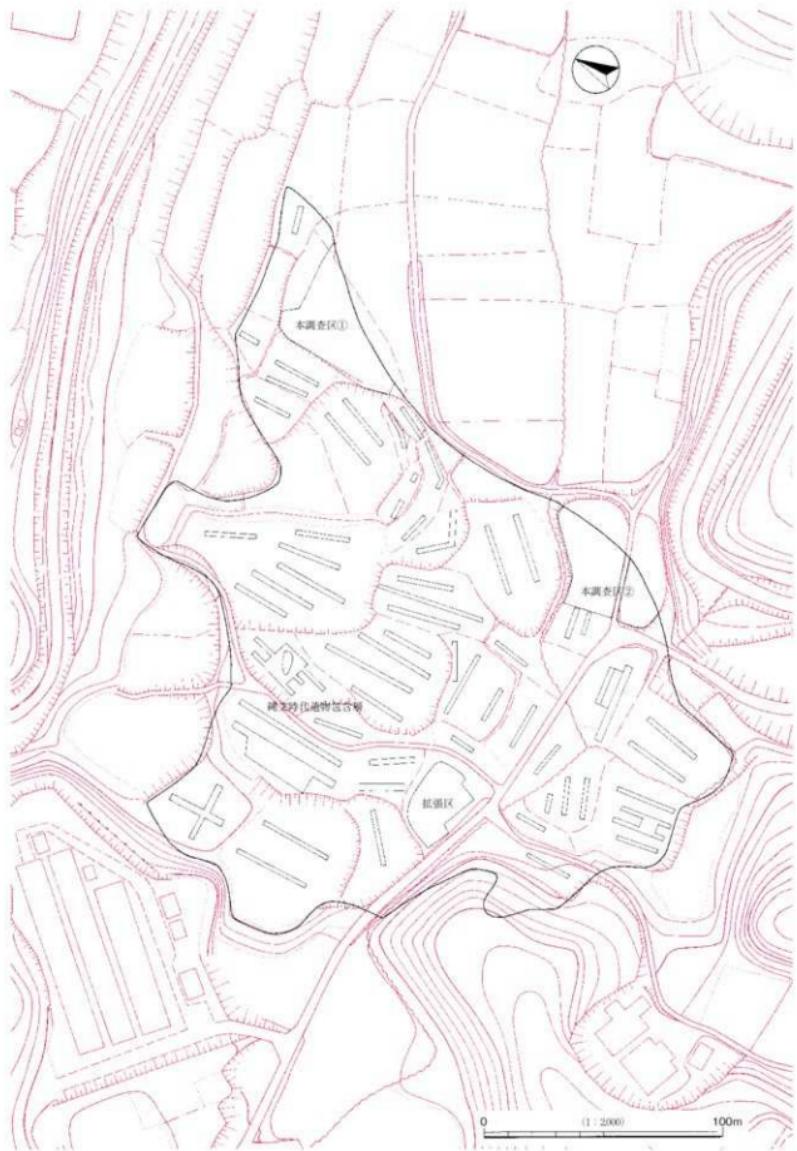
平成23年度 整理期間：平成23年6月22日～平成24年3月28日

作業内容：挿図作成の一部から刊行まで

組織：調査研究部長 及川淳一、中央調査事務所長 白井久美子、担当：上席研究員 森本和男



第15図 関尻遺跡の年度別調査範囲とグリッド設定図(1:2,000)



第16図 関尾遺跡の確認調査と本調査区(1:2000)

調査方法 調査は、遺跡全体に40m四方の大グリッドを基本とするグリッド網を設定して行った。大グリッドの名称を北から南へ1・2・3・…、西から東へA・B・C・…という順序で配列した(第15図)。さらに大グリッドを、4m四方の小グリッドで東西南北に10区画ずつ配して全体を100等分した。小グリッドの名称は、北西隅を00にして、東へ00・01・02・…と1の位を増し、南へ00・10・20・…と10の位を増して、00~99の小グリッドを設定した。遺構・遺物を検出した場合、その出土地点を特定するためには大グリッドと小グリッドの名称を組み合わせて、たとえば2F88、5E89などの表記でしめしている。調査で遺構を検出することごとに遺構番号を付け、整理作業の時も、基本的に野外調査で付された遺構番号を使用した。

上層の調査については、遺構の有無を確認するため、調査対象となった範囲に幅2mのトレンチを任意に設定し、必要に応じてトレンチを拡張した(図版4)。設定したトレンチの合計面積が、調査面積全体の約10パーセントに相当するようにした。下層の調査については、水田でローム層が検出されなかったので、確認調査を実施しなかった。

平成17年度の調査で、トレンチによる確認調査の結果、標高の高い2地点から多数のピットと遺物が検出されたので、本調査区を2か所設定した。北側を本調査区①、南側を本調査区②とし、本調査範囲の総面積は2043m²であった。周辺の遺跡から出土例のない青磁をはじめ、中世の陶器が多く出土し、また多数のピットは中世の掘立柱建物跡と判断された。その他にも土坑とピットの組み合わせた遺構が検出され、トレンチを拡張して調査した。また平成20年度の調査では、確認調査で縄文時代の遺物包含層1か所が検出され、トレンチを拡張して調査を行った(第16図)。遺物は、おもに2か所の本調査区と遺物包含層から、縄文時代の土器と石器・礫、そして中~近世の陶器などが出土した。

土層層序 関尻遺跡の立地は河岸段丘上の水田であり、基本的な土層層序も耕作土からなっていた。調査範囲のやや東側、本調査区①に近い3E09の土層層序をみると(第17図)、おもに暗色もしくは黒色系の粘質土からなり、下層に暗青灰色のシルト層が堆積していた。地表から約20cmまでは暗茶褐色粘質土で、現代の水田耕作土である。地表から約50cm下に7層の暗茶褐色粘質土があり、宝永火山灰を含んでいた。7層より下層は黒色をやや増した粘質土であった。地表から約1mの15層より下は、水田還元層の暗青灰色シルト層となっていた。

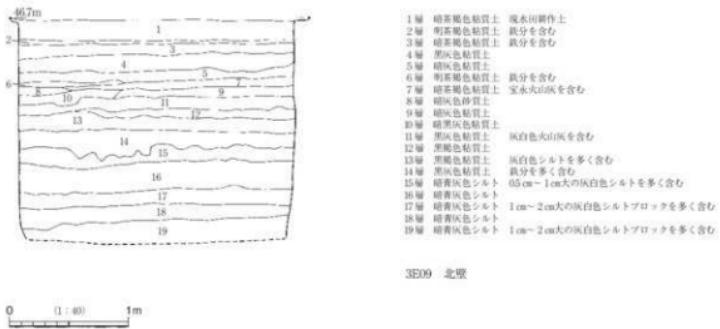
水田耕作地造成のため、標高の高い部分を削平して谷部に土を搬入したと思われるが、少なくとも近い過去に、大規模な土壤改良を行った形跡はさほど見受けられなかった。

2 縄文時代遺物包含層

検出された遺構・遺物を、縄文時代遺物包含層、拡張区、本調査区①、本調査区②の順で記述する。

遺物包含層SX02 (第18図、図版4)

縄文時代遺物包含層は、調査範囲のやや北側、平蔵川に近い段丘上から検出された。東西約11m、南北約4.5m、深さ0.2m~0.5mの溝状の窪地内に、東西約10m、南北約2mの範囲に縄文土器と礫が分布していた。数量は土器片約70点、礫約80点(石器を含む)で、合計約150点。その総重量は土器片2,870g、礫・石器7,044gであった。土器片はおもに撚糸文系の縄文土器であった。これらの遺物は、水田土壤下に堆積した厚さ約30cmの黒褐色粘質土から出土した。利器として使用された礫や石器が含まれていたが、遺構や火の使用の顕著な痕跡はなく、人間活動にともなってその場所に土器や礫が残存したのか、あるいは単純



第17図 関尻遺跡の土層断面図

に小規模な窪地に流れ込んで埋没した遺物なのか、判断したい。

縄文土器（第18図、第5表、図版15）

図化できた縄文土器の点数は少なかった。焼成不良な脆弱な破片が多く、器形を復元できるものはなかった。1~3は撚糸文系の土器片で、4は尖底の底部で、縄文時代早期前半の型式に属する土器であろう。石器（第19~21図、第6表、図版16・17）

図化した石器のうち、1・10~33が遺物包含層から出土した石器で、礫を応用した利器が多かった。1は黒曜石の加工痕のある剥片で、薄い剥片の側辺一部に押圧による剥離痕があった。10は砂岩の片刃の礫器で、底辺を打点にして敲いて鈍い角度の刃部を作っている。手のひらよりやや大きいサイズで、片手で持ち上げて振り下ろすのに適した重量である。13~17も礫器で、敲いて刃部が作られている。11は焼けた細長い砂岩を横位にして、底辺を両側から敲いた加工痕があった。12は砂岩の被加熱痕のある円礫で、焼成をうけ、一部赤化している。18~25は加熱痕のある礫で、様々な石材を素材にしていた。22は焼成をうけ、一部赤化している。

28はチャートの石核である。打面部を上面に設定して、剥片剥離痕が正面と背面にみられる。29~33は磨石で、焼成をうけて赤化したものもあった。

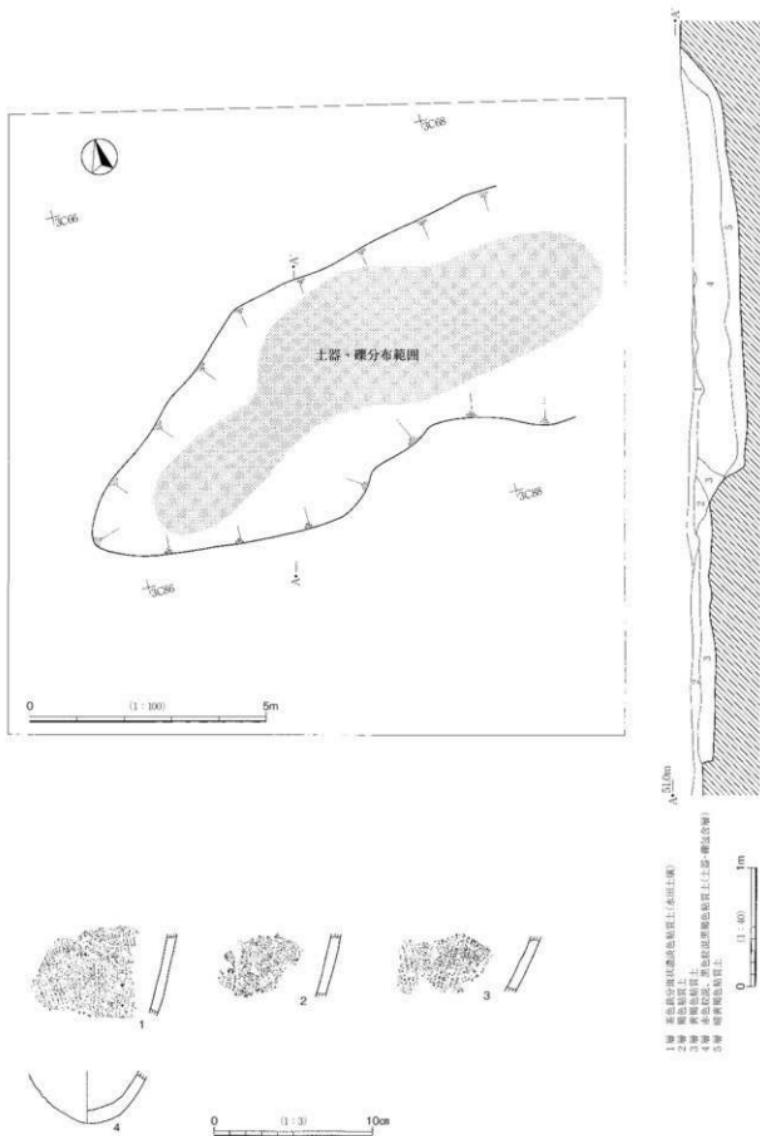
3 拡張区

確認調査の際に調査範囲の西南付近で土坑が検出され、周囲を拡張した。やや距離をおいてピットが検出された。拡張区一帯から縄文時代の土器と石器、陶磁器片、煙管、錢貨などが少量出土した。

土坑（第22図、図版5）

縦1.9m、横2.2mのほぼ正方形をした土坑が、5B88・89・98・99に位置していた。深さは約1.3mで、中間に段を形成して縦1.6m、横1.9mのひと回り小さな土坑が掘られていた。土坑内部には類似した暗青灰色砂が堆積し、長期間かけて徐々に埋没したのではなく、比較的の短期間に同質な土で埋まつたと考えられる。土坑から出土遺物はなく、遺構の年代を推定するのは困難である。

土坑の西側7m、東側7m、そして北側7mと14mの地点でピットが検出され、それぞれの規模は、直



第18図 縄文時代早期の遺物包含層と出土縄文土器

第5表 間尻遺跡の縄文土器

排図番号	実測番号	出土地区	遺物番号	型式	備考
1	1	早期包含層 SX02	SX02-8		撫糸
2	2	早期包含層 SX02	SX02-68		撫糸
3	3	早期包含層 SX02	SX02-68		撫糸
4	4	早期包含層 SX02	SX02-17		尖底の底部
5	1	SX01	SX01-5		
6	2	SX01	SX01-3	加曾利E	縄文
7	3	SX01	SX01-2	加曾利E	
8	4	SX01	SX01-6		
9	22	本調査区①	2G30-1		縄文
10	6	本調査区①	2F88-1		
11	11	本調査区①	2F56-2		
12	19	本調査区①	2F56-2		
13	27	本調査区①	2F58-1		底部
14	1	本調査区②	5F90-8	阿玉台	雲母片
15	2	本調査区②	5E98-9	阿玉台	雲母片
16	23	本調査区②	5E89-16		
17	18	本調査区②	5E99-13	阿玉台	雲母片
18	25	本調査区②	5E98-5	阿玉台	雲母片
19	24	本調査区②	6F00-4	阿玉台	
20	20	本調査区②	5F90-4		
21	16	本調査区②	5F80-2	阿玉台	雲母片
22	15	本調査区②	5E98-23	阿玉台	雲母片
23	12	本調査区②	6F00-3	阿玉台	竹管
24	5	本調査区②	5E89-12	加曾利E	
25	3	拡張区	5C81-3, 5C82-5	阿玉台	竹管
26	26	本調査区②	5F90-3		
27	14	本調査区②	5F99-23		
28	21	本調査区②	5F90-6		
29	13	本調査区②	5F91-1		縄文 LR
30	7	本調査区②	6F10-1		竹管
31	4	本調査区②	6D96-1		
32	9	拡張区	5C82-2		
33	17	本調査区②	5F90-10		
34	8	本調査区②	5F82-1		
35	28	本調査区②	5F91-2		底部
36	29	本調査区②	6E09-10		底部
37	30	本調査区②	5E89-5	土器片鍤	竹管

径約40cm、深さ25cm～90cmであった。つまり土坑を中心にして、直角に交差するライン上に等間隔にピットが配置されていた。一見するとこの規格性は、5mほど南側を走る農道のライン方向と近似している。土坑とピットは一体となって解釈すべきであろうが、土坑の性格は不明とせざるをえない。農道の近くに位置し、農道のラインに準じた規格性もうかがえることから、あるいは最近の構造物かもしれない。

遺物（第21・25・36～38図、第5表、図版15・17～19・25）

縄文時代と中世の遺物が少量出土した。第25図の25と32が、拡張区から出土した縄文土器である。25は風化が著しいが、竹管による模様が施された阿玉台式の土器と思われる。図化した石器は第21図の34と35である。34は、比較的大きな砂岩の原石を利用した磨石で、正面がやや凹むほど摩滅が進んでいた。

中～近世の遺物として陶磁器と金属製品があった。第36図21は瀬戸・美濃の描鉢小片である。年代を細かく比定するのは困難なので、漠然と中世から17世紀までの所産としておく。第37図50～53は近世の陶磁器で、50～52は瀬戸・美濃志野小皿もしくは灯明皿である。53は瓦質土器でできた瓶掛の獣面把手である。19世紀前後の第8小期・第9小期の年代であろう。

金属製品として、第38図3の鉄釘、13の煙管の吸口、20の寛永通宝が出土した。

4 本調査区①

調査範囲の北東隅で多数のピットが検出され、付近一帯で遺物が出土したため、縦約50m、横約40mの三角形状の本調査範囲が設定された。ピット以外に明確に掘り込まれた遺構は検出されなかった。本調査区範囲の北西部分で、ピットの配置から竪穴住居跡1軒が認められた（第23図、図版5）。住居跡以外に、ピット群から規格性を識別することは困難であった。しかしながら、縄文土器と中～近世の陶磁器が本調査区全体から出土していることから、これらのピット群が、縄文時代もしくは中～近世の何らかの構造物の痕跡であった可能性も考えられる。遺物として、本調査区範囲全体から縄文時代の土器、礫・石器、中近世の陶磁器と金属製品が出土した。

SX01（第24図、図版5）

本調査区①の北西部分、2F17～19・27～29・37～39の範囲で楕円形状にめぐるピットが10基以上検出され、またそのピット群内側の中央やや北側で、焼土と炭が分布していた。周辺からは縄文時代中期の土器片が少量出土した。楕円形状のピット群を柱穴、焼土と炭を炉跡と解釈し、少量ながらも縄文土器が共伴したので、ピット群を縄文時代の竪穴住居跡と判断した。

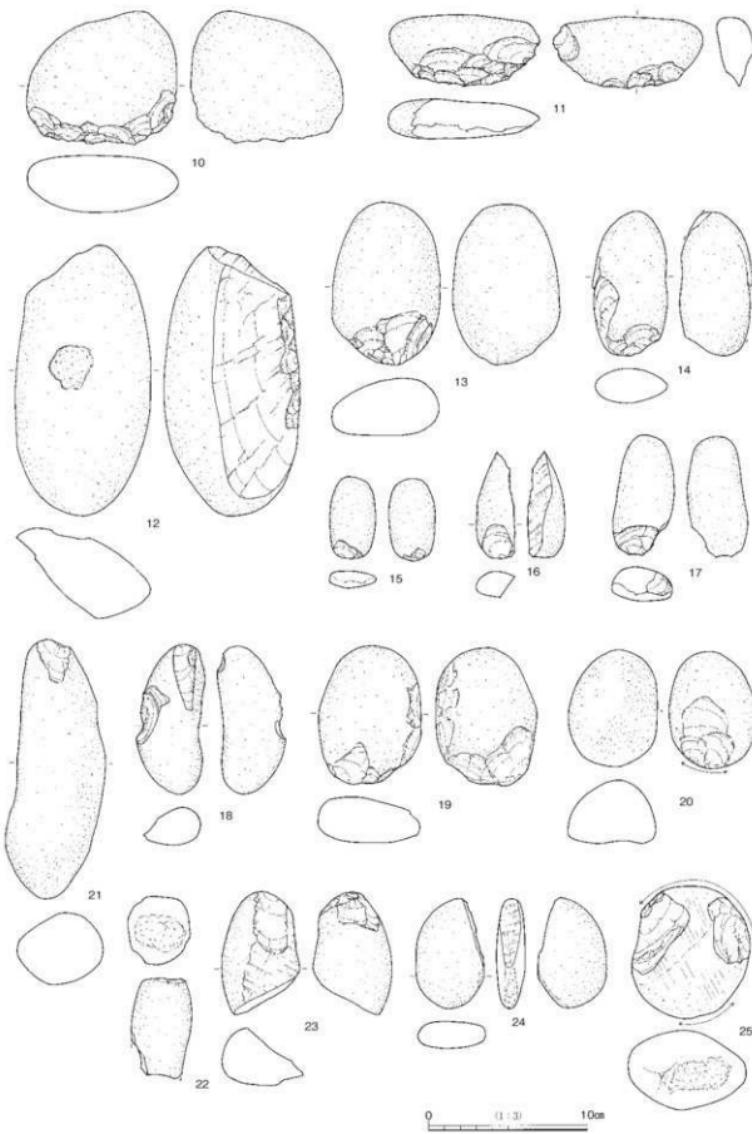
竪穴住居跡の規模は長軸10.2m、短軸8.6mと推定された。楕円形状にならぶ柱穴と考えられたピットは、直径20cm～45cm、深さは10cm～30cmと小規模であった。ピット群内側の中央やや北東側に縦40cm、横80cmの楕円形状に焼土が分布していた。焼土は厚さ数cmの薄い層で堆積していた。焼土の周辺には縦約1m、横約4mの範囲に炭が分布していた。明確に掘り込まれた炉跡ではなかったが、一応竪穴住居跡にともなう焼土と炭と考えたい。

竪穴住居とともに縄文時代中期の加曾利E式の土器が出土しているので、竪穴住居の年代も縄文時代中期と解釈してよからう。

竪穴住居の柱穴と判断したピット以外に多数のピットが検出されたが、それらにともなって出土した遺物はなく、時代の比定およびピットの性格について判断するのは困難である。ただし本調査区範囲全体から縄文時代と中～近世の遺物が出土しているので、それらのピットの年代も縄文時代もしくは中～近世の可



第19図 石器(1)



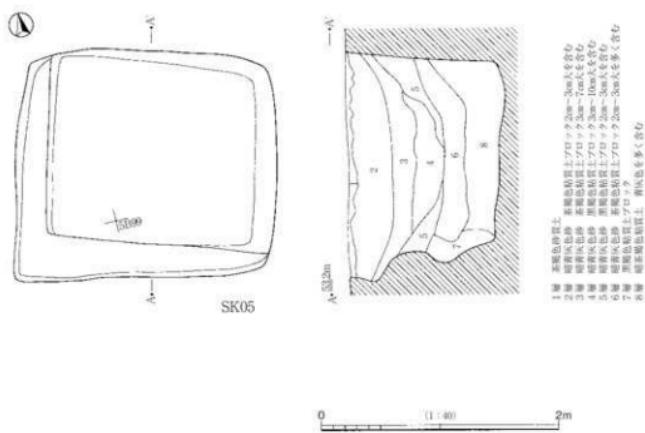
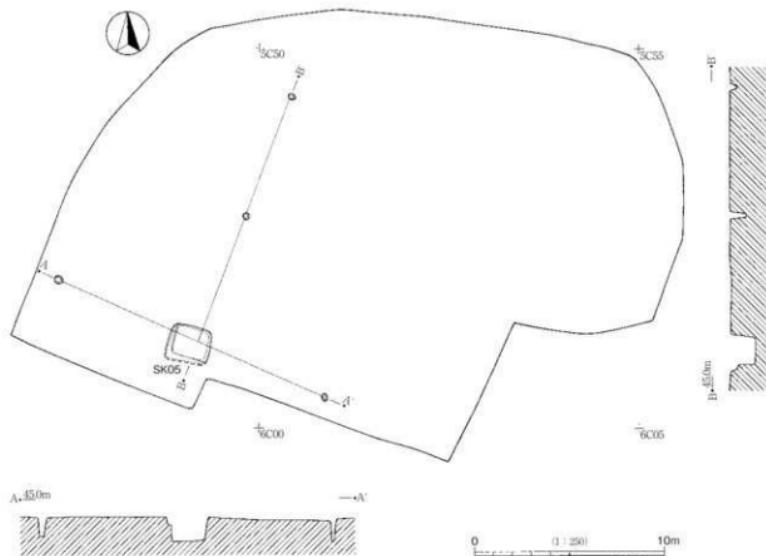
第20図 石器(2)



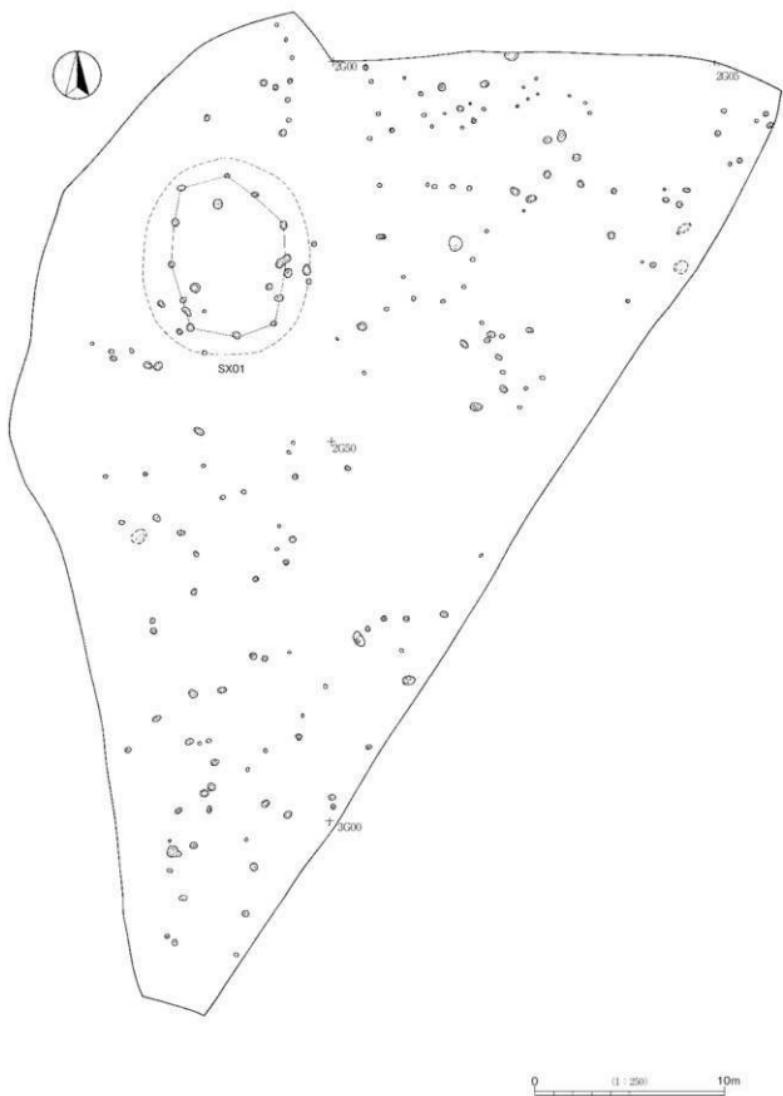
第21図 石器(3)

第6表 関尻遺跡の石器

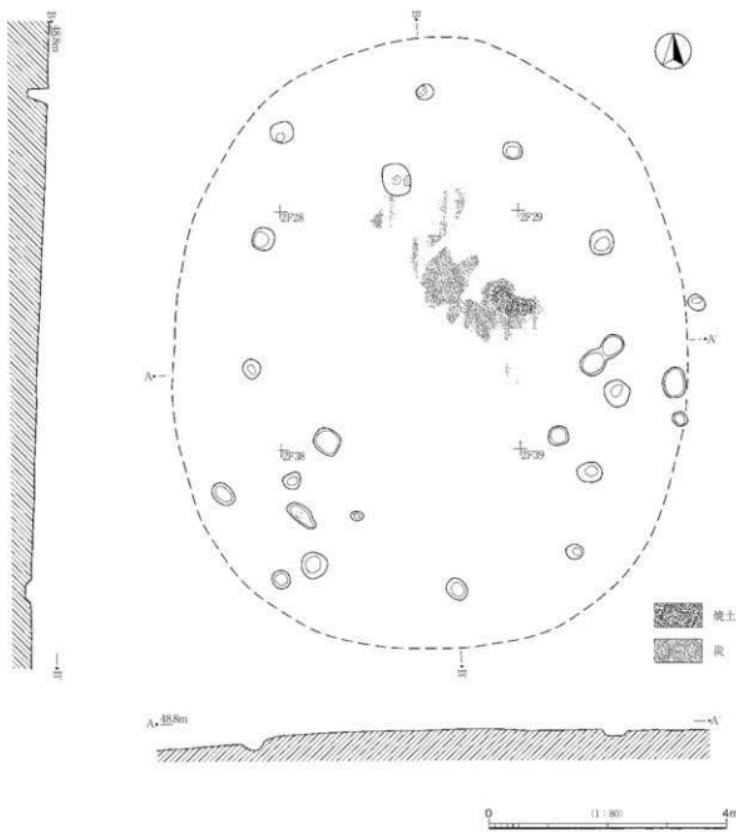
種別 番号	実測 番号	出土地区	器種	石材	縦 (mm)	横 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	遺物番号	備考
1	22	早期包含層 SX02	加工痕のある剥片	黒曜石	17	21	4	14	SX02-66	
2	30	本調査区①	石鏃	黒色安山岩	23	18	5	20	2F67-6	
3	31	本調査区①	小型の石核	黒曜石	24	14	9	26	2G12-2	
4	33	本調査区②	スクレイパー	保田層産珪質頁岩	45	38	14	9.7	6E18-7	
5	34	本調査区②	スクレイパー?	チャート	25	25	8	4.9	6F00-3	
6	32	本調査区②	小型の石核	黒曜石	16	26	18	5.2	5E97-1	
7	27	2008年度	ポイント・フレーク?	珪化泥岩	27	16	5	3.4	I区第1トレンチ-5	旧石器時代の可能性あり
8	28	2008年度	礫片	玉隨	31	39	20	29.5	I区第1トレンチ-7	
9	26	2008年度	二次加工のある剥片	珪質な泥岩	44	34	9	14.9	I区第1トレンチ-3	
10	9	早期包含層 SX02	片刃の礫器	砂岩	85	94	36	407.9	SX02-35	
11	8	早期包含層 SX02	二次加工のある礫	砂岩	44	94	25	124.2	SX02-33	
12	20	早期包含層 SX02	被加撃痕のある円礫	砂岩	171	85	40	1184.0	SX02-56	剥離面に細部加工あり
13	11	早期包含層 SX02	礫器	溶結凝灰岩	101	67	36	368.6	SX02-39	
14	14	早期包含層 SX02	礫器	砂岩	90	45	22	137.2	SX02-46	
15	17	早期包含層 SX02	小型の礫器	溶結凝灰岩	51	29	10	29.7	SX02-52	
16	19	早期包含層 SX02	小型の礫器	久慈川産黑色頁岩	67	24	17	29.7	SX02-54	
17	23	早期包含層 SX02	小型の礫器	泥岩	76	37	22	77.7	SX02-68a	
18	7	早期包含層 SX02	加撃痕のある円礫	黒色頁岩	94	40	23	122.1	SX02-31	赤谷層産
19	5	早期包含層 SX02	加撃痕のある礫	安山岩	88	84	29	201.1	SX02-29	
20	2	早期包含層 SX02	加撃痕のある円礫	安山岩	74	55	40	231.1	SX02-25	
21	6	早期包含層 SX02	加撃痕のある細長礫	石英斑岩	164	55	47	568.7	SX02-30	
22	15	早期包含層 SX02	加撃痕のある礫	溶結凝灰岩	62	36	42	135.1	SX02-47	
23	18	早期包含層 SX02	加撃痕のある礫	砂質ホルンフェルス	77	49	34	163.4	SX02-53	
24	1	早期包含層 SX02	加撃痕のある礫	砂岩	68	43	17	76.9	SX02-23	
25	12	早期包含層 SX02	加撃痕と磨痕のある礫	砂岩(硬質)	83	72	49	422.2	SX02-43	
26	10	早期包含層 SX02	加撃痕のある剥片	砂岩	74	44	27	213.6	SX02-36	
27	25	早期包含層 SX02	剥片	粘板岩質ホルンフェルス	70	51	26	103.0	SX02-68c	
28	21	早期包含層 SX02	石核	チャート	80	41	26	153.5	SX02-60	
29	3	早期包含層 SX02	磨石	溶結凝灰岩	101	64	47	398.3	SX02-27	
30	16	早期包含層 SX02	磨石	砂岩	70	86	41	412.4	SX02-49	素材円礫を半削して磨石として使う
31	24	早期包含層 SX02	磨石	砂岩	93	63	28	235.0	SX02-68b	
32	13	早期包含層 SX02	磨石	溶結凝灰岩	114	74	43	536.6	SX02-45	
33	4	早期包含層 SX02	磨石	砂岩	107	72	46	624.4	SX02-28	方形に削った礫片を磨石に使用
34		拡張区	磨石	砂岩	179	111	59	2022.1	5C91-2	
35		拡張区	加撃痕と磨痕のある礫	砂岩	121	79	56	635.4	5C71-3	焼成
36		本調査区②	被加撃痕と磨痕のある礫	溶結凝灰岩	97	82	42	320.5	5F62-5	
37	29	2008年度	加撃痕のある礫	花崗斑岩	88	64	27	201.1	III区第10トレンチ-1	



第22図 拡張区の遺構



第23図 本調査区①



第24図 SX01

能性が考えられる。

遺物（第19・25・36～38図、図版15・16・18・19・25）

本調査区①から出土した遺物として、縄文時代の土器、礫・石器、中近世の陶磁器と鉄釘、煙管、銭貨がある。第25図5～8の縄文土器はSX01にともない、また9～13は本調査区の範囲から出土した。縄文土器の表面は風化が著しく、文様が判別しにくいが、6と7には縄文が施文され、加曾利E式と思われる。図化した縄文時代の石器は第19図の2と3である。2は黒色安山岩の石鎌で、基辺がくぼみ、先端と基辺の片方が欠損していた。3は黒曜石の小型の石核で、上面を打面部に設けて小型の剥片を剥離させている。

第36図の1～3はカワラケである。4は須恵器壺の底部高台である。5～7は瀬戸・美濃の志野丸皿と小皿で、7の内面には鉄絵が見られる。第37図の42～44が近世の陶器である。42はカワラケ、43と44は肥前の碗と丸碗である。44の内面には一重網目文、外面には二重網目文が描かれ、18世紀後半～19世紀の所産と思われる。

第38図の1と2は鉄釘で、断面の形状が長方形であった。10は煙管の火皿、11は雁首である。銭貨は2点出土し、17は宋錢の熙寧元宝（初鑄1078年）、18は明錢の洪武通宝（初鑄1408年）であった。

5 本調査区②

調査範囲の南東隅で多数のビットが密集して検出され、付近一帯で遺物が出土したため、縦60m、横25mの細長い本調査範囲が設定された。本調査範囲の南側を東西に走る現代の道路によって、調査範囲は南北に二分されたようになった。検出されたビットからは長方形を基本とする規格性が見いだされたので、これらのビット群は掘立柱建物跡の柱穴と判断され、全部で15棟の建物が確認された（第26図、図版6）。そして本調査区全体から中～近世の陶磁器片が多数出土したので、掘立柱建物跡の年代も中～近世と推定された。ただし縄文時代の遺物も出土しているので、中～近世の建物の柱穴と判断したビットとは別に、縄文時代に穿たれたビットも含まれている可能性がある。ビット以外の遺構として、土坑や道路跡が検出された。

遺物として、本調査区範囲全体から縄文時代の土器、礫・石器、中～近世の陶磁器と金属製品が出土した。出土品のなかで目を引いたのは青磁の破片であった。

縄文時代の遺物（第19・21・25図、第6表、図版15～17）

第25図に載せた縄文土器のうち、14～24・26～31・33～37が本調査区②から出土した。いずれも小さい土器片であった。14・15・18は、胎土に大粒の白色長石粒と雲母片を含んだ口縁で、口縁下に押し引きによる沈線を横位にめぐらせ、波状のモチーフが施文されている。阿玉台式の土器であろう。21～23も胎土に大粒の白色長石粒と雲母片を含んだ土器片で、23には押し引きによる円形のモチーフが施されていた。阿玉台式と思われる。24には縦位の沈線に区画された部分に縄文が施文されていて、加曾利E式と思われる。30と37には竹管による平行沈線が施され、37は土器片錐であった。

図化した石器のうち第19図の4～6、第21図の36が本調査区②から出土した石器である。4は珪質岩のスクレイパーで、右側縁の両面を押圧によって刃部を作出している。5はチャートのスクレイパーで、正面に礫面が残っていた。6は黒曜石の小型の石核で、上面と下面を打面部にして剥片を剥離させたと予想される。36は被加撃痕と磨痕のある礫で、焼成のため赤化していた。表面の中央は加撃を受けて凹み、

周囲には磨痕がめぐっていた。

掘立柱建物跡 本調査範囲のほぼ全域で、大量のピットが複雑に密集していた。掘立柱建物跡は全部で15棟確認され、建物の方位および配置に、統一された規格性はさほど見受けられなかった。15棟以外に、あるいはまだ確認できなかった建物が含まれている可能性も否定できない。建物の年代の確証となる柱穴ピットからの出土遺物はなかったが、調査範囲全体から中近世の陶磁器が出土し、そのうち中世の陶磁器が多く、しかも中世の青磁がともなっているので、掘立柱建物跡の年代も中世と判断してよかろう。

SB07（第27図、第7表）

本調査範囲の北端で検出され、5F43・53に位置する。間数は 1×1 で、規模は桁行1.88m、梁行1.79mでほぼ正方形をしていた。柱間の長さはほぼ6尺であった。柱穴の深さは30cm～40cmであった。桁行の方位は357°で、壁面を東西南北に向けた建物であった。

SB03（第27図、第7表）

本調査範囲の北側で検出され、5F61・62に位置する。間数は 2×1 で、規模は桁行3.20m、梁行3.05mで正方形に近い。柱穴の深さは20cm～80cmであった。桁行の方位は61°であった。

SB01（第27図、第7表）

本調査範囲の北側で検出され、5F52・53・62・63に位置する。間数は 2×2 で、規模は桁行3.80m、梁行3.62mで、正方形に近い。柱間の長さはほぼ5.5尺であった。柱穴の深さは20cm～80cmであった。桁行の方位は105°であった。

SB05（第28図、第7表）

本調査範囲の北側で検出され、5F62・72・73に位置し、SB04・06と重複している。間数は 2×2 で、規模は桁行3.71m、梁行2.70mで、長方形である。桁行の柱間の長さは5.6尺であった。柱穴の深さは50cm～80cmであった。桁行の方位は48°であった。

SB04（第28図、第7表）

本調査範囲の北側で検出され、5F71・72・73・81・82・83に位置し、SB05、SB06、SB02と重複している。SB06と規模および方位が近似している。間数は 2×2 で、規模は桁行5.80m、梁行4.28mで、長方形である。柱間の長さは桁行で8.8尺、梁行で6.5尺であった。柱穴の深さは40cm～80cmであった。桁行の方位は71°であった。

SB06（第29図、第7表）

本調査範囲の北側で検出され、5F71・72・81・82に位置し、SB04・05と重複している。SB04と規模および方位が近似している。間数は 3×2 である。規模は桁行5.05m、梁行3.64mで、梁行2辺の長さがそろわらず、変形した長方形である。柱穴の深さは20cm～80cmであった。桁行の方位は75°であった。

SB02（第29図、第7表）

本調査範囲の中央や北側で検出され、5F82・83・91・92・93に位置し、SB04と重複している。間数は 2×2 で、規模は桁行4.77m、梁行3.97mで、長方形である。柱間の長さは桁行で7.2尺、梁行で6尺であった。柱穴の深さは50cm～100cmであった。桁行の方位は21°であった。

SB08（第30図、第7表）

本調査範囲の中央で検出され、6F00・01・10・11に位置している。間数は 2×2 で、規模は桁行4.91m、梁行4.79mで、ほぼ正方形である。柱間の長さは約7.3尺であった。柱穴の深さは20cm～60cmであった。桁

行の方位は354°であった。

SB14（第30図、第7表）

本調査範囲の中央南側で検出され、6E49・59、6F40・50に位置し、SB15と重複している。柱穴3本からなる建物南側の1辺と、それに直行する東側ラインに位置する柱穴1本の計4本の柱穴しか確認できなかった。柱穴3本からなる南側1辺の長さは3.80mであった。柱穴の深さは8cm～30cmであった。

SB15（第31図、第7表）

本調査範囲の中央南側で検出され、6E48・49・58・59、6F40・50に位置し、SB11・14と重複している。柱穴3本からなる建物南側の1辺と、それに直行する西側ラインに位置する柱穴1本、東側ラインに位置する柱穴2本の計6本の柱穴を確認できた。柱穴3本からなる南側1辺の長さは5.66mで、柱間の長さは8.6尺である。また東側1辺の長さは4.10mで、柱間の長さは6.2尺である。柱穴の深さは10cm～50cmであった。北側部分は調査できなかつたが、おそらくこの建物は、間数2×2の建物だったと予測される。

SB11（第31図、第7表）

本調査範囲の中央南側で検出され、6E58・59・68・69に位置し、SB15と重複している。間数は2×2で、規模は桁行4.29m、梁行4.14mで、ほぼ正方形である。柱間の長さはほぼ6.4尺である。柱穴の深さは20cm～40cmであった。桁行の方位は355°で、壁面を東西南北に向けた建物であった。

SB10（第32図、第7表）

本調査範囲の中央南東で検出され、6F50・51・60に位置していた。SB09と重複し、規模と方位で近似する。柱穴3本からなる建物西側の1辺と、それに直行する北側ラインに位置する柱穴1本の計4本の柱穴しか確認できなかつた。柱穴3本からなる西側1辺の長さは4.80mで、柱間の長さはほぼ7.3尺である。柱穴の深さは20cm～30cmであった。

SB09（第32図、第7表）

本調査範囲の中央南東で検出され、6F50・51・60に位置していた。SB10と重複し、規模と方位で近似する。柱穴3本からなる建物西側の1辺と、それに直行する北側ラインの柱穴2本の計5本の柱穴が確認できた。柱穴3本からなる西側1辺の長さは3.88mで、北側1辺の長さは4.18mで、柱間の長さはそれぞれ5.9尺、6.3尺である。柱穴の深さは10cm～40cmであった。

SB13（第33図、第7表）

本調査範囲の中央南側で検出され、6E68・69・78・79に位置していた。SB12と重複し、規模と方位で近似する。間数は2×2で、規模は桁行3.87m、梁行3.42mで、長方形である。柱間の長さは5.9尺と5.2尺であった。柱穴の深さは10cm～40cmであった。桁行の方位は90°で、壁面を東西南北に向けた建物であった。

SB12（第33図、第7表）

本調査範囲の中央南側で検出され、6E68・69・78・79に位置していた。SB13と重複し、規模と方位で近似する。規模は桁行4.28m、梁行3.83mで、長方形である。桁行の柱間の長さは6.5尺であった。南側1辺の中間に相当する柱穴が検出されなかつたが、もしかするとSB13の柱穴を共有したのかもしれない。柱穴の深さは40cm～60cmであった。桁行の方位は1度で、壁面を東西南北に向けた建物であった。

土坑 本調査範囲の全域に分布する中近世の柱穴ピットに混在して、土坑4基が検出された。土器・陶磁器の破片が少量出土し、おそらく建物と同様に中近世の年代と考えられる。

SK02（第34図）

本調査範囲の北側で検出され、5F72に位置していた。SB04・05・06の重複する部分にあり、SK03が東側に隣接している。形状は円形で、直径約1.1m、深さは約40cmである。壁の立ち上がりは垂直に近い。

SK03（第34図）

本調査範囲の北側で検出され、5F72に位置していた。SB04・05・06の重複する部分にあり、SK02が西側に隣接している。形状は円形で、直径約0.85m、深さは約20cmである。壁の立ち上がりはやや傾斜している。

SK04（第34図）

本調査範囲の北側で検出され、5F80に位置していた。形状は円形で、直径約0.85m、深さは約20cmである。壁の立ち上がりは垂直に近い。土器片が数点出土し、図化したのは第36図18のカワラケである。

SK01（第34図、図版6）

本調査範囲の中央で検出され、6E09・19に位置していた。形状は長方形で、長軸約3.7m、短軸約2.0mで、深さ約70cmであった。長軸はほぼ南北方位に向いている。壁の立ち上がりは傾斜していた。底面には複雑な形状をしたビットや小ビットが複数存在した。また南北の両壁両隅に対になった小ビットがあり、これら的小ビットが上屋構造を支えた柱穴であった可能性も考えられる。東側約2.5mに、土坑とほぼ同じ方位を向いたSB08が位置し、両者の関連性もうかがえる。土器・陶磁器片が数点出土した。

道路跡 堪穴建物跡や土坑など他の遺構とは少し離れて、道路状遺構が1本検出された。

SD01（第35図、図版6）

本調査範囲の中央西側で検出され、5E98に位置していた。形状は直線状で、長さ約4m、幅50cm~70cmであった。道路の方角は北西から南東へ、SK01とSB08へ通ずるかのような向きであった。道路の南北両側にそれぞれ炭の分布が2か所、計4か所あった。道路跡と炭の分布との関連性は不明である。

中近世の陶磁器（第36~37図、第8表、図版巻頭カラー、18~19）

本調査範囲の全体から中近世の陶磁器片が出土した。いずれも小片ばかりで、完形品はなかった。本調査区①でも同じような陶磁器片が出土したが、本調査区②では青磁が出土し、本調査区①では青磁が含まれていなかつた点が大きな相違である。

第36~37図の8~18・20・22~30・32~41が本調査区②から出土した中世の陶磁器片である。8~14は土師器の杯で、15~18はカワラケである。土師器とカワラケの区別は、調整や胎土が近似してやや困難であるが、色調が、土師器については黄橙色、カワラケについては橙色を帯びる点を目安にした。20・22~27は、常滑の片口鉢もしくは甕である。胎土に石英・長石をふくむものが多い。色調は灰白色、にぶい褐色、黒褐色など、様々な色調を呈している。20・22・23は13世紀前半の年代と思われる。28は瀬戸・美濃播鉢で、近世の可能性もある。

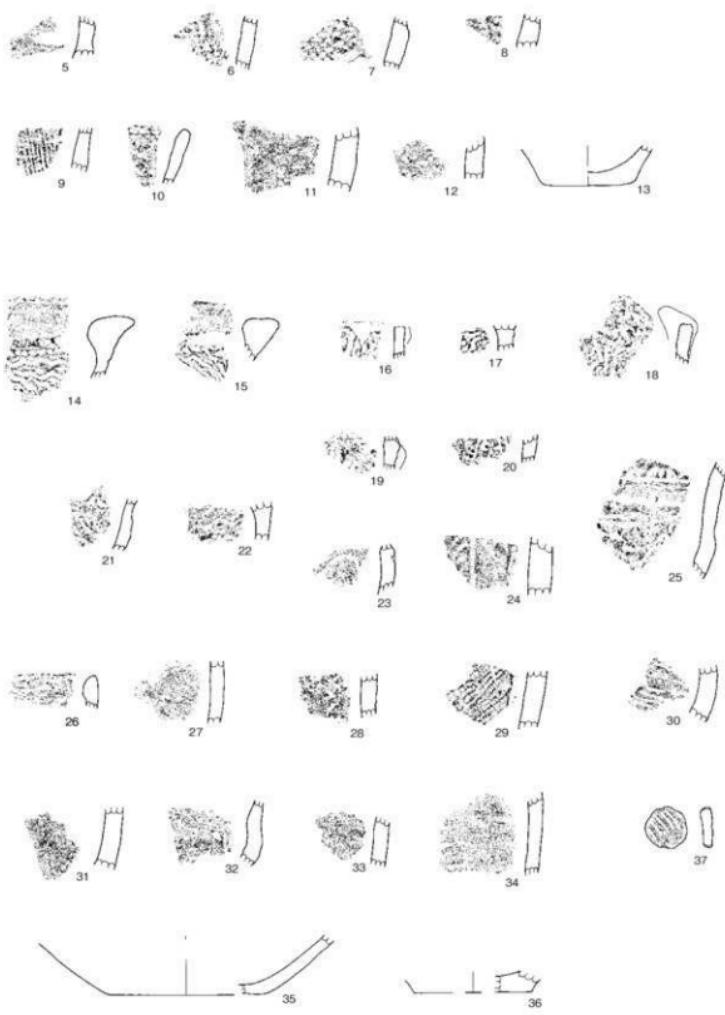
29~41は青磁もしくは青白磁である。29~38と40は青磁碗、39は青磁折縁皿であろう。41は青白磁の梅瓶である。青磁碗は龍泉窯系で、外面には鎬蓮弁文が施されていた。29・30・32・33はB1類の13~14世紀、34~38・40はB0類の14世紀前半の年代と思われる。41は梅瓶の丸く張った肩部の破片で、外面に陰刻で円形の波濤文が施されている。

第37図45~49が近世の陶器で、いずれも小型のカワラケである。

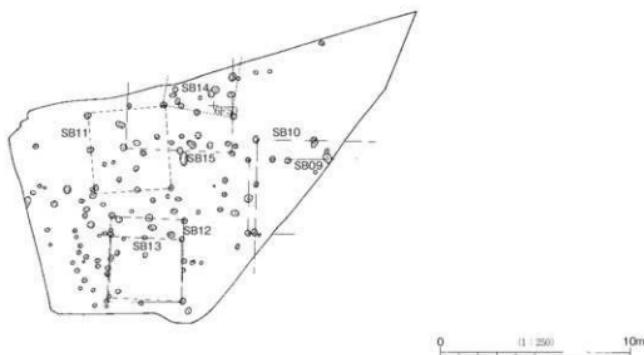
その他の遺物（第38図、第9表、図版19・25）

陶磁器以外に、中～近世の遺物として第38図4～9・16・19に図化した鉄釘、鉄滓、砥石、錢貨が、本調査区②から出土した。4は断面正方形の鉄釘の先端で、長さ3.6cmであった。5～9は製鉄関連の遺物で、おそらく鍛冶滓であろう。5は椀型滓、6は流動滓、7～8はスラグである。9は鞴の羽口の先端部分で、推定口径は約2cm、黒色のガラス質付着物が見受けられる。16は砂岩の砥石である。19は「咸」の文字のある鎧貨片で、咸平元宝(宋錢、初鑄998年)か、咸淳元宝(南宋錢)のいずれかの破片と思われる。

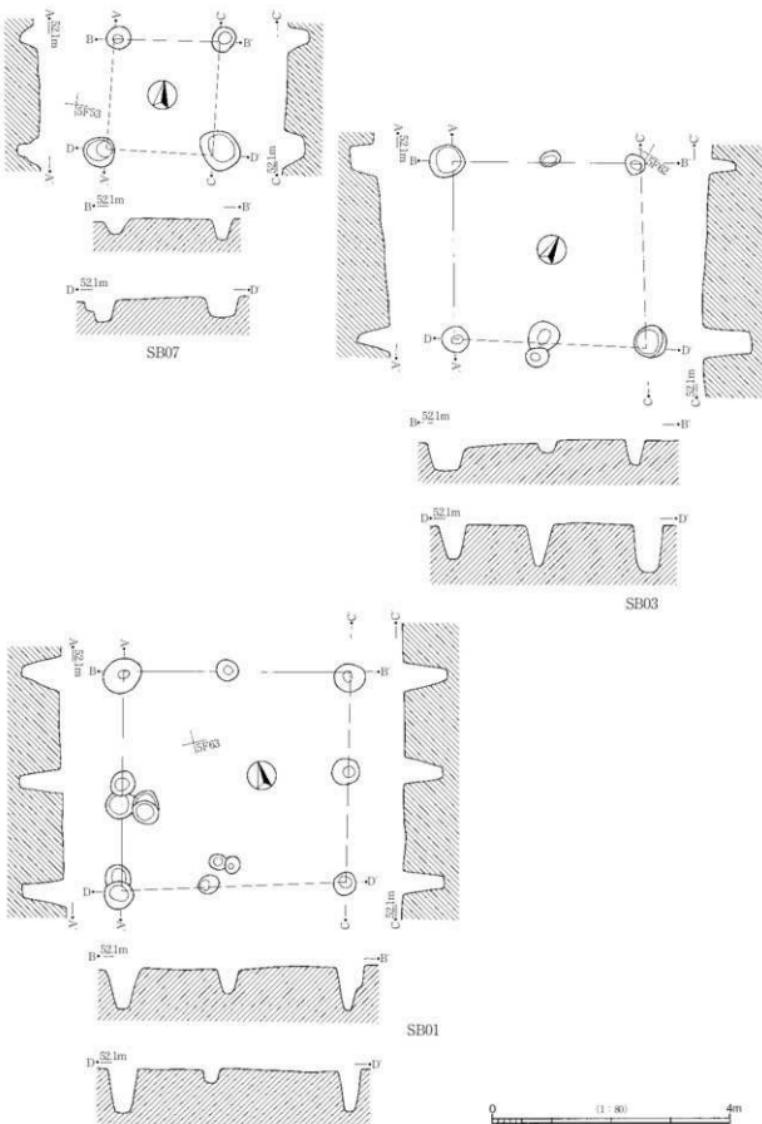
ついでに拡張区と本調査区以外の場所から出土した金属製品を、ここで記述しておく。いずれも平成20年度の調査でトレンチから出土した。12は煙管の火皿と雁首で、14は長さ2.9cmの細い管、15は直径約5cmの鉄輪であった。21は寛永通宝である。



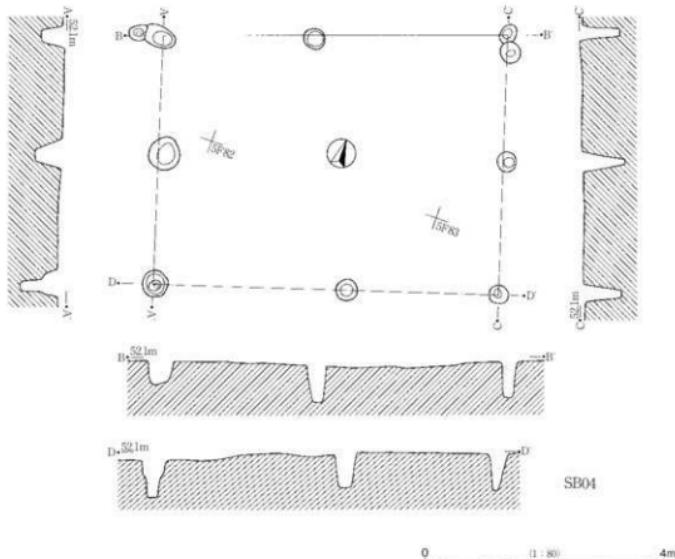
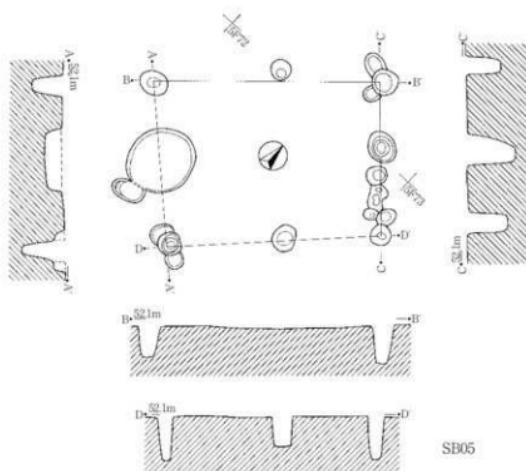
第25図 縄文土器



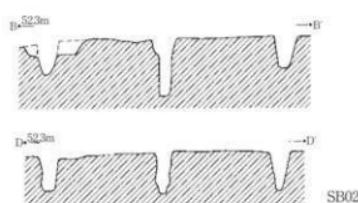
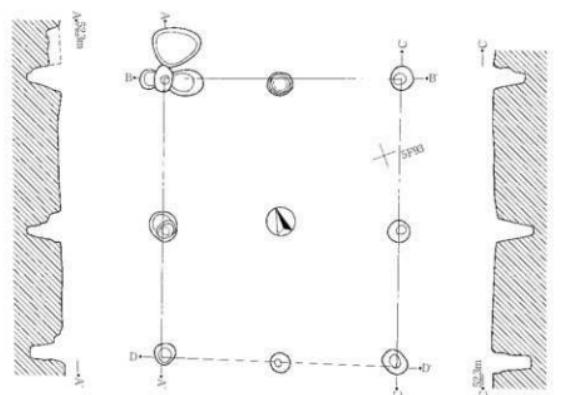
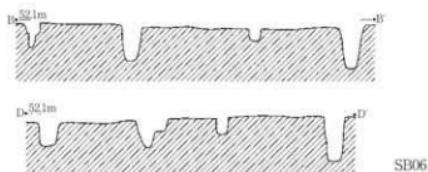
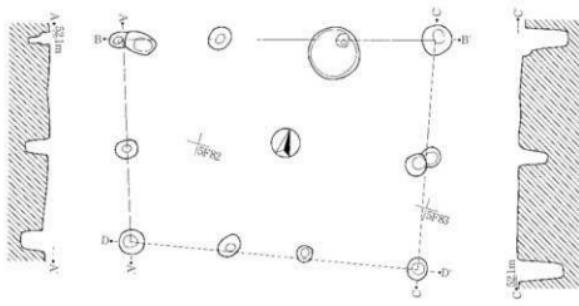
第26図 本調査区(2)



第27図 SB07・03・01

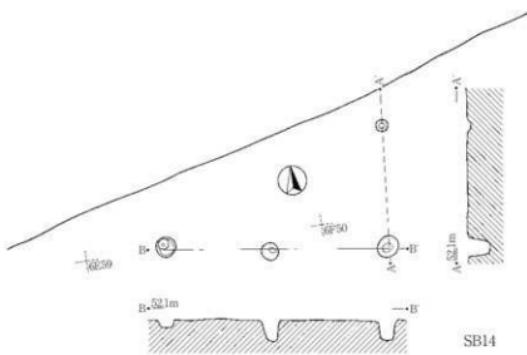
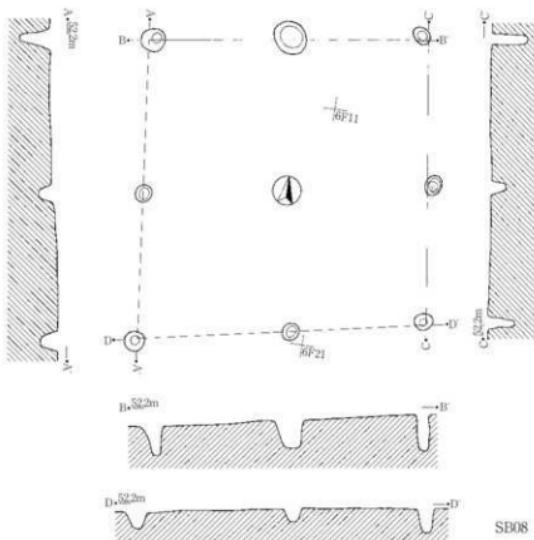


第28図 SB05・04



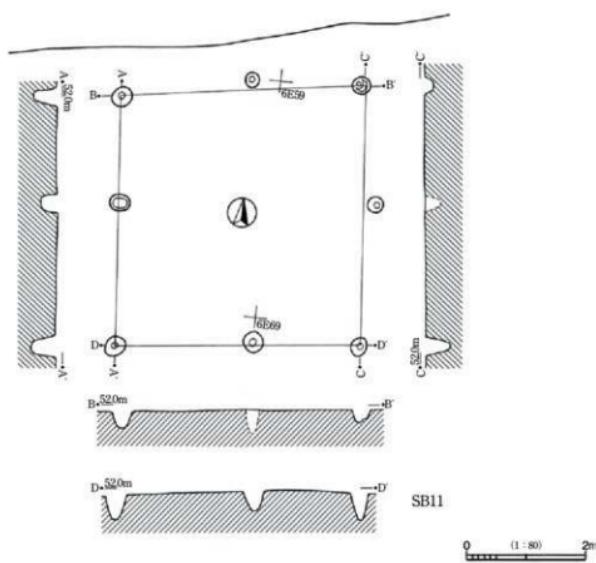
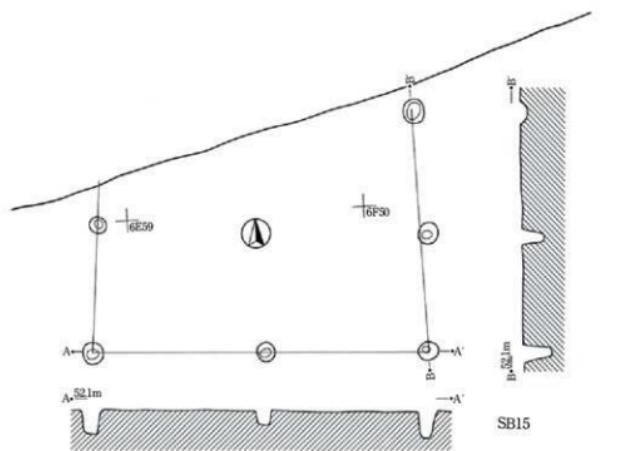
0 (1:80) 2m

第29図 SB06・02

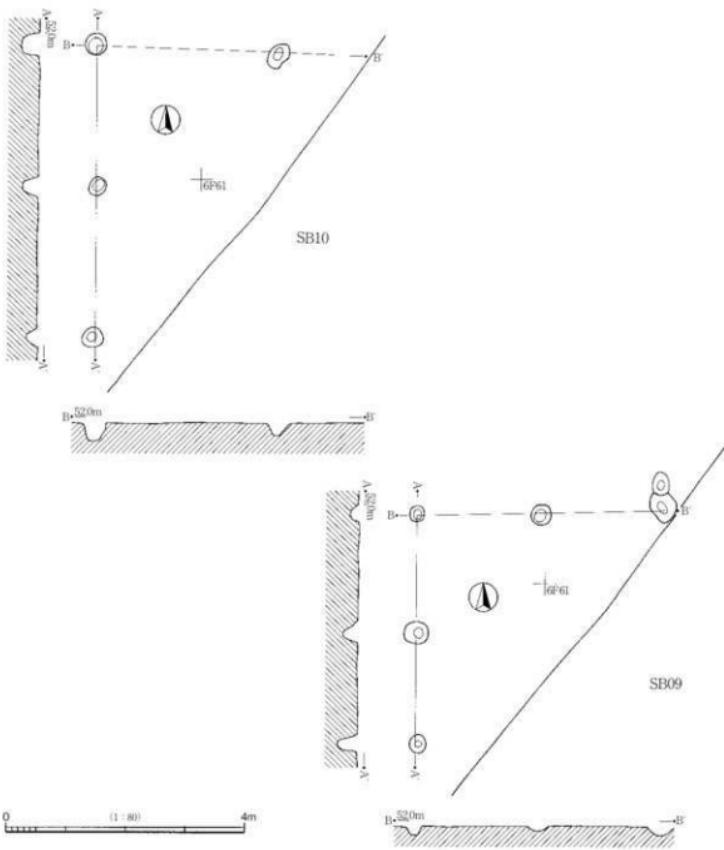


0 (1 : 80) 4m

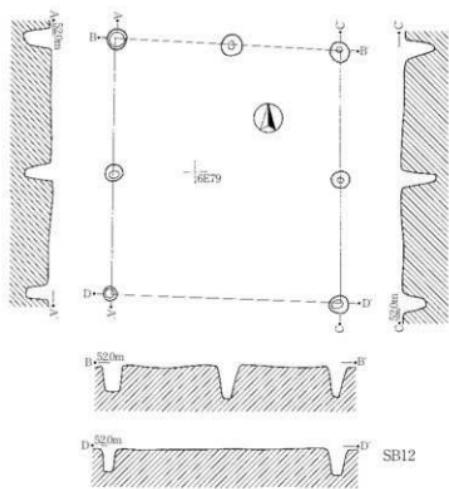
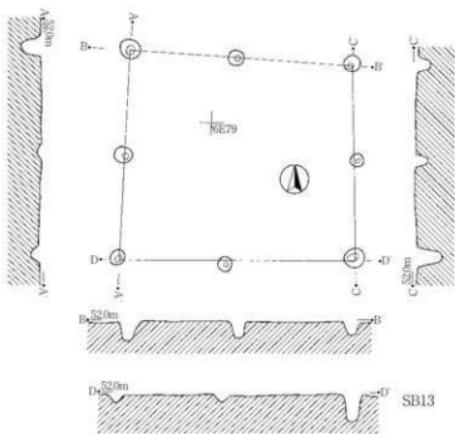
第30図 SB08・14



第31図 SB15・11



第32図 SB10・09

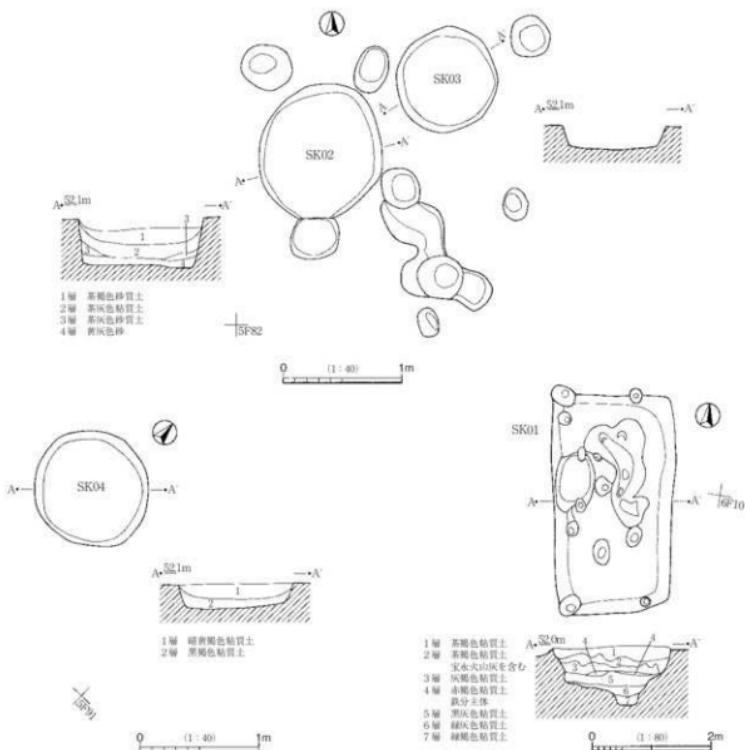


0 (1 : 80) 4m

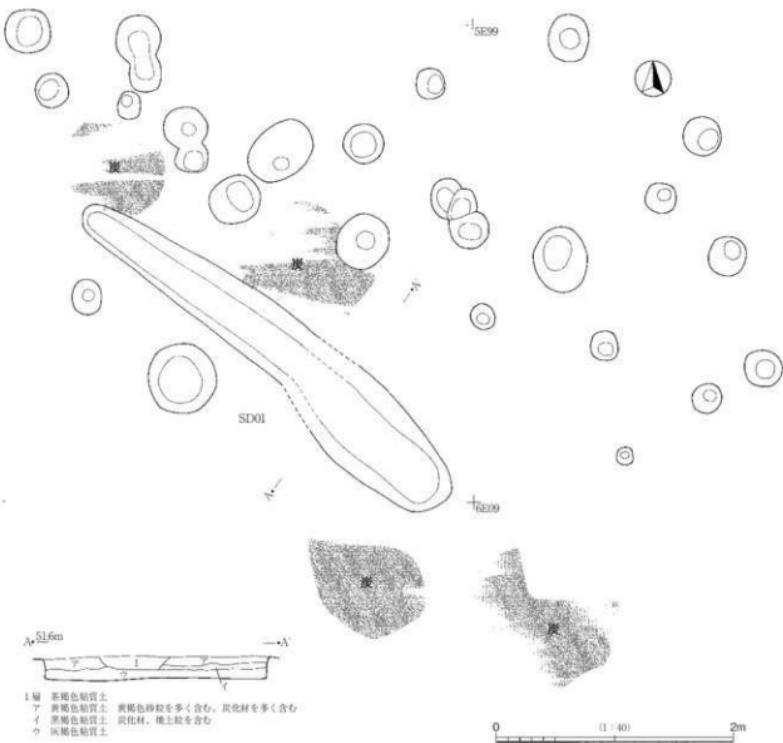
第33図 SB13・12

第7表 関尻遺跡の掘立柱建物一覧

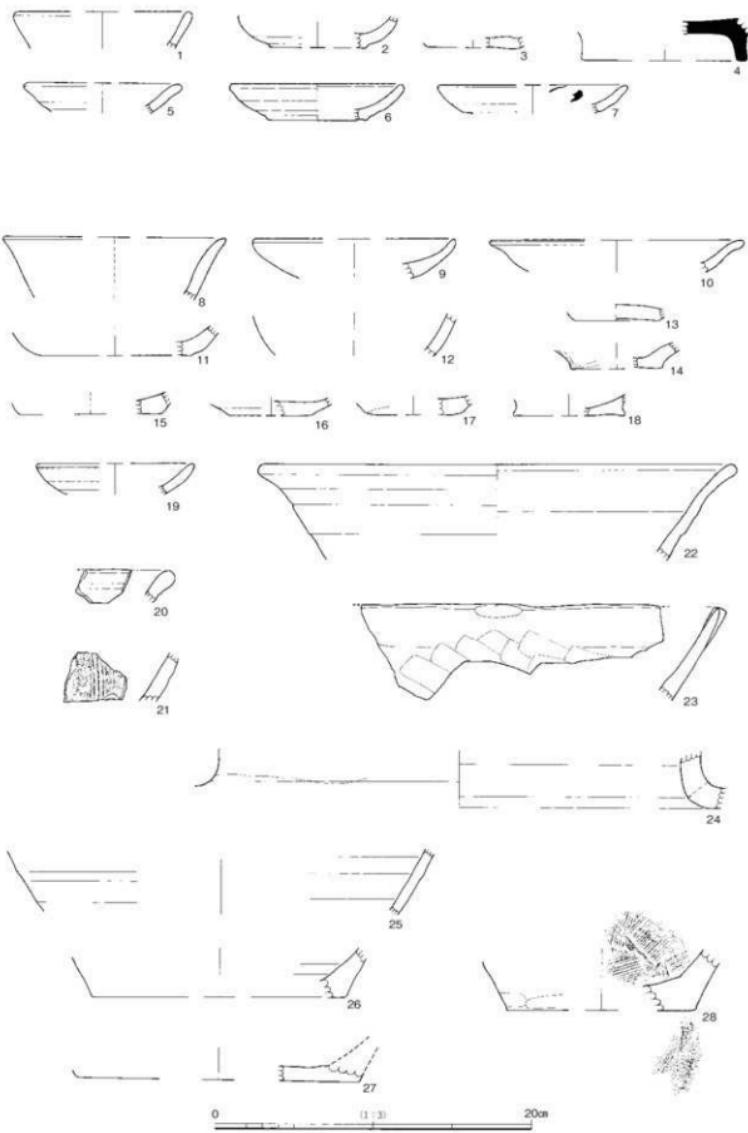
挿 図	遺構 番号	位 置	間数	桁行 (m)	梁行 (m)	面積 (m ²)	桁行方位 (°)	備 考
第 27 図	SB01	5F52・5F53・5F62・5F63	2 × 2	3.80	3.62	13.72	105	
第 29 図	SB02	5F82・5F83・5F91・5F92・5F93	2 × 2	4.77	3.97	18.91	21	SB04 と重複
第 27 図	SB03	5F61・5F62	2 × 1	3.20	3.05	9.73	61	
第 28 図	SB04	5F71・5F72・5F73・5F81・5F82・5F83	2 × 2	5.80	4.28	24.80	71	SB05・06・02と重複
第 28 図	SB05	5F62・5F72・5F73	2 × 2	3.71	2.70	9.98	48	SB04・06と重複
第 29 図	SB06	5F71・5F72・5F81・5F82	3 × 2	5.05	3.64	18.36	75	SB04・05と重複
第 27 図	SB07	5F43・5F53	1 × 1	1.88	1.79	3.36	357	
第 30 図	SB08	6F00・6F01・6F10・6F11	2 × 2	4.91	4.79	23.49	354	
第 32 図	SB09	6F50・6F51・6F60		(4.18)	(3.88)		89	SB10 と重複
第 32 図	SB10	6F50・6F51・6F60		(4.80)	—			SB09 と重複
第 31 図	SB11	6E58・6E59・6E68・6E69	2 × 2	4.29	4.14	17.74	355	SB15 と重複
第 33 図	SB12	6E68・6E69・6E78・6E79		4.28	3.83	16.39	1	SB13 と重複
第 33 図	SB13	6E68・6E69・6E78・6E79	2 × 2	3.87	3.42	13.22	90	SB12 と重複
第 30 図	SB14	6E49・6E59・6F40・6F50		(3.80)	—			SB15 と重複
第 31 図	SB15	6E48・6E49・6E58・6E59・6F40・6F50	2 × 2	(5.66)	(4.10)		273	SB11・14と重複



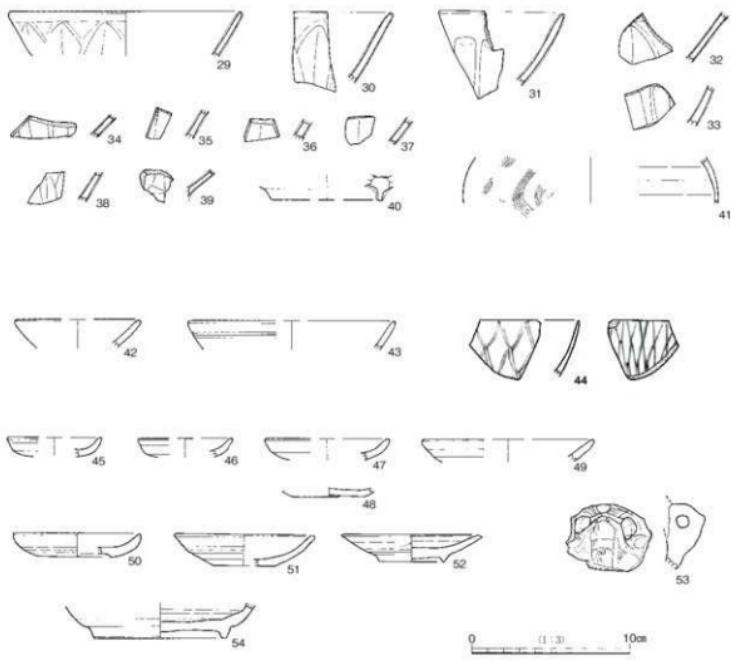
第34図 土坑



第35図 SD01



第36図 中～近世の陶磁器(1)

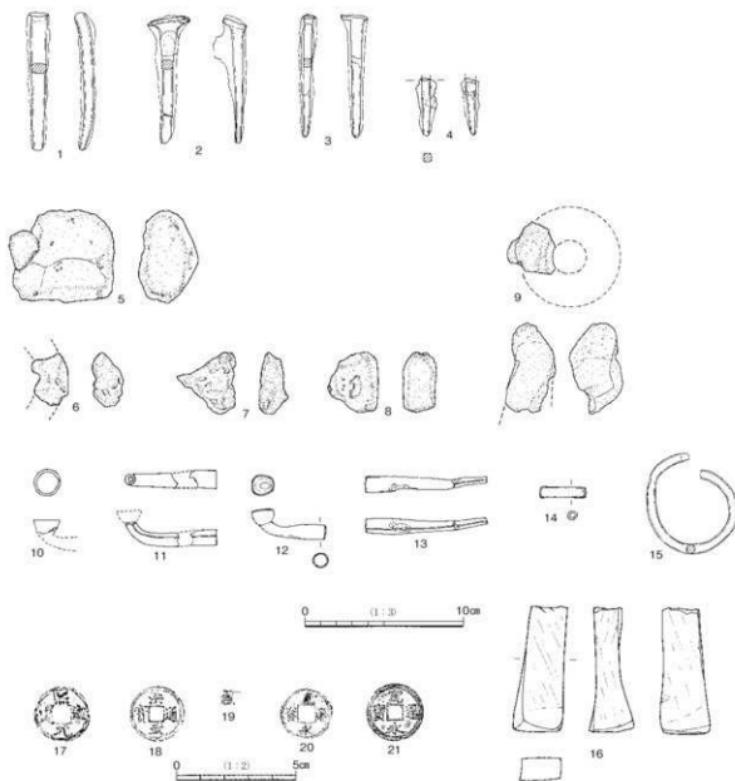


第37図 中～近世の陶磁器(2)

第8表 開戸遺跡の陶磁器

番号	文別 番号	出土地区 箇所等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調 整		粘土	色 調		遺物番号	備 考
							外圓	内圓		外圓	内圓		
1	白5	本調査(1) 在地・器	カワラケ	11.0	—	ナダ	ナダ	ナダ	密・少	灰・白	灰・白	1-10	3G40-2
2	9	本調査(1) 在地・器	カワラケ	—	6.0	—	ナダ	ナダ	石英・黒斑・スコリア	灰・白	灰・白	1-8	3G40-1
3	白1	本調査(1) 在地・器	カワラケ	—	5.8	—	ナダ	ナダ	雲母・スコリア	灰・白	灰・白	1-10	3G22-4
4	35	本調査(1) 在地・器	回文・ヘタケズ	—	10.2	—	回文・ナダ	ナダ	密・少	灰・白	灰・白	小片	2F29-1
5	1	本調査(1) 亂口・美濃 丸皿	灰	—	9.6	—	リ・ロク口盤形	ナダ	密・少	乳灰斑・輪裏	灰・白	1-8	3G21-1
6	3	本調査(1) 亂口・美濃 丸皿	灰	10.2	5.8	21	ロク口盤形	ナダ	密・少	乳灰斑・輪裏	灰・白	1-8	3G21-2
7	6	本調査(1) 亂口・美濃 小皿	灰	11.8	—	—	ロク口盤形	ナダ	密・少	乳灰斑・輪裏	灰・白	1-8	3G21-3
8	自8	本調査(2) 土器	杯	13.8	—	—	ヘタケズリ・ナダ	ナダ	白色射少・スコリア	灰・白	灰・白	1-10	5E89-17
9	自3	本調査(2) 土器	杯	12.6	—	—	ヘタケズリ・ナダ	ナダ	雲母・白色射少	灰・白	灰・白	1-9	5E88-11
10	自9	本調査(2) 土器	杯	15.6	—	—	ナダ	ナダ	スコリア	灰・白	灰・白	1-12	5F61-9
11	白2	本調査(2) 土器	杯	—	9.6	—	ヘタケズリ・ナダ	ナダ	スコリア	灰・白	灰・白	1-8	5F62-3
12	白6	本調査(2) 土器	杯	—	—	—	ヘタケズリ・ナダ	ナダ	砂粒・白色射	灰・白	灰・白	1-10	5E89-13
13	白10	本調査(2) 土器	杯	—	5.4	—	ナダ	ナダ	砂粒・白色射	灰・白	灰・白	1-5	5E89-14
14	10	本調査(2) 土器	杯	—	5.6	—	ナダ	ナダ	雲母	灰・白	灰・白	1-6	5E88-36
15	白4	本調査(2) 在地・器	カワラケ	—	9.0	—	ナダ	ナダ	密・少	鈍色	鈍色	1-10	5F62-9
16	8	本調査(2) 在地・器	カワラケ	—	5.2	—	ナダ	ナダ	密・少	灰・白	灰・白	1-8	5E89-6
17	白7	本調査(2) 在地・器	カワラケ	—	5.0	—	ナダ	ナダ	密・少	灰・白	灰・白	小片	3G28-14
18	7	本調査(2) 在地・器	カワラケ	—	7.0	—	ナダ	ナダ	密・少	灰・白	灰・白	1-8	SK04-1
19	2	トレーナー	丸皿	9.8	—	—	ロク口盤形	ナダ	密・少	灰・白	灰・白	1-8	3G28-3
20	30	本調査(2) 常滑	片口鉢	—	—	ナダ	ナダ	密・少	灰・白	灰・白	小片	3G24-1	
21	50	長良区	亂口・美濃 摺鉢	—	—	ナダ	ナダ	密・少	灰・白	灰・白	小片	3G87-3	
22	41	本調査(2) 常滑	片口鉢	—	—	ナダ	ナダ	石英・長石	灰・白	灰・白	小片	5F22-8	
23	48	本調査(2) 常滑	片口鉢	36.0	—	—	ナダ・ヘタケ	ナダ	石英・長石	灰・白	灰・白	1-4	3G79-1, 2, 3G88-5
24	46	本調査(2) 常滑	葉	—	—	ナダ	ナダ	黑褐色	黄灰斑	黄灰斑	小片	3G89-14	
25	33	本調査(2) 常滑	片口鉢	—	—	ナダ	ナダ	石英・長石	灰・白	灰・白	小片	3G88-1	
26	32	本調査(2) 常滑	片口鉢	—	14.0	—	ナダ	ナダ	石英・長石	灰・白	灰・白	1-6	3G82-2
27	31	本調査(2) 常滑	片口鉢	—	17.9	—	ナダ	ナダ	石英・長石	灰・白	灰・白	小片	3F70-2
28	51	本調査(2) 亂口・美濃 摺鉢	—	11.9	—	ナダ	ナダ	密・少	灰・白	灰・白	1-6	3G82-2	
29	17	本調査(2) 中国	青釉碗	15.0	—	—	糊薙半文	ナダ	绿青灰斑・極	绿青灰斑・極	绿青灰斑・極	1-8	3F72-1
									紫	紫	紫	1-4c	3-5 b 4-13 ~

博物 館 番 号	出土地(区) 名	種類等	器 種	口径 (cm)	底径 (cm)	高 (cm)	内面	胎土	色		調 査 日	遺物番号	備 考
									外面	内面			
30 21	本調査区(2) 中国	青磁碗	-	-	-	-	施刻畫文	密・少	経青灰地・柏 葉	経青灰地・柏 葉	5F59-2	龍泉窯系、B1期 (I - 5 b 期) 13 - 14c	
31	海外	2008年度	中国	青磁碗	-	-	施刻畫文	密・少	経青灰地・柏 葉	経青灰地・柏 葉	1	Ⅲ区3012レシチ -	
32 18	本調査区(2) 中国	青磁碗	-	-	-	-	施刻畫文	密・少	経青灰地・柏 葉	経青灰地・柏 葉	5F71-2	龍泉窯系、B1期 (I - 5 b 期) 13 - 14c	
33 22	本調査区(2) 中国	青磁碗	-	-	-	-	施刻畫文	密・少	経青灰地・柏 葉	経青灰地・柏 葉	5F92-1	龍泉窯系、B1期 (I - 5 b 期) 13 - 14c	
34 26	本調査区(2) 中国	青磁碗	-	-	-	-	施刻畫文	密・少	経青灰地・柏 葉	経青灰地・柏 葉	5E89-3	龍泉窯系、B1期 (I - 5 b 期) 13 - 14c 前半	
35 20	本調査区(2) 中国	青磁碗	-	-	-	-	施刻畫文	密・少	経青灰地・柏 葉	経青灰地・柏 葉	6F60-1	龍泉窯系、B1期 (I - 5 b 期) 13 - 14c 前半	
36 19	本調査区(2) 中国	青磁碗	-	-	-	-	施刻畫文	密・少	経青灰地・柏 葉	経青灰地・柏 葉	5F80-3	龍泉窯系、B1期 (I - 5 b 期) 13 - 14c 前半	
37 23	本調査区(2) 中国	青磁碗	-	-	-	-	施刻畫文	密・少	経青灰地・柏 葉	経青灰地・柏 葉	5F81-4	龍泉窯系、B1期 (I - 5 b 期) 13 - 14c 前半	
38 28	本調査区(2) 中国	青磁碗	-	-	-	-	施刻畫文	密・少	経青灰地・柏 葉	経青灰地・柏 葉	5E99-7	龍泉窯系、B1期 (I - 5 b 期) 13 - 14c 前半	
39 24	本調査区(2) 中国	青磁折沿 皿?	-	-	-	-	施刻畫文	密・少	経青灰地・柏 葉	経青灰地・柏 葉	5E99-2	13c 後半 - 14c 前半 龍泉窯系、B1期 (I - 5 b 期) 13 - 14c 前半	
40 29	本調査区(2) 中国	青磁碗	-	7.0	-	-	施刻畫文	密・少	経青灰地・柏 葉	経青灰地・柏 葉	6E29-4	龍泉窯系、B1期 (I - 5 b 期) 13 - 14c 前半	
41 36	本調査区(2) 中国	青磁碗	-	-	-	-	施刻畫文	密・少	明オリーブ灰 色	明オリーブ灰 色	5E89-6	14c?	
42 12	本調査区(1) 在地土器	カラケ	7.8	-	-	-	ナフロ	密・少	灰白色	[±5]・黄褐色	1.8	3F10-2	
43 27	本調査区(1) 肥前	焼瓦	-	-	-	-	ナフロ口盤形	密・少	灰白色	灰白色	2G33-1	磁器、近世?	
44 5	本調査区(1) 肥前	丸瓶	-	-	-	-	二重蓋口文	密・少	灰白色	灰白色	2F57-2	磁器、近世?	
45 14	本調査区(2) 在地土器	カラケ	5.9	2.7	1.2	ナフ	ナフ	密・少	[±5]・黄褐色	[±5]・黄褐色	1.8	5E99-17	
46 16	本調査区(2) 在地土器	カラケ	5.6	-	-	ナフ	ナフ	密・少	[±5]・黄褐色	[±5]・黄褐色	1.8	5E88-18	
47 13	本調査区(2) 在地土器	カラケ	7.8	-	-	ナフ	ナフ	密・少	[±5]・黄褐色	[±5]・黄褐色	1.8	5E88-19	
48 11	本調査区(2) 在地土器	カラケ	-	5.2	-	ナフ	ナフ	密・少	[±5]・黄褐色	[±5]・黄褐色	1.8	6E70-1	
49 15	本調査区(2) 在地土器	カラケ	10.8	-	-	ナフ	ナフ	密・少	[±5]・黄褐色	[±5]・黄褐色	1.8	5E88-4	
50 2	飯塚区	瀬戸口 灰陶	8.0	4.4	1.5	ナフロ	ナフ	密・少	灰白色	灰白色	1.5	3H77-2	
51 1	飯塚区	瀬戸口 灰陶	8.9	3.9	2.0	ナフロ口盤形	ナフ	密・少	[±5]・黄褐色	[±5]・黄褐色	1.8	5B57-4	
52 4	飯塚区	瀬戸口 灰陶	8.6	4.0	1.7	ナフロ口盤形	ナフ	密・少	灰白色	灰白色	1.3	5C54-3	
53 3	飯塚区	丸貫口器	-	-	-	ナフ	ナフ	密・少	灰白色	灰白色	1.3	5C73-1	
54 6	2008年度	瀬戸口 灰陶	-	8.3	-	ナフロ口盤形	ナフ	密・少	[±5]・黄褐色	[±5]・黄褐色	1.8c 小?	1類第9 - 10小類, Ⅲ区3012レシチ - 1 18c 小?	



第38図 中～近世のその他の遺物

第9表 関尻遺跡のその他の遺物

捲団番号	出土地区	種類	長さ(cm)	横(cm)	幅(cm)	重量(g)	遺物番号	備考
1	本調査区①	鉄釘	86	13	1.2	25.1	2F67-3	
2	本調査区①	鉄釘	80	27	1.5	21.7	3F18-1	
3	拡張区	鉄釘	77	1.7	0.9	15.2	5B68-1	
4	本調査区②	鉄釘	36	0.6	0.6	5.4	5E98-3	
5	本調査区②	鉄滓	59	6.6	3.7	168.7	6E09-11	椀型滓
6	本調査区②	鉄滓	33	22	1.9	12.9	5E99-24	流動滓
7	本調査区②	鉄滓	39	3.7	1.9	15.4	5E89-4	スラグ
8	本調査区②	鉄滓	38	3.1	2.1	52.2	6E70-2	スラグ
9	本調査区②	羽口	56	2.9	—	43.3	6E78-4	先端のみ、推定口径 2cm
10	本調査区①	煙管	—	—	—	1.6	2F99-1	火皿のみ
11	本調査区①	煙管	57	1.0	—	4.0	2F37-1	雁首のみ
12	2008 年度	煙管	45	1.0	—	5.9	II区第1トレンチ-1	火皿と雁首
13	拡張区	煙管	76	1.0	—	4.8	5B88-1	吸口
14	2008 年度	管	29	—	—	2.8	I区第1トレンチ-1	外径 0.6cm、内径 0.4cm
15	2008 年度	輪	—	—	—	18.1	II区第1トレンチ-1	外径 6.4cm～5.3cm、内径 5.3cm～4.3cm、輪径 0.6cm
16	本調査区②	砥石	79	3.1	2.8	75.9	5F80-4	砂岩

第4節 山小川遺跡

1 調査の経過と調査方法

山小川遺跡は、首都圏中央連絡自動車道(圏央道)と国道297号線が交差して、市原南IC(仮称)となる料金所付近で、高速道路本線と在来道路とが立体交差する場所にある。蛇行する平蔵川から約500m西側の標高約75mの段丘上に位置し、付近は畠もしくは荒蕪地であった(図版1・7)。山小川遺跡の北東約300mに閑尻遺跡、約500mに竹ノ下遺跡がある。また山小川遺跡の西側に柏野遺跡が接している。

調査の経過 野外の発掘調査を平成17年度、19年度、20年度、22年度に実施し、調査面積は合計12,430m²であった。整理作業と報告書作成を平成23年度に行った。発掘調査から整理作業・報告書刊行に至るまでの調査組織、担当者および作業内容は以下のとおりである。

発掘調査

平成17年度 調査期間：平成17年10月3日～平成17年12月2日

調査対象面積：6,650m²

確認調査面積：上層752／6,650m²、下層87／6,650m²

組 織：調査部長 矢戸三男、南部調査事務所長 高田 博、担当：主席研究員 宮重行、上席研究員 福田 誠

平成19年度 調査期間：平成20年3月3日～平成20年3月28日

調査対象面積：2,400m²

確認調査面積：上層490／2,400m²、下層32／2,400m²

組 織：調査研究部長 矢戸三男、南部調査事務所長 西川博孝、担当：上席研究員 小高春雄

平成20年度 調査期間：平成20年9月1日～平成20年9月30日

調査対象面積：3,300m²

確認調査面積：上層315／3,300m²、下層60／3,300m²

組 織：調査研究部長 大原正義、中央調査事務所長 折原 繁、担当：主席研究員 土屋治雄

平成22年度 調査期間：平成22年7月1日～平成22年7月6日

調査対象面積：80m²

確認調査面積：上層8／80m²、下層8／80m²

組 織：調査研究部長 及川淳一、中央調査事務所長 白井久美子、担当：上席研究員 鵜沢正則

整理作業

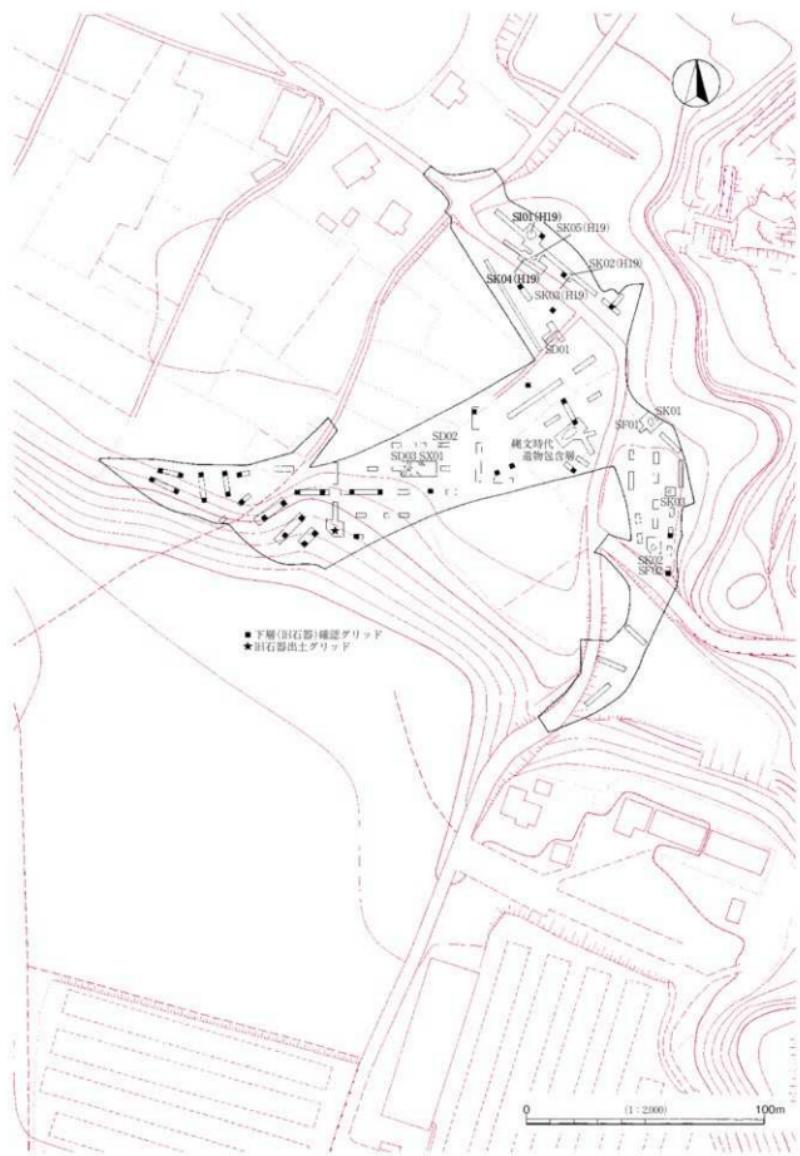
平成23年度 整理期間：平成23年6月22日～平成24年3月28日

作業内容：水洗注記から刊行まで

組 織：調査研究部長 及川淳一、中央調査事務所長 白井久美子、担当：上席研究員 森本和男



第39図 山小川遺跡の年度別調査範囲とグリッド設定図(1:2000)



第40図 山小川遺跡の確認調査と遺構配置図(1:2000)

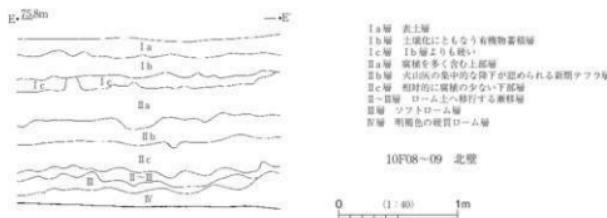
調査方法 調査は、遺跡全体に20m四方の大グリッドを基本とするグリッド網を設定して行った。大グリッドの名称を北から南へ1・2・3・…、西から東へA・B・C・…という順序で配列した(第39図)。さらに大グリッドを、2m四方の小グリッドで東西南北に10区画ずつ配して全体を100等分した。小グリッドの名称は、北西隅を00にして、東へ00・01・02・…と1の位を増し、南へ00・1・20・…と10の位を増して、00~99の小グリッドを設定した。遺構・遺物を検出した場合、その出土地点を特定するためには大グリッドと小グリッドの名称を組み合わせて、たとえば9M30などの表記でしめしている。調査で遺構を検出することに遺構番号を付け、整理作業の時も、基本的に野外調査で付された遺構番号を使用した。

上層の調査については、遺構の有無を確認するため、調査対象となった範囲に幅2mのトレンチを任意に設定し、必要に応じてトレンチを拡張した。設定したトレンチの合計面積が、調査面積全体の約10パーセントに相当するようにした。下層の調査については、2m四方の正方形のグリッドを任意に設定し、グリッドの合計面積が、調査面積全体の約1パーセントに相当するようにした。

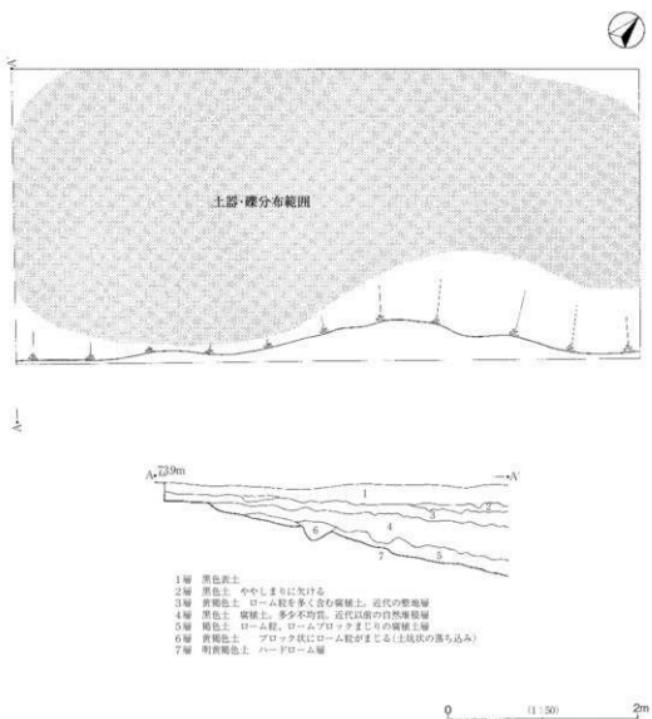
平成17年度の上層確認調査では土坑3基、焼土跡2基、溝3本、歯跡が検出され、トレンチを拡張して精査したが、他に遺構の検出や広がりは見受けられなかつた。また下層確認調査では1か所のグリッドから1点の石器が検出されたので、周囲を拡張して石器分布の広がりを調査した。その結果他に石器は検出されず、石器集中地点でないことが判明した。上層・下層ともに確認調査で終了した。確認調査で終了したが、出土遺物は縄文土器と礫・石器を中心比較的多かつた。なお下層確認調査で出土した石器は、人工的な加工製品ではなく単なる礫片であることが、整理作業の時に判明した。

平成19年度の上層確認調査では、縄文時代前期の遺物包含層1か所、縄文時代中期の堅穴住居跡1基、小堅穴1基、土坑数基が検出された。下層確認調査では石器が検出されなかつた。平成20年度、22年度の調査では遺構が検出されず、少量の遺物が出土して、確認調査で終了した(第40図)。

土層層序 山小川遺跡は、平蔵川河岸からやや離れた畠もしくは荒蕪地に立地していた。調査範囲の中央付近、10F08・09の土層層序を見ると(第41図)、地表から約40cmまで表土層、その下に腐植土を含んだ土層が堆積し、約120cm以下にソフト・ローム層が堆積していた。遺跡付近の立地が畠もしくは荒蕪地であったため、ソフト・ローム層まで表土層と腐食土層が厚い層を形成して堆積したと考えられる。



第41図 山小川遺跡の土層断面図



第42図 縄文時代の遺物包含層

2 縄文時代

遺構 検出された縄文時代の遺構は、遺物包含層1か所、竪穴住居跡1軒、小堅穴1基、土坑6基、焼土跡2基であった。

遺物包含層（第42・46・49図、第10表、図版7・20・23）

遺物包含層は、調査範囲の中央やや東側の8K79・88・89、97~99、8L70、8L80に位置していた。北西に向かって緩やかに下がる傾斜面で縦約6.5m、横約2.5mの範囲から、縄文土器と礫・石器が大量に出土した。土層断面を見ると、黒色表土層の下に近代の整地層である3層の黄褐色土層がある。近代整地層の下に腐植土を含む4層の黒色土層と5層の褐色土層が堆積し、その下にハード・ローム層があった。土器や礫・石器は、おもに4層~5層にかけて出土した。

包含層から出土した遺物の総点数は約500点あった。そのうち土器の点数は21点で、重量は1,447g。礫・石器の点数は475点で、重量は16,855gであった。つまり土器は僅少で、数量および重量ともに礫・石器が圧倒的に大部分を占めていた。

第46図1～5が遺物包含層から出土した縄文土器である。1・3・4には単節縄文が施され、4の口縁外面には輪積み痕が見られた。2には単節縄文の連結文が施され、縄文時代前中期の土器と思われる。単節縄文の施された1～4は、縄文時代前期の土器である。

遺物包含層から出土した礫・石器は小型なもののが多かった。図化した石器のうち、第49図の1～8が遺物包含層から出土した。1は安山岩の尖頭器で、打面部を基部に設定して押圧によって刃部を作り出している。2はメノウのスクリーパーで、正面には原礫面が残置している。下端部に調整されたやや厚い刃部がある。4は頁岩のスクリーパーで、縦長剥片の下端右側縁に調整加工が施されている。3はチャートの使用痕のある剥片で、横長剥片の下部に細かい縦離痕があった。5はメノウの石核で、正面に原礫面が残置している。背面を調整して、右側面および上面を調整して打面部を作っている。

6～8は剥片で、6と8は安山岩、7は頁岩であった。

遺物包含層からは縄文時代前期から前中期の土器が出土しているので、包含層の年代を縄文時代前期と比定しておく。

SI01（第43・46・50・51図、第11表、巻頭図版、図版7・8・20・24）

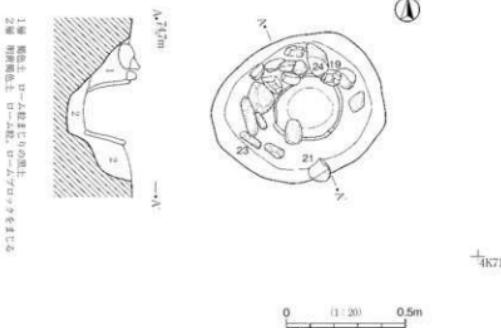
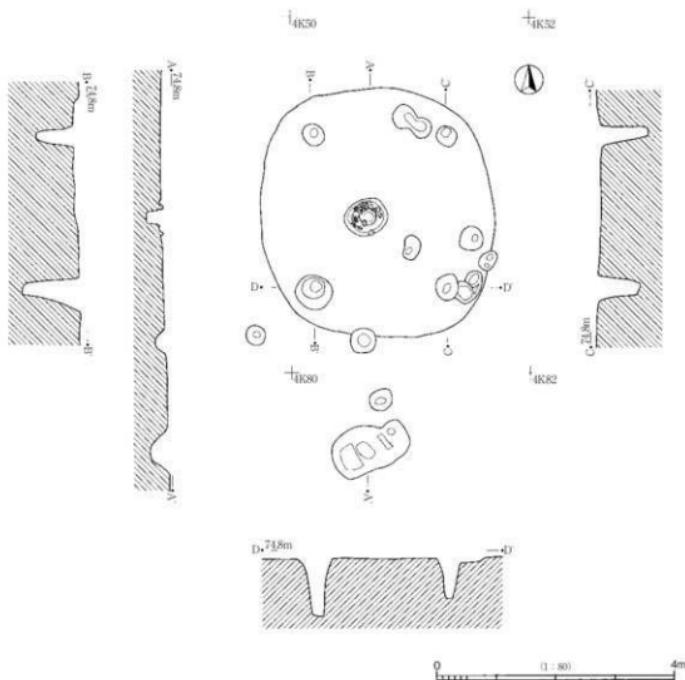
調査範囲の北東で竪穴住居跡、小堅穴、土坑が検出された。竪穴住居跡は4J69・79・89・4K60～62・70～72・80～82に位置していた。竪穴住居の柱穴と炉が検出され、壁については北側にわずかな高まりが識別できた。形状は東西南北にやや角張った直径約4mの円形で、角張った4か所に柱穴が掘られていた。柱穴は直径30cm～60cm、深さ60cm～100cmであった。柱穴以外に住居内外で小ピットが検出された。竪穴住居のほぼ中央に埋甕炉が設けられていた。

埋甕炉は、深鉢形土器の底部を除去した口縁から胴部までの部分を土中に埋め、その周囲に礫・石器をめぐらせていた（巻頭図版）。炉の土台となった深鉢形土器は、口縁の直径約30cm、高さ約21cmであった。この深鉢形土器を、深さ約30cm、長軸約72cm、短軸約60cmの楕円形状の小ピットに埋め、土器と小ピットとの隙間を土で充填してから、上面の周囲、おもに北側に18個の礫・石器を配して炉を補強していた。一般に竪穴住居の入口は、北風を避けて南向きに開口していたと想定されるので、炉の石は、入口とは逆方向に配置されたと考えられる。深鉢形土器のなかには、軟らかい腐植土が堆積していた。

遺物は、埋甕炉を構成していた深鉢形土器、礫・石器以外に、少量の土器と礫・石器が出土した。

第46図6～8が、竪穴住居跡から出土した縄文土器である。6は埋甕炉の深鉢形土器で、胴下半部から底部を欠いていた。口縁部には半截竹管の刺突文を上下2段にめぐらせ、その下に1本の沈線を横位にめぐらせていた。胴部には単節縄文を施してから、3本の平行沈線による波状のモチーフ、さらにその下に横位の沈線を描いている。7はキャリバー形土器の口縁で、楕円形と四角形の区画文に縄文が施されていた。8は半截竹管を利用した横位の刺突文と平行沈線の下に、縦位の平行沈線が施されている。これらの縄文土器は、加曾利E II式の土器である。

図化した石器のうち、第50図の12、第51図の18～24が住居跡から出土した石器である。12と18は柱穴から出土した。第50図12は北西の柱穴から出土したチャートの剥片で、裏面に原礫面が残置している。第51図18は南西の柱穴から出土した砂岩の打製石斧で、分銅形である。



第43図 SI01

19・21・23・24は炉の周辺から出土した。19は埋甕炉で、深鉢形土器の北側に接して出土したホルンフェルスの打製石斧である。わずかにくびれを作り出していて、分銅形の範疇に含まれるだろう。21は深鉢形土器の南側でやや離れた状態で出土した砂岩の礫で、狹小な範囲に被加撃痕と磨痕がある。焼けて赤化しているが、炉の火を受けて赤化したのか、あるいはもともと焼けていた礫を炉のまわりに配置したのか不明である。23は炉の東南側にあった礫で、ちょうど掌におさまる大きさである。重量は400g弱で、現代の金槌とはほぼ同じ重さである。手に握り打ち下ろして打撃をあたえるには、格好の道具だったんだろう。24は炉の深鉢形土器の北側に接して出土した。形状は細長い三角形をしていて、斜辺部に加撃を受けた凹みが見られる。この礫も焼けて赤化していた。

20は住居跡周辺から出土した加撃痕と被加撃痕のある礫で、正面と背面の中央に加撃を受けた凹みが見られる。22も掌におさまる大きさで、23と同様に手に握って打ち下ろすのに適した道具だったと思われる。

平成19年度調査区

小豎穴SK05（第44図、図版8）

SI01の南側約8mの地点で、小豎穴と土坑数基が群をなしていた。5K10・11、5K20・21に位置していた。形状は円形で直径約1.8m、深さ25cm～30cmであった。中心に直径約25cm、深さ70cmの小ピットがあり、その両脇に直径約40cm、深さ40cmのピット2基が直線状に穿たれていた。中心の小ピットは、上屋構造を支える支柱の柱穴であろう。両脇のピットは貯蔵用の穴と思われる。少量の縄文土器が出土した。

土坑SK04（第44・46図、図版9・20）

SK05の西側約2.5mの地点で、5J19・29に位置する。形状は楕円形で長軸約1.0m、短軸約0.8m、深さ約60cmであった。少量の土器が出土した。第46図10がSK04から出土した縄文土器で、加曾利E式の土器である。

土坑SK02（第44・46図、図版20）

SI01の南東約20mの地点で、土坑が2基検出された。SK02は5K58に位置していた。縦約1.2m、横約1.5mの不整形な形状で、深さは約20cmであった。少量の縄文土器が出土した。第46図9がSK02から出土した縄文土器で、横位の平行沈線文の区画に刺突文が施されていた。加曾利E II式と思われる。

土坑SK03（第44図）

SI01の南東約20mの地点で、土坑が2基検出された。SK03は5K68に位置していた。長軸約0.9m、短軸約0.5mの楕円形で、深さは約15cmであった。

平成17年度調査区

土坑SK01（第45図、図版9）

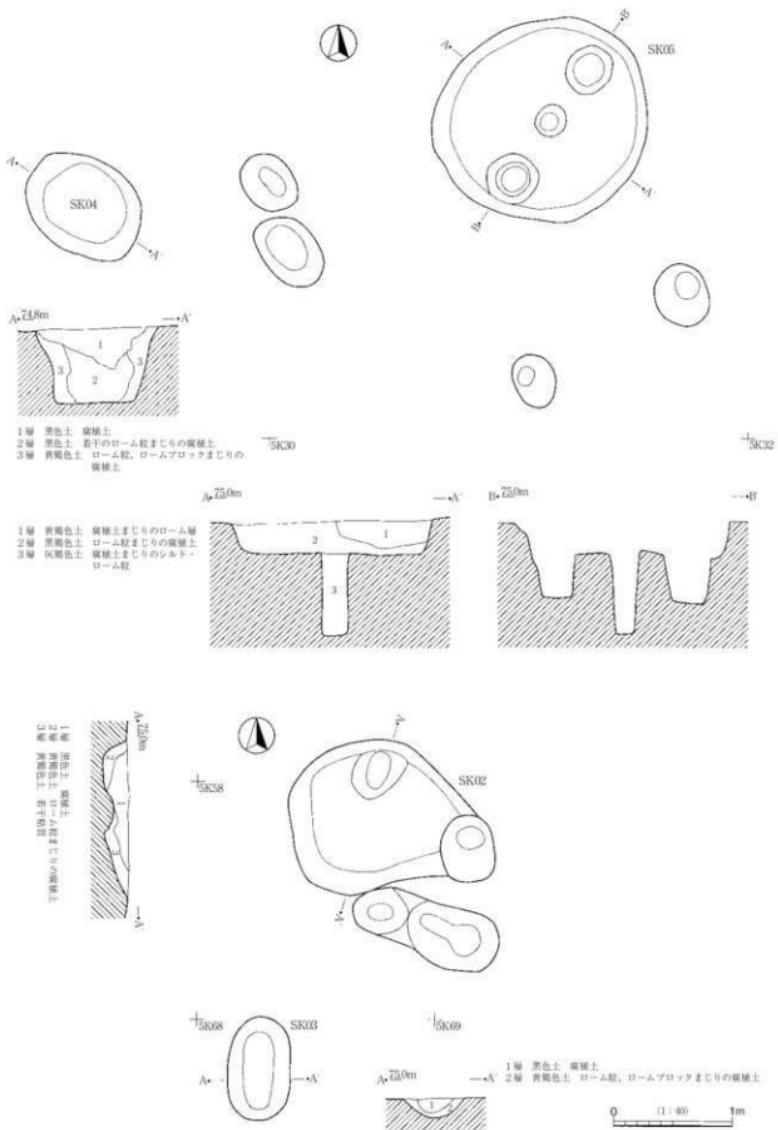
調査範囲の東端、8M45・55に位置する。南西側1.5mにSF01がある。形状は楕円形をしていて、長軸約2.4m、短軸約1.3mであった。深さは約30cmであった。少量の縄文土器と礫が出土した。

土坑SK02（第45図、図版10）

調査範囲東端の南側、11M25に位置する。SF02と隣接している。形状は三角形をしていて、1辺約1.5mであった。深さは約30cmであった。少量の縄文土器と黒曜石が出土した。

土坑SK03（第45図、図版10）

調査範囲東端のやや南側、10M08・09に位置する。形状は長方形をしていて、縦約1.2m、横約1.4mで



第44図 小堅穴と土坑

あった。深さは約35cmであった。少量の縄文土器が出土した。

焼土跡SF01（第45図、図版9）

調査範囲の東端、8M54・55に位置する。北東側1.5mにSK01がある。焼土は縦約1.6m、横約1.2mの範囲に広がり、厚さ約10cmの層を形成していた。少量の縄文土器と礫が出土した。

焼土跡SF02（第45図）

調査範囲東端の南側、11M25に位置する。土坑SK02と隣接している。焼土は縦約0.7m、横約1.8mの範囲に広がり、厚さ約10cmの層を形成していた。少量の礫が出土した。

遺物 縄文時代の遺物として縄文土器と礫・石器が、遺構以外にも確認調査のトレンチや拡張した部分から多数出土した。

縄文土器（第46～48図、図版21～23）

第46図11～第48図58が、遺構にともなわずに出土した縄文土器である。第46図の11には太い沈線文が施文され、口縁下部に補修孔が穿たれていた。12は深鉢の鋭角な尖底である。11と12は早期中葉の田戸下層式である。

13～18には羽状縄文が施され、関山式の土器である。20の口縁には縦位に細かい平行沈線がランダムに施され、21には竹管文が横位に施されていた。24の口縁には竹管による横位の押し引き文の下部に縄文が施文され、土器断面は漆黒色で黒浜式の土器である。25には平行沈線による横位の区画内に、連続する刺突文が横位にめぐらされ、田戸下層式の土器であろう。27の口縁には縄文を施文した後に竹管による平行沈線を斜位に施し、さらに押し引き文を横位にめぐらしていた。28には半截竹管による押し引き文が横位にめぐらされていた。20～28は前期の縄文土器と思われる。

29には縄文と沈線が施文され隆帯にも縄文が施されて、土器胎土には長石や雲母が含まれていた。阿玉台IV式の土器であろう。30～35、38～39は加曾利E式ないしは加曾利E I式の土器である。

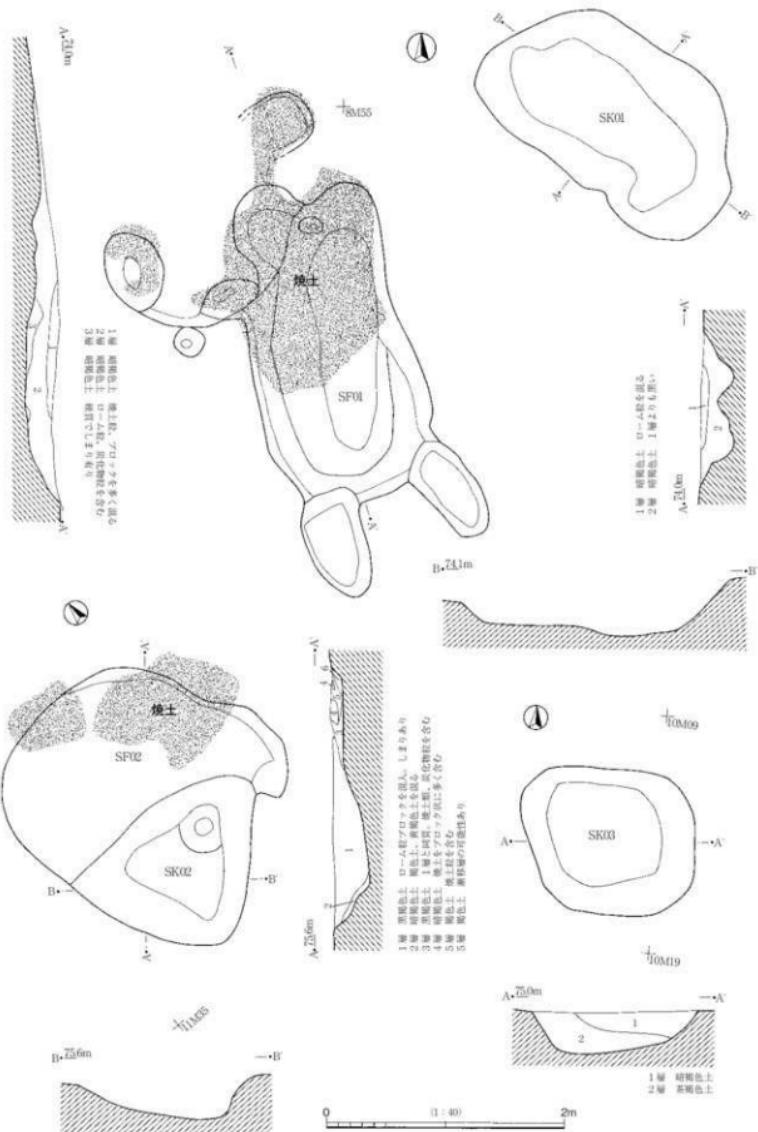
41は縄文の施文に、縦位に直線状および波状の沈線が施されていた。堀之内I式の土器であろう。44～48にも直線状、曲線状の沈線によるさまざまなモチーフが施されていた。44～48も堀之内I式の土器である。43の口縁の隆帯には左右対になった沈線による渦巻き文が施され、胴部にも渦巻き文のモチーフが見られる。51の口縁には指頭圧痕がめぐらされ、口縁から下の部分に縄文と竹管による平行沈線文が施されていた。53の口縁には竹管による横位の平行沈線が、54には細い沈線による斜位の直交するモチーフが描かれていた。51、53、54は加曾利B式の土器である。55の口縁には横位の連続刺突文が、口縁下部には斜位の細い沈線文が施されている。56の口縁には縦位の細い沈線文が、口縁下部には竹管による押し引き文が横位に施されていた。55～56は安行式の土器であろう。57は突起と磨消縄文の目立つ浅鉢で、安行III式の土器である。

58は、単節縄文の施文された土器片を錐に転用した土器片錐である。

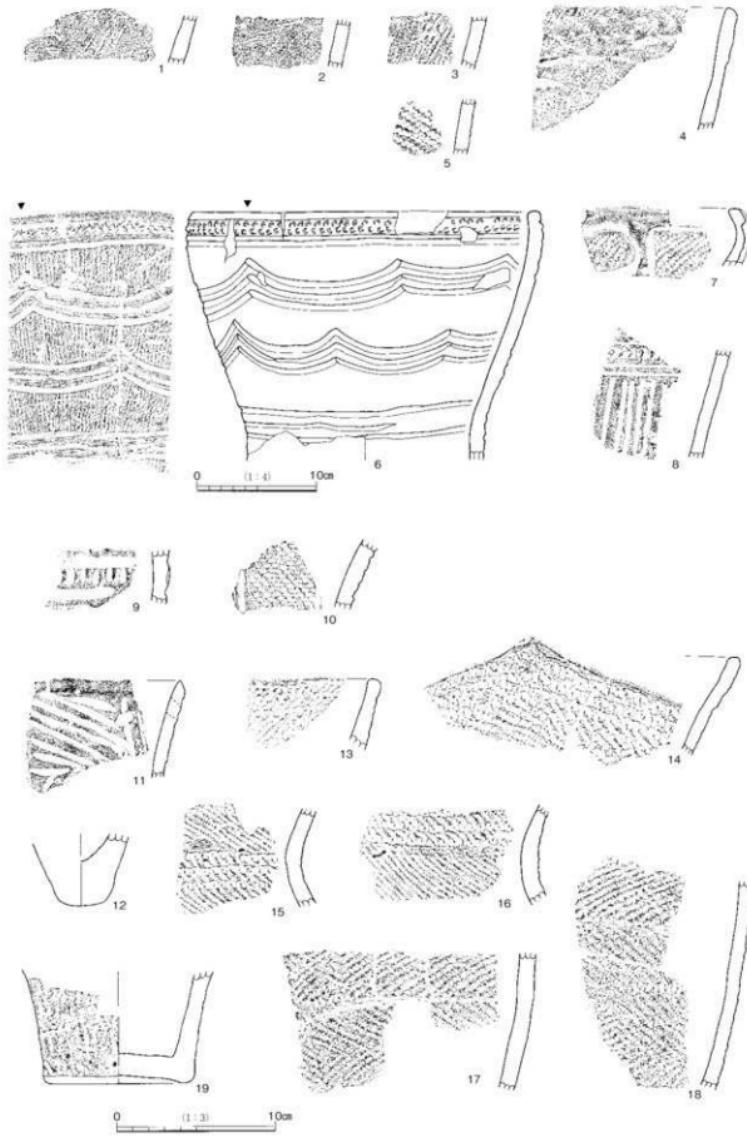
早期から後期にかけて各時期の縄文土器片が出土したが、完形またはそれに近い形にまで復元できた事例は皆無だった。

石器（第50・52図、図版24・25）

第50図9～11・13～17、第52図25～31が、遺構にともなわずに出土した石器である。第50図の9は安山岩の石鎚である。10は黒曜石でできた小型の石鎚で、小さいながらも側縁全体に細かい剥離痕がみられる。13は緑泥片岩の磨製石斧刃部で、14は砂岩の磨製石斧である。15は加撃痕のある丸い扁平な礫で、上下の



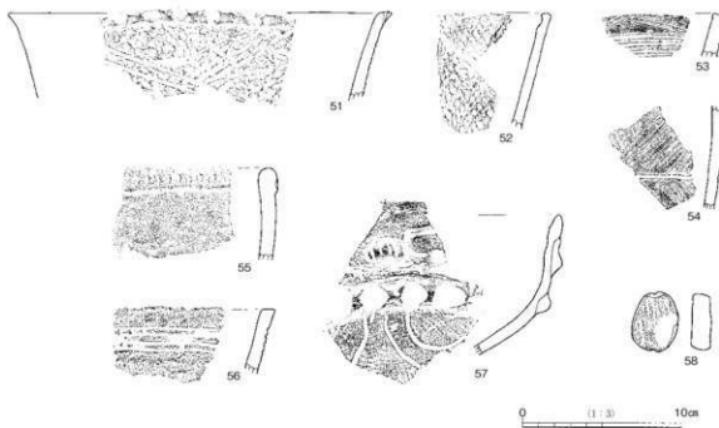
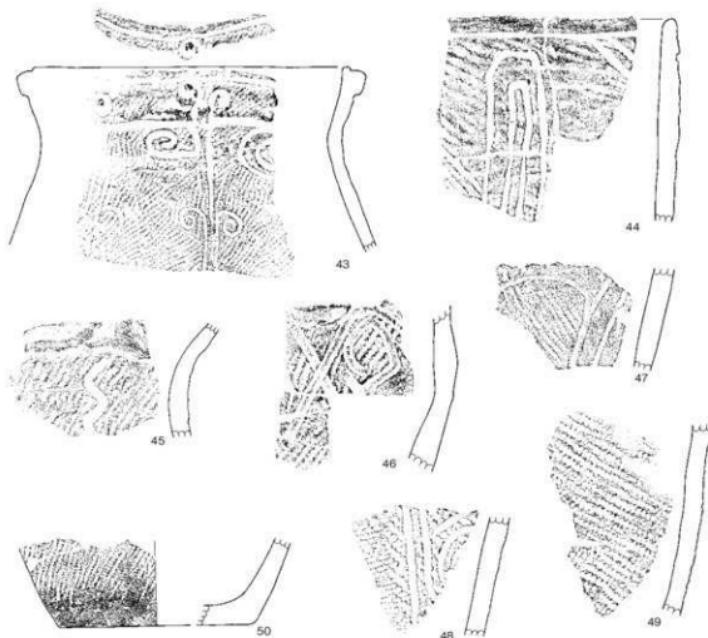
第45図 土坑と焼土遺構



第46図 繩文土器(1)



第47図 繩文土器(2)

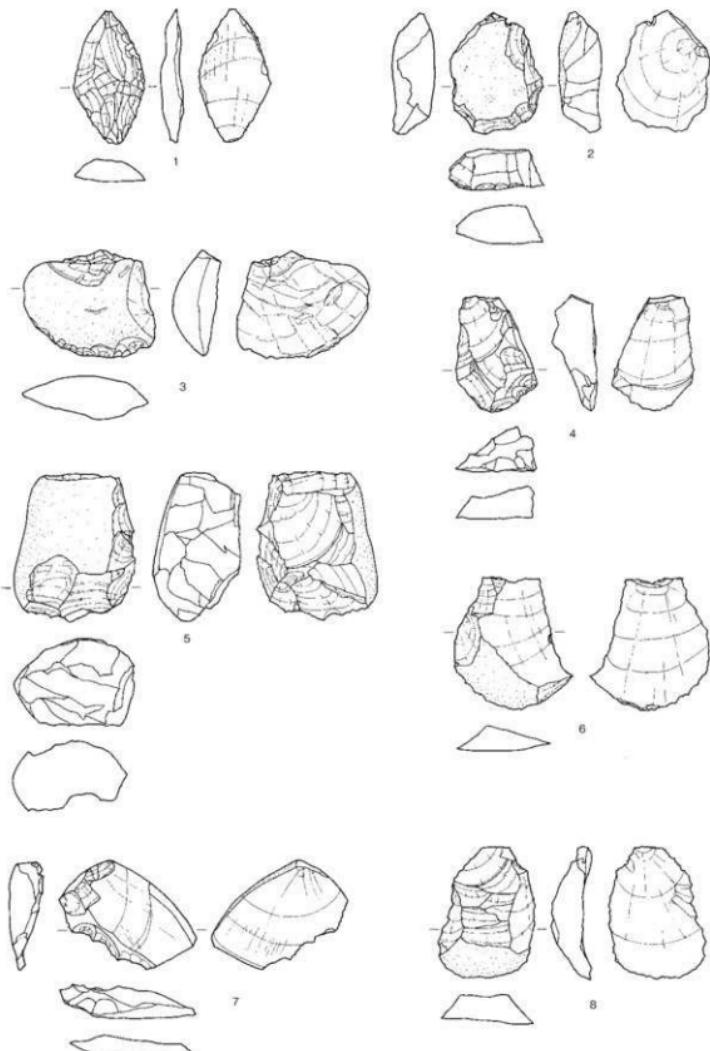


0 (1 : 3) 10cm

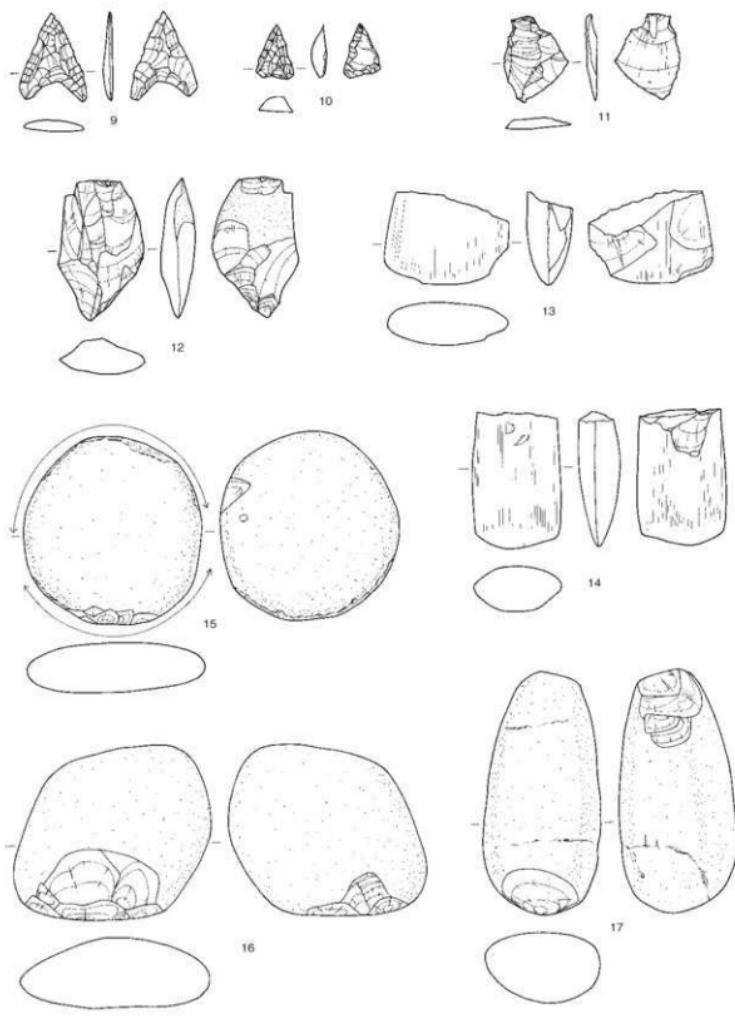
第48図 繩文土器(3)

第10表 山小川遺跡の縄文土器

掛図番号	実測番号	出土地点	遺物番号	土器型式	備考
1	2T-1	前期包含層	2T-122		単節縄文
2	2T-3	前期包含層	2T-512		単節縄文
3	2T-4	前期包含層	2T-370		単節縄文
4	10	前期包含層	2T-123・124・169		単節縄文
5	2T-2	前期包含層	2T-511		
6	SI01	SI01-32	加曾利E II		
7	8	SI01	SI01-2	加曾利E II	
8	9	SI01	SI01-7	加曾利E II	
9	6	SK02	SK02-2	加曾利E II	
10	3	SK04	SK04-1	加曾利E	
11	5		5T-2		
12	41		11M14-4	田戸下層	尖底
13	31		10M48-4	黒浜	
14	1		8M44-3, 8M45-2	黒浜	
15	22		9M07-2	黒浜	
16	21		9M07-3	黒浜	
17	37		11M15-2・5, 11M85-4	関山	
18	38		11M04-4, 11M26-3, SK02-3	黒浜	
19	42		11M14-3・4, 11M15-4	関山	
20	33		10N10-2		
21	18		9M89-2		
22	35		5T-2		
23	36		10N50-2		
24	4		5T-2	黒浜	
25	2		9T-2	関山	
26	39		11M04-2		
27	25		9N70-2		
28	6		8M79-3		
29	11		遺跡一括	阿玉台Ⅳ	
30	9		9M97-2	加曾利E I	
31	10		9M29-4, 4T-2	加曾利E	
32	11		9M86-1	加曾利E I	
33	24		9N40-2, 9N41-2	加曾利E	
34	13		9M85-1, 9M86-1	加曾利E	
35	7		遺跡一括	加曾利E I	
36	12		9M86-1		
37	5		8M97-2		
38	16		9N30-2, 9M38-1	加曾利E	
39	3		8M78-4	加曾利E	
40	28		9N40-2, 9N41-2		
41	17		9M29-4, 9M39-4	瓶之内 I	
42	40		11M06-2		
43	23		9M85-1, 9M86-1	瓶之内 I	
44	14		9M71-2, 5T-2	瓶之内 I	
45	34		10N40-2	瓶之内 I	
46	15		9M78-2	瓶之内 I	
47	43		4T-2	瓶之内 I	
48	29		9N30-1	瓶之内 I	
49	45		5T-2		
50	44		5T-1, 2		
51	27		9N00-2	加曾利B	
52	30		10H03-1		
53	1		5T-2	加曾利B	
54	19		9M07-2	加曾利B	
55	26		9N90-2	安行	
56	4		8M89-2	安行	
57	2		8M46-2, 8M75-2	安行Ⅲ	
58	7		8M95-2		土器片疊

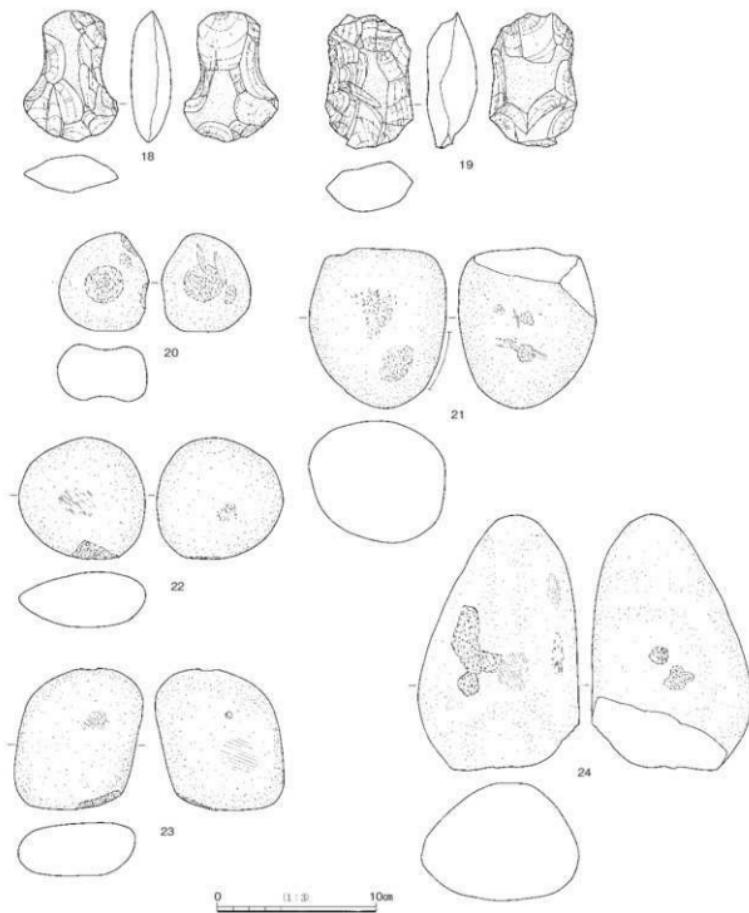


第49図 石器(1)

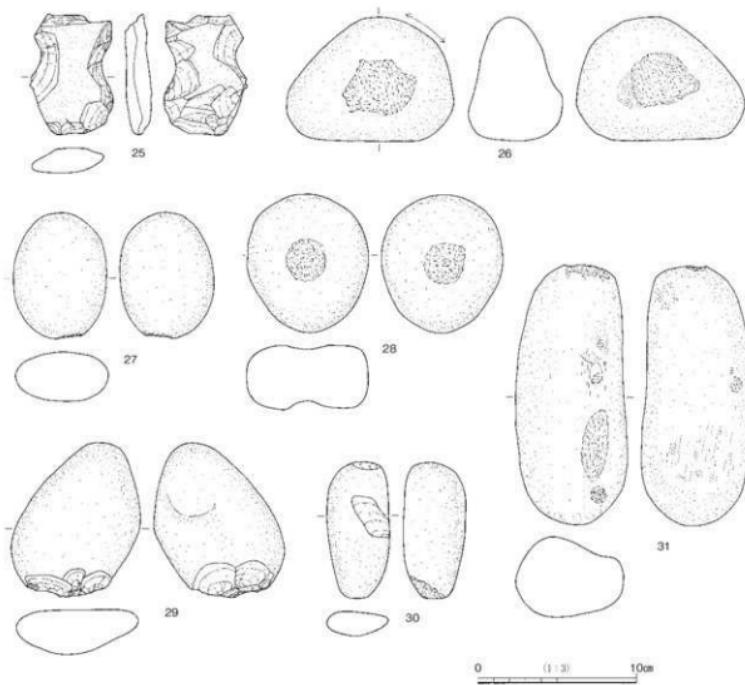


0 (2:3) 5cm

第50図 石器(2)



第51図 石器(3)



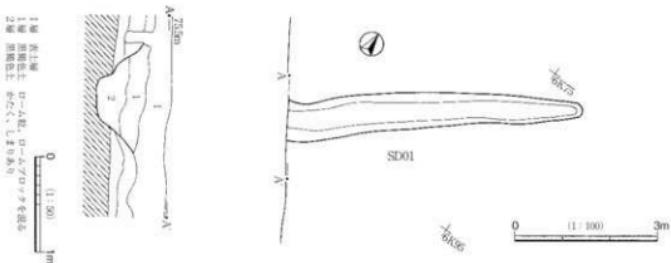
第52図 石器(4)

側縁に加撃痕が顕著にみられた。

第52図の25は、凝灰岩の打製石斧で刃部の片方が欠損している。26は被加撃痕と加撃痕のある礫で、重量が637gとやや重いが、掌に握るのに適した大きさである。28は円形の礫で、正面と背面の中央に丸くくぼんだ被加撃痕がある。31は細長い礫で上面に加撃痕がある。正面の傾斜した面には、すり減ってくぼんだ部分と加撃を受けてくぼんだ部分があった。また裏面の平らな面の下部にも、すり減ってくぼんだ部分があった。さまざまな用途に使用された礫と思われる。

第11表 山小川遺跡の石器

種類番号	実測番号	出土地点	器種	石材	縦 (mm)	横 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	遺物番号	備考
1	24	前期包含層	尖頭器	安山岩	42	23	7	6.0	2T-366	
2	17	前期包含層	スクレイバー	メノウ	38	30	14	16.9	2T-138	
3	25	前期包含層	使用痕のある剥片	チャート	34	42	14	21.1	2T-386	
4	14	前期包含層	スクレイバー	頁岩	37	25	14	9.5	2T-79	
5	15	前期包含層	石核	メノウ	47	38	27	62.9	2T-99	
6	16	前期包含層	剥片	安山岩	42	37	8	11.0	2T-137	
7	21	前期包含層	剥片	頁岩	43	35	10	12.2	2T-304	
8	20	前期包含層	剥片	安山岩	42	31	10	12.5	2T-289	
9	20		石礫	安山岩	28	21	3	1.1	11M02-1	
10	21		石礫	黒曜石	17	11	5	0.7	11M06-1	
11	27		剥片	黒曜石	27	21	4	1.7	9T-1	
12	2	SI01	剥片	チャート	44	21	10	12.2	SI01-3	
13	6		磨製石斧先端	練泥片岩	29	38	14	20.9	8MT5-1	
14	17		磨製石斧	砂岩	43	27	12	24.5	10M38-2	
15	18		加撃痕のある礫	砂岩	59	56	15	78.9	10M48-1	
16	15		加撃痕のある礫	砂岩	54	62	22	99.9	9N91-1	
17	19		加撃痕のある礫	チャート	76	37	22	97.9	10N00-1	
18	1	SI01	打製石斧	砂岩	82	58	24	115.8	SI01-2	分銅形
19	10	SI01	打製石斧	ホルンフェルス	84	55	32	152.6	SI01-26	分銅形
20	3	SI01	加撃痕と被加撃痕のある礫	安山岩	61	56	34	172.7	SI01-10	
21	4	SI01	被加撃痕と磨痕のある礫	砂岩	101	85	76	951.3	SI01-11	焼成、赤化
22	13	SI01	加撃痕と磨痕のある礫	流紋岩	76	79	34	293.9	SI01-31	焼成、赤化
23	5	SI01	加撃痕と磨痕のある礫	流紋岩	88	80	32	385.6	SI01-14	焼成、赤化
24	9	SI01	被加撃痕と磨痕のある礫	流紋岩	160	101	73	1553.5	SI01-25	焼成、赤化
25	1		打製石斧	凝灰岩	76	52	16	84.1	5T-1	分銅形
26	14		被加撃痕と加撃痕のある礫	チャート	77	105	76	636.5	9N40-1	
27	12		加撃痕のある礫	砂岩	79	58	31	207.6	9M68-2	
28	3		磨石	安山岩	86	75	39	366.9	6L-2	
29	9		加撃痕のある礫	砂岩	96	81	28	321.5	9G64-1	
30	7		加撃痕のある礫	凝灰岩	85	39	15	86.4	8M189-3	
31	11		加撃痕と磨痕のある礫	凝灰岩	163	67	50	892.6	9M62-2	



第53図 SD01

3 中～近世

遺構 中～近世の遺構として溝3条と戸1か所が検出された。遺構にともなって出土した遺物が少量だったため、細かい年代の比定は困難であった。

SD01（第53図、図版11）

調査範囲の中央や北東の6K74・75、6K83・84に位置する。北東から南西へ直線状に延びている。全長は不明だが、検出できた長さは約6mで、深さは約50cmである。覆土が硬くしまっていたので、小規模な道に関連した遺構かもしれない。少量の土器と礫が出土した。

SD02（第54図、図版11）

調査範囲中央の9H00・01に位置する。幅2mのトレンチ内で検出され、北東から南西へ直線状に延びていた。全長は不明で、深さは約40cmである。覆土が硬くしまっていたので、小規模な道の可能性がある。少量の礫が出土した。

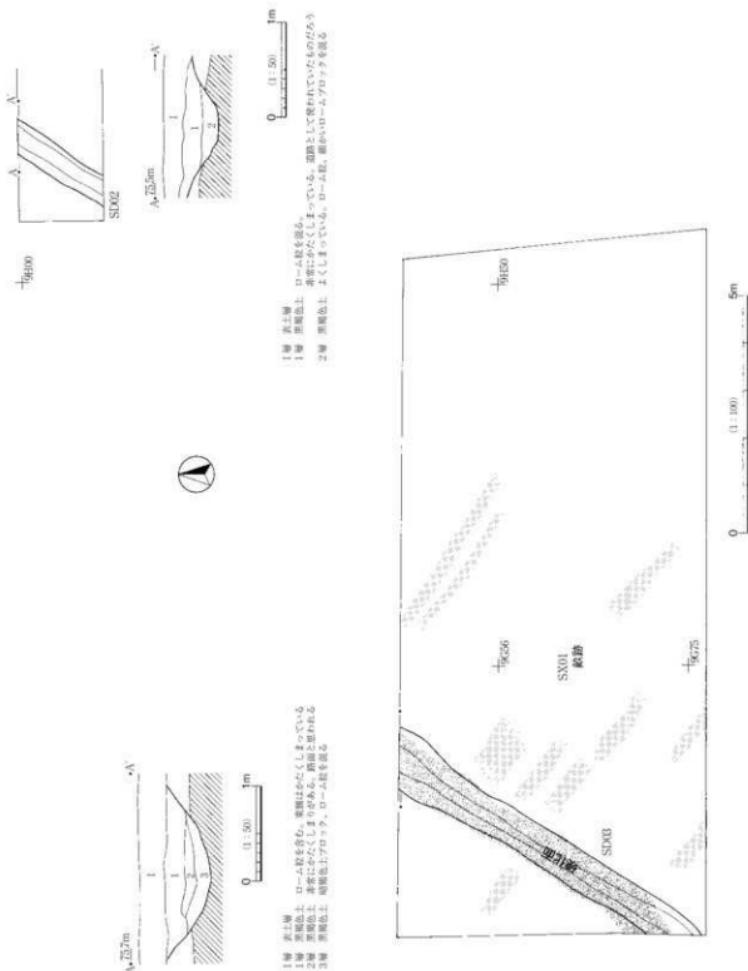
SD03（第54図、図版11）

調査範囲中央の9G44・45・53・54・63に位置する。北東から南西へ直線状に延びていた。全長は不明だが、検出できた長さは約6.5mで、深さは約50cmであった。遺構の上面には硬化面があり、また覆土も硬くしまっていたので、小規模な道の可能性がある。隣接する戸跡と方位が直交していて、両者に関連性があるかもしれない。少量の土器と礫が出土した。

SX01（第54図、図版10）

調査範囲中央の9G43～47、9G53～55、9G63～67に位置する。北西から南東へ直線状に延びる6・7本の戸を検出した。戸に掘り込みはなく、シミのような黒い模様として新期テフラ層の土層上面で識別できた。戸の方向は、道路と考えられるSD03の方位と直交していて、道路と戸の関連性がうかがえる。少量の土器と礫が出土した。

遺物 中～近世の遺物はほとんど出土しなかった。中～近世について、道路や戸など生産に関連する遺構が検出され、住居跡や建物の柱穴などは検出されなかった。この遺跡は居住に関する空間ではなかったので、日常雑器の遺物は残らなかったと考えられる。

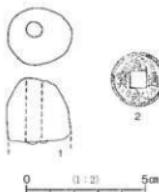


第54図 溝と歎跡

その他の遺物（第55図、第12表、図版25）

中～近世の遺物として図化したのは、土錘と錢貨である。土錘は縄文時代前期の遺物包含層から、縄文土器や礫・石器に混じって出土した。縄文時代前期に土錘が作製されたとは考えられないで、中近世の土錘が縄文時代の包含層に混入したと解釈したい。古墳時代前期の菱形土器口縁の破片が、調査範囲からわずかに出土しているので、あるいは古墳時代の土錘かもしれない。土錘の形態は通常の管状のもので、その端部が出土した。直径約2.5cm、穴の直径約0.6cmであった。

出土した錢貨は、直径23mmの寛永通宝である。



第55図 その他の遺物

第12表 錢貨

遺跡	博国番号	出土地點	種類	外縁 外径	外縁 内径	内部 外径	内部 内径	外縁 厚さ	内面 厚さ	量目 [g]	遺物番号	備考
竹ノ下 遺跡	第14図8	トレンチ	寛永通宝	24.43	19.29	7.26	5.29	1.30	0.75	3.64	2008年度 17-27	古寛永
	第14図9	トレンチ	寛永通宝	28.04	21.14	8.15	6.71	1.05	0.95	4.41	T21-1	新寛永、背面：十一波文
岡尻 遺跡	第38図17	本調査区①	熙寧元宝	23.24	20.22	8.24	7.30	1.10	1.05	1.97	2G30-1	宋銭、初鑄 1078年
	第38図18	本調査区①	洪武通宝	23.35	18.96	7.15	5.63	1.40	0.83	3.42	2G42-1	明銭、初鑄 1408年
	第38図19	本調査区②	「咸」	—	—	—	—	—	—	0.07	6E84-1	咸平元宝(宋銭、初鑄 988年)、 咸淳元宝(南宋銭、初鑄 1265年？)のいずれか。
	第38図20	抵抗区	寛永通宝	22.14	18.20	8.19	6.74	1.15	0.85	2.15	5B68-3	
山小川 遺跡	第38図21	2008年度	寛永通宝	24.27	19.36	7.57	5.59	1.10	0.80	3.04	II区第1 トレンチ-1	古寛永
	第55図2		寛永通宝	23.28	19.47	8.89	6.60	0.95	0.65	1.92	—括	

計測値単位：mm

第5節　まとめ

竹ノ下遺跡、関尻遺跡、山小川遺跡は、東京湾に流入する養老川中流域に所在し、房総半島のほぼ中央に位置している。戦後の高度経済成長以後、東京湾沿岸部では大規模開発とともに大がかりな発掘調査が相次いで行われ、沿岸部の考古学的見識は飛躍的に増大した。一方、沿岸から離れた房総半島の内陸部では、開発にともなう発掘調査は少なく、ともすると考古学的に空白な部分が広がっていた。

圏央道は木更津から市原、茂原、東金、そして成田へと房総半島の内陸を走るので、その建設にともなう発掘調査は、内陸部の新たな考古学的資料をもたらして、房総半島全体の歴史をより深く理解できるようになると期待される。そこで、これまでの成果をふまえながら、今回の調査で判明した知見を記しておく。

1 竹ノ下遺跡

竹ノ下遺跡は、平蔵川が大きく銳角に蛇行する河岸段丘に所在し、対岸には関尻遺跡が位置している。この遺跡で検出された遺構は、縄文時代のピット群2か所と土坑3基であった。遺物は、おもにピット群周辺を中心に縄文時代の土器と礫・石器が少量出土した。縄文時代以外の遺物として近世の陶磁器と錢貨が出土した。

ピット群については、住居の柱穴を構成するような配列が一部に見られるものの、炉跡などは検出されず、竪穴住居跡と判断するまでにはおよばなかった。ただし周辺一帯からは焼けて赤化した礫が出土しているので、ピット群を、長期間の居住ほどでない短期間の人間活動の痕跡と見なすことができるだろう。出土した縄文土器の多くが縄文時代中期前半の阿玉台式から中期後半の加曾利E式の土器型式だったため、ピット群の年代も縄文時代中期の限られた時期に比定して良かろう。

2 関尻遺跡

関尻遺跡は、平蔵川をはさんで竹ノ下遺跡の対岸の河岸段丘に位置している。関尻遺跡で検出された遺構は、縄文時代の遺物包含層1か所、抵抗区で土坑とピット、本調査区①で縄文時代の竪穴住居跡1軒と多数のピット、本調査区②で掘立柱建物跡15棟であった。出土した遺物は、縄文時代の土器と礫・石器、中～近世の陶磁器、釘・煙管・鐵冶滓・錢貨などであった。

縄文時代　縄文時代の遺物包含層からは、少量ながら早期の撚糸文系の縄文土器が出土した。関尻遺跡から南へ約130m離れた新井花和田遺跡では、同じ早期でも条痕文系の子母口式から野鳥式の時期を中心とする竪穴住居跡や炉穴・土坑が多数検出され、この遺跡は拠点的集落とされた。また近年の調査で関尻遺跡の西側、山小川遺跡に隣接する柏野遺跡で縄文時代早期の炉穴、遺物包含層が検出された。さらに関尻遺跡から西へ約200m離れた高瀬湖北側台地にある大和田遺跡でも、縄文時代早期の遺物包含層が検出され、土器や礫に混ざって玦状耳飾り、垂飾、管玉などが出土した。

從来養老川中流域の縄文時代早期については、拠点的集落である新井花和田遺跡しかあまり知られていない。沿岸部と比べて房総半島内陸部の早期に関する情報は少なかったが、近年の調査で養老川中流域の早期の遺跡が明らかになってきた。近いうちに公表されるであろう大和田遺跡や柏野遺跡などの調査成果を総合することにより、内陸部における長期的居住以外の人間活動について、より深い理解が得られるだろう。

本調査区①で縄文時代中期の住居跡が検出され、また本調査区①と本調査区②から出土した縄文土器は

阿玉台式および加曾利E式の土器であった。本調査区①と本調査区②では多数のピットが検出され、なかには縄文時代のピットが含まれる可能性も考えられる。対岸に位置する竹ノ下遺跡でも、多数のピットが検出され、同じ土器型式の縄文土器が出土した。縄文時代中期に川をはさんで同じような遺跡が形成されたといえるだろう。

中世の村落 本調査区①と本調査区②で多数のピットが検出された。そして両本調査区からは中～近世の陶磁器が出土した。本調査区②ではピットの規格性から15棟の建物が確認でき、中～近世の遺物が周辺で出土した。13世紀～14世紀の龍泉窯系の青磁、さらに近世の陶磁器も出土しているので、長期にわたって継続した集落の一部であった可能性が考えられる。陶磁器のうち中世のものが多いので、集落の時期も中世を中心として見てよからう。本調査区①では規格性のある建物跡は確認できなかったが、多数のピットは中～近世の何らかの遺構をしめしているかもしれない。

本調査区②で検出された15棟の建物の規模を比較してみると、最小の建物がSB07で面積は3.4m²、最大はSB04で面積は24.8m²、平均は15.4m²であった。20m²を超える建物が2棟あるものの、飛び抜けて大きな建物は含まれていない。基本的に建物の間数は2×2で、柱が格子状にならぶ総柱建物ではなく、廂などの施設もない小規模な建物で占められていた。本調査区北側で、建物の規模と方位の近似するSB04とSB06が検出され、建物を建て替えた可能性がうかがえる。ただし、土地を区画するような溝などが存在しないため、建物の建て替えをもってすぐさま土地占有に結びつけるのは困難だろう。

本調査区②の南東で、平蔵川の支流である小草畠川が南北から東西へと川の流れを変え、閑尻遺跡の東側約250mで平蔵川に流入している。小草畠川と平蔵川の合流地点南側が現在の山小川集落である。河川合流地点に位置する山小川集落は、水運交通が主体を占めていた頃、養老川を下って東京湾に通じる中継的村落だったと考えられる。江戸期の明和年間(1764～72)の文書によると、山小川村に水運を営む舟持がいて幕府に冥加金を上納していたことがわかる^[1]。その集落の一部、おそらく集落の辺縁が一時期間閑尻遺跡まで広がっていたと考えられる。

山小川集落の起源がどの時代までさかのばるのか不明であるが、閑尻遺跡で出土した陶磁器および青磁は重要な資料となるだろう。出土した龍泉窯系青磁の年代は13世紀～14世紀であるが、この青磁の持ち主の時代は、製作年代よりも多少後世になるとしても、鎌倉時代後半から南北朝、ないし室町時代前半とみてよからう。

この時期の村落構造に関する史料として、『金沢文庫古文書』にある建武五年(1338)6月の上総国市西郡新堀郷(現市原市新堀)の給主得分に関する文書があげられる。その文書によると、新堀郷には屋敷持ちの有力農民である「名百姓」と、そうでない隸属的な「百姓」とに階層が分化して、領主制支配に対抗して有力名主層を中心とする村落共同体の構成が見られるのである^[2]。また鎧物師免・猿楽給と記されて、農具製造にたずさわる鎧物師の存在が予測された。実際に近年、市原市新堀馬場で調査された小鳥向遺跡で、その文書に記されていた鎧物師の工房が発掘された^[3]。

同時期の中世の青磁が出土した君津市外箕輪遺跡、同市郡遺跡、同市泉遺跡を見てみよう。外箕輪遺跡では12世紀から13世紀の青磁が9点出土した。そして7棟の建物跡が検出され、66m²～71m²の建物が3棟、31m²～35m²の建物が2棟、25m²～27m²の建物が2棟と、建物は3つのグループに分類された。50m²～90m²の建物は名主層クラスの屋敷主屋と推測されることから、外箕輪遺跡の性格は、領主層の居館に付属する施設か、居館に隣接する上層名主の屋敷地とされた^[4]。

郡遺跡では12世紀～15世紀の青磁が5点出土した。この遺跡からは古墳時代以降の堅穴住居跡や掘立柱建物跡、溝が多数検出されたが、中世と考えられる建物が数棟確認された。その中には総柱建物や、周りに柵・堀を設けて櫓門と考えられる門を取り付けた屋敷・館が含まれていた⁽⁵⁾。このような建物の構成から、郡遺跡は名主層クラスの屋敷地と考えられるだろう。

泉遺跡では12世紀～13世紀の青磁が3点出土し、16棟の建物とともに13世紀～14世紀の村落跡として報告された。いずれの建物も小規模で、最大でも面積は28.6m²であった。建物の間数は2×2か2×3で、総柱建物ではなく、また身舎の縁辺に付く廂のような付属施設もなかった。小規模かつ簡素な建物からなる泉遺跡は、百姓層の村落を想起させるものだった⁽⁶⁾。

君津市の3遺跡と比較すると、関尻遺跡の内容は、泉遺跡と最も適合するだろう。つまり関尻遺跡には外箕輪遺跡や郡遺跡で検出された名主層クラスの建物はみあたらず、小規模かつ質素な建物からなる百姓層の村落だったと推測できる。

君津市の3遺跡が東京湾に近い小糸川流域に位置し、付近一帯が古墳時代から有力な勢力の根拠地であったのに対して、関尻遺跡は養老川中流域の山間部に位置し、その近辺は前代から有力な勢力が継続して存在した場所ではなかった。上総国府や国分僧寺、尼寺などがあって早くから大規模な開墾が始まったであろう養老川下流域と異なり、中流域の開墾事業は鎌倉時代になって盛んになったと考えられる。

養老川流域の鎌倉時代の郷名・保名として、新堀郷以外に、乾元2年(1303)に海郷(現市原市海士有木)、永仁4年(1296)に勝馬郷(現市原市勝馬)、嘉暦3年(1328)に土宇郷(現市原市土宇)、鎌倉時代初期に与宇呂保(現市原市中高根)、文治2年(1186)に矢田郷(現市原市矢田)が知られている⁽⁷⁾。平安時代末期から鎌倉時代初期に養老川流域でも次第に川をさかのぼって開発が進められ、南北朝時代には新堀郷に見られるような階層分化した村落、中世的郷村が形成されていた。小規模かつ質素な建物で構成された関尻遺跡は、まだ階層分化の進んでいない開発型の百姓層の村落だったと言えるだろう。金沢文庫古文書の称名寺寺領に関する史料によると、鎌倉時代末期以降、土宇郷と与宇呂保は金沢氏の所領であった⁽⁸⁾。川をさかのぼって関尻遺跡付近まで金沢氏の所領であった可能性も考えられるだろう。

3 山小川遺跡

山小川遺跡は、平蔵川から西へ約500m離れた段丘上に所在し、さらに西側のいちだん高くなった台地上に柏野遺跡が隣接している。この遺跡で検出された遺構は、縄文時代の遺物包含層1か所、埋甕炉のある堅穴住居跡1軒、小堅穴1基、土坑6基、焼土跡2基と、中～近世の溝3条、畝1か所である。遺物は、おもに縄文時代早期から後期にかけての縄文土器と礫・石器が出土し、その他の時代の遺物はほとんどなかった。

縄文時代前期の遺物包含層は、從来養老川中流域でほとんど知られていないので、関尻遺跡で検出された早期の遺物包含層や、現在整理作業の進んでいる柏野遺跡や大和田遺跡の資料とともに縄文時代早期・前期の好資料となるだろう。

検出された1軒の縄文時代中期の堅穴住居跡では、加曾利E II式の深鉢形土器が埋甕炉に転用されていた。同じ山小川遺跡で約5年前に調査された県道部分では、加曾利E III式から称名寺式、堀之内式に属する堅穴住居跡が19軒検出された。その時に検出された堅穴住居跡の特長は、いずれも規模が小さい、炉が作られないか、作られても使用頻度の低い貧弱なものという点で共通していた。炉のともなう堅穴住居

は加曾利E III式とIV式の3軒に限られ、その竪穴住居の規模の判明しているものは長軸4.4m×短軸3.8m、長軸3.5m×短軸2.4mだった。今回新たに検出された竪穴住居跡は、以前に検出されたものより若干時期がさかのぼるもの、規模はほぼ同じで小さいものだった。

以前の調査成果をあわせると、縄文時代中期から後期にかけて、山小川遺跡では竪穴住居の規模が小さいまま炉の使用が衰退したという現象を見て取れる。生活パターンが、長期居住から放散的な短期居住へと変動過程を示唆しているのかもしれない。

出土した縄文土器について、早期から後期の土器型式のものが含まれていた。以前の調査では早期や前期のものは含まれていなかった。逆に今回の調査では、前回の調査で出土していた後期初頭の称名寺式が含まれていなかった。同一遺跡内で調査した地点が互いに約300m離れているだけなのだが、微妙に遺跡の内容が異なっている。

中近世の遺構として、道路と思われる溝と畝跡が検出された。遺構にともなって出土した遺物がないので、遺構の年代は比定できない。とはいってもこれらの遺構は養老川中流域の開墾および農業に関わる遺構だろう。関尻遺跡では掘立柱建物跡と青磁・陶磁器が出土して、中世村落の存在を確認できた。今後このような資料の蓄積によって、山小川遺跡の中近世遺構の検討が進むことを期待したい。

注

- (1) 「市原市史」中巻、市原市、1986年。542~5頁。
- (2) 「市原市史」中巻、市原市、1986年。77~81頁。
- (3) 櫻井淳教「市原市小鳥向遺跡II」市原市文化財センター発掘調査報告書第77集、2002年。
- (4) 中能 隆・篠生 南「外箕輪遺跡発掘調査報告書」君津都市文化財センター発掘調査報告書第98集、1994年。
- (5) 小高幸男「郡遺跡群発掘調査報告書II」君津都市文化財センター発掘調査報告書第117集、1996年。
- (6) 松本 勝「泉遺跡発掘調査報告書I」君津都市文化財センター発掘調査報告書第110集、1996年。
- (7) 「市原市史」中巻、市原市、1986年。72~76頁。
- (8) 「市原市史」中巻、市原市、1986年。48~51頁。

第2章 長南町田宿川間遺跡

第1節 調査の概要

1 調査の経過

田宿川間遺跡の発掘調査は、平成16年度に一部について、確認調査を実施し、平成18年度に残りの部分について、確認調査を実施した。整理作業は、平成19年度に水洗・注記～原稿執筆まで実施した。

発掘調査

平成16年度 調査期間：平成16年11月16日～平成17年2月23日

調査対象面積：14,500m² 確認調査面積：上層1,699m²／9,849m² 下層対象外
組織：調査部長 矢戸三男、南部調査事務所長 高田 博、担当：副所長兼主席研究員 土屋治雄、上席研究員 麻生正信

平成18年度 調査期間：平成18年8月1日～平成18年9月22日

調査対象面積：14,500m² 確認調査面積：上層917m²／4,810m² 下層対象外
組織：調査研究部長 矢戸三男、南部調査事務所長 高田 博、担当：上席研究員 柴田龍司

整理作業

平成19年度 整理期間：平成19年5月1日～平成19年8月31日

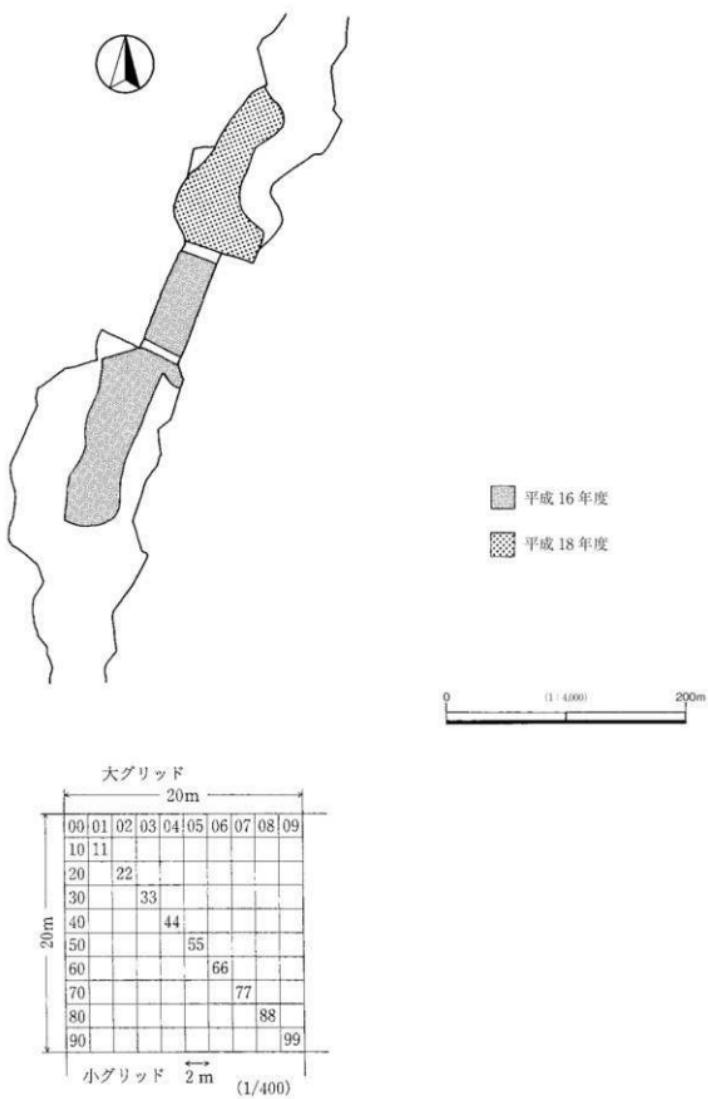
作業内容：水洗・注記～原稿執筆まで
組織：調査研究部長 矢戸三男、南部調査事務所長 西川博孝、担当：上席研究員 麻生正信

2 調査の方法

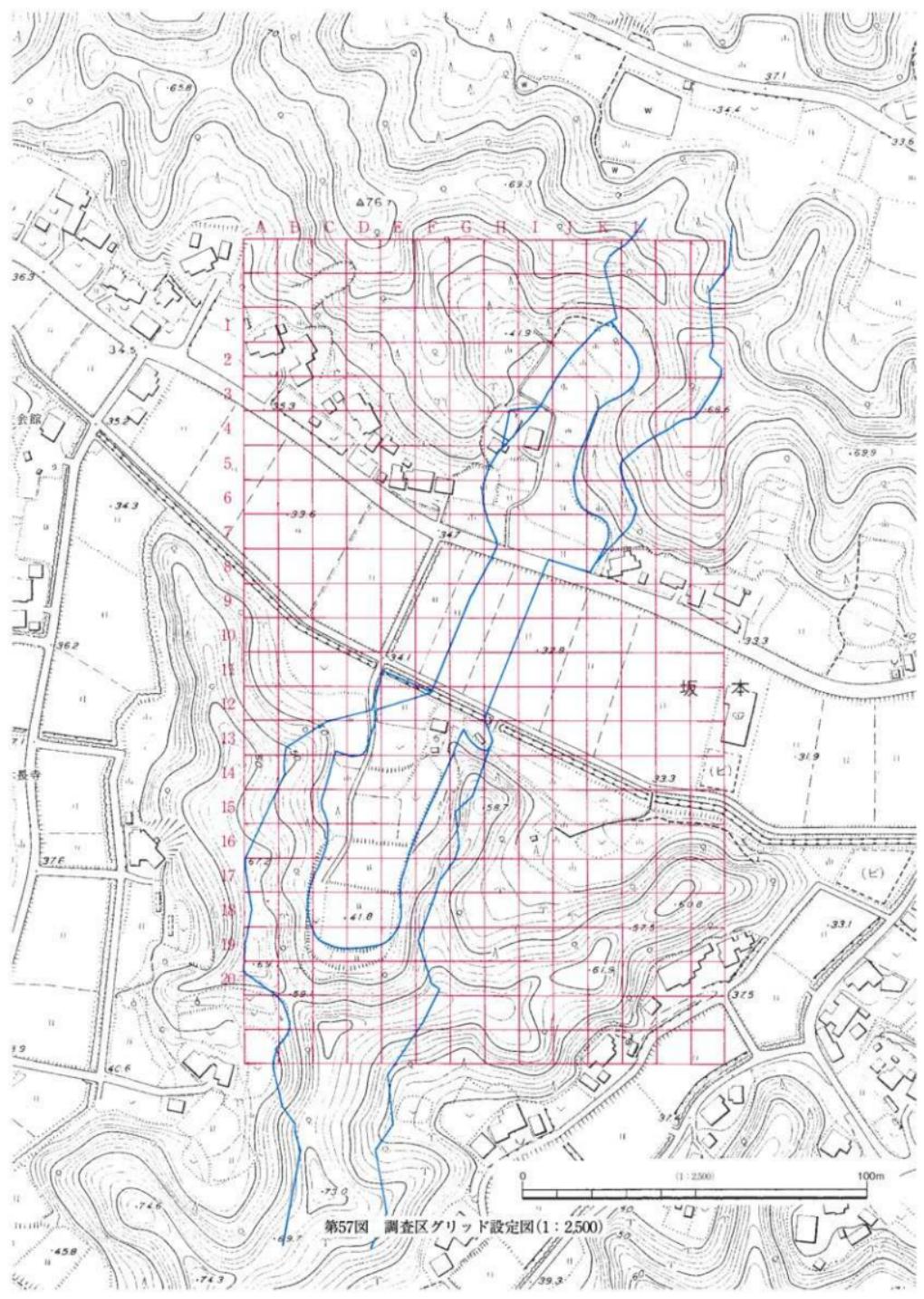
グリッドの設定 調査の開始にあたって、遺構の検出地点・遺物の出土地点の記録のため、グリッドの設定を行った。遺跡全体に公共座標の成果を基準とした20m方眼の大グリッドを設定し、X = -66,860、Y = 37,660(日本測地系)を起点とする座標北の北西端を1 Aとし、以下南北方向をアラビア数字、東西方向をアルファベットでそれぞれ大グリッドの名称とした。大グリッド内は2 m方眼で区画し、北西端から東西方向に順次番号を付した。(第56・57図)

確認調査と方法 確認調査は、平成16年11月より開始した。調査区全体に2 m幅の確認トレンチを基本に、南北ないし東西方向に、地形に合わせて長さを設定した。重機により、表土を除去し、遺構の所在を確認した。平成16年度調査区は、谷底平野部分を北区、南に開口する小支谷部分を南区とした。確認調査の結果、北区の一部について、遺構が確認されたため、その周辺を拡張して調査を実施した。平成18年度調査区は、平成16年度調査区北側の北に開口する小支谷部分について、調査を実施した。調査の結果、一部について、遺構が確認されたため、その周辺を拡張して調査を実施した。(第59図)

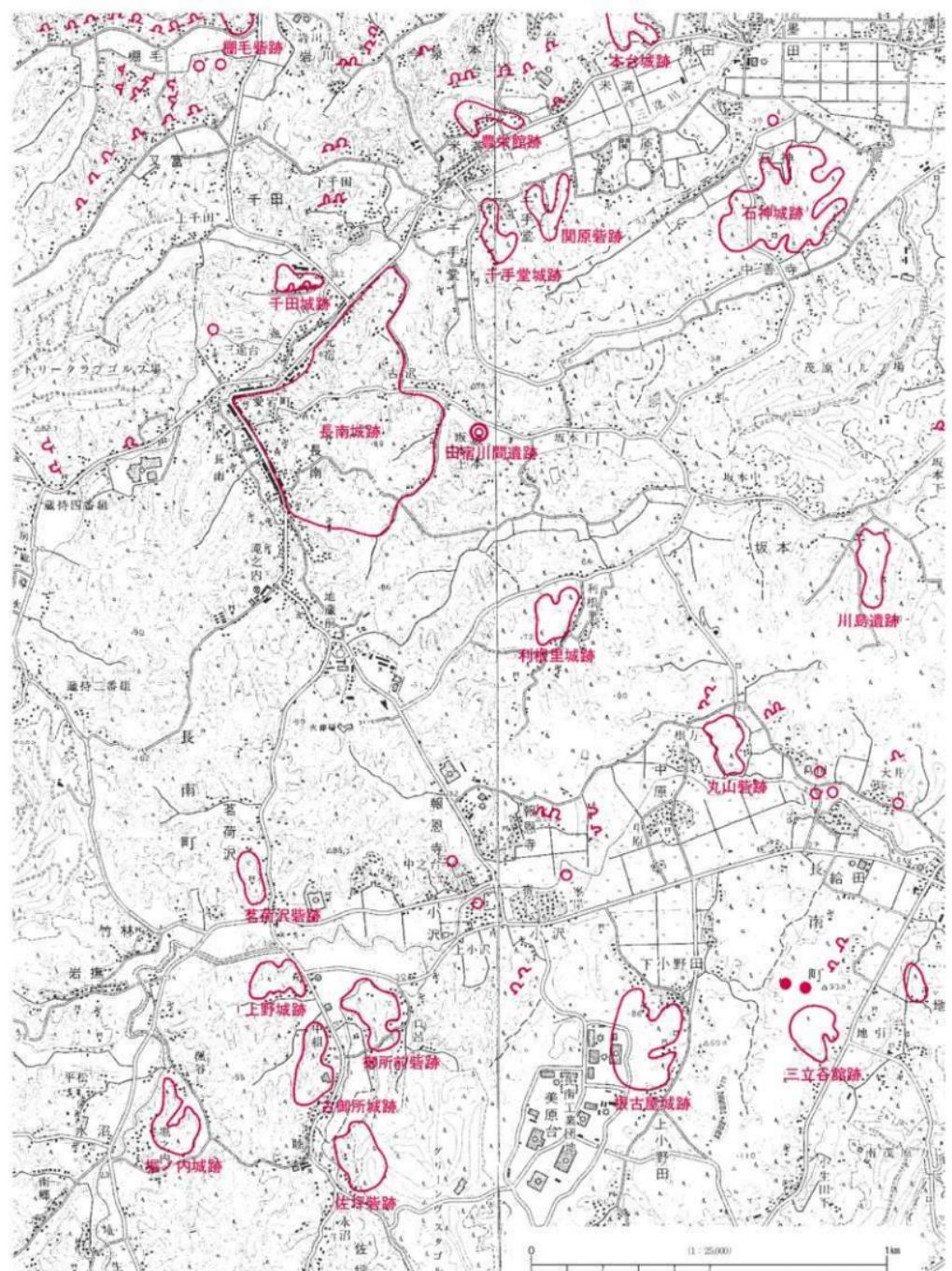
基本土層 遺跡の所在する地点は、一宮川の支流である鶴枝川が浸食した北および南に開口する小支谷、その間の谷底平野に所在する。このため、小支谷上と谷底平野上では、その土層堆積状況にかなり差が存



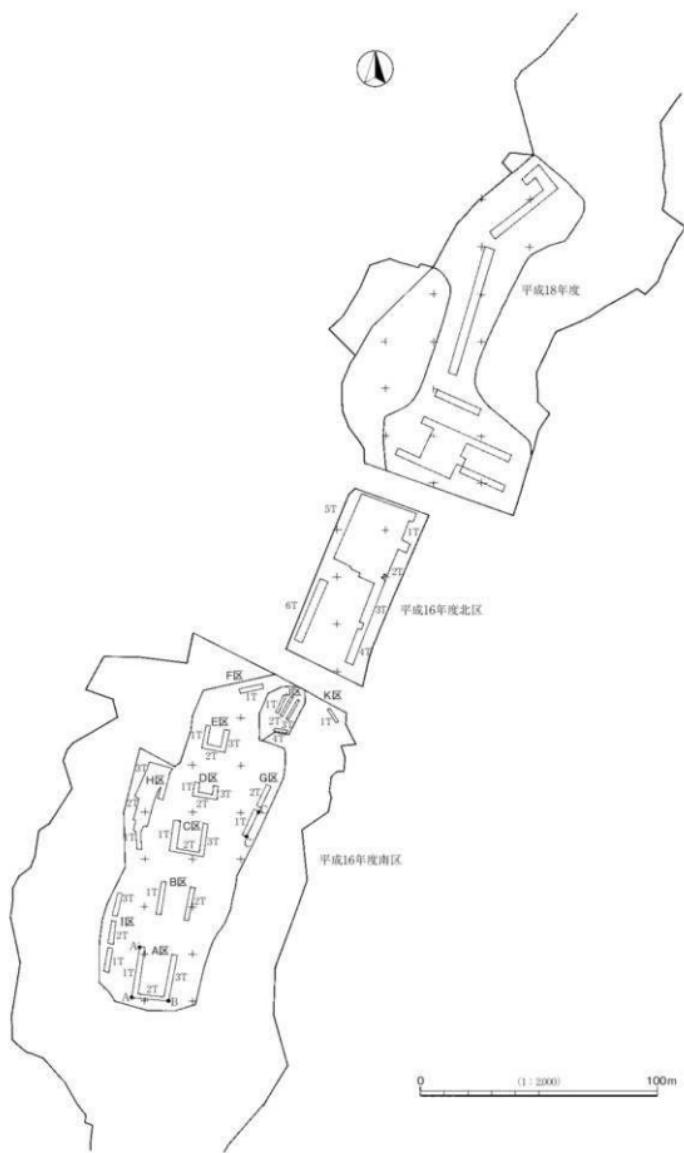
第56図 年度別調査範囲(1:4,000)・グリッド設定模式図(1:400)



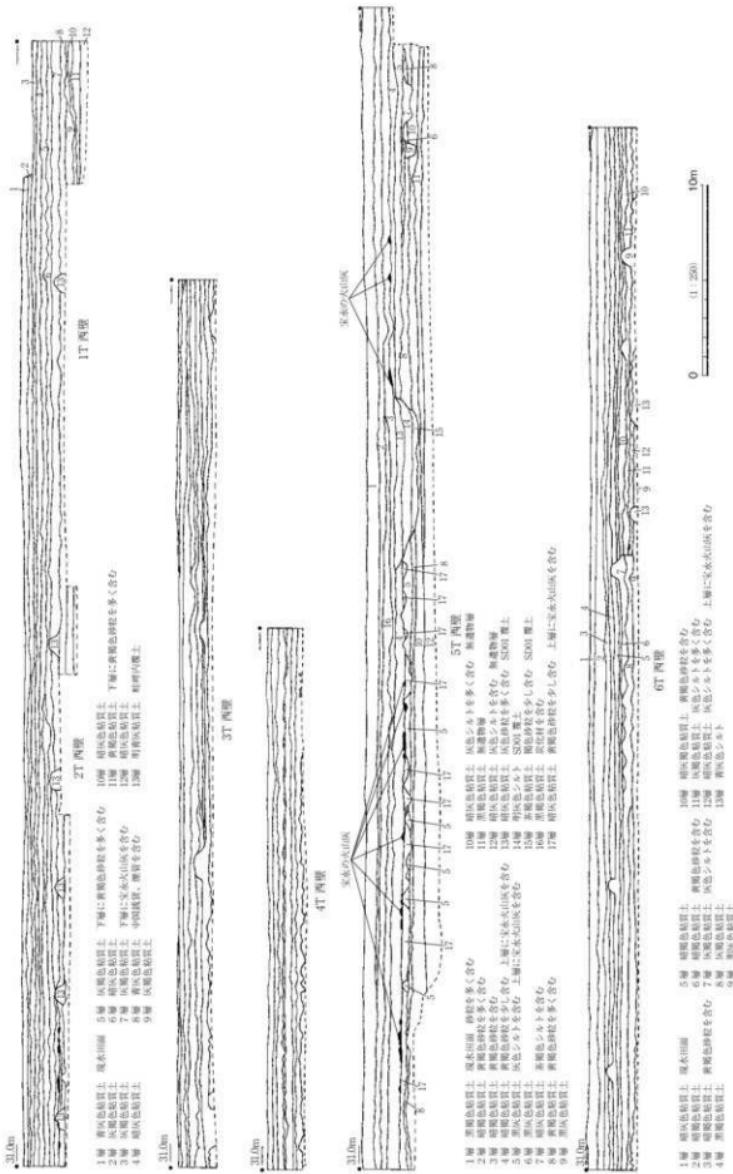
第57図 調査区グリッド設定図(1:2500)



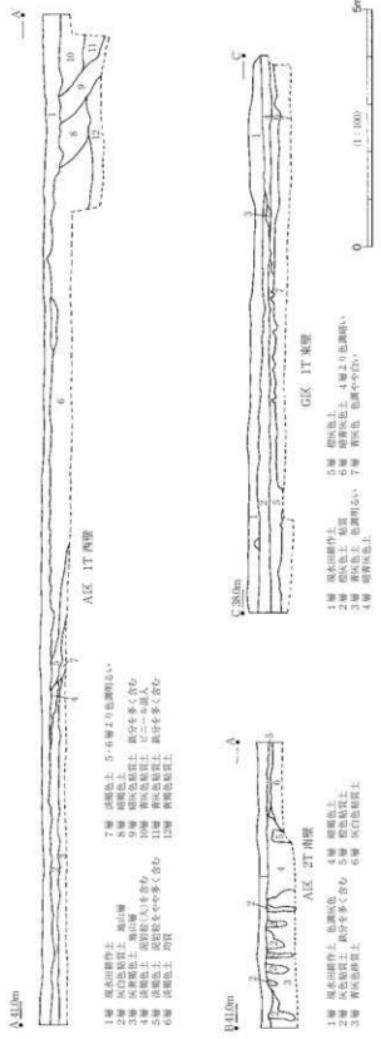
第58図 遺跡の位置と周辺の遺跡(1:25,000)



第59図 確認調査トレンチ配置図



第60図 北区上層確認トレーン土層断面図



第61図 南区上層確認トレチ土層断面図

在する。

遺構の確認は、宝永四年(1707)富士山の噴火火山灰(黒色スコリア粒)を鍵層(以降、宝永火山灰層とする)として検出し、それより下層で遺構が検出された部分を拡張し、遺構確認、精査、記録、遺物取上、写真撮影を実施した。

谷底平野にあたる平成16年度調査区北区については、木田確認面より下層に確認グリッドを設定した。第1トレチ北端、第2トレチ南端、第3トレチ北端、第4トレチ北端、第5トレチ北端、同南端、第6トレチ北端、同南端の6か所に確認グリッドを設定し、土層の確認ならびに遺物の包含の有無の確認を実施した。(第60~63図)

第2節 遺跡の位置と環境

田宿川間遺跡が所在する千葉県長生郡長南町は、標高約50m~100mほどの低い丘陵地帯から、一宮川の支流、三途川・埴生川・鶴枝川が東に向けて流れ、幅数百mほどの谷底平野を形成している。長生地域は、調査例が少ない地域であるが、近年調査例が増えてきており、丘陵上だけではなく、丘陵裾部でも遺跡がみつかっている。各時代の様相を簡単に述べる。(第58図)

旧石器時代は、ローム層の堆積面が乏しく、現況で遺跡は発見されていない。今後の調査如何にかかっている。

縄文時代は、早期より遺跡の所在が確認されている。埴生川上流の野見金遺跡で早期から中期の土器が出土している。埴生川下流の能満寺裏遺跡で中期から後期の集落が検出されている。

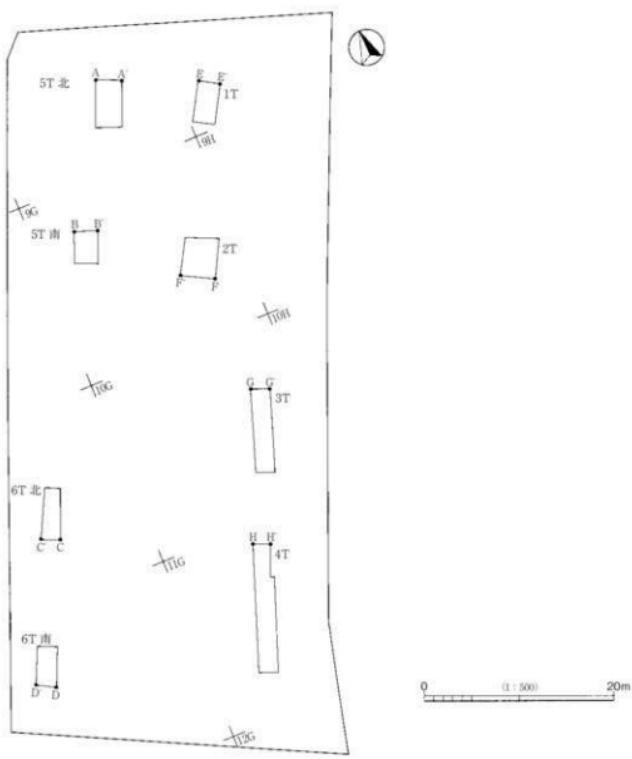
弥生時代は、三途川下流の著名な宮ノ台遺跡があげられる。能満寺裏遺跡で中期後半から後期の集落が検出されている。

古墳時代は、能満寺裏遺跡で前期~中期の集落が検出され、後期には古墳群が造営された。埴生川流域では、能満寺古墳群・油殿古墳群など首長墓と思われる古墳群が造営されている。鶴枝川下流の川島遺跡では、後期の堅穴住居跡が検出されている。また、当地域の特徴として横穴墓群が多数造営されている。三途川流域の米満横穴墓群、鶴枝川流域の法華谷横穴群、池谷横穴群、埴生川流域の地引横穴群などがあげられる。

奈良・平安時代は、鶴枝川下流の川島遺跡で集落が検出されている。この時代には、国家的規模で耕地の開発、農民の移住やその後の国衙、荘園領主の再開発などが行われており、台地上だけでなく、河岸段丘上、谷底平野微高地上など流域に多くの遺物が出土している。

中世、長南町の一部は鎌倉鶴岡八幡宮の社領であった。「続群書類從」卷第876「鶴岡事書案」に記録が残されており、埴生郡佐坪村、一野村の地名が記されている。「鶴岡事書案」に記されている岩名出氏、茗荷瀬、小蓋氏などは、現地名である岩撫、茗荷沢、小生田を名字にした在地領主と思われる。社領の経営は、八幡宮から任命された代官だけでは難しく、農民達との年貢・公事の減免をめぐる戦いに、在地領主が時に政所の一員として、領民支配の一端に連なったり、或いは、社領を蚕食する存在にもなることから、在地領主の協力がなければ難しいものと思われる。

次いで、室町から戦国時代は、長南氏、長南武田氏のことが嘴矢となろう。長南氏は14~15世紀の資料に断片的に確認されるが、「続群書類從」卷第870下 正長2年(1429)正月廿九日条「満済准后日記」に長南周防守または主計守なる人物が登場する。この時期は上総を離れて活動していたと思われ、北関東、東



第62図 北区下層確認グリッド配置図(1:500)

北に長南姓が多いことと関係するのであろう。長福寺(当時は長福寺)の慈恵大師坐像銘文(延徳二年二月十六日紀年)には「大旦那、・、長南次郎平常秀」なる人物が登場する。姓名からすると上総氏につながることは確実で、延徳2年(1490)までは上総氏系氏族と長南氏との関係は肯定されるであろう。

康正2年(1456)正月十九日武田信長が古河公方足利成氏の命を受け、上総守護職である上杉氏の所領である上総九郡を占領、真里谷城・長南城を築き、長孫信興を真里谷に、次孫道信を長南に置いたという。そうなると、上総系氏族の長南氏と系団等で迫る長南武田氏と併存することになり、その出自や系譜の整理に問題が生じる。

上総武田氏の系統のうち、真里谷武田氏は15世紀後半の文明年間(1469~1486)には真里谷を本拠とし、真里谷氏と称している。一方の長南武田氏も『古河市史資料中世編』642号「足利高基書状」に大永年間(1521~1527)長南三河守なる人物がおり、長南氏と称している。これは、武田氏が長南氏の名跡を継いだともとれるが、16世紀の初め頃には長南進出がなされているのであろう。

いずれにしても経緯を系統立てて、説明できる良好な資料が乏しい現状では、問題点を説明しえない。

戦国末期の永禄年間(1558~1569)以降は、資料も豊富で、長南武田氏の系譜も比較的たどりやすい。当主は豊信といい、五代長南武田氏兵部大輔信栄ともいう。周囲の列強(千葉小弓・原氏、小田原・北条氏、館山・里見氏、大多喜・正木氏)とあえて敵対せず、独自の外交を以て、戦国末期を生き抜いた。その範囲は房総の中央部、北は長柄から東は茂原・睦沢の一部、西は市原市南総地区におよんだが、最後は、天正18年(1590)七月豊臣秀吉の小田原攻めにより北条氏と運命を共にした。同年八月徳川家康が関東に入国し、譜代の家臣團四十氏が関東各地に封ぜられた。千葉県には、譜代大名では大多喜へ本多氏、成東へ石川氏、その他十三氏に所領を与えられ、旗本御家人では、茂原へ大久保氏、勝浦へ植村氏、五井へ松平氏、その他八氏に知行地を与えられた。

近世は、これら譜代大名、旗本御家人が各地に分散して領地を与えられ、特別な事情がなくても幕府の方針により、配置換え、知行替えが行われながら、当遺跡のある坂本村でも分郷支配が幕末まで続いていた。

参考資料

長南町『長南町史』長南町史編纂委員会、1973年。

『千葉県埋蔵文化財分布地図3』千葉県文化財センター、1999年。

小高春雄『長南町長南城跡』千葉県文化財センター調査報告第509集、2005年。

第3節 遺構と遺物

1 遺構

調査区内では、18年度調査区の南向きに開口した小支谷内から地山整形遺構が数面、16年度調査区北区から水田2面、畑1面、水路跡1条が検出された。北区6トレンチ内から畦畔および杭列が1条検出された。

平場1-01号跡（第64図、図版31）

平成18年度調査区の一番北側から検出した。南に開口した小支谷で北東から南西に緩く傾斜する。1K62グリッド付近に位置する。いわゆる「地山整形遺構」と称するもので、緩く傾斜していた地形を削平および盛土して、数段の平坦面を造り出している。

検出された平坦面は、北西側が南東側に比較して、40cm～50cmほど上位の面になり、北東から南西方向へ緩い傾斜がみられるが、平坦に造成している。南東側の下位面では、壁が直角に近く掘り込まれ、北西から南東方向へ緩い傾斜が見られるが、平坦面を削りだしている。床面よりやや浮いた状態で炭化物を検出した。出土状況から、他所で焼かれ、この場所に投棄したものと判断された。

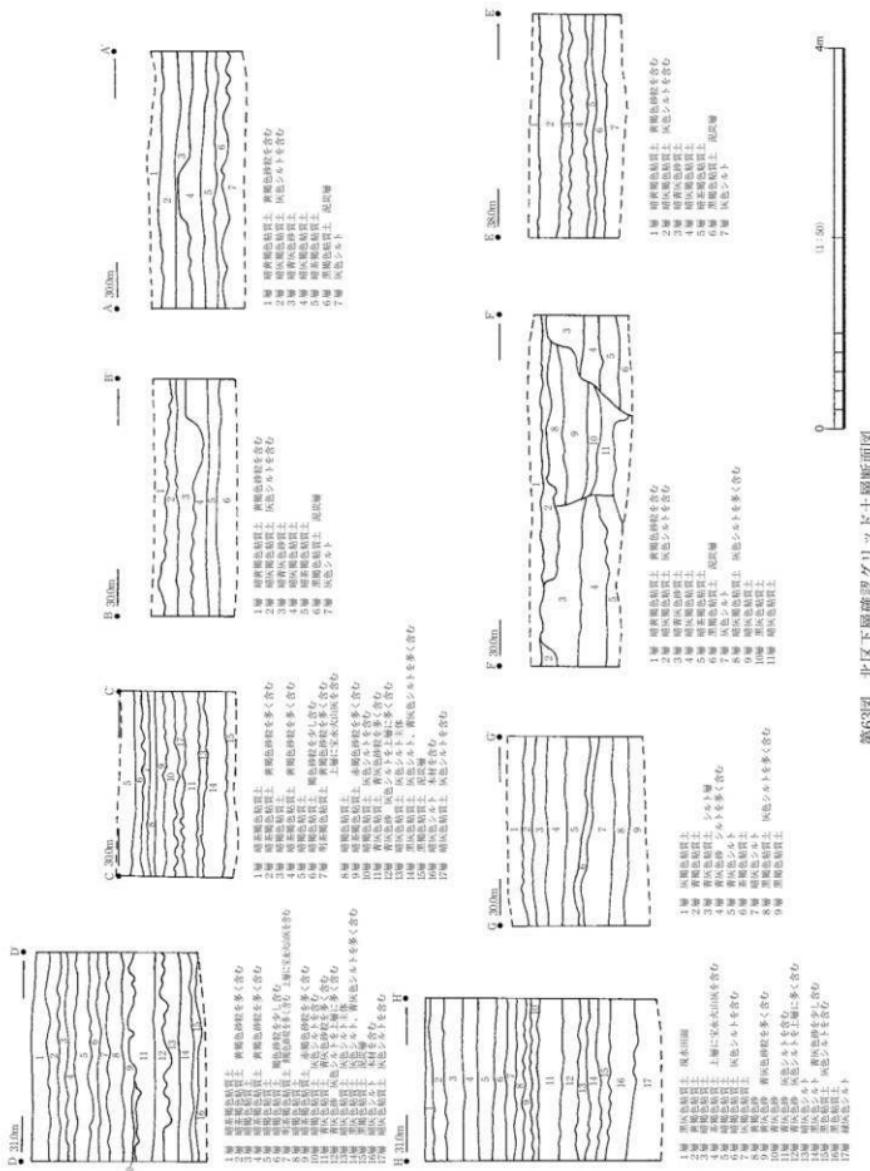
図示はしていないが、遺物として近世後半の青色花瓶が床面上で出土している。従って、近世後半には造成されたと思われる。

平場9-03号跡（第65図、図版31）

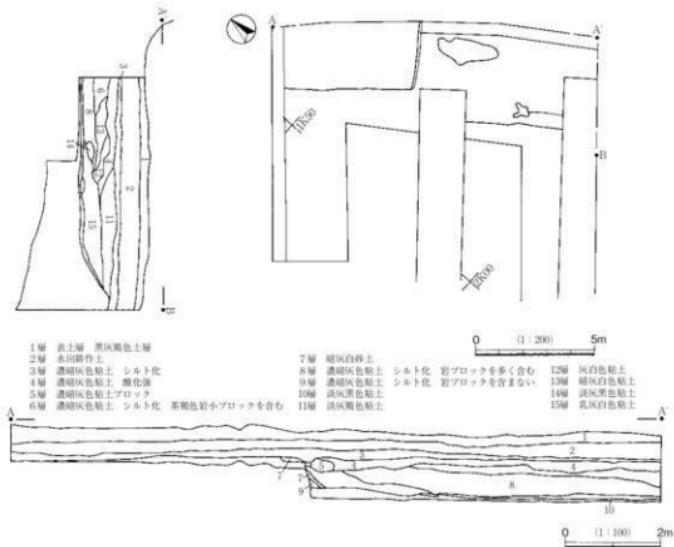
6155グリッド付近に位置する。平場1-01号跡から110mほど南西に位置する。いわゆる「地山整形遺構」と称するもので、北東から南西方向に緩く傾斜していた地形を削平して、数段の平坦面を造り出している。検出された平坦面は、北側が南側に比較して、6cm～16cmほど上位の面になり、北東から南西方向へ緩い傾斜が見られるが、平坦に造成している。南側の下位面では、壁が直角に近く掘り込まれ、北東から南西方向へ緩い傾斜が見られるが、平坦面を削りだしている。平坦面および壁面際では、柱穴が多数認められた。調査地区外に続くため、柱穴列の方向、数などが不明で、建物の構造は解明できなかった。柱穴の掘り込は、30cm～60cmを測り、柱穴の位置関係から数回の立て替えが想定される。壁面間に南北2間、東西1間の柱穴が確認されている。壁面の東側の平坦面にも、南北2間、東西1間の柱穴が確認されている。柱穴の向きはほぼ同一であるが調査時の所見が不明のため、前後関係および全体構造は不明。造成時期は、15世紀後半代の在地系の擂鉢などが出土している。従って、15世紀後半には造成されたと思われる。

平場10-01号跡（第65図）

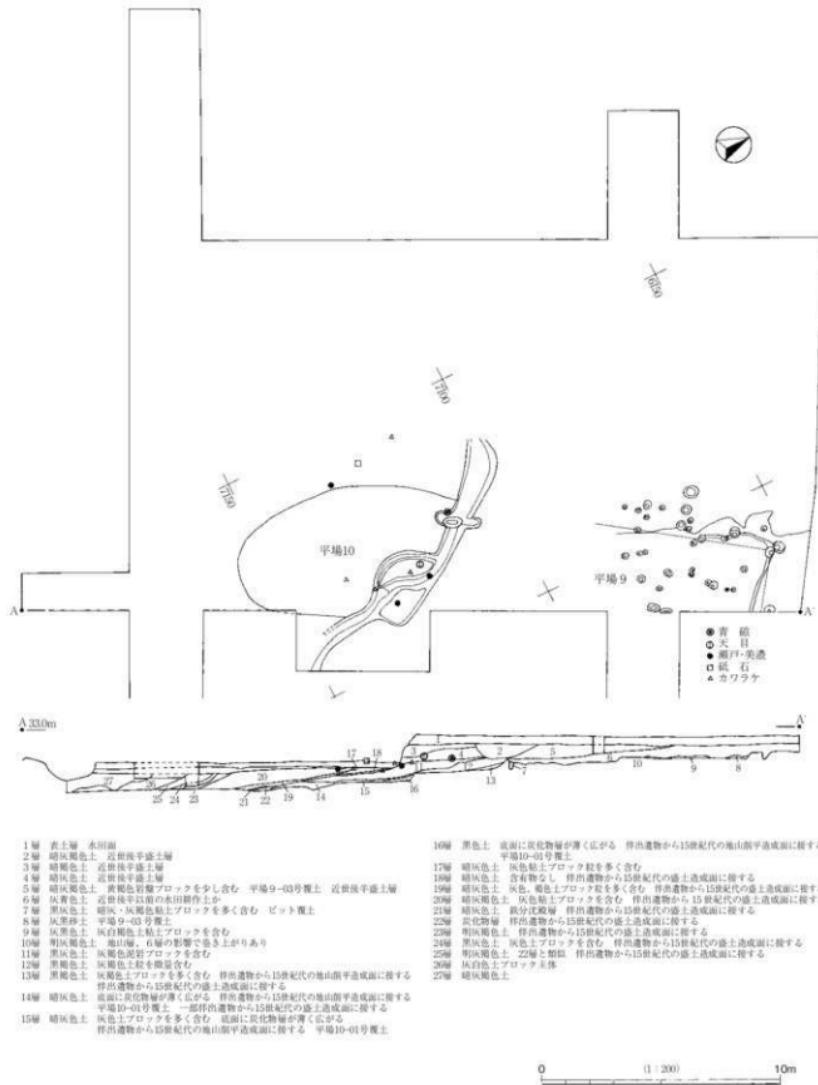
7112グリッド付近に位置する。平場9-03号跡から10mほど南西に位置し、現道路に面する地点に占地する。いわゆる「地山整形遺構」と称するもので、北東から南西方向に緩く傾斜していた地形を削平および一部盛土して、平坦面を造り出している。床面は、地山層の灰色砂層まで掘り込んだ後、その上に暗灰白色粘土を盛土している。床面は硬化し、床面上には、炭化材および灰層が検出された。灰層の広がる範囲の北東側に、北西から南東方向に浅い溝が検出され、幅80cm～120cm、深さ7cm～35cmを測る。この溝より北東側では、灰層は検出されていない。溝の北東側は南西側に比較して、20cmほど上位面となり、北東から南西方向へ緩い傾斜がみられるが平坦に造成している。



第63図 北区下層確認ゾリッド土層断面図



第64図 平場1 遺構平面図・土層断面図



第65図 平場9、10造構平面図・遺物土層断面図

遺物は、灰層が検出された床面上から16世紀後半の中国青花皿、17世紀前半の瀬戸・美濃志野小皿、14世紀後半の青磁、瀬戸・美濃天目碗などが出土している。従って、15世紀には造成されたと思われる。

北区拡張区第1面水田検出面（第66図）

確認調査時に1・2トレンチと5トレンチで水田畦畔が検出されたので、その間を拡張し、遺構を検出した。8G・9Gグリッドに位置し、宝永火山灰層を検出した水田面である。標高は29.90m～30.00mの間である。幅0.7m～1m位の畦畔をともなう。南北方向の畦畔は磁北に対して、30°東へ傾いている。水田の区画は南北に8m～10m、東西に3mほどの南北に長い短冊形となっている。

遺物は、散在的に煙管や寛永通寶、陶磁器が出土している。出土した寛永通寶は、ほとんどが1期古寛永であることから、1期古寛永初鋸年の寛永13年(1636)から宝永4年(1707)まで頃の水田と思われる。煙管も18世紀前半と思われる特徴を持つ雁首が出土している。

北区拡張区第2面畑検出面（第67図、図版29）

第1面から15cm～25cmほど下位で検出した。標高は29.75m前後である。幅30cm位の畠状の掘り込をともなう。水田面のように周囲に畦畔上の区画がないことと畠状の掘り込の間隔が狭く、平行に検出されたことなどから、畑と判断した。南北方向の畠は磁北に対して、31度東へ傾いている。畑の区画は、調査区北側は、南北に1.6m～1.8m、東西に8mほどの東西に長い短冊形となっている。調査区中央部～南側で、南北と東西に耕作の方向を変更したものか、畠の方向は直角に交わる。調査区中央部の畠は、先に東西方向、後に南北方向となる。東西方向は長さ8m～10m、幅1.2m～1.4mを測る。南北方向は長さ12m、幅1.2m～1.6mを測る。調査区南部の畠は、先に南北方向、後に東西方向となる。東西方向は長さ14m、畠の間隔は1.4m～1.5mを測る。南北方向は長さ10m、畠の間隔は0.9m～1.7mを測る。

遺物は、散在的に煙管や銭貨、陶磁器が出土している。出土した銭貨は、中国銭、1期古寛永、1枚のみ3期新寛永で、1期古寛永初鋸年の寛永13年(1636)から3期新寛永初鋸年の元禄10年(1697)をあまり下らない頃の水田と思われる。煙管も17世紀前半と思われる特徴を持つ雁首が2点出土している。

北区拡張区第3面水田検出面（第68図、図版29）

第1面から30cmほど下位で検出した。標高は29.70m前後である。幅50cm位の畦畔をともなう。南北方向の畦畔は磁北に対して、29°東へ傾いている。水田の区画は、南北に28m～30m、東西に4m～10mほどの南北に長い短冊形となっている。

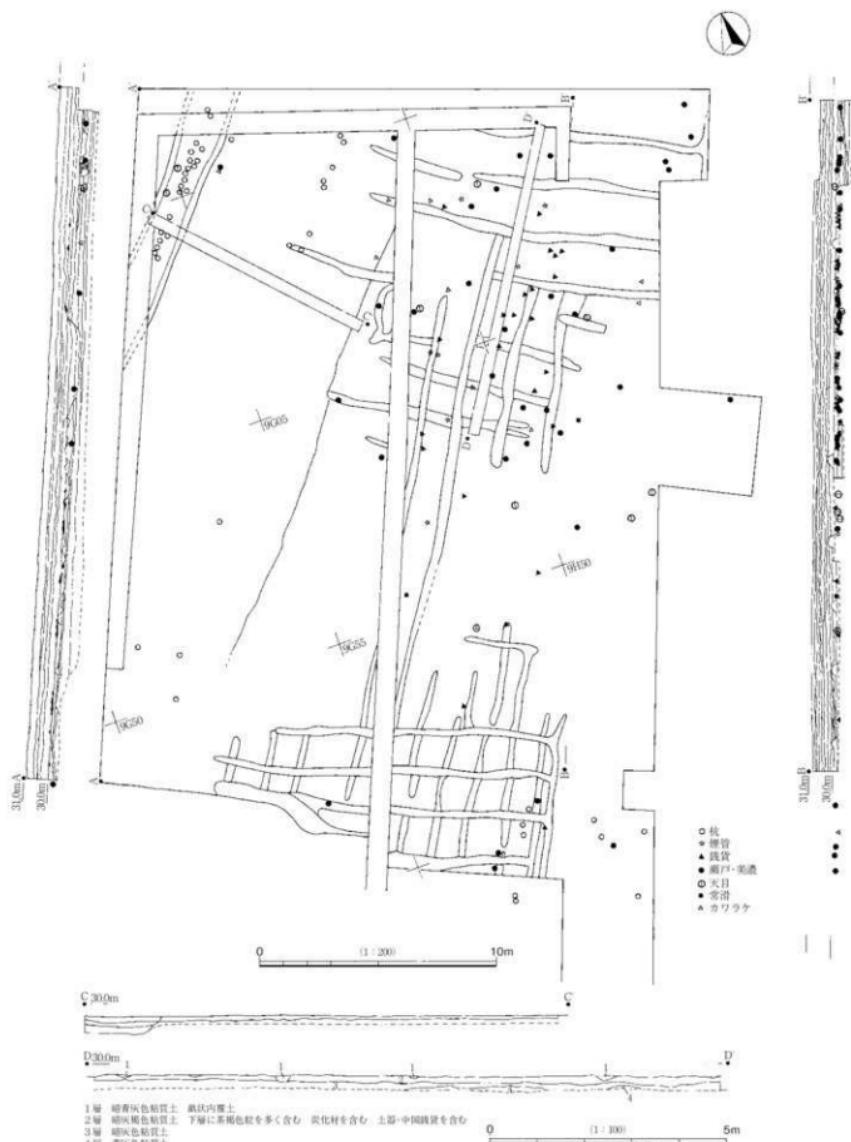
遺物は、散在的に銭貨、陶磁器が出土している。出土した銭貨は中国銭のみで、寛永13年(1636)に寛永通寶が鋳造される以前の頃の水田と思われる。

3トレンチ（第69図、第13表、図版28）

トレンチ内から、水田にともなう畦畔は確認されていない。遺物は散在的に銭貨、煙管、陶磁器類が出土している。出土レベルは30m前後でほとんど高低差がない。従って、洪水等により同一水田面に漂着したものと思われる。



第66図 北区擴張区第1面水田検出面平面・遺物出土層断層図



第67図 北区擴張区第2面烟検出面平面・遺物出土層断面図



第68図 北区擴張区第3面水田検出面平面・遺物出土層断面図

4 トレンチ（第69図、第13表、図版28）

トレンチ内から、水田にともなう畦畔は確認されていないが、幅2m、長さ12mほどの茶褐色砂を含む微高地の高まりが検出された。微高地の方向は、磁北に対して40°東に傾いている。遺物は散在的に陶磁器類が出土している。出土レベルは30m前後でほとんど高低差がない。従って、洪水等により同一水田面に漂着したものと思われる。

6 トレンチ（第69・89図、第13表、図版28）

トレンチ内中央付近より、畦畔、杭列が平行して検出された。方向は、磁北に対して60°西に傾いている。この畦畔を境に北側が南側と比較して、水田面の標高が20cmほど低い。また、この畦畔の北側にだけ、遺物は散在的に、錢貨、煙管、陶磁器類が出土している。錢貨は、中国銭3点、1期古寛永1点、2期新寛永1点、3期新寛永9点が出土しているが、出土レベルは30.00m～29.96mでほとんど高低差がない。従って、洪水等により同一水田面に漂着したものと思われる。297の元豊通寶は、29.88mとやや低い出土レベルである。

北区 S D01水路跡（第70図、図版30）

平成16年度調査区の北区8G45グリッド付近で検出された。調査区北西境界付近に位置し、北東側現道路境界から南北方向に検出した。長さ9m、幅1.7m～2m、深さ16cm～45cmを計る。断面は逆台形を呈し、床面はほぼ平坦で、北東から南北方向へ緩い傾斜が見られる。水田灌漑用水路と思われ、北西側壁面と平行して、杭列が2条検出された。これは畦畔補強のために打たれた杭列と思われる。この水路跡の方向は、検出された水田面および畑面と主軸方向が同一で、中世末以降近世まで水田区割りがほとんど変化がないことがうかがえる。土層断面の観察から、宝永火山灰層を切って検出された。従って、宝永4年(1707)以後18世紀前半には構築されたものであろう。

遺物は、覆土中より散在的に煙管や寛永通寶、陶磁器が出土している。

2 遺物

遺物は、須恵器・土師器から陶磁器、金属製品、石製品、鍛冶関係製品が出土している。遺構にともなわないものは、グリッド出土として取り上げている。

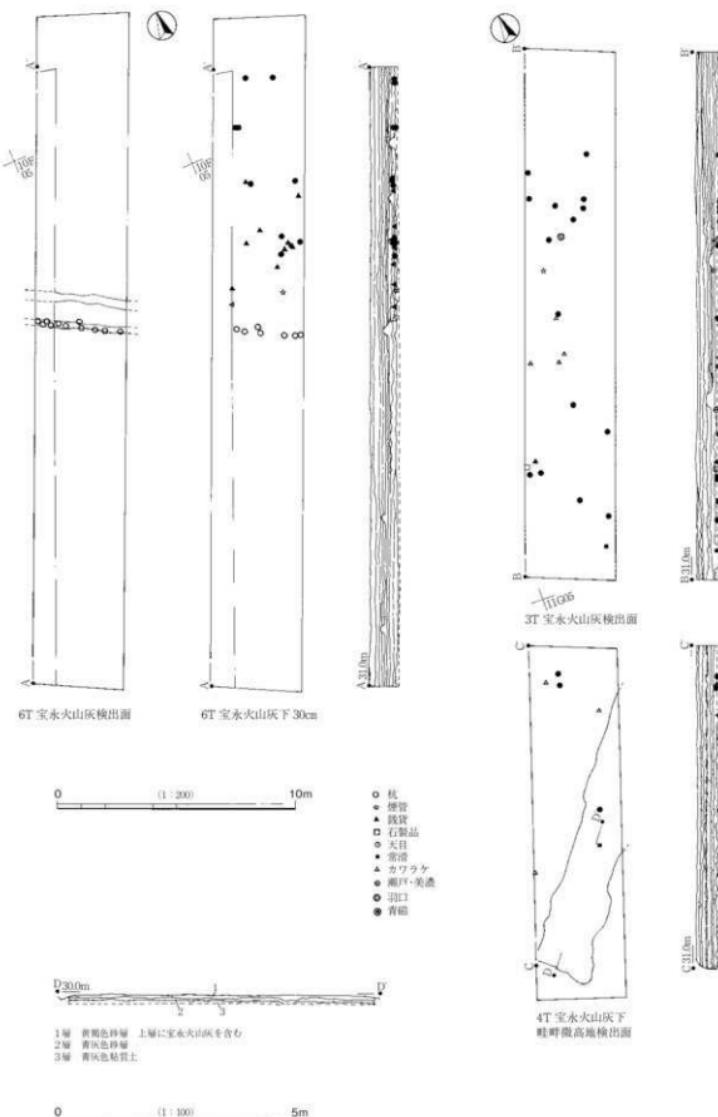
土器・陶磁器

(1)須恵器（第71図、第13表、図版32）

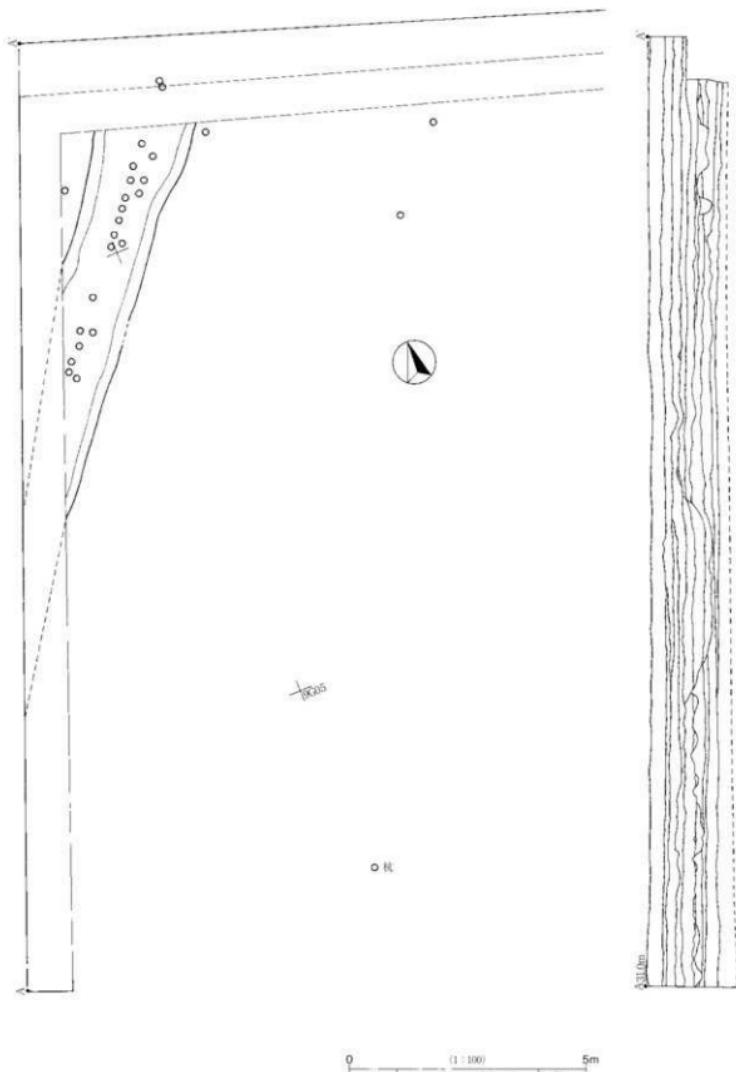
1は壺の胴部破片で外面にタタキ痕が認められる。2は壺の胴部である。外面に自然釉が認められる。3は壺底部である。4は皿である。5は長頸壺の頸部である。6は蓋である。体部のみで内外面にヘラナデ痕が認められる。159は壺の胴部である。

(2)土師器（第71図、第13表、図版32）

8は皿である。10～15は环である。9は底部外面回転糸切り調整なし、体部はやや外反して立ち上がる。口径12cm、底径7cm、器高2.3cmを測る。体部内外を丁寧にナデ調整している。10は内面黒色処理が認め



第69図 北区3・4・6トレンチ宝永火山灰層検出平面図・遺物出土層断面図



第70图 北区SD01水路迹平面图·土层断面图

られる。10世紀頃の所産であろう。11は体部がやや外反して立ち上がり、輪轂目が残る。14は底部外面へラケズリ調整、体部はやや外反して立ち上がり、輪轂目が残る。口径15.8cm、底径8cm、器高4.7cmを測る。

(3)貿易陶磁（第71・72図、第14表、図版33）

22は青磁蓮弁文碗で、14世紀のものである。46は青花皿である。内面に花樹文、外面に唐草文が描かれている。16世紀後半の所産であろう。

(4)肥前（第71図、第13表、図版32）

16は腰から下が丸くなる香炉である。17は碗である。体部外面に輪轂目が残る。18・19は香炉で、18は筒形になる。体部のみ遺存する。19は体部のみ遺存する。20は腰から下が丸なるものである。21・23は碗である。

(5)瀬戸・美濃（第71～75図、第14表、図版32～35）

団化したものだけでも132点で、内訳は擂鉢17点、皿類86点、碗類19点、香炉6点、その他4点となる。24は擂鉢である。27は蓋である。灰釉が全面に施釉される。28は碗である。高台部が一部遺存する。24・29～32・34～41・43・44・49・175は擂鉢である。内外面に鉄釉を施釉する。30は底部外面に回転糸切り痕が認められる。47は皿で内外面に灰釉を施す。48は碗である。42は壺の胴部である。外面に鉄釉を施す。49～51・175は擂鉢である。49は底面内面の擂り目がかなり磨滅している。

52・53・55・56は筒形の香炉である。鉄錆釉を施す。54は筒形の碗である。内外面に鉄釉を施す。57～65は天目茶碗である。57は茶褐色の鉄錆釉を内外面に施す。腰部外面および底部には釉薬を施さない。58は黒褐色の鉄釉を内外面に施釉する。59は黒褐色の鉄釉を内外面に施釉する。口縁部はやや外反して立ち上がる。

73・154は香炉である。底部外面に三足が付き、口唇部は肥厚し、体部は直立気味に立ち上がる。77は小皿である。78・79は皿である。80は折縁小皿である。81は大皿である。82は鉢皿である。内面に格子状の鉢目を施す。83は楕円盞である。84は菊皿である。74・85・88・89は輪禪皿である。86は香炉である。87～158は皿もしくは丸皿である。100は内面に鉄錆釉により鉄絵が施される。162は折縁皿である。163～172は碗あるいは皿である。

(6)常滑（第79図、第13表、図版35）

遺跡全体で13点出土している。71・184は片口鉢で、176～183・185～188は壺の胴部破片である。外面に自然釉がかかる。

(7)土器

カワラケ（第71・80・81図、第13表、図版36）

9・190～240はカワラケである。196・197・202・208は粘土柱より輪轂整形にて引き出す。底部は厚く、回転糸切り離し、調整なし。212は粘土柱より輪轂整形にて引き出す。体部はやや内彎して立ち上がる。226は輪轂整形、体部は外反して開く。

擂鉢（第72・74図、第14表、図版33）

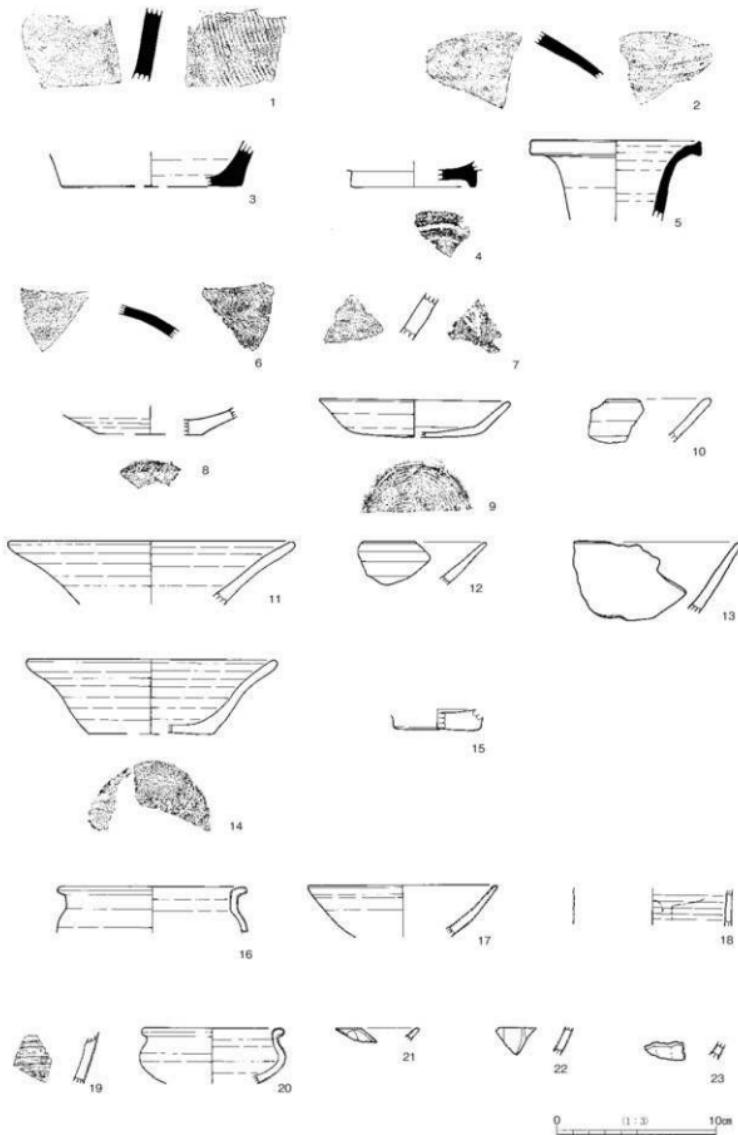
33・66・67の3点出土しており、いずれも15～16世紀の在地系擂鉢である。

瓦質火鉢（第82図、第14表、図版36）

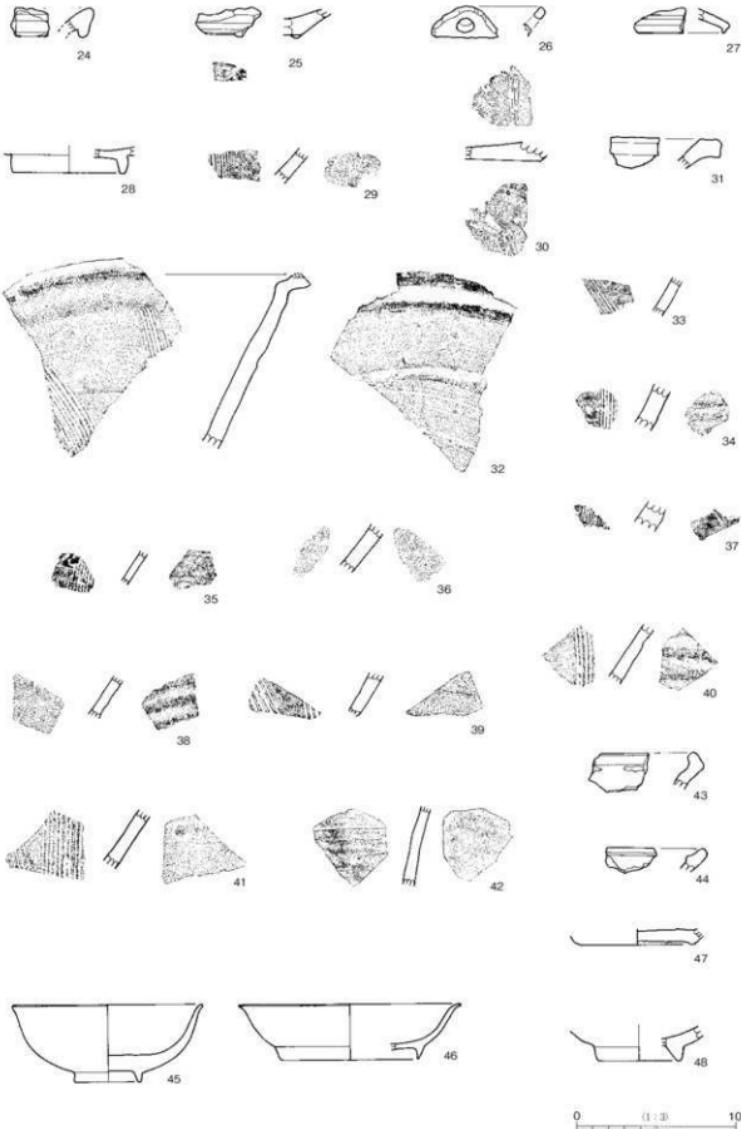
241は、瓦質火鉢である。瓦質で暗灰色を呈する。口径に比べ、器高の低いタイプで、平面形が円形を呈する。粘土板を底面として、これに粘土紐を積み上げて、体部を形造っている。底部外面に三足と呼ばれる突起を貼り付け、床面が熱を受けないように工夫されている。体部外面中央に二条の沈線をめぐらせ、内部に繩文を充填している。体部はやや外反しながら立ち上がり、口縁部で直立する。

焰烙（第82図、第13表、図版37）

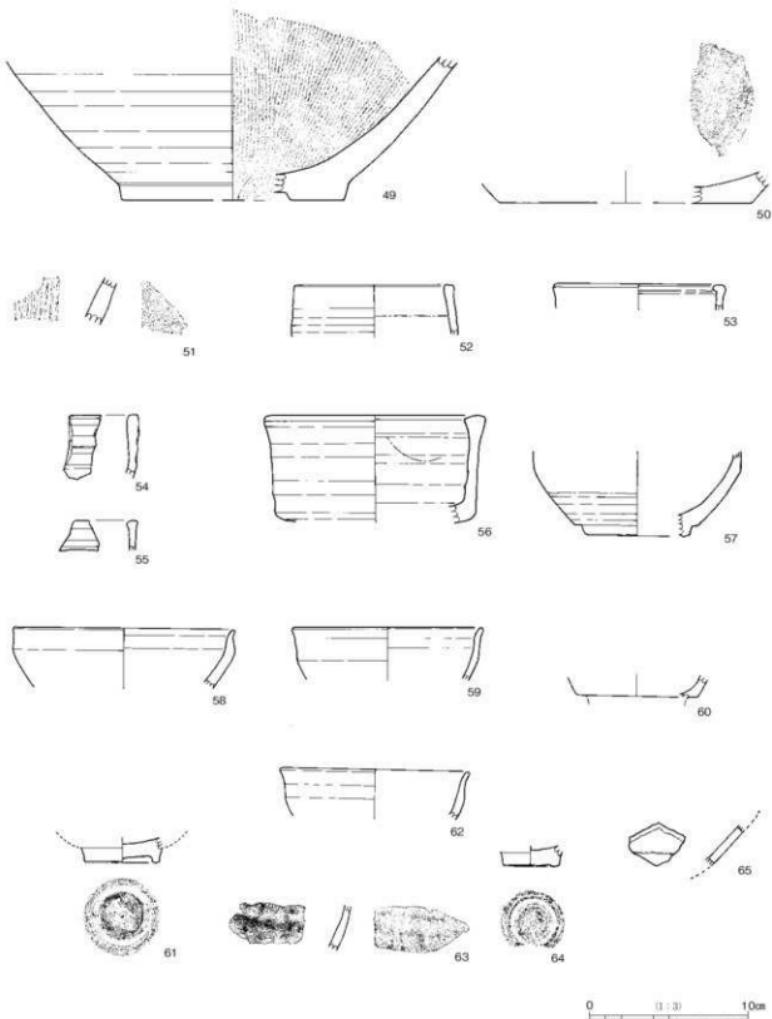
242～250・252・253は焰烙である。242は体部が外反しながら立ち上がる。244～246は体部が外反しながら立ち上がる。器高が低いタイプである。247は口唇部が平らに削ぎ落とされる。248は体部が外反して立ち上がり、器高は3.2cmと低いタイプである。器厚が厚い。250・252は、内耳土器である。250は器厚が薄く、口縁部は内彎しながら直立する。内耳は1個のみ遺存する。252は器厚が厚く、口縁部はやや外反しながら立ち上がる。内耳は1個のみ遺存する。口径は14.2cmと小さい。



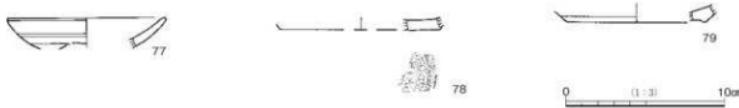
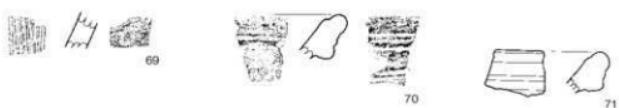
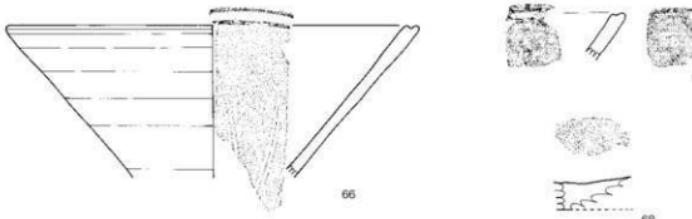
第71図 出土遺物(1)



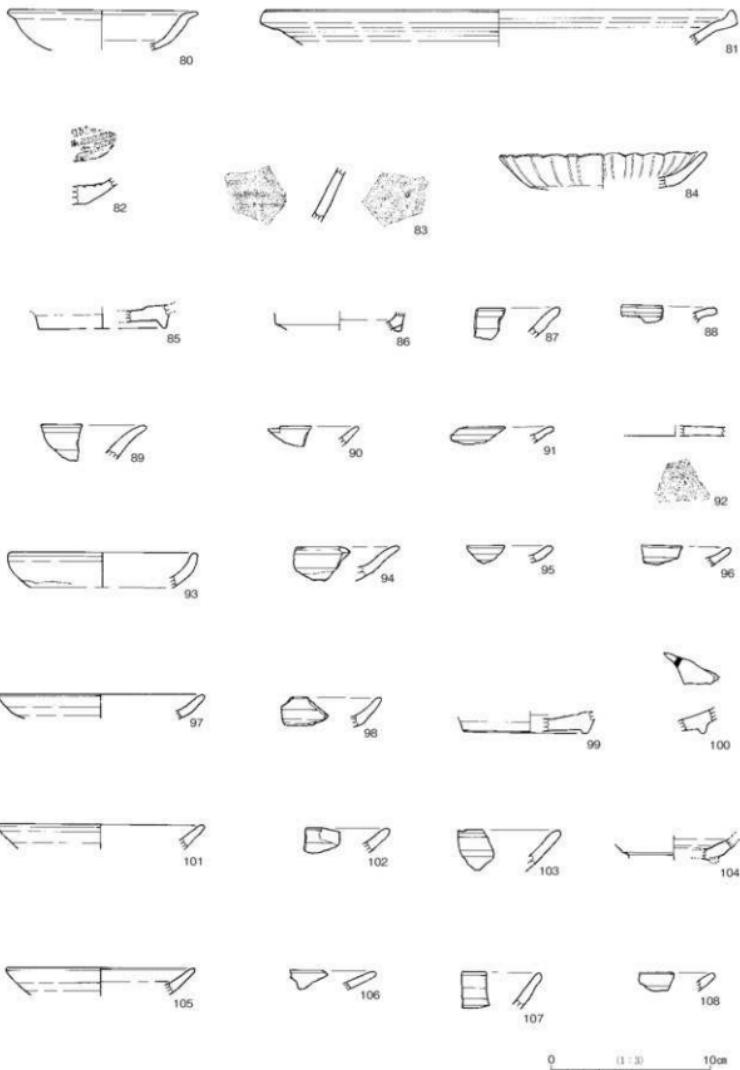
第72図 出土遺物(2)



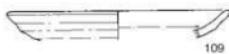
第73図 出土遺物(3)



第74図 出土遺物(4)



第75図 出土遺物(5)



109



110



111



112



113



114



115



116



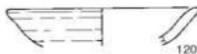
117



118



119



120



121



122



123



124



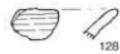
125



126



127



128



129



130



131



132



133



134



135

0 (1 : 3) 10mm

第76図 出土遺物(6)



136



137



138



139



140



141



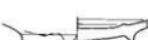
142



143



144



145



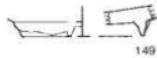
146



147



148



149



150



151



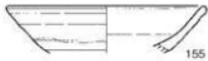
152



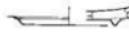
153



154



155



156



157



158



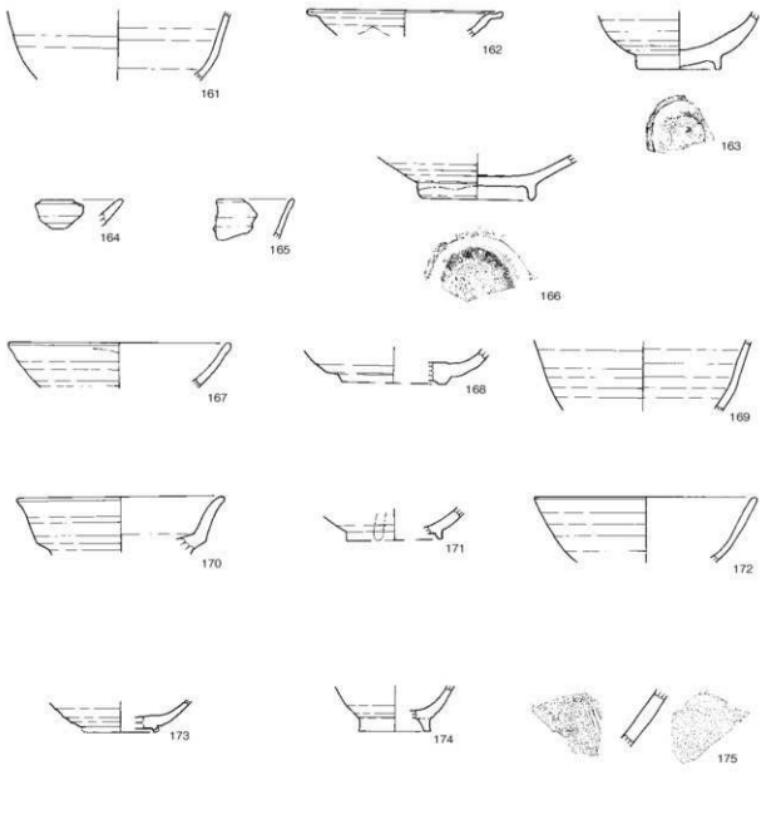
159



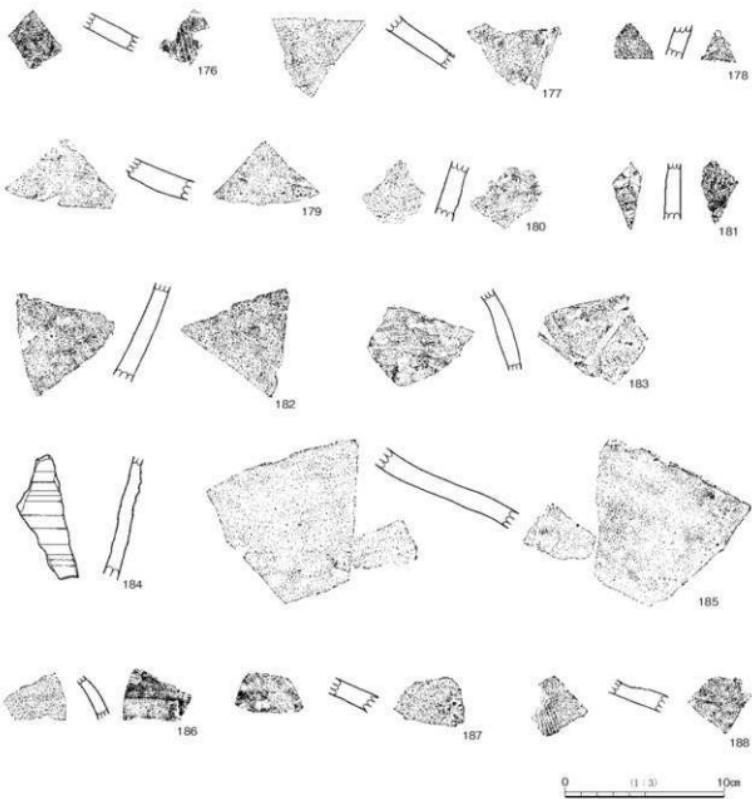
160



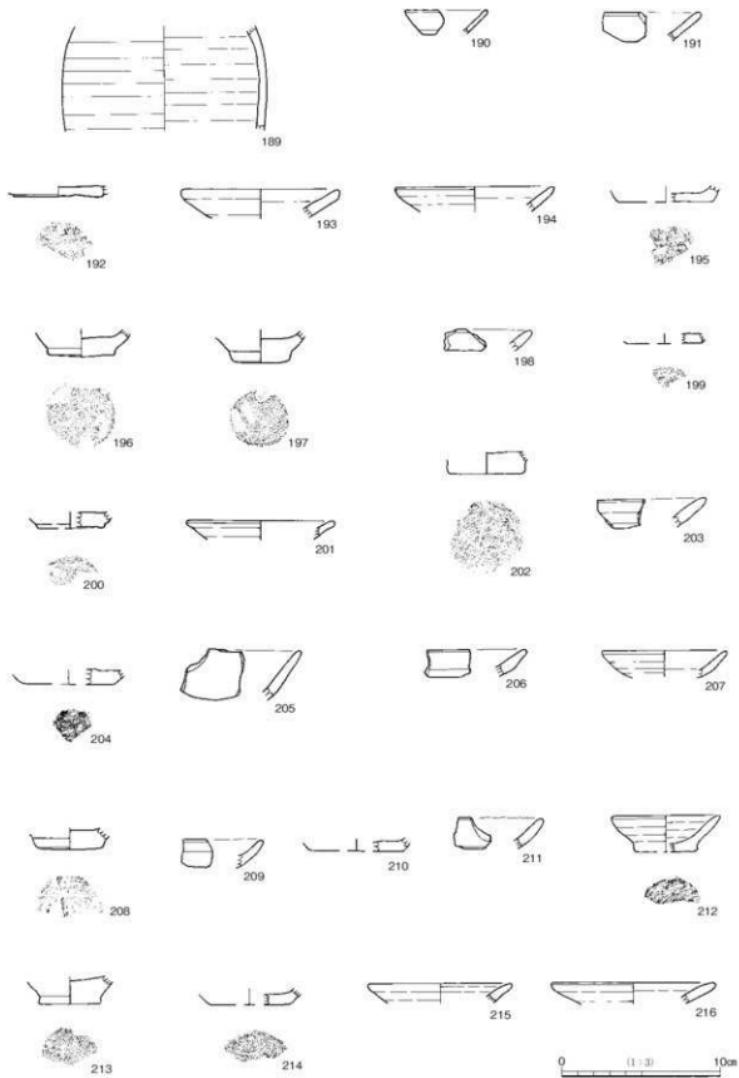
第77図 出土遺物(7)



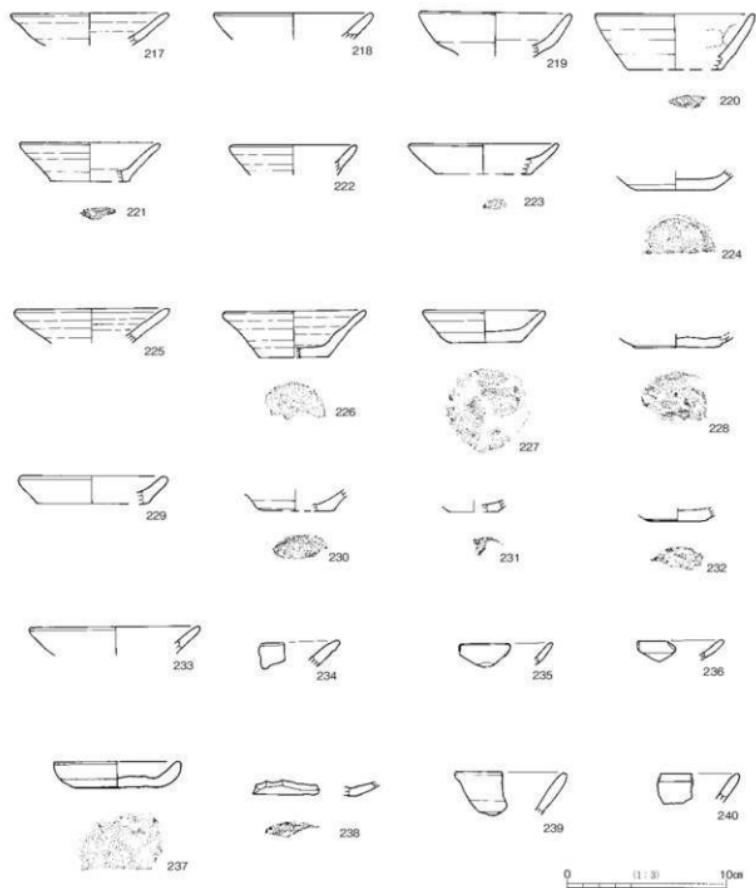
第78図 出土遺物(8)



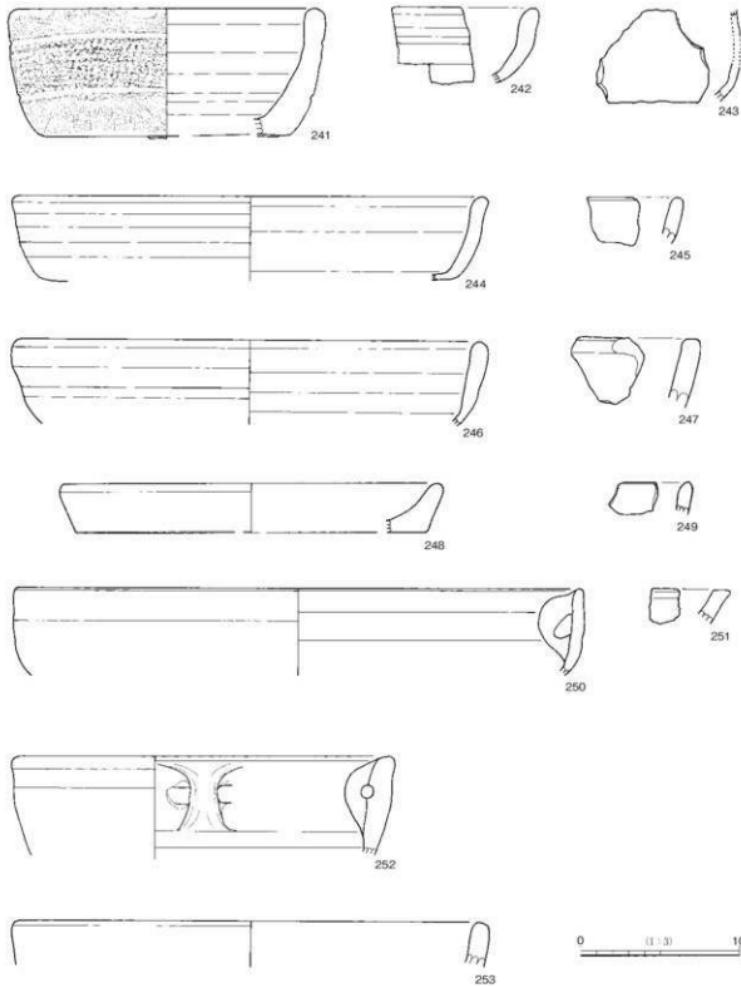
第79図 出土遺物(9)



第80図 出土遺物(10)



第81図 出土遺物(11)



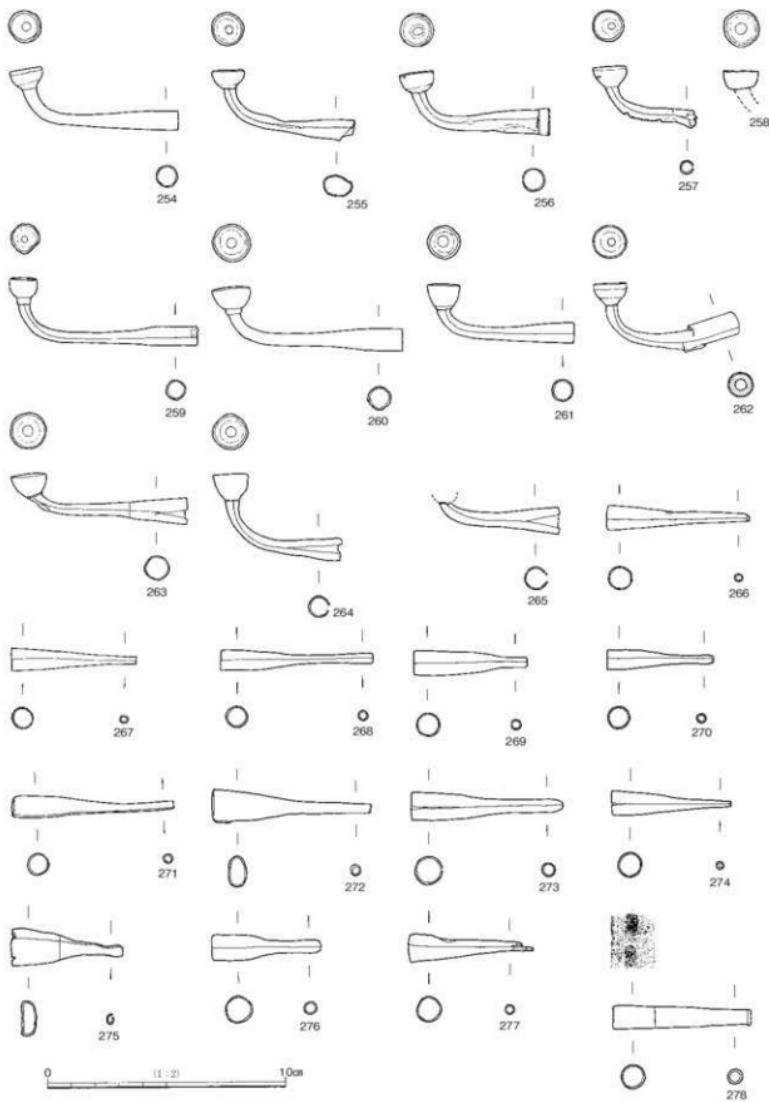
第82図 出土遺物12

第13表 田宿川開置路の土器観察表

河川名	流域	地名	遺物	発生年	層位	遺存状況	%	経年	外因	内因	遺物特徴	層位	土	地質	外因	内因	遺物	層位	地質
利根川	利根川	No.																	
1	30	利根川-001	1 田宿	土器	土器	-	-	-	110	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
2	40	利根川-001	2 田宿	土器	土器	-	-	-	44	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
3	17	利根川-001	111 田宿	土器	土器	15	-	-	114	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
4	20	利根川-001	122 田宿	土器	土器	20	-	-	28	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
5	30	利根川-007	78 田宿	土器	土器	15	-	-	78	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
6	92	S001	4 田宿	土器	土器	-	-	-	140	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
7	27	利根川-017	89 田宿	竹口鉢	土器	15	-	-	14	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
8	194	S044	2 田宿	土器	土器	15	-	-	14	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
9	120	S028	2 田宿	土器	土器	15	-	-	14	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
10	159	S003	2 田宿	土器	土器	15	-	-	14	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
11	34	110	2 田宿	土器	土器	15	-	-	14	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
12	70	110	2 田宿	土器	土器	15	-	-	14	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
13	242	S001	1 田宿	土器	土器	15	-	-	142	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
14	35	110-001	1 上田宿	土器	土器	25	(158)	(80)	147	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
15	25	110-001	6 上田宿	土器	土器	25	(158)	(80)	147	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
16	34	110	1 土器	土器	土器	15	-	-	140	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
17	125	9005	5 土器	土器	土器	15	-	-	125	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
18	211	2517	57 土器	土器	土器	15	-	-	121	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
19	256	2517	1 土器	土器	土器	15	-	-	121	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
20	28	110-001	2 田宿	土器	土器	15	-	-	125	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
21	121	9288	2 田宿	土器	土器	15	-	-	125	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
22	63	110-001	5 田宿	土器	土器	15	-	-	120	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
23	84	8377	96 田宿	土器	土器	-	-	-	14	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
24	30	9286	2 田宿	土器	土器	-	-	-	148	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
25	20	2517	6 沖縄	土器	土器	5	-	-	148	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
26	258	110-001	1 田宿	土器	土器	-	-	-	139	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
27	35	110-001	1 田宿	土器	土器	15	-	-	140	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
28	248	2517-15	1 田宿	土器	土器	15	-	-	145	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
29	161	10206	5 土器	土器	土器	-	-	-	147	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
30	166	S029	3 田宿	土器	土器	15	-	-	122	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
31	166	S007	3 田宿	土器	土器	15	-	-	145	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
32	36	S001	7 田宿	土器	土器	15	-	-	110	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
33	233	2517	58 田宿	土器	土器	-	-	-	14	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
34	136	9007	2 田宿	土器	土器	-	-	-	147	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
35	227	2517-15	1 田宿	土器	土器	-	-	-	147	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
36	169	110-001	87 田宿	土器	土器	-	-	-	147	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川
37	244	2517-15	1 田宿	土器	土器	-	-	-	147	ナガリ	ヘチマ	土	少	風化	利根川底	利根川底	利根川土器	利根川土器	利根川

地名	流域	河段	流速 km/h	流量 m ³ /s	落差 m	植被	底质	外流	内流	地质	流入物	渠化	外流		内流		特征	特征 (单位)	
													百分比	cm	百分比	cm			
38	229	红江T	2	0.51~1.0	冲积	冲积	-	-	-	+	+	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
39	241	龙江T	48	0.51~1.0	冲积	冲积	-	-	-	+	+	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
40	171	龙江T	29	0.51~1.0	冲积	冲积	-	-	-	+	+	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
41	红江T	1	0.51~1.0	冲积	冲积	冲积	-	-	-	+	+	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
42	111	020	1	0.51~1.0	冲积	冲积	-	-	-	+	+	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
43	30	红江T	94	0.51~1.0	冲积	冲积	-	-	-	+	+	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
44	301	红江T	86	0.51~1.0	冲积	冲积	-	-	-	+	+	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
45	30	红江T	1	0.51~1.0	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	+	+	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
46	229	HJD-001	10	0.98	冲积	冲积	1310	13	[142]	140	140	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
47	240	红江T	11	0.51~1.0	冲积	冲积	-	-	-	+	+	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
48	231	0209	8	0.51~1.0	冲积	冲积	13	13	[52]	121	121	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
49	36	14-001	1	0.51~1.0	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	+	+	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
50	6	10	3	0.51~1.0	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	+	+	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
51	7	10	1	0.51~1.0	冲积	冲积	-	-	-	+	+	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
52	249	红江T	25	0.51~1.0	冲积	冲积	1310	15	[100]	—	[32]	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
53	248	红江T	78	0.51~1.0	冲积	冲积	13	13	[160]	—	[161]	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
54	308	红江T	37	0.51~1.0	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	+	+	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
55	108	0206	1	0.51~1.0	冲积	冲积	13	13	[360]	1261	1261	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
56	104	0210	2	0.51~1.0	冲积	冲积	-	-	-	+	+	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
57	104	0208	8	0.51~1.0	冲积	冲积	1310	15	[140]	1000	[63]	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
58	104	0208	1	0.51~1.0	冲积	冲积	1310	15	[140]	1200	[63]	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
59	35	HB-100	7	0.51~1.0	冲积	冲积	13	13	[120]	—	[32]	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
60	225	红江T	32	0.51~1.0	冲积	冲积	-	-	-	+	+	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
61	106	0239	7	0.51~1.0	冲积	冲积	100	—	48	145	145	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
62	106	红江T	21	0.51~1.0	冲积	冲积	1310	15	[140]	—	[32]	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带
63	112	红江T	13	0.51~1.0	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	—	—	少	良好	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带	冲积带

編號	地點	地質	岩種	風化度	風化率%	風化：cm (風化帶/風化後)	外 壓	風化帶	風化外因	風化率%	侵入物	色		風化：	時間：	時間：			
												外	內	風化：					
134	25 25.377	16 級	風化帶	風化帶	15	120 (120)	風化	1.9	120 (120)	風化	1.9	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±10%	20±10%		
135	25 25.477	18 級	風化帶	風化帶	—	—	—	—	—	—	—	B4	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%		
136	25 25.477	1 千石	風化帶	風化帶	—	—	—	—	—	—	—	B4	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	—	—		
137	25 25.477	1 色	風化帶	風化帶	20	—	(66)	120 (120)	風化	1.7	120 (120)	風化	1.7	A5	褐色，褐色	褐色，褐色	褐色	—	—
138	25 25.677	93 級	風化帶	風化帶	10	—	—	(21)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%		
139	25 25.677	25 級	風化帶	風化帶	10	—	—	(18)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%		
140	25 25.677	63 級	風化帶	風化帶	15	96 (96)	—	(17)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%		
141	25 25.677	99 級	風化帶	風化帶	15	98 (98)	—	(15)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%		
142	25 25.677	1 色	風化帶	風化帶	20	—	(66)	(66) (66)	風化	1.7	(20)	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%			
143	25 25.677	1 色	風化帶	風化帶	10	—	—	(21)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%		
144	89 25.7	1 色	風化帶	風化帶	—	—	—	(16)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	—	—		
145	100 86.620	3 級	風化帶	風化帶	—	—	—	(17)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%		
146	129 86.729	1 色	風化帶	風化帶	—	—	(20)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%			
147	234 86.729	2 級	風化帶	風化帶	25	—	(66)	(12)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%		
148	311 81.810	10 級	風化帶	風化帶	25	—	(67)	(20)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%		
149	212 25.7	65 級	風化帶	風化帶	20	—	(78)	(19)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	—	—		
150	210 25.7	47 級	風化帶	風化帶	25	—	(20)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%			
151	212 25.7	18 級	風化帶	風化帶	25	—	(68)	(12)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%		
152	226 25.7	3 1千石	風化帶	風化帶	25	—	—	(21)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	—	—		
153	166 25.737	69 級	風化帶	風化帶	25	—	(78)	(21)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%		
154	128 25.737	111 級	風化帶	風化帶	15	—	(62)	110 (110)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	—	—			
155	129 25.737	4 色	風化帶	風化帶	10	120 (120)	(68)	(12)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%		
156	222 25.737	1 色	風化帶	風化帶	25	—	(68)	(12)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%		
157	225 25.737	1 色	風化帶	風化帶	15	—	(12)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%			
158	226 25.737	1 色	風化帶	風化帶	5	—	—	(12)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	—	—		
159	69 110	2 級	風化帶	風化帶	—	—	—	—	—	—	—	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	—	—		
160	67 110	2 級	風化帶	風化帶	—	—	—	—	—	—	—	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	—	—		
161	229 25.737	1 色	風化帶	風化帶	—	—	—	—	—	—	—	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	—	—		
162	172 25.737	4 色	風化帶	風化帶	15	120 (120)	—	(16)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%		
163	163 86.9	5 級	風化帶	風化帶	25	—	(52)	(36)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%		
164	213 86.91	6 級	風化帶	風化帶	10	—	—	(16)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%		
165	212 86.99	5 級	風化帶	風化帶	—	—	—	(25)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	20±6%	20±6%		
166	206 5.503	1 色	風化帶	風化帶	36	—	(68)	(29)	120 (120)	風化	1.7	B5	褐色，黃褐色	褐色，黃褐色	褐色	—	—		

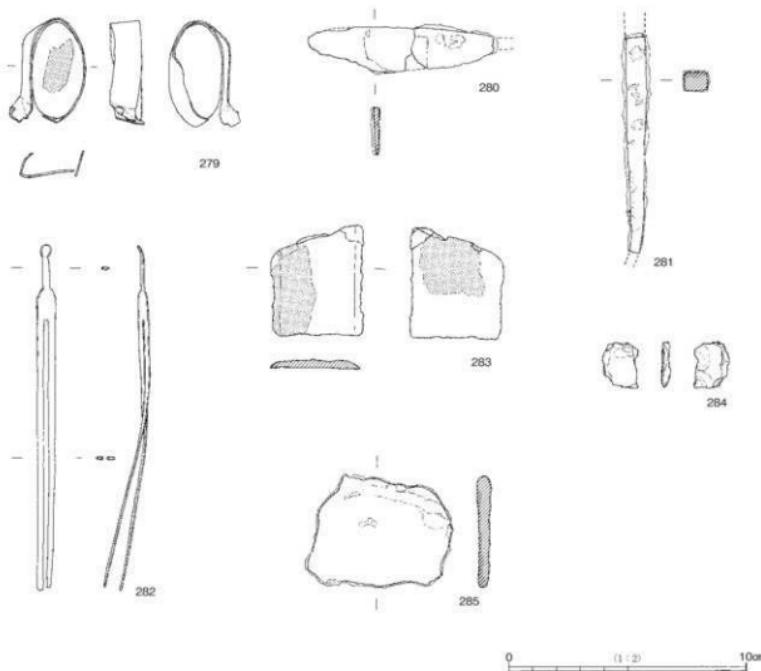


第83図 出土金属製品(1)

金属製品

煙管 (第83図、第14表、図版38)

254~265は、煙管の雁首である。266~278は、煙管の吸口である。256は、羅字との接合部に肩と呼ばれる段差が付く。258は、煙管の雁首であるが、鍤付けがとれて火皿だけである。259・260は、火皿部に火皿窓と呼ばれる口径1.5mmほどの小さな穴が開く。場所は、火皿部底面と口縁部との中间で、吸口方向に位置する。また、火皿部と脂返しと呼ばれる首部との接合部に補強帯が着く。262は雁首と吸口をつなぐ羅字が一部遺存する。263・275は、肩部が意匠的に残る。278は、肩部に彫金による装飾が施される。



第84図 出土金属製品(2)

第14表 田宿川開遺跡の金属製品

編 號 No.	実 測 N _{o.}	遺 物 名 グリット名	遺 物 N _{o.}	製 品 名	法 量 (cm)			法 量 (cm)			特 記 事 項			時 代・時 期等	出 土 レ ベ ル (標高 m)	
					長 さ	火 薙 口 径	薙 子 底	11 径	吸 口 径	重 量 (g)	特 記 事 項					
254	17	北区	1T	4	鍔管	71	14	10	-	5.97					近世ISC前葉	29.840
255	19	北区	1T	34	鍔背	[60]	14	-	-	4.03					近世ISC前葉	29.848
256	22	北区	1T	53	鍔背	63	15	11	-	6.27					近世ISC前葉	29.734
257	23	北区	5T	8	鍔背	[44]	14	-	-	2.53					近世ISC前葉	30.055
258	1	南区	S901	5	鍔背	火皿	-	16	-	-	1.77	火皿のみ			近世	36.870
259	4	北区	8297	2	鍔背	鍔背	8.0	12	0.8	-	5.9	火皿意・火皿鍔背有り			近世ISC前葉	29.747
260	5	北区	8298	3	鍔背	鍔背	8.0	16	0.9	-	5.19	火皿意・火皿鍔背有り、8286-5と対			近世ISC前葉	29.836
261	11	北区	8150	1	鍔背	鍔背	6.2	14	0.9	-	6.35				近世ISC前葉	29.909
262	25	北区	81572	1	鍔背	鍔背	[60]	13	-	-	5.19	羅字の一部が遺存する			近世ISC前葉	29.767
263	7	北区	92929	6	鍔背	鍔背	[74]	15	-	-	5.37				近世ISC前葉	29.787
264	8	北区	9418	3	鍔背	鍔背	[54]	14	-	-	5.61				近世ISC前葉	29.780
265	18	北区	1T	10	鍔背	鍔背	[50]	-	-	-	3.41	火皿欠失			近世	30.024
266	20	北区	1T	48	鍔背	吸口	6.1	-	1.0	0.3	2.51				近世	29.733
267	21	北区	1T	51	鍔背	吸口	5.3	-	1.1	0.3	1.8				近世	29.773
268	15	北区	3T	14	鍔背	吸口	6.4	-	1.0	0.4	4.5				近世	30.009
269	24	北区	5T	12	鍔背	吸口	4.8	-	1.0	0.5	4.04				近世	30.055
270	16	北区	6T	40	鍔背	吸口	4.5	-	0.8	0.4	2.27				近世	29.940
271	2	北区	8269	2	鍔背	吸口	6.9	-	0.9	0.4	3.66				近世	29.807
272	3	北区	8288	1	鍔背	吸口	6.7	-	-	0.4	3.28				近世	29.790
273	6	北区	8268	5	鍔背	吸口	6.4	-	-	0.5	4.72	8296-3と対			近世ISC前葉	29.868
274	13	北区	8181	3	鍔背	吸口	5.1	-	-	0.3	1.72				近世	29.805
275	12	北区	8170	1	鍔背	吸口	[47]	-	-	-	2.03				近世	29.778
276	9	北区	9427	4	鍔背	吸口	4.6	-	1.1	0.6	3.79				近世	29.615
277	10	北区	92925	13	鍔背	吸口	[53]	-	-	-	2.44				近世	29.824
278	14	南区	J-1T-46	1	鍔背	吸口	5.8	-	1.0	0.6	3.79	-15			近世	-15
遺 物 N _{o.}	実 測 N _{o.}	遺 物 名 グリット名	遺 物 N _{o.}	製 品 名	法 量 (cm)			法 量 (cm)			特 記 事 項			時 代	出 土 レ ベ ル (標高 m)	
					長 さ	幅	厚み	長 さ	幅	厚み	特 記 事 項					
279	31	北区	1T	69	刀架具	刀子	4.4	2.6	1.1	8.19	新良金貝、外側の一部に切妻仕				近世	29.781
280	32	北区	8171	8	刀架具	刀子	[80]	[20]	0.4	10.2	柳葉文々々				近世	29.698
281	27	北区	9230	2	鍔製品	茎	[9.3]	1.2	0.9	28.38	方頭文々々				近世後半	30.498
282	26	北区	9230	1	鍔製品	茎	14.5	0.8	0.1	6.43	鍔製品				近世後半	30.496
283	30	北区	3T-46	1	鍔製品	小丸	[46]	[3.8]	0.3	11.65	一柄、表面に半歩が付着				近世	-15
284	29	北区	9277	7	鍔製品	鍔板	[20]	[0.8]	[0.3]	2.62					近世	29.867
285	28	北区	北E-46	1	鍔製品	鍔板	[5.8]	[4.7]	[0.5]	38.25	-15				近世	-15

刀装具ほか（第84図、第14表、図版38）

279は、近世に盛行した打刀柄の刀装具である鎧(鞘尻金具)である。鞘から脱落し、金具のみ出土した。底面外面に赤漆が一部付着する。280は刀子で、柄を欠く。281は茎で刃部を欠く。断面が四角なので、鐵の一部かもしれない。出土レベルは30.5m付近で宝永火山灰層より高く、近世後半の所産であろう。簪とは同じ地点で出土した。283は小札状の鉄板である。裏表に赤漆が一部付着する。上下を欠損し、実測図右上側の破断面に1箇所穿孔痕が認められる。幅3.8cm、厚み0.3cmを測り、断面形状は左右端の同一面が片刃状に斜めになる。284・285は板状の鉄である。腐食が激しく原型および用途は不明である。

簪（第84図、第14表、図版38）

282は、耳搔きの付いた双足の簪である。出土レベルは30.5m付近で宝永火山灰層より高く、近世後半の所産であろう。

簪は笄が変化して、髪飾りに純化していく過程で現れたと言われている。享保年間(1716～1736)に高橋国南によって耳搔き付きの簪が発明されたとされ、当時の簪の特徴は、頭部に耳搔きが付き、髪に挿す部分が二股になっている。享保頃(1716～1736)より装飾的要素が強まり、びらびら簪をはじめ、様々な装飾要素や形態を持ったものに変化していく。材質も金属から木製、竹、角、鯨鬚、鼈甲など多岐にわたる。

銭貨（第85～87図、第15表、図版39・40）

286～312は渡来銭である。286～307は中国の北宋銭である。286は景德元寶、287は祥符通寶、288は天祐通寶、289～293は皇宋通寶、294は至和元寶、295は熙寧元寶、296～300は元豐通寶、301・302は元祐通寶、303は紹聖元寶、304・305は聖宋元寶、306は政和通寶、307は至道元寶である。308は洪武通寶、309～311は永樂通寶で中国の明銭である。312は光順通寶でベトナムの後黎銭である。

313～350は寛永通寶である。313～335は特徴として、「寛」の12・13画の頭が接する、「寶」の貝画末尾が「ス」となる。1期古寛永と分類した。336は特徴として、背面上部に「文」を鋳出し、いわゆる「文銭」と言われる。2期新寛永と分類した。337～350は特徴として、「寛」の12・13画の頭が接しない、「寶」の貝画末尾が「ハ」となる。3期新寛永と分類した。351は、「寶」一字のみ遺存するため、銭名は不明であるが、隸書体であることから渡来銭であろう。

石製品（第88～90図、第16表、図版41）

352～358は砥石である。凝灰岩製のものが多く、研ぎ減りしているものが多い。353は使用頻度が高く薄く摩耗している。裏面は未使用で出荷時の整形痕が残る。356は実測図上側に紐を通すための穿孔痕が認められる。359は安山岩製の茶臼の破片と思われる。18年度調査区平場9-01より出土した。

360～371は、燧石(火打ち石)である。打撃式発火方法で使用された石で、鋼鉄と石を打撃した際に、鋼鉄の表面が削れて火花が起り、その火花で発火させたものである。硬度7以上の堅さがあれば、どの石でも火花が起きる。当遺跡からは、16年度調査区北区から12点が出土している。白色の石英系の石材が2点、緑灰色、茶褐色のチャート系の石材が10点出土している。

江戸市中で出土する燧石の大半は、透明感の強い白色を基本とする石英質の石で、茨城県那珂郡山方町近郊から産出された「水戸火打ち石」である。火打ち石は鋭い稜角が摩耗し、稜部分に擦痕が無数に認めら

れるのが特徴で、石の稜がすべて摩耗し、全面が丸みを帯びると鋼鉄と打撃しても鋼鉄片を削り取ることができずに、火花が出なくなる。そうした場合、石を削って、鋭利な稜を持つ小剥片を再度作り出す。この小剥片は持ちやすければ最大長が2cm程度のものまで再利用されている。367・369は使用頻度が高く丸く摩耗している。

375は軽石である。梢円形に整形されている。376～378は碁石である。黒色で扁平で円形に近い。379・380は粘板岩で。薄く扁平状を呈し、表裏をよく研磨している。原型および用途は不明である。381は水晶製の丸玉である。径7.5mmほどで球形を呈し、2mmほどの大きさで穿孔する。数珠或いは根付けの一部か。

鑄造関連（第90図、第17表、図版41）

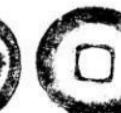
372は輪の羽口で先端部の一部である。炉内に差し込まれていた部分と思われ、飴状に溶けたスラグが付着する。北区3トレンチ内より出土した。373はスラグ（流出滓）で、飴状に溶け、表面にガスが抜けた円形のくぼみ状の痕跡がある。北区拡張区G49グリッドより出土した。374は坩堝である。内面に飴状に溶けたスラグが付着する。大きさは小さく、現存高2.8cm、器厚は0.5cmを測る。復原口径は10cmほどであろう。底径は小さく、胴部が軽く垂直に立ち上がる器形になると思われ、粘土紐を巻き上げて整形している。胎土は密で、細かい砂粒、赤色スコリア粒を含む。18年度調査区平場10より出土した。

参考文献

- 古泉 弘『江戸 都立一橋高校地点発掘調査報告』都立一橋高校遺跡調査団、1976年。
古泉 弘「江戸の町の出土遺物－その展望」『季刊考古学』13、雄山閣出版、1985年。
古泉 弘『江戸の考古学』（考古学ライブラリー48）ニューサイエンス社、1987年。
永井久美男『日本出土銭総覧 1996年版』兵庫埋蔵銭調査会、1996年。
小日置晴展「沙留遺跡出土の煙管」「沙留遺跡」沙留地区遺跡調査会、1996年。
長井光彦「沙留遺跡出土の簪・笄」「沙留遺跡」沙留地区遺跡調査会、1996年。
永井久美男『近世の出土銭II－分類図版篇－』兵庫埋蔵銭調査会、1998年。
松崎亜穂子『VI江戸の生活文化 3 衣文化 結髪用具』『図説江戸考古学研究辞典』柏書房、2001年。
小林 克『VI江戸の生活文化 4 調度・文具 発火具2 火打ち石』『図説江戸考古学研究辞典』、柏書房、2001年。
古泉 弘「VI江戸の生活文化 2 喫茶・飲酒・喫煙・喫煙1 煙草の伝来」『図説江戸考古学研究辞典』柏書房、2001年。
小川 望「VI江戸の生活文化 7 さまざまな道具 武器・武具2 槍・刀・刀装具」『図説江戸考古学研究辞典』柏書房、2001年。



286



287



288



289



290



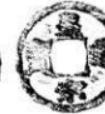
291



292



293



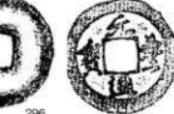
294



295



296



297



298



299



300



301



302



303



304



305



306



307



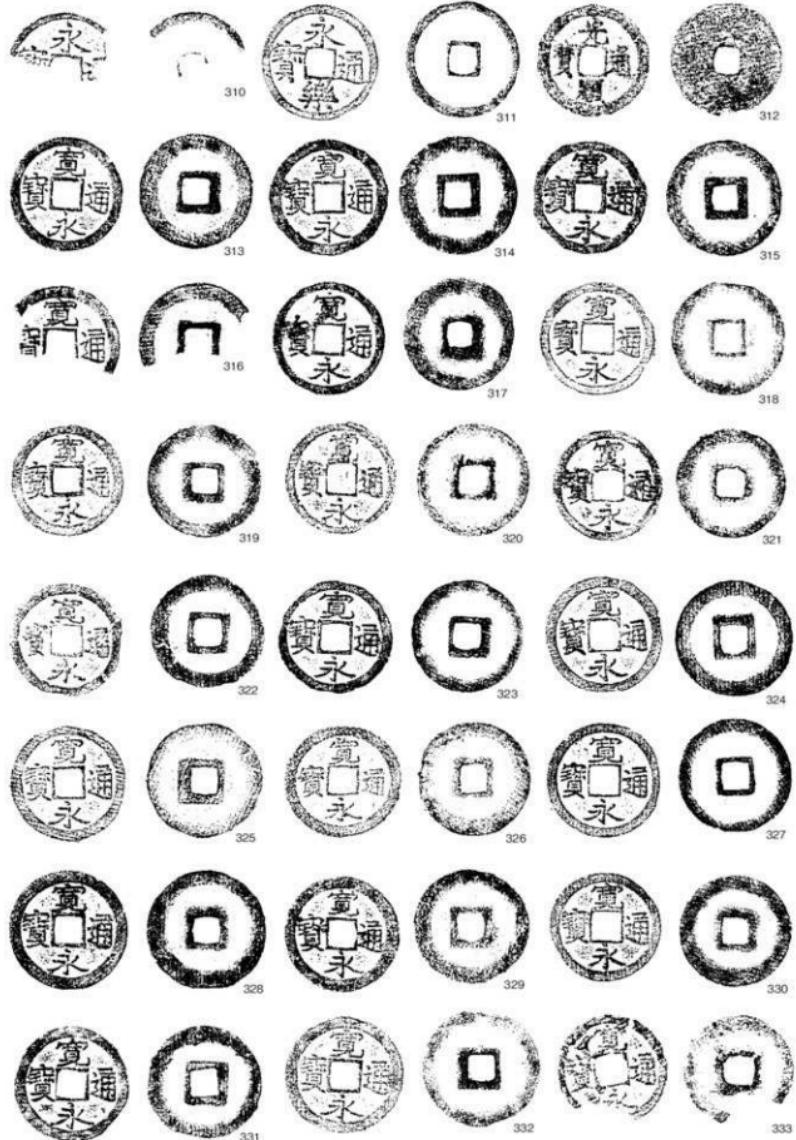
308



309

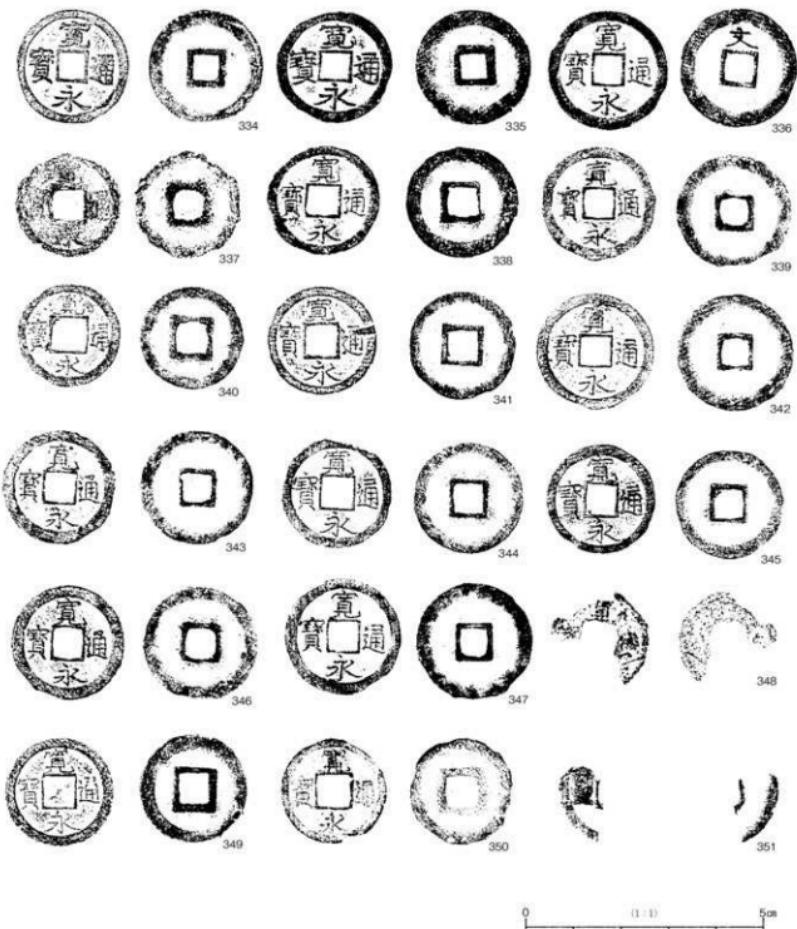
第85図 出土銭貨(1)





第86図 出土銭貨(2)





第87図 出土錢貨(3)

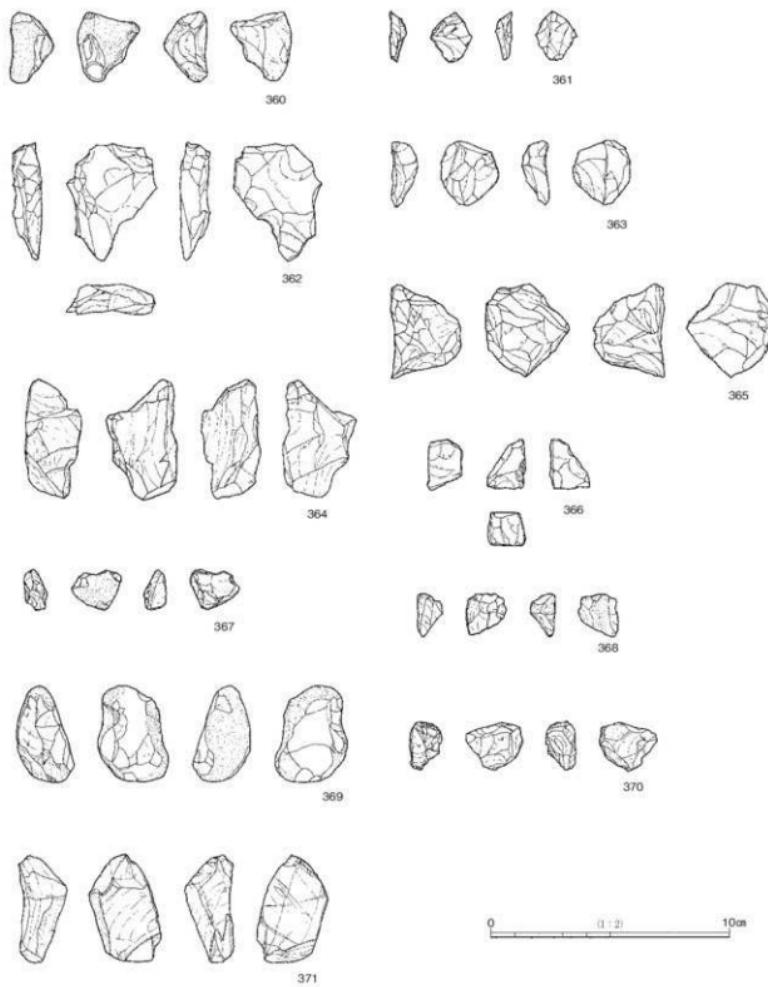
第15表 田宿川開選路の錢貨

番號 No.	地點 Loc.	通地名 Locality name	鑄造 年 Year	鑄造 所 Mint	書体 Font	文 Character	銘 Engraving	外輪徑(mm) Outer diameter (mm)	内輪徑(mm) Inner diameter (mm)	外輪厚 (mm) Outer rim thickness (mm)	内輪厚 (mm) Inner rim thickness (mm)	外輪重 (g) Outer rim weight (g)	内輪重 (g) Inner rim weight (g)	枚数 Number	備考 Remarks	出土上べき (出土所) (Locality)		
286 57	北 ¹⁴ K	T	39	笠原美智 Katori Mikuni	真書 True script	対 Matched	対 Matched	23.80	19.60	18.70	7.20	6.80	6.80	1.00	0.70	224	1009 北室	
287 59	北 ¹⁴ K	T	73	羽林美智 Ujinomi	真書 True script	対 Matched	対 Matched	24.60	19.10	19.10	7.20	6.80	6.80	1.00	0.70	234	1004 北室	
288 8	北 ¹⁴ K	T	11	天保美智 Tenpo Mikuni	真書 True script	対 Matched	対 Matched	23.80	19.60	19.60	7.20	6.80	6.80	1.00	0.70	226	1009 北室	
289 55	北 ¹⁴ K	T	26	弘化美智 Kōka Mikuni	真書 True script	対 Matched	対 Matched	24.60	20.00	20.40	8.30	8.50	7.10	1.00	0.70	259	1038 北室	
290 2	北 ¹⁴ K	G4688	1	弘化美智 Kōka Mikuni	真書 True script	対 Matched	対 Matched	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2643 金剛門 Kinkōmon	
291 6	北 ¹⁴ K	S8171	7	弘化美智 Kōka Mikuni	真書 True script	対 Matched	対 Matched	24.20	19.00	19.00	8.80	8.10	7.10	1.00	0.70	233	1038 北室	
292 28	北 ¹⁴ K	S4677	6	弘化美智 Kōka Mikuni	真書 True script	対 Matched	対 Matched	24.60	20.20	20.60	8.60	8.30	7.10	1.00	0.60	252	1038 北室	
293 33	北 ¹⁴ K	94112	1	弘化美智 Kōka Mikuni	真書 True script	対 Matched	対 Matched	23.80	23.80	15.80	21.10	8.50	9.00	7.20	7.20	1.00	0.60	213 北室
294 57	北 ¹⁴ K	617	2	弘化美智 Kōka Mikuni	真書 True script	対 Matched	対 Matched	25.60	19.90	18.00	7.20	6.80	6.80	1.00	0.70	204	1038 北室	
295 54	北 ¹⁴ K	-16	1	明治美智 Meiji Mikuni	真書 True script	対 Matched	対 Matched	24.60	22.70	17.40	17.60	7.00	7.10	6.30	6.30	1.30	0.68	1036 北室
296 50	北 ¹⁴ K	97	46	元治美智 Genji Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	24.70	24.70	18.60	20.00	8.60	8.30	7.10	7.20	1.30	0.60	340 1038 北室
297 13	北 ¹⁴ K	61190	6	元治美智 Genji Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	24.20	24.80	17.60	18.40	8.00	7.80	6.70	6.70	1.10	0.60	2078 北室
298 14	北 ¹⁴ K	61910	7	元治美智 Genji Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	24.00	24.00	18.50	18.50	8.00	8.10	7.10	7.10	1.10	0.60	2570 北室
299 17	北 ¹⁴ K	S8191	9	元治美智 Genji Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	24.80	24.00	15.90	15.90	8.70	8.40	7.50	7.10	0.70	269	1078 北室
300 31	北 ¹⁴ K	94100	5	元治美智 Genji Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	25.10	25.10	20.00	20.00	7.00	7.20	5.90	5.90	1.20	0.60	310 1038 北室
301 56	北 ¹⁴ K	1,T	52	元治美智 Genji Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	24.20	24.00	24.40	24.40	8.70	8.60	7.10	6.80	1.20	0.60	2577 1038 北室
302 36	北 ¹⁴ K	3,T	7	元治美智 Genji Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	23.60	23.60	16.50	16.50	7.50	8.00	6.60	6.60	1.20	0.60	1086 1038 北室
303 66	北 ¹⁴ K	91190	1	元治美智 Genji Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	23.70	23.70	—	14.10	—	—	6.30	—	1.30	0.60	1035 相模小菅 Sagami Kogane
304 9	北 ¹⁴ K	61181	4	弘化美智 Kōka Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	24.10	24.10	26.30	19.90	8.10	8.10	6.50	6.60	1.10	0.60	2344 1038 北室
305 29	北 ¹⁴ K	56577	8	弘化美智 Kōka Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	25.90	24.00	15.80	19.90	8.30	8.10	6.70	6.20	1.20	0.60	263 1161 北室
306 30	北 ¹⁴ K	9616	1	戊辰美智 Gozen Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	25.00	25.00	26.10	19.90	7.20	7.40	6.40	6.10	1.30	0.60	277 1111 北室
307 61	北 ¹⁴ K	2,T	17	戊辰美智 Gozen Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	24.50	24.50	19.00	19.00	7.00	6.80	6.10	6.10	1.20	0.70	2495 1038 北室
308 7	北 ¹⁴ K	S8171	9	戊辰美智 Gozen Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	23.10	23.20	19.20	19.20	7.10	7.00	5.70	5.80	1.30	1.00	2565 1038 北室
309 1	北 ¹⁴ K	56577	2	永治美智 Ei Hei Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	24.80	24.90	26.60	21.00	6.00	5.80	6.00	1.20	0.60	274 1488 北室	
310 3	北 ¹⁴ K	S8190	2	永治美智 Ei Hei Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	24.20	24.60	23.00	19.80	7.50	7.20	5.70	5.70	1.40	0.70	350 1038 北室
311 10	北 ¹⁴ K	61181	6	水谷美智 Shimoda Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	24.90	24.90	21.10	21.10	6.50	5.70	5.70	5.70	1.30	0.70	2576 1038 北室
312 36	北 ¹⁴ K	61181	8	光治美智 Kei Hei Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	24.10	19.70	18.60	6.00	7.00	5.80	6.00	1.20	0.70	2565 1038 北室	
313 60	北 ¹⁴ K	2,T	16	寛永美智 Kan'ei Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	24.20	24.30	19.80	19.80	7.20	7.30	5.80	6.00	1.00	0.60	2345 1038 北室
314 62	北 ¹⁴ K	2,T	21	寛永美智 Kan'ei Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	25.10	25.10	19.90	19.90	7.20	7.20	5.80	5.80	1.30	0.60	2565 1038 北室
315 63	北 ¹⁴ K	3,T	35	寛永美智 Kan'ei Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	24.20	24.20	18.50	18.50	7.20	7.20	5.70	5.70	1.40	0.70	2612 1038 北室
316 65	北 ¹⁴ K	2,T	30	寛永美智 Kan'ei Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3000 1038 北室	
317 49	北 ¹⁴ K	61181	71	寛永美智 Kan'ei Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	24.10	24.20	19.90	19.90	7.40	5.60	5.60	5.60	1.40	0.60	2576 1038 北室
318 4	北 ¹⁴ K	61190	2	寛永美智 Kan'ei Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	24.00	24.30	19.00	20.00	7.20	7.40	6.00	5.90	1.30	0.60	2572 1038 北室
319 5	北 ¹⁴ K	61190	2	寛永美智 Kan'ei Mikuni	行書 Cursive script	対 Matched	対 Matched	24.00	24.00	19.70	19.40	7.20	7.50	5.80	5.80	1.30	0.70	2572 1038 北室

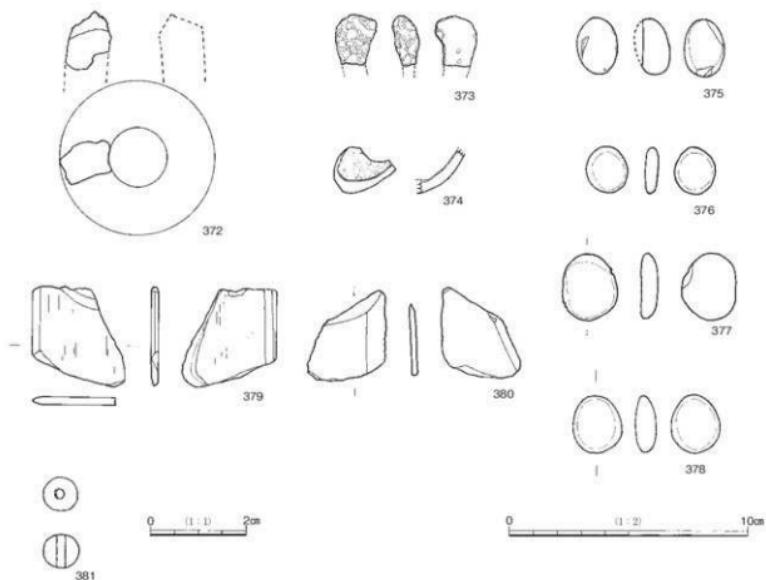
特征 项目	特征 项数 No.	产地名	植物 学名	植物 科名	特征 分组	特征 特征	外植体特征 (mm)			内植体特征 (mm)			外植体特征 (mm)		内植体特征 (mm)		外植体 特征年 (年)	内植体 特征年 (年)	备注		
							高 度 mm	宽 度 mm	厚 度 mm	长 度 mm	宽 度 mm	厚 度 mm	长 度 mm	宽 度 mm	厚 度 mm						
320	11	北川	AIB12	1	1	宽水管道	真柏	对枝	23.80	23.80	19.90	19.90	7.10	6.80	5.80	5.90	1.00	0.80	1.85	1.66	1期 古老水
321	18	北川	AIB19	10	2	宽水管道	真柏	对枝	23.40	23.40	19.90	19.90	7.00	7.40	6.00	5.80	1.00	0.80	2.33	1.66	1期 古老水
322	15	北川	AIB19	7	7	宽水管道	真柏	对枝	24.60	24.50	19.90	19.90	7.00	7.40	5.80	6.20	1.20	0.80	2.86	1.66	1期 古老水
323	19	北川	SG67	1	1	宽水管道	真柏	对枝	24.20	24.20	19.70	19.70	7.00	5.80	6.00	5.80	1.10	0.80	2.35	1.66	1期 内老水
324	21	北川	SG117	4	4	宽水管道	真柏	对枝	25.00	25.10	20.30	20.00	6.80	7.20	5.80	6.20	1.20	0.80	2.92	1.66	1期 古老水
325	22	北川	SG67	1	1	宽水管道	真柏	对枝	24.80	24.80	19.90	19.90	7.20	7.20	5.80	5.80	1.25	0.70	3.05	1.66	1期 古老水
326	21	北川	SG118	2	2	宽水管道	真柏	对枝	24.60	24.50	19.90	19.90	6.20	6.00	5.70	5.70	1.20	0.70	3.21	1.66	1期 古老水
327	21	北川	SGC28	4	4	宽水管道	真柏	对枝	24.20	24.30	19.90	19.90	6.00	6.00	5.90	5.90	1.40	0.70	3.35	1.66	1期 古老水
328	25	北川	SG49	7	7	宽水管道	真柏	对枝	25.30	25.40	19.50	19.50	7.20	7.60	5.70	5.80	1.20	0.70	3.11	1.66	1期 古老水
329	26	北川	SG358	9	9	宽水管道	真柏	对枝	25.50	25.40	19.20	19.20	6.80	7.20	5.80	5.80	1.10	0.60	2.95	1.66	1期 古老水
330	27	北川	SG76	13	13	宽水管道	真柏	对枝	25.90	25.90	19.10	19.60	7.00	7.40	6.10	6.10	1.20	0.70	2.98	1.66	1期 古老水
331	30	北川	SG410	3	3	宽水管道	真柏	对枝	24.70	24.60	16.70	19.80	7.20	7.50	5.80	5.80	1.25	0.80	3.22	1.66	1期 古老水
332	32	北川	SGH10	5	5	宽水管道	真柏	对枝	24.80	24.80	18.00	18.00	7.80	7.90	6.80	6.80	1.20	0.80	2.88	1.66	1期 古老水
333	24	北川	SG120	2	2	宽水管道	真柏	对枝	23.70	—	19.70	19.70	7.50	6.40	6.00	6.00	1.43	1.66	1期 古老水	29531	
334	35	北川	SGH42	1	1	宽水管道	真柏	对枝	24.40	24.30	20.10	20.10	7.30	7.00	5.60	5.60	1.20	0.80	3.00	1.66	1期 古老水
335	51	南川	SG101	12	12	宽水管道	真柏	对枝	24.10	24.00	16.80	20.10	7.00	7.20	5.80	6.00	1.20	0.80	3.28	1.66	1期 古老水
336	48	北川	SG7	36	36	宽水管道	真柏	对枝	25.30	25.30	20.40	20.40	7.20	7.40	6.30	6.00	1.10	0.80	2.82	1.66	2期 新老水 (下)
337	58	北川	SG17	72	72	宽水管道	真柏	对枝	22.30	22.30	17.10	18.30	8.00	8.20	6.40	6.20	1.20	0.80	2.15	1.66	3期 新老水
338	64	北川	SG7	37	37	宽水管道	真柏	对枝	22.80	22.70	17.10	19.30	7.80	7.90	6.00	6.00	1.20	0.80	2.23	1.66	3期 新老水
339	28	北川	SG17	16	1	宽水管道	真柏	对枝	24.40	24.30	17.00	19.90	7.10	7.10	6.20	6.20	1.20	0.70	2.72	1.66	1期 新老水
340	30	北川	SG7	18	2	宽水管道	真柏	对枝	22.10	22.10	18.10	18.10	8.40	8.40	6.80	7.00	1.10	0.70	2.28	1.66	3期 新老水
341	40	北川	SG7	18	3	宽水管道	真柏	对枝	22.70	22.70	19.10	19.10	8.20	8.30	6.80	7.10	1.00	0.70	1.97	1.66	3期 新老水
342	41	北川	SG7	23	23	宽水管道	真柏	对枝	25.00	25.00	20.00	20.00	7.20	7.30	5.90	5.90	1.30	0.70	3.14	1.66	3期 新老水
343	42	北川	SG7	24	24	宽水管道	真柏	对枝	23.20	23.30	17.10	19.20	7.20	7.50	6.50	6.20	1.10	0.80	2.84	1.66	3期 新老水
344	44	北川	SG7	34	1	宽水管道	真柏	对枝	23.50	23.60	17.00	19.30	7.40	7.00	6.00	6.00	1.10	0.70	2.91	1.66	3期 新老水
345	45	北川	SG7	34	2	宽水管道	真柏	对枝	22.30	23.30	17.00	18.70	7.40	7.20	6.20	6.20	1.10	0.80	2.48	1.66	3期 新老水
346	36	北川	SG7	41	1	宽水管道	真柏	对枝	24.30	24.30	17.10	18.70	7.40	7.20	6.40	6.40	1.10	0.80	2.54	1.66	3期 新老水
347	47	北川	SG7	41	2	宽水管道	真柏	对枝	25.00	25.00	17.00	19.10	7.20	7.40	6.20	6.20	1.30	0.80	3.40	1.66	3期 新老水
348	67	北川	AIB12	1	2	宽水管道	真柏	对枝	—	21.10	—	18.00	—	8.20	—	7.00	6.00	0.80	0.67	1.66	1期 新老水
349	72	北川	SG100	1	2	宽水管道	真柏	对枝	22.00	22.00	18.10	18.10	7.60	7.60	6.20	6.20	1.00	0.70	2.18	1.66	3期 新老水
350	66	北川	SG7	32	32	宽水管道	真柏	对枝	22.50	22.60	18.40	18.40	8.10	8.00	7.40	6.40	1.10	0.70	2.74	1.66	3期 新老水
351	43	北川	SG7	32	32	工业厂房	千叶	对枝	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
352	52	南川	J-27-46	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
353	53	南川	J-27-46	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	



第88図 出土石製品(1)



第89図 出土石製品(2)



第90図 出土石製品(3)・土製品・スラグ・軽石

第16表 田宿川開闢跡の石製品

補図 No.	実測 No.	通称名: グリッド名	遺物 No.	製品名	法量(cm) (復元値)	幅 厚み 孔径 (g)	重量(g) (現存値)	特記事項	時代・時期等	出土レベル (標高m)
352	94	H9	3	砥石	8.50	3.70	1.30	-	59.74	灰白色
353	99	H9-001	2	砥石	8.70	4.50	1.10	-	63.96	1面未使用、灰白色
354	93	H10-001	16	砥石	6.60	3.80	2.60	-	60.88	完形、明瞭灰色
355	96	北区 一括	1	砥石	4.50	4.00	1.80	-	38.74	灰白色
356	96	北区 一括	1	砥石	3.60	3.80	1.00	-	15.16	灰白色
357	97	H10-一括	1	砥石	4.10	2.70	3.00	-	53.18	灰色
358	98	北区 一括	1	砥石	6.90	4.00	2.50	-	87.82	灰白色
359	100	H9-001	1	茶臼岩	-	-	7.60	-	212.48	茶臼の一端、1.5cm黄色
360	265	北区 9056	1	鐵石	2.80	2.50	1.80	-	13.77	1.5cm黄色
361	266	北区 9056	1	鐵石	2.10	1.80	0.70	-	1.80	灰褐色
362	258	北区 1T	38	鐵石	5.00	3.60	1.20	-	21.44	明瞭褐色
363	262	北区 3T-一括	1	鐵石	2.70	2.40	1.00	-	6.61	ナリープ灰褐色
364	290	北区 3T-一括	1	鐵石	3.90	2.50	2.90	-	38.26	-
365	261	北区 3T-一括	1	鐵石	5.10	2.80	2.40	-	31.69	綠灰色
366	259	北区 3T	34	鐵石	2.10	1.50	1.40	-	5.62	灰白色
367	268	北区 4T	13	鐵石	1.70	1.80	1.00	-	3.49	-
368	267	北区 6T	57	鐵石	1.60	1.50	1.10	-	2.95	灰白色
369	264	北区 6T	6	鐵石	4.00	2.50	2.00	-	23.91	1.5cm黄色
370	263	北区 6T-一括	1	鐵石	1.90	2.30	1.20	-	6.76	明瞭褐色
371	299	H9-001	1	鐵石	4.50	2.60	1.90	-	27.04	綠灰色
375	122	北区 9057	1	不明	2.40	1.70	1.20	-	1.94	白色
376	121	北区 9057	4	鉢石	2.00	1.80	0.50	-	2.93	完形 黑色
377	229	北区 2T-一括	56	鉢石	2.80	2.30	0.70	-	7.05	-
378	240	北区 3T	1	不明	2.45	2.05	0.85	-	5.90	完形 黑色
379	85	北区 一括	1	不明	[4.20]	[3.90]	0.30	-	7.15	黑色、薄い板状
380	230	北区 2T-一括	1	不明	[3.80]	[3.30]	0.20	-	4.31	黑色、薄い板状
381	33	北区 9076	9	瓦玉	0.75	0.75	0.20	0.52	8.43	黑色
									29.888	

第17表 田宿川開闢跡の縫合關係製品

補図 No.	実測 No.	通称名: グリッド名	遺物 No.	製品名	法量(cm) (復元値)	幅 厚み 孔径 (g)	重量(g) (現存値)	特記事項	時代・時期等	出土レベル (標高m)
372	243	北区 3T	99	その他 縫合の羽口	[3.3]	-	3.1	-	6.23	口縫部前共縫合物付着、輪十番、焼成 良好、黒褐色
373	123	北区 9049	6	その他 スラブ	[2.1]	[1.8]	1.0	-	1.50	黒褐色
補図 No.	実測 No.	通称名: グリッド名	遺物No.	製品名	法量(cm) (復元値)	幅 厚み 孔径 (g)	重量(g) (現存値)	特記事項	時代	出土・レベル (標高m)
374	41	H10	2	端塊	=	=	[2.8]	0.5	8.43	内面スラブ付着、輪十番、焼成良好、 近世
									-	29.888

第4節　まとめ

1 小結にかかえて

今回調査区内では谷底平野部を除き、時期の特定できる宝永4年(1707)に富士山が噴火した宝永火山灰層が認められなかった。平成18年度調査区である北側小支谷内は、近現代に耕地整理がなされ、現況水田となっている。水田下からは、いわゆる「地山整形遺構」が検出された。傾斜地に平坦面を造成し、柱穴などが検出されたことから、居住地となっていたようである。遺物から一部では15世紀には居住していたことがうかがえる。近世後半には、北側小支谷内は広く地山整形を実施し、居住地および水田耕作地となっていたようである。平成16年度調査区である南側小支谷内は、近現代に耕地整理がなされ、現況水田となっている。遺物から近世後半になり、一部居住地になっていたようであるが、大半は水田耕作地であったようである。平成16年度調査区である北区谷底平野部は、近現代に耕地整理がなされ、現況水田となっている。土層の様子から、水田耕作と洪水などによる埋没が繰り返されていたことが認められた。黄褐色砂層を含む層が何層も確認され、湧水位が低い時には、歓状の痕が検出されたことから畠地にもなっていたようである。水路跡1条と水田1面を宝永火山灰層検出面で、その下20cmで畑1面、その下5cmで水田1面を検出した。第1面水田、第2面畑、第3面水田の畔の疊北に対する角度は、ほとんど変化が認められず、洪水などにより耕作地が埋没しても、すぐに從前とあまり変わらない区画で耕作地が復旧されていたことがうかがえる。

天正18年(1590)に北条氏が小田原にて豊臣・徳川連合軍に敗退した。その時に命運を共にした中世長南武田氏の居城である長南城が西方300mに存在する。当遺跡の所在する地点は長南城の坂本口から藻原庄、現在の芦原市藻原寺方面へと続く街道筋にあたり、街道の北側は宿の一部であったようで、当該期と思われる15世紀～16世紀の陶磁器などが出土している。その後、近世には旗本御家人・譜代大名が幕末まで、当地方を分譲支配していた。近世17世紀頃までの陶磁器しか図示していないが、以降も近世後半、幕末から昭和までの陶磁器が出土していることから、田宿川間遺跡が所在する当所も植生郡坂本村、宿の一部として機能していたことがうかがえる。

今回の調査区そのものが南北に長いトレンチ状の調査区であるため、坂本村のごく一部の様相について、解明されたにすぎない。また、遺物の様相からは中世から近世に連続と続くのではなく、16世紀と17世紀の間に一部とされるようである。

2 寛永通寶について

寛永通寶は、その字体から製造時期が3期に分類されている。314～336は、特徴として、「寛」の12・13画の頭が接する、「寶」の貝画末尾が「ス」となる。1期古寛永と分類した。寛永13年(1636)から万治2年(1659)までの24年間に鑄造された。337は、特徴として、背面上部に「文」を鋳出し、いわゆる「文銭」と言われる。2期新寛永と分類した。寛文8年(1668)から天和3年(1683)までの16年間に鑄造された。338～351は、特徴として、「寛」の12・13画の頭が接しない、「寶」の貝画末尾が「ハ」となる。3期新寛永と分類した。元禄10年(1697)から延享4年(1747)までの51年間、明和4年(1767)から天明元年(1781)までの15年間に鑄造された。

当遺跡で出土した寛永通寶のうち、北区拡張区出土のものは1期古寛永と3期新寛永が出土している。宝永4年(1707)の富士山噴火火山灰層検出面を遺構確認面としたので、実年代がわかる地層面より下面

から出土している。標高30m前後くらいが宝永火山灰層の検出面で、3期新寛永1枚が出土している。他に、1期古寛永が標高29.86m～29.76mの間で出土している。当遺跡で出土した新寛永通寶のうち、3期新寛永は元禄10年(1697)から宝永4年(1707)までの10年間に鋳造されたものに限定される。2期新寛永は、北区6トレンチで1枚出土している。周辺から出土した3期新寛永とはほぼ同レベルから出土している。

参考文献

- 永井久美男『日本出土銭総覧』1996年版』兵庫埋蔵銭調査会、1996年。
永井久美男『近世の出土銭II－分類図版篇－』兵庫埋蔵銭調査会、1998年。

3 煙管について

日本への煙草の伝播は、文献上では天正17・18年(1589・1590)頃、越後出雲崎に「たばこ屋」があったとする説(『目さまし草』)、『鹿苑目録』の文禄2年(1593)条に「煙草」の語が見えるなどが古い記述である。元禄8年(1695)発行の『本朝食鑑』に天正年中(1573～1592)に煙草の種が南蛮商船によってもたらされたと記述がある。慶長5年(1600)前後頃にはポルトガルなどの西洋諸国との貿易によって日本に煙草が伝来していたと思われ、この頃に南蛮人の喫煙具を真似て製作されたものが煙管の始まりであるという。慶長10年(1605)には喫煙が大流行し、その後度数の禁煙令が公布されていたにもかかわらず、喫煙の風習が日本人に広く深く浸透していったようである。

日本では金属製煙管が普遍的に使用され、雁首と吸口を別々に製作して竹でつなぐ「羅字煙管」と、雁首、吸管、吸口が一体化した「延べ煙管」がある。煙管の編年は、古泉 弘(1985年、1987年)氏の研究によれば六段階に分けられている。その変遷は、①火皿が大型から次第に小型化する。②火皿窓は第1・第2段階に見られる。③脂返しは火皿の付け根から大きく湾曲するものから、だんだん湾曲が小さくなり、最新形式では全くなくなる。④肩付けは、第1・第2段階で盛行する。第3段階以降では、あっても首部との段差がなめらかになり、首部から肩部へ曲線的に移行し、最新では意匠のみの肩となる。⑤火皿補強帯は第1・第2段階に顕著であり、以降は消失する。

この変遷は、①たばこの葉の刻み方が細くなる。それにともなって火皿が小型化する。②煙管は、初期には室内で使用されるものであったが、次第に懷中に入れて持ち歩くものへと変わってきた。それにともなって形状が直線的なものに変化した。③鍛着けなどの技術の向上にともない、製作工程が単純化した。などの要因によると思われる。

本遺跡出土の煙管を上記の変遷の特徴に当てはめると、260と261は火皿窓、火皿補強帯が認められ、脂返しが大きく湾曲する。(古泉編年第2段階・17世紀前半)255～259と262～265は火皿補強帯が消失する。(古泉編年第4段階・18世紀前半)以上の雁首の特徴から、17世紀前半のものと18世紀前半のものに分類することが可能である。

参考文献

- 古泉 弘『江戸 都立一橋高校地点発掘調査報告』都立一橋高校遺跡調査団、1976年。
古泉 弘「江戸の町の出土遺物－その展望」『季刊考古学』13、雄山閣出版、1985年。
古泉 弘『江戸の考古学』(考古学ライブラリー48) ニューサイエンス社、1987年。
小日置晴展「汐留遺跡出土の煙管」「汐留遺跡」汐留地区遺跡調査会、1996年。
古泉 弘『VI江戸の生活文化 2喫茶・飲酒・喫煙 喫煙1 煙草の伝来』『図説江戸考古学研究辞典』柏書房、2001年。

写 真 図 版

遺跡の周辺航空写真 (縮尺: 10,000、昭和5年撮影)

竹ノ下遺跡
関戸遺跡
山小川遺跡
柏野遺跡

図版2

竹ノ下遺跡



調査前風景



第6・7トレンチ
発掘状態



ピット群2
南西から





調査前風景



3F区トレンチ
発掘状況



縄文時代
遺物包含層



図版6



本調査区②



SK01



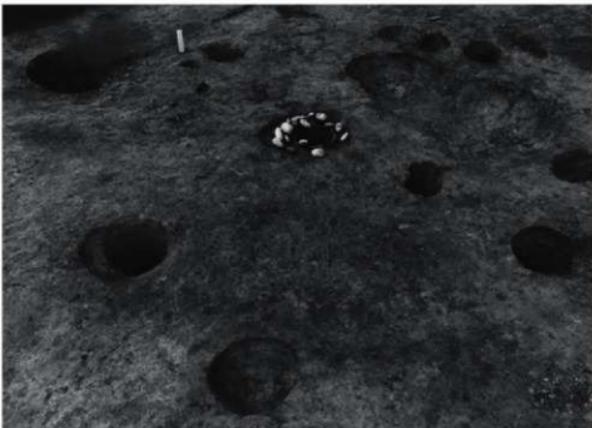
SD01



調査前風景



平成19年度調査区
縄文時代遺物包含層
土層断面



SI01

図版8



SI01
埋甕炉断面



土坑群



SK05



図版10



SK02



SK03



SX01



SD01



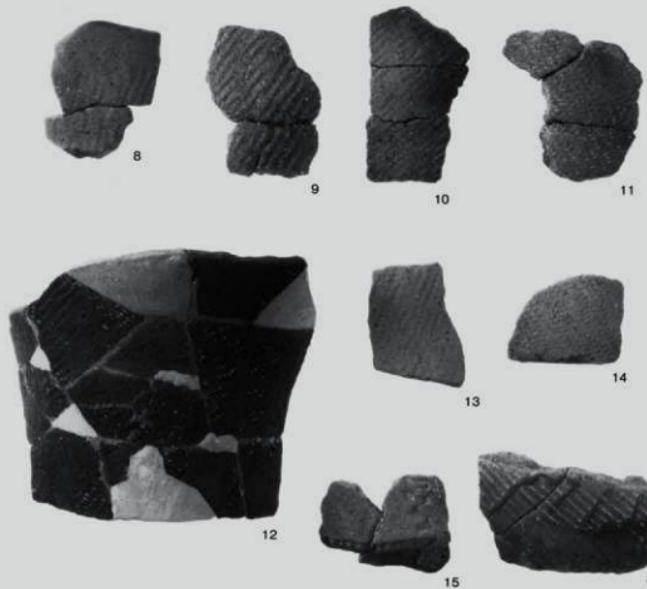
SD02



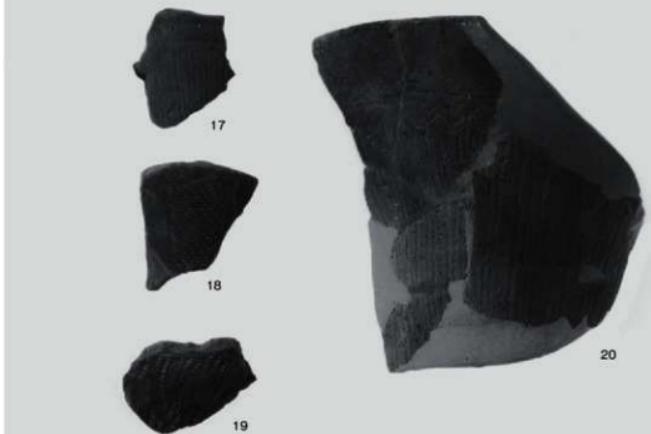
SD03



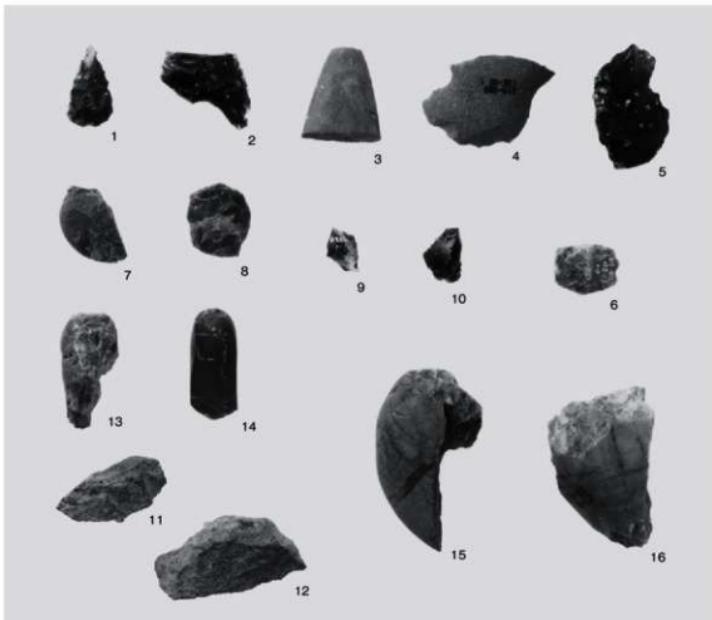
縄文土器(1)



縄文土器(2)

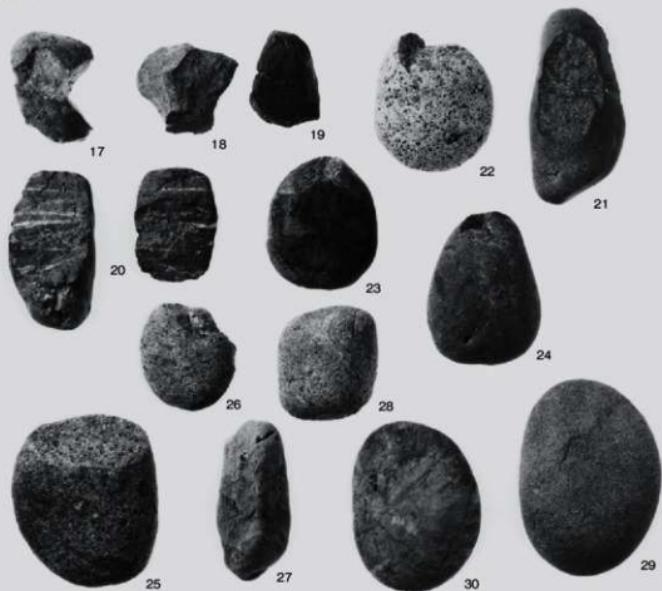


縄文土器(3)

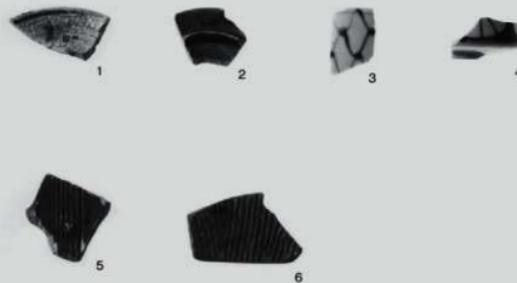


石器(1)

図版14

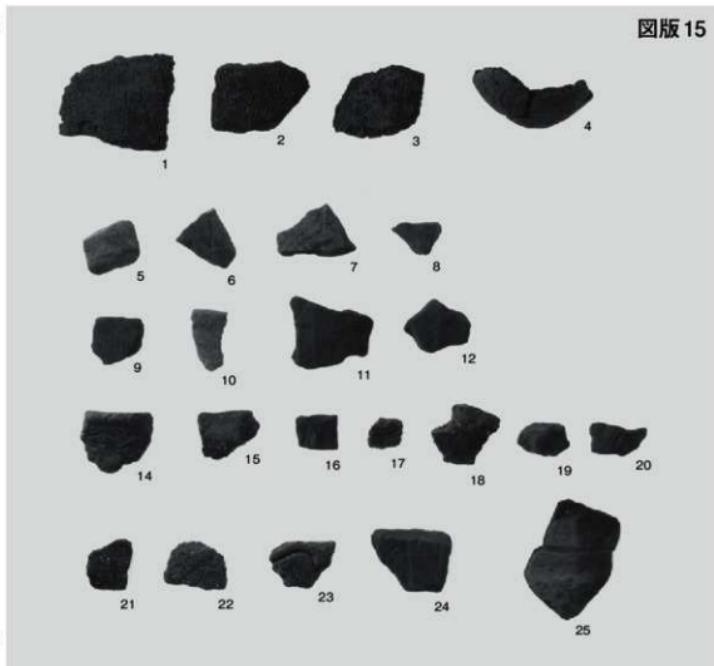


石器(2)

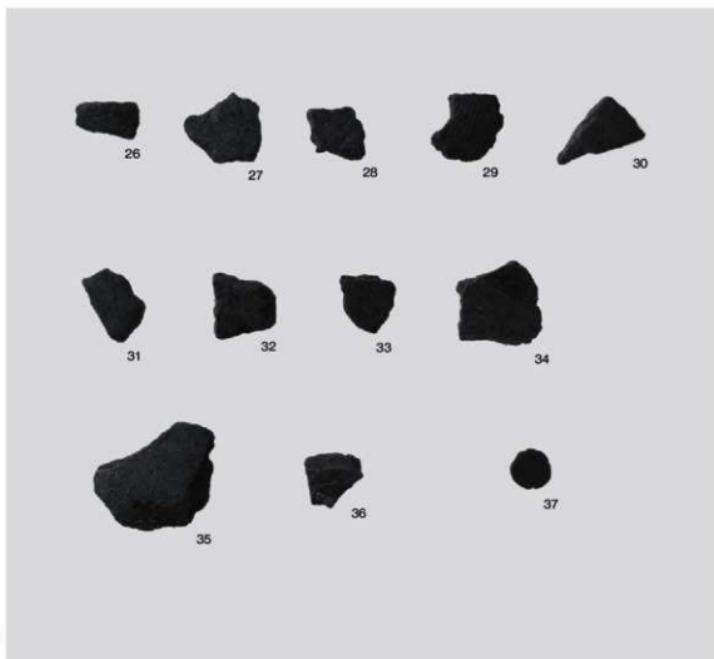


陶器

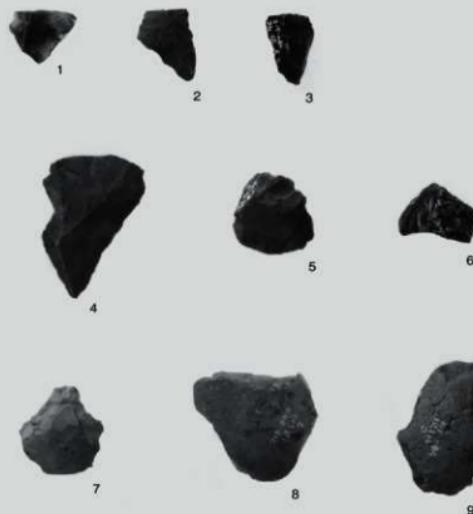
縄文土器(1)



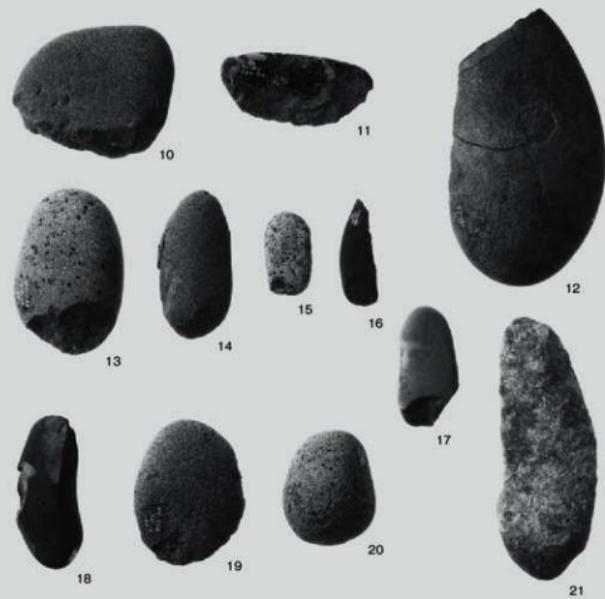
縄文土器(2)



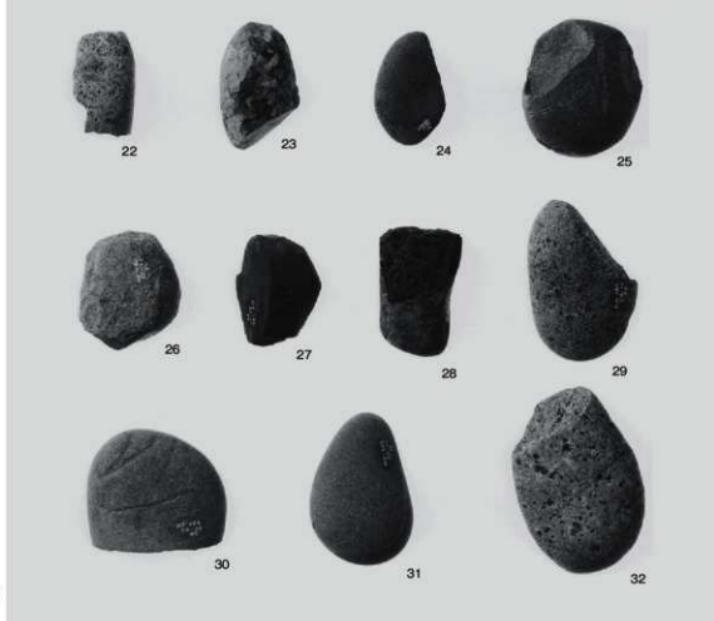
図版16



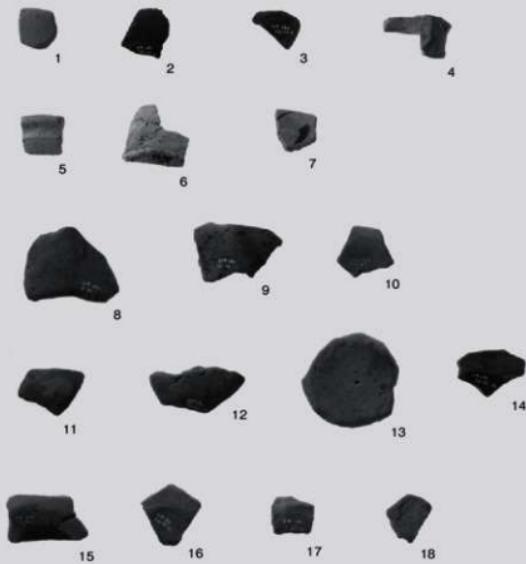
石器(1)



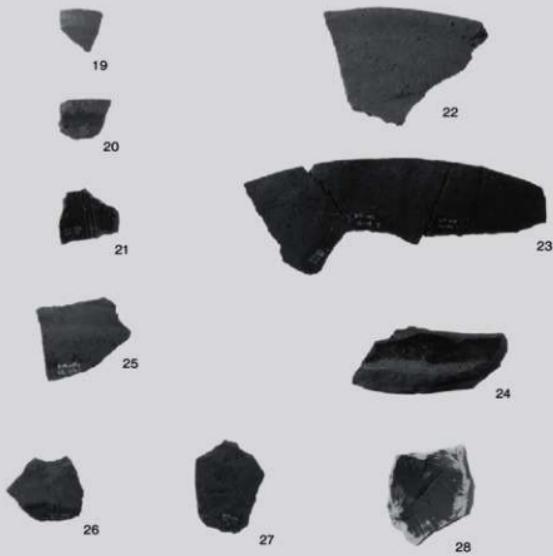
石器(2)



図版18

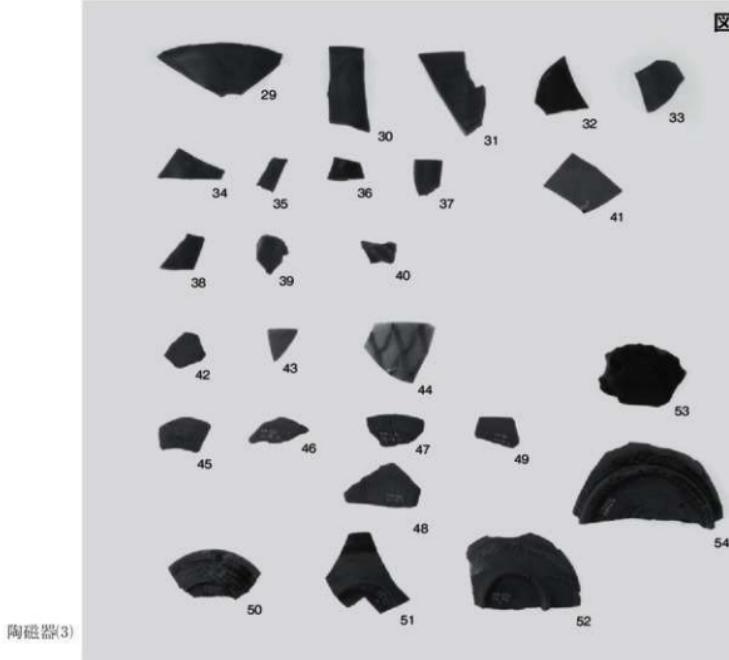


陶磁器(1)



陶磁器(2)

図版19



その他の遺物



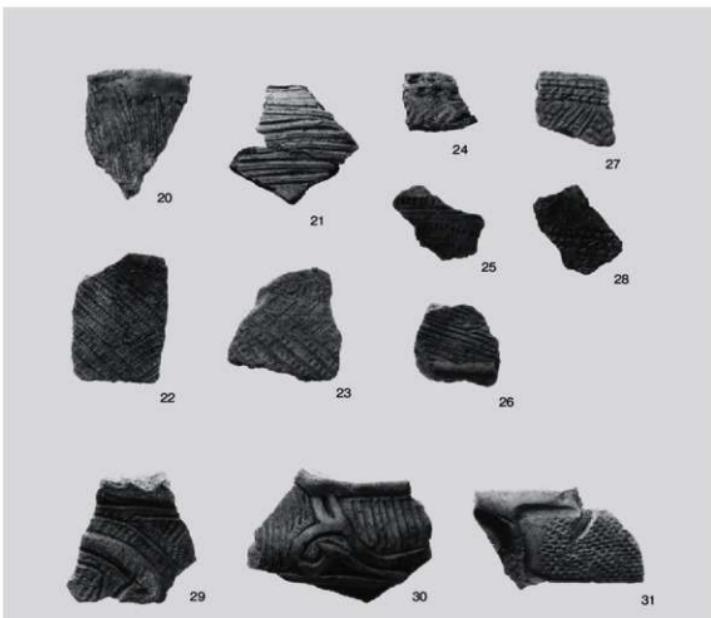
縄文土器(1)



縄文土器(2)



縄文土器(3)



縄文土器(4)

図版22



縄文土器(5)



縄文土器(6)

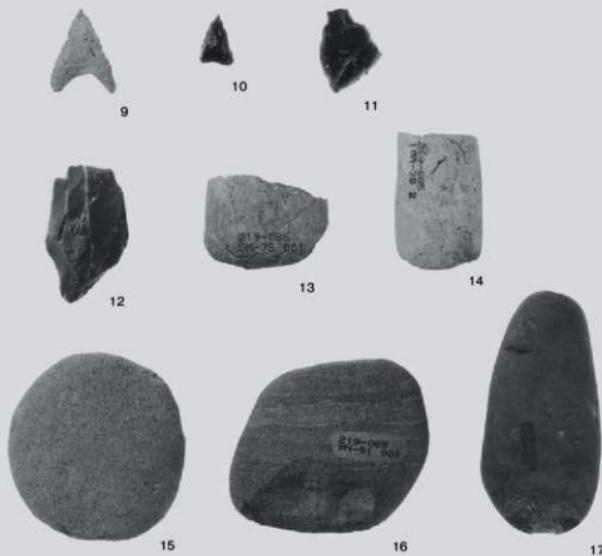


縄文土器(7)

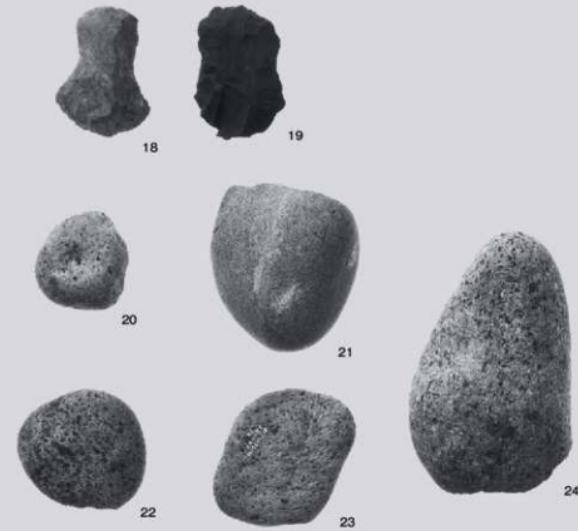


石器(1)

図版24



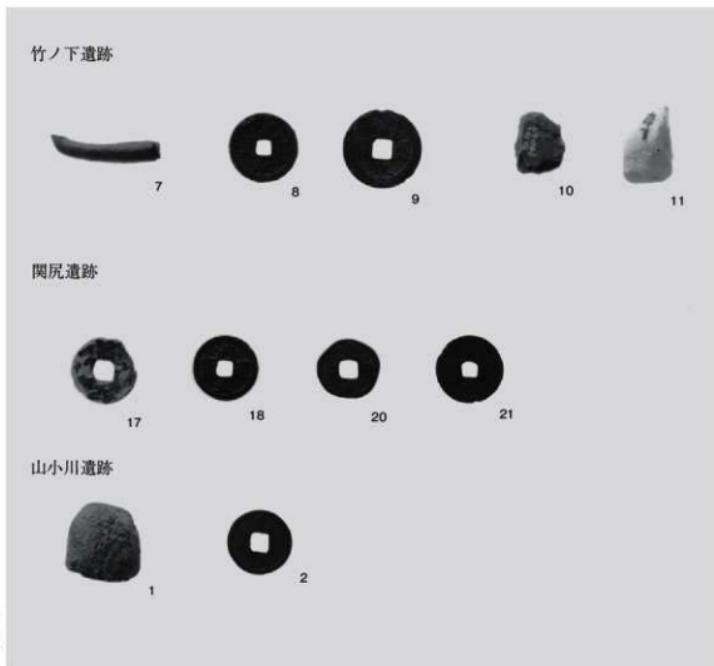
石器(2)



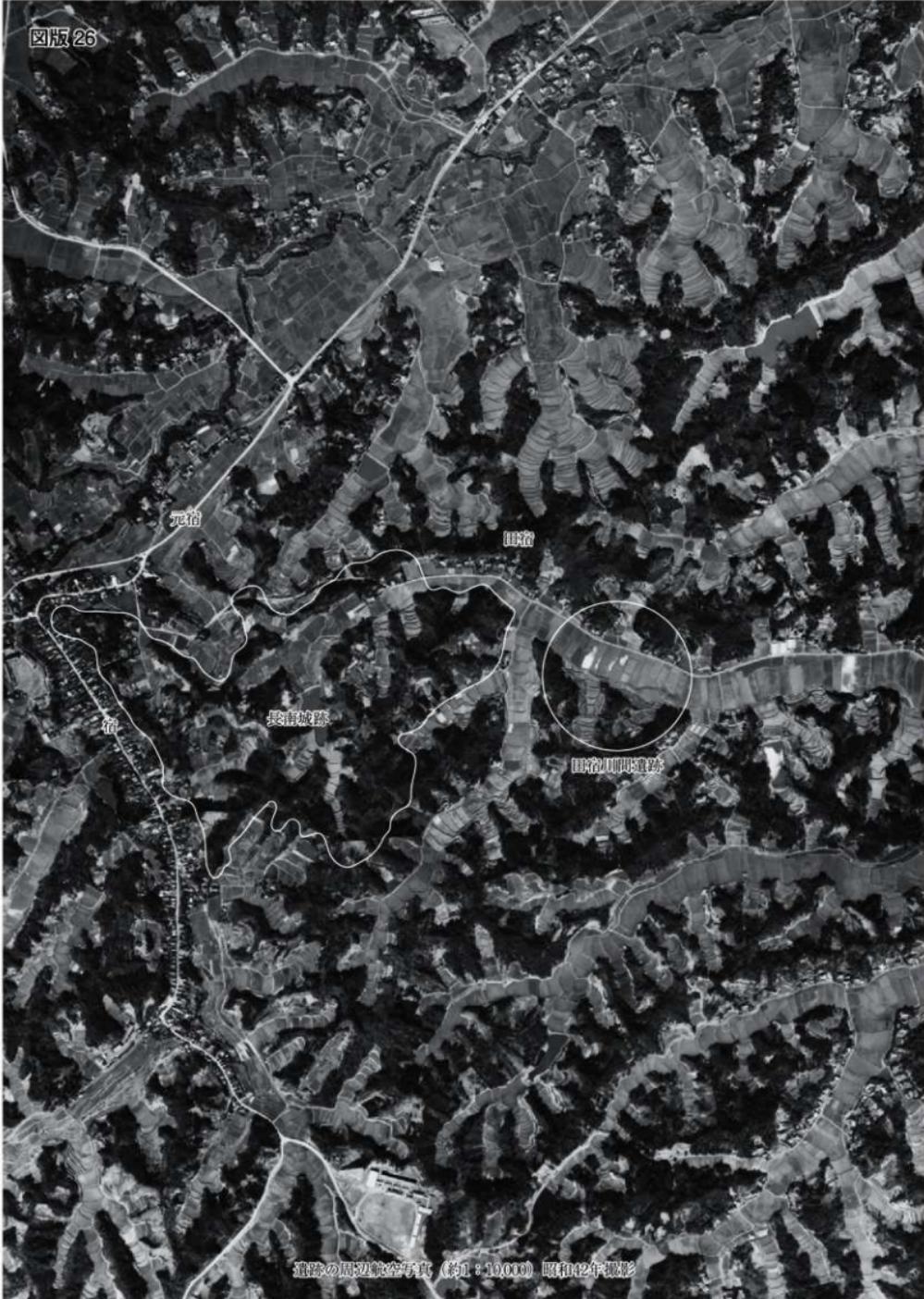
石器(3)



石器(4)

錢貨
その他

図版26







確認調査
北区1～4トレンチ



確認調査
北区4トレンチ



確認調査
北区6トレンチ土層断面



図版30



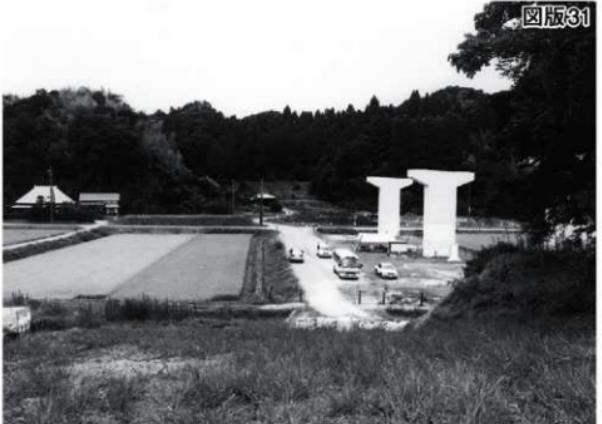
SD01 検出



SD01 完掘



北区下層土層断面



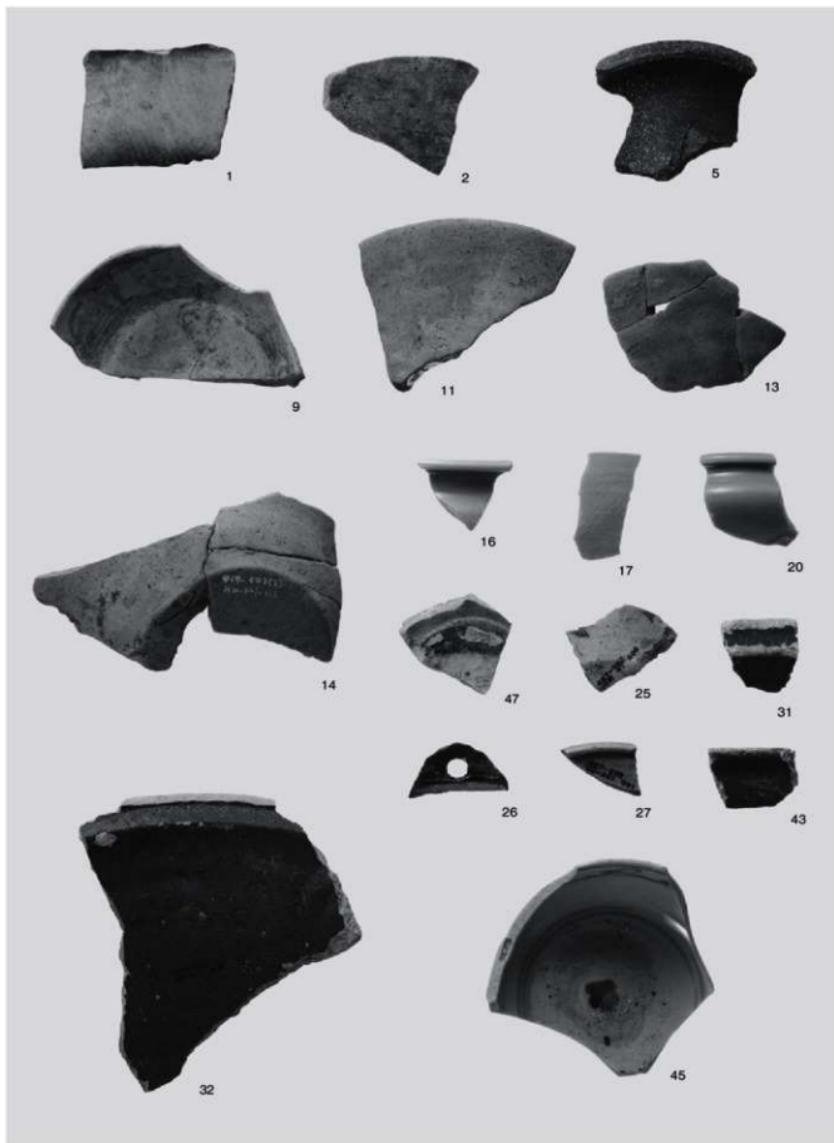
発掘前風景
平成18年度調査区



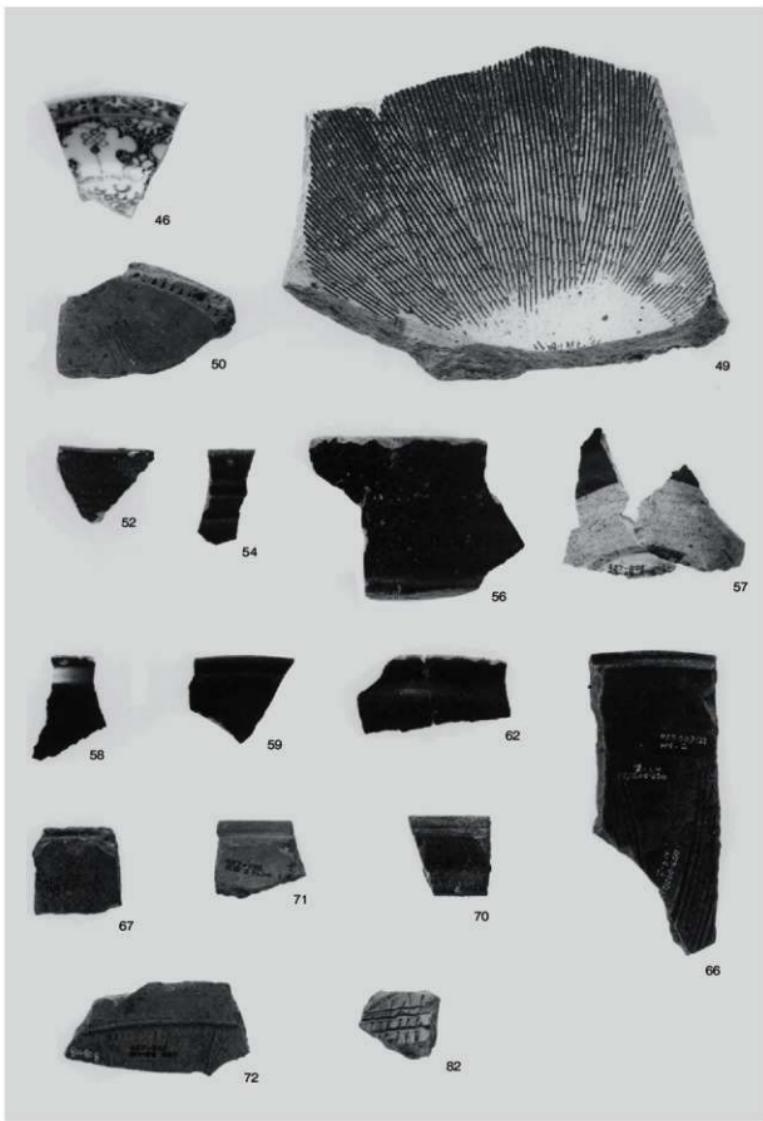
平場1 拡張区全景



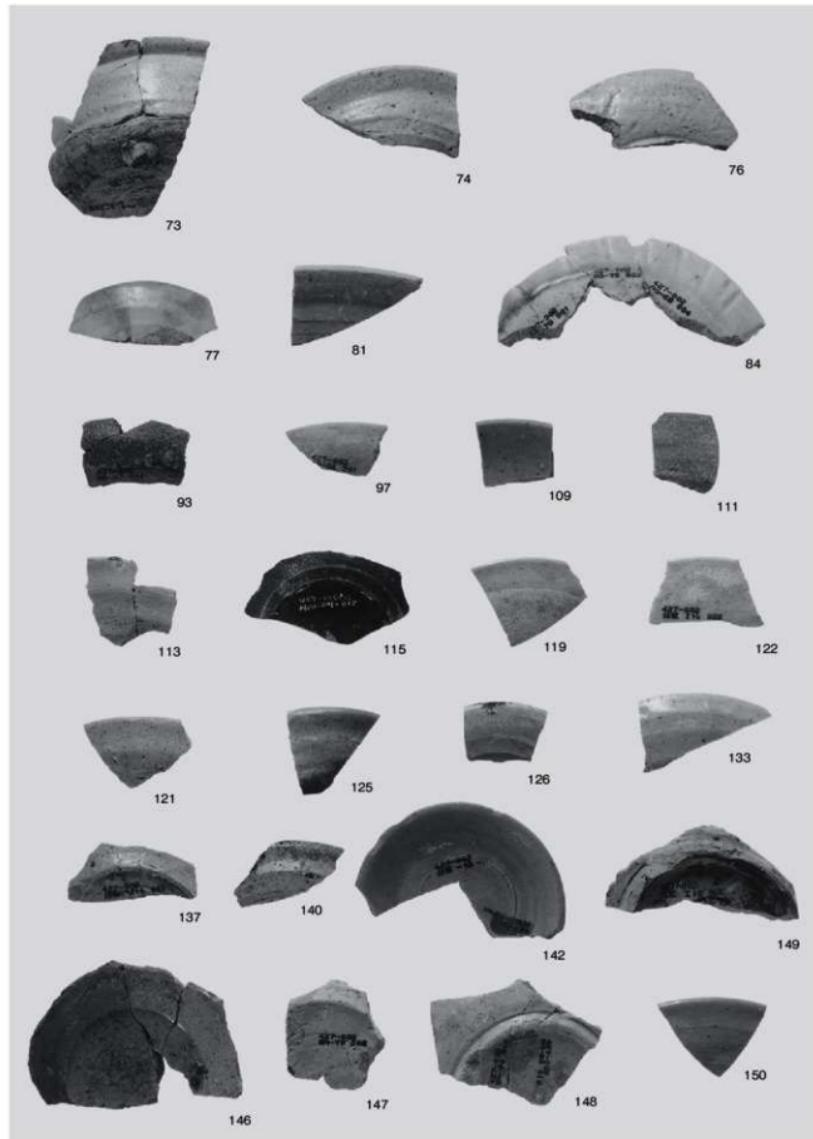
平場9 拡張区
ビット群全景



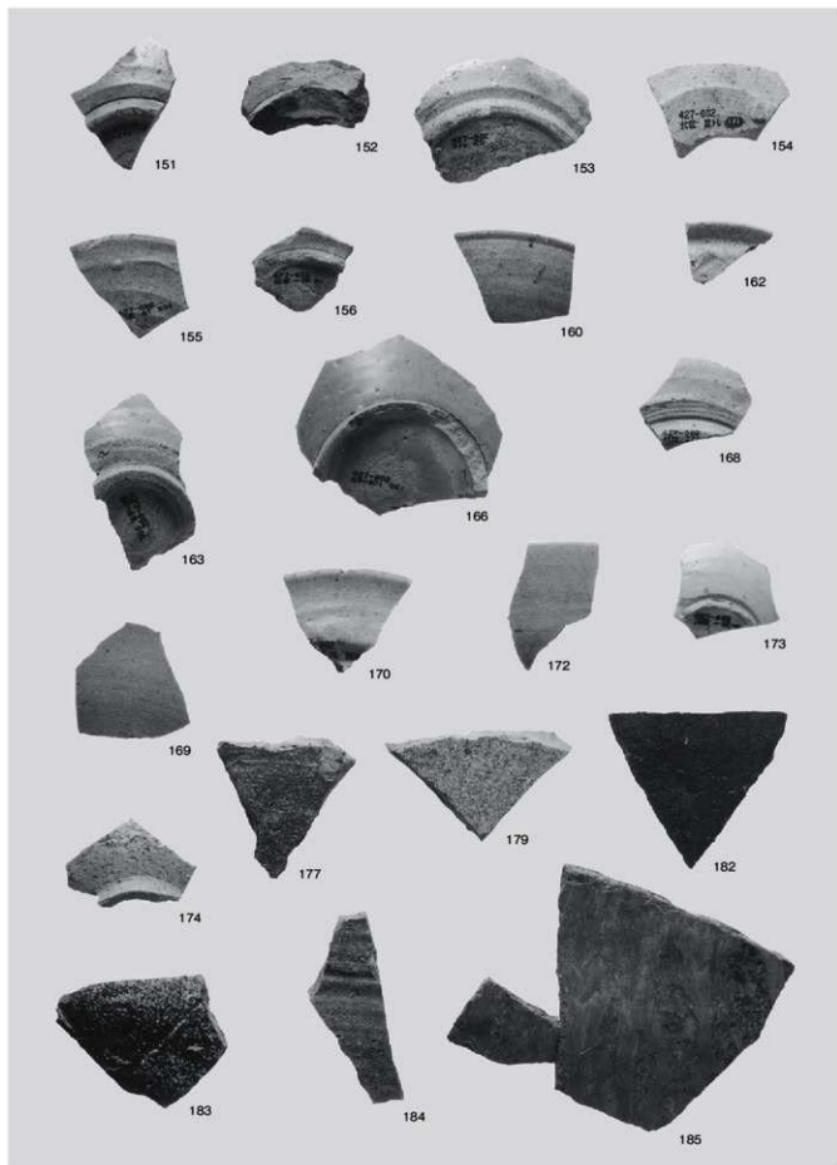
出土遗物(1)



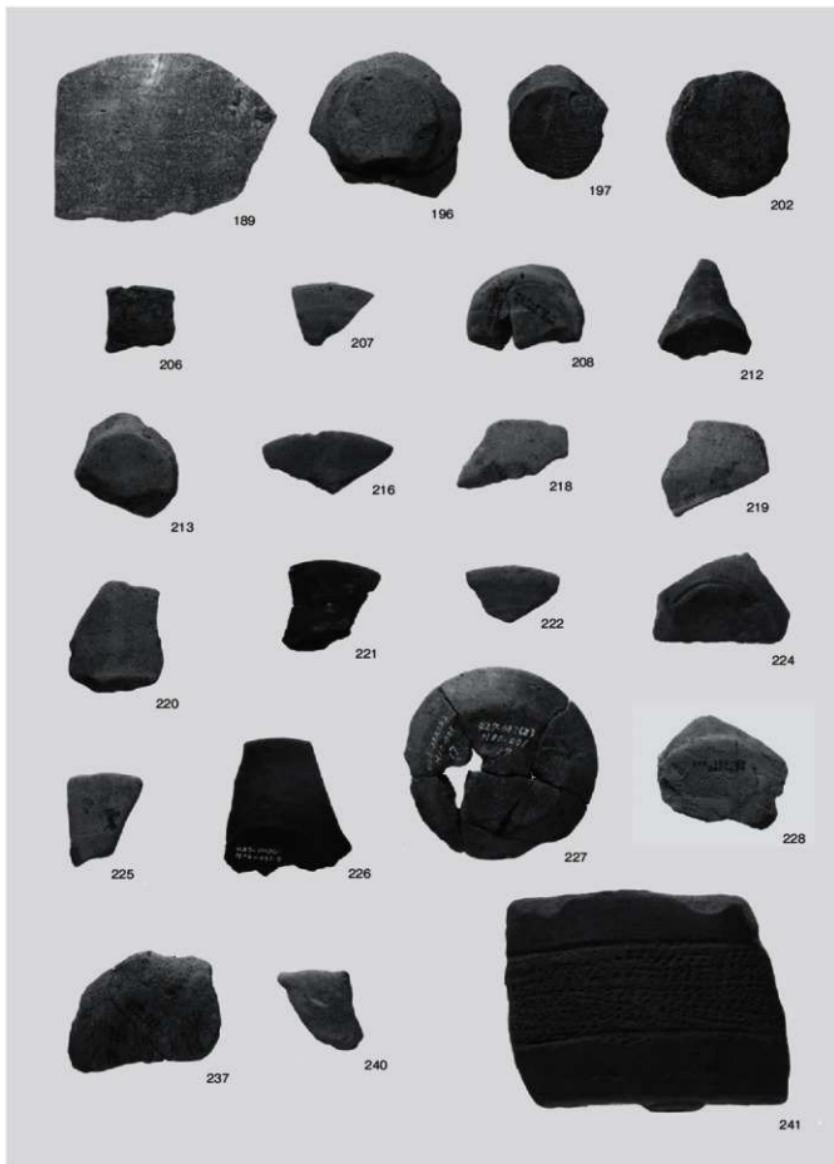
出土遺物(2)



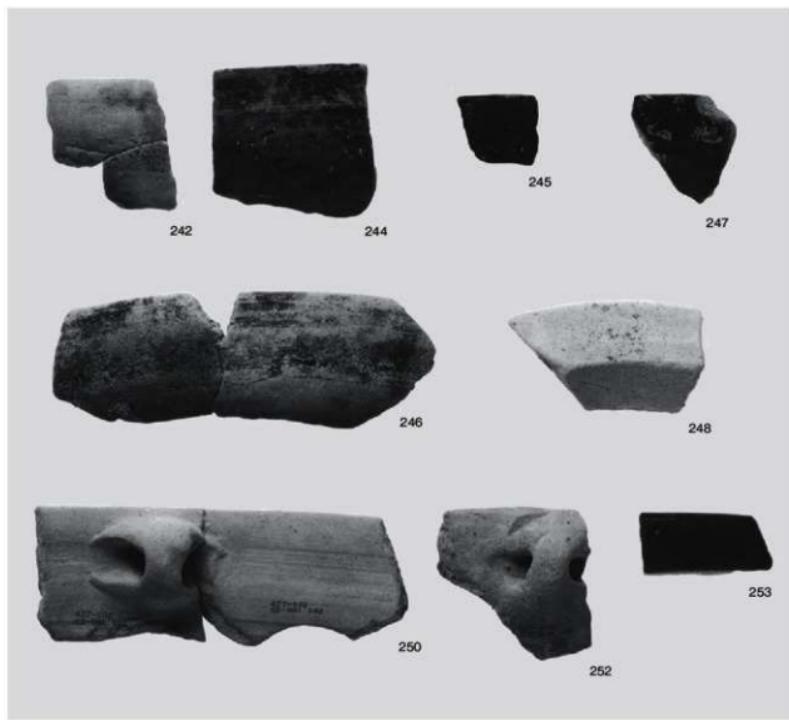
出土遗物(3)



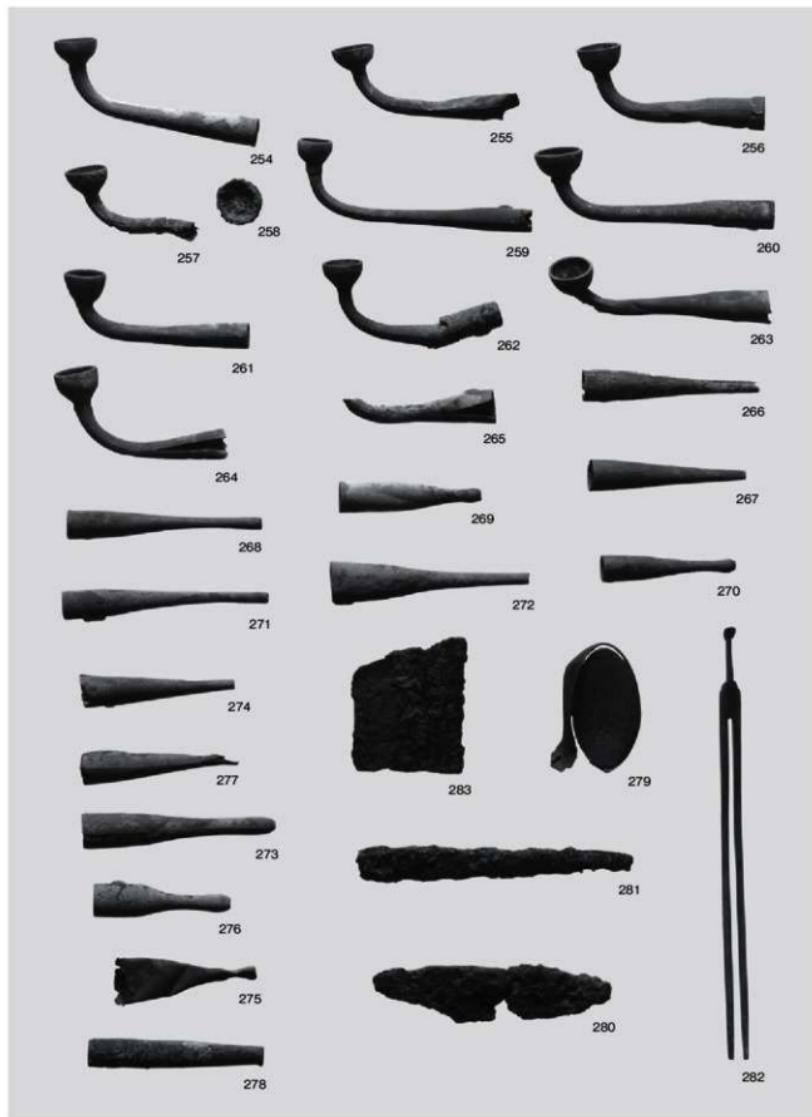
出土遺物(4)



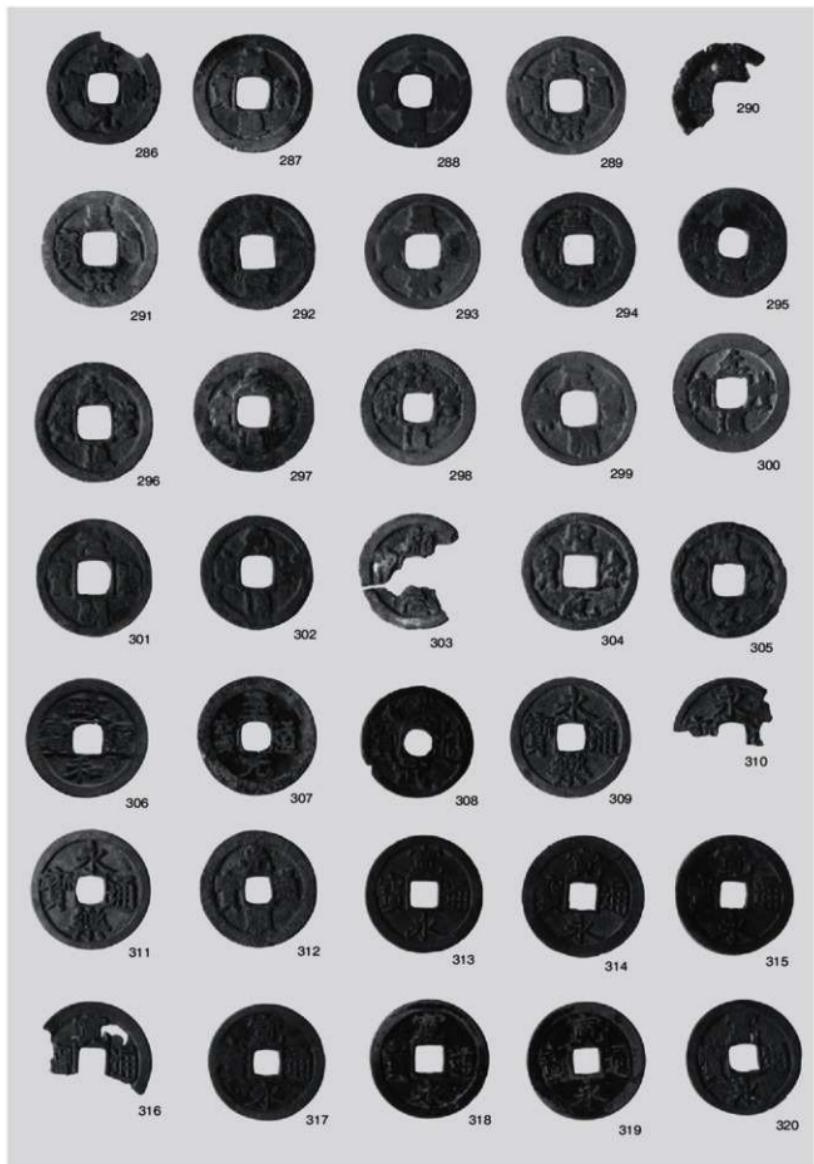
出土遺物(5)



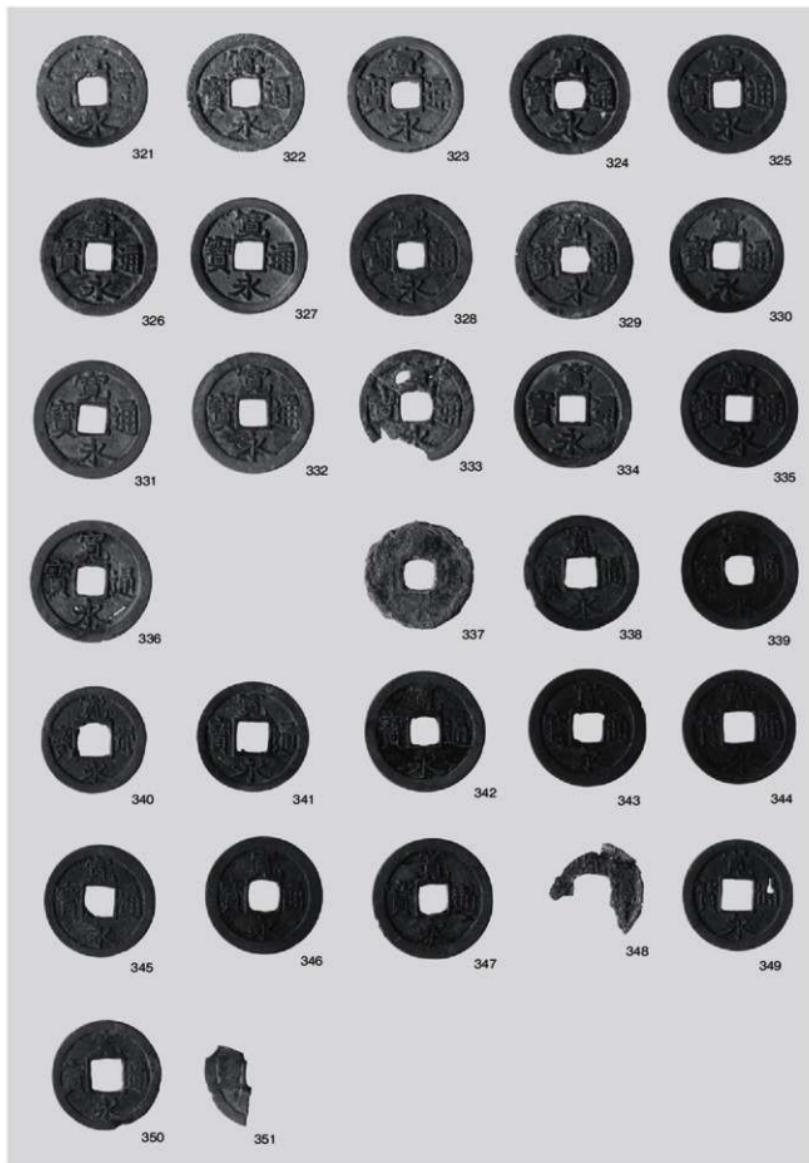
出土遺物(6)



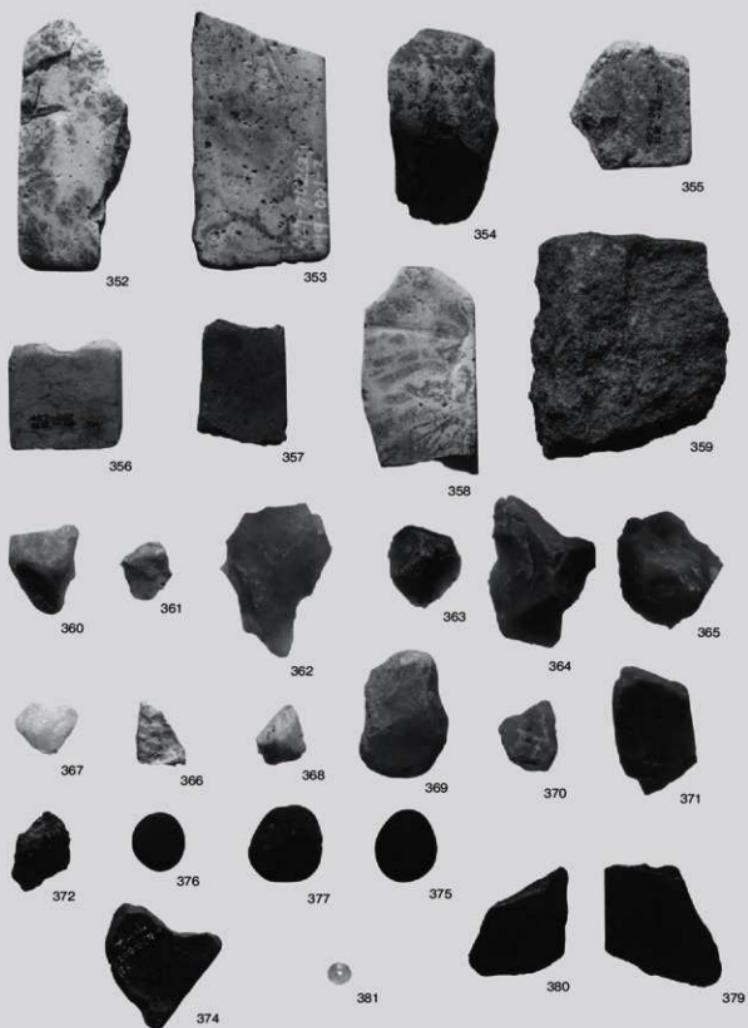
出土遗物(7)



出土遺物(8)



出土遗物(9)



出土遺物⑩

報告書抄録

ありがな	しゅとけんちゅうおれんらくじどうしゃどうまいざうぶんかさいちょうさほうこくしょ							
書名	首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書							
副書名	市原市竹ノ下遺跡・閑尻遺跡・山小川遺跡・長南町田宿川間遺跡							
巻次	15							
シリーズ名	千葉県教育振興財团調査報告							
シリーズ番号	第681集							
編著者名	森本和男、麻生正信							
編集機関	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 Tel. 043-424-4848							
発行年月日	西暦2012年3月25日							
所取遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
竹ノ下遺跡	市原市田尾112-1ほか	219	088	35度 21分 38秒	140度 10分 59秒	20061218～ 20070228 20080820～ 20080828	31.700m ²	
閑尻遺跡	市原市田尾501ほか	219	084	35度 21分 33秒	140度 11分 5秒	20051003～ 20051215 20061002～ 20061018 20080801～ 20080829	36.938m ²	
山小川遺跡	市原市山小川字閑ノ代817-21ほか	219	085	35度 21分 30秒	140度 10分 48秒	20051003～ 20051202 20080303～ 20080328 20080901～ 20080930 20100701～ 20100706	12.430m ²	道路建設に伴う埋蔵文化財調査
田宿川間遺跡	長生郡長南町坂本字田宿川間5096ほか	427	002	35度 23分 41秒	140度 14分 57秒	20041116～ 20050223 2006080～ 20060922	14.659m ²	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
竹ノ下遺跡	包蔵地	縄文時代	縄文時代 ピット群2か所、土坑3基		縄文土器、縄文時代石器 近世陶磁器、銭貨			
閑尻遺跡	包蔵地 集落	縄文時代 中世 近世	縄文時代 遺物包含層1か所、堅穴住居跡1軒 中世 挖立柱建物跡15棟、土坑5基		縄文土器、縄文時代石器 中世陶磁器（青磁、瀬戸美濃、常滑）、銭貨 近世陶磁器、煙管、鉄釘、砾石、銭貨		掘立柱建物跡とともに13～14世紀の青磁が出土した。	
山小川遺跡	包蔵地	縄文時代	縄文時代 遺物包含層1か所、堅穴住居跡1軒、小堅穴1基、土坑6基、焼土跡2基		縄文土器、縄文時代石器			
田宿川間遺跡	包蔵地	奈良・平安 中世以降	水田2面・畑1面 水路跡1条 地山地形遺構2か所		土師器、須恵器 土製品、石製品、銅製品 陶製器、鉄製品、煙管、銭貨 カワリケ			
要約	市原市山小川周辺に位置する竹ノ下遺跡、閑尻遺跡、山小川遺跡は、房総半島中央を南から北へと流れる養老川中流域の歴史的状況をしめしていた。閑尻遺跡、山小川遺跡では縄文時代早期・前期の遺物包含層が検出された。閑尻遺跡では、掘立柱建物跡とともに13～14世紀の青磁が出土し、中世村落の様子をうかがえる資料を得た。從来、房総半島の歴史的状況は東京湾沿岸部を中心に解明されてきたが、房総半島内陸の山間部における人々の生活も次第に明らかになりつつある。	長南町田宿川間遺跡は、中世長南武田氏が居城した長南城外郭城にあたり、中世～近世初頭にかけての土器とともに当時の耕作遺構の遺構が検出された。						

千葉県教育振興財團調査報告第681集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書15
-市原市竹ノ下遺跡・関尻遺跡・山小川遺跡・長南町田宿川間遺跡-

平成24年3月23日発行

編集 財團法人 千葉県教育振興財團
文化財センター

発行 國土交通省関東地方整備局
千葉国道事務所
千葉市稲毛区天台5丁目27番1号

財團法人 千葉県教育振興財團
四街道市鹿渡809番地2

印刷 大和美術印刷株式会社
木更津市中央1-1-6